

POPPINS

ポピンズ



Daichi & Airi

目次

お箸	1
唐突過ぎる	5
骨折	10
ママが出かけた日	15
抜けてる天然二人	21
千切りキャベツとお皿	25
お弁当	30
指紋認証	35
承認手形	39
家庭科	43
ミシン	49
ピザ	55
鈍感	61
コメノ	66
噂	73
セリフ	79
月に一度の地獄	88
チョコレート	93
LINE	97
消しゴム	103
コクる	108
血液について	113
パフェ	118
生物のプリント	127
イメージ変更	132
お花とお弁当箱	138
お父さん	146
女神	152
カフェ	157
ストロベリータルト	161
女神降臨	166
契約終了	172

Better than nothing	180
ついでのお弁当	186
予行練習	191
新しい家政婦	198
学校での呼び名	202
またもお見舞い	207
指輪	214
ドライカレー	220
オーダー	225
初日	229
救われた	235
ミニトート	240
お弁当箱入れ	243
虫	249
ギャップ	254
煩惱	260
盗撮問題	266
夜の野原から	274
こころ	279
ナポリタン	284
闇歴史	289
最後のお弁当	294
進路	299
土曜日	305
まさかの	311
キーホルダー	318
あさって	323
アメリカ行きの話	329
森下大一のノート	333
マンション	340
知恵熱	345
モリシタダイチの家	351
好きが出て	356
ママの涙	362
物件探し	368
引っ越し	374
空港と獣	382
新しい部屋	389
事の顛末	393
夏休み前	400

ニューヨーク	406
約束と予約	411
10 年後	418

お箸

あ お箸入ってない！

ママ～！ またお箸入れ忘れてるううっ

何回目ええ？ おっちょこちよいなのはわかってるけどさあ

わかってるけど 困るよおお

あーもーっ 購買行かなきゃ

いっそ買い溜めしてロッカーに入れておこうかなあ。

ロッカーに割り箸入れてるってどうなの？ 見られたらやだあ、やらないけど

あれ？ おばさんは？ 誰もいない？ 奥の部屋で休憩？

「すみませーん！」

「あい」

グインって目の前に立ち上がった・・・のは

「あっ！」

え？ あっ！ て、なに？ なんでそんなビックリ！ って顔で見てるの？

驚くのはこっちの方なんだけど？ てか男子？ てか誰？

てか生徒は購買の中に入っちゃいけないんじゃ・・・

ああああ、いろいろクエスチョンが錯綜して何がなにやらわから

「なに？」

ハ？

なに？ って、なんでこの男子が訊く？ あなたこそなんでそこに、そんなことはいい

けど

「なに？」

また聞いた

「え、あの・・・（おばさんどこかなあ） お箸を・・・（早く出てきてよお）」

「何膳？」

「へ？」

「箸、何膳？」

この男子に答えていいのだろうか？ おばさんに伝えてくれるのかな？

「えっと・・・ 一膳だけど」

えっ？ ポンってケースの上にお箸置いたけど？

なぜこの男子が???

「3円」

この男子にお金を渡していいの？

そのまま持って逃走・・・は しないか 3円ごときで でもいいの？ どうする？

いっかあ、私はお箸が必要で早くしないとお弁当食べる時間なくなっちゃう

えっと・・・ 1円玉なんて持ってないから・・・

10円玉をケースの上に

置こうとしたらサッと手が出て男子の手のひらに載せちゃったんだけど

「まいど」

まいど？ あなたからお箸買ったことないですけど？ 誰だか知らないし

なに？ なんで私の顔ジューッと見てるの？

お釣りは？ って目で促してみても「ん？」で顔で見続けている わけわかんない

「あの、お釣りを・・・」

「オツリ？ あ！ 釣り！」

なんか 疲れる

「えっと、10 - 3は・・・」

え・・・

「じゅうひくさんじゅうひくさん・・・」

10 - 3がわからない？ よくこの高校入れたね、てか小学一年生レベルの算数だよな

「じゅうひくさん・・・」

やだなにー？

私の顔ジューッと見ながら「じゅうひくさん」で繰り返されると呪文みたいで怖い

「あのお、7円です」

「え？ ああ、7円、7円、7円」

なんだろおこの人おお

「7円」

え・・・ 7円つかんで・・・ その手つきは・・・ ほら！ みたいにしてくるけど

チョコで受け取れってこと？

このケースの上に置けばよくない？

あ ダメだ 手のひら出すまで動かないなこれは

手のひら出したら や・・・っと7円受け取れましたっ

なんか

怖いからダッシュ！

はああああ なんだったんだろ？ いいやどうでも

「ラブリーーン！」

え？ あ！ ミカリンとアミリン！

1年のとき同じクラスでメチャ仲良かったんだけど、2年になって二人は同じクラスで、

私だけ違うクラスになっちゃったんだよお

「ラブリン、なにしてるの？」

「購買で・・・」

異次元空間みたいな・・・ いいや、めんどくさい

「もしかしてお箸？」

「うん」

「ラブリンママ、またやったね」

「そうなのおお」

「ラブリンママのおっちょこちよい加減が可愛いよね」

「私は迷惑だよおお」

この二人と話しているとホッとするうう

私のことラブリンと呼ぶのもミカリンとアミリンだけだし

なんか自然とそうなったよね

ミカリンはミカでアミリンがアミ、私は愛里だから「アイリリンはおかしいよね」って、

ミカリンが言い出してラブリン、最初はメッチャイヤだったけどね

今となっては懐かしいよお

「ラブリン、お弁当持ってるけど、どこで食べるの？」

「中庭」

「誰と？」

「ひとりで」

「ラブリーーン、まだ友だちできてないの？」

「うん・・・」

「ラブリン極度の人見知りだもんね」

「だよね、そう見えないから私たちも最初は声かけられなかったもんね」

「私は友だちごっこなんてする気ないです！ みたいなカンジだったよね」

仲良くなってからそのこと言われたけど そんなつもりないんだけどなあ

「私たち、クラスの他の女子と学食いくんだけど、一緒に行く？」

「え、あ、ううん」

「それじゃまたね！」

「うん、またね」

新しいクラスで新しい友だちできたんだね、廊下の向こうで待ってるね・・・

2年になって、クラス替えになって、もう4月も後半になってるのに、

私、まだ友だちできてない

小学校のときも中学のときも、クラス替えって苦手だったなあ

メッチャ人見知りだから私から声かけるなんて絶対できないし

学年変わったことにいっぱいいっぱいクラスに誰がいるかなんて把握できてないよお

うちの高校、男子の方が多から把握したって口きかないだろうし
1年のときも結局一回も口きかないで終わった男子の方が多い 必要性なかったしね
今のクラスの女子も、なんかもうだいたいグループみたいなのができてちゃってて
お弁当食べるときも自然と一緒に食べる人が決まってくるカンジで
ひとりポツーンはイヤだから
こうして中庭のベンチでお弁当食べてる私
暗いっ
ママー！ 唐揚げ入れないでよ！ ニンニクでウツてなるって言ってるのにさ
私が嫌いなものわかってるでしょ！ わかってるのに忘れて入れちゃうのがママだけど
さあ
あ！ 午後イチは家庭科だ！ 今日だけ時間変更で午後だった 忘れてたよ
イヤだあああ 2年は裁縫 必要あるかなあっ 今の時代に裁縫ってさあ
しかも進学校だよ？
いいけど よくないけど ママにやってもらうから 中学のときもそうだったし
しかもパジャマって、高校生にパジャマ作らせる？ エコバッグみたいなのでよく
ない？
どっちにしてもママに縫ってもらうけど
布とボタンは自分で選んだけどね
薄いグレーでボタンはスモーキーピンク！ ボタンがアクセントカラー！
我ながらステキだと思う ママが縫うんだけど
だってママに選ばせたら、ピンクのハートとか、ピンクのクマさん模様とかになる
絶対なる このお弁当入れだってママが作って
「愛里ちゃんが好きだったお姫様のイメージよ」って
レースのフリフリまでついてるし
ママの中で私は何歳？ もう高校生なんだけど？
このお弁当入れの袋を見られたらドン引きされるよね
これを変えてもらうまでは友だち作れない これをなんとかしてもらわな・・・
あ・・・
お弁当入れのせいではない うん 違う
はああああ

天気いいなあ

どーーでもいいんだけど

唐突過ぎる

4月って いつもこうなんだよね。

席順があいうえお順

私は上原だから、いつも廊下側の端の前。

しかも、今回はまわりが全員男子だからほぼ口きかない、必要性もないし。

これじゃ友だちできないでしょ！

席のせいだけじゃないけど わかってるけど

2年になったら授業がガンガン進むからついてくの必死なんだもん

2年になってすぐの実力テスト ヤバかった

英語とか世界史とか国語 それは得意

でも理数系が 点数見て冷や汗出た ううん 問題見たときにすでに頭クラクラした

この進学高校では私は中間の成績維持するのがやっと

もうひとつランク下げればよかったかなあ

でもパパがこの卒業生で 私にも入って欲しかったからねえ

入ったけどね パパ喜んでたけどね

喜んだ直後にニューヨークに単身赴任になって行っちゃったけどね

あ 学活終わった

明日から連休だあ！

さっさと帰ろ！

え？ あれ？ 窓際から二列目のいちばん後ろの男子・・・

えっ？ あれは・・・

昼休みの購買にいた あれじゃない？ でも まさか あ やっぱり あれだ！

ウッソーー！ 同じクラスだったのーっ？

だから驚いてたの？ 言ってくればいいじゃない同じクラスだって

あ 知ってると思ってた？ わかんないけど

まあいい どうせ口きかないで1年が終わるから

帰ろう

「愛里ちゃん、おかえりなさい」
ニッコニコして出迎えてくれるけど
「ママ、お弁当にお箸入ってなかったよ」
「そうなのよお！ 愛里ちゃんが出たあとに気がついたのよお、しかもお昼近く！」
うん いつもそうだよ
「ママ今度からちゃんと気をつけるわ、約束するから安心して」
安心できないよお 何回目よお
「パパから電話があったわよ」
「へえ」
「愛里は大丈夫かって」
「学校？」
理数系がヤバイよ パパ
「ちがうわよお、連休明けからママはパパのところに行くでしょ？」
「ン??？」
「愛里ひとりで大丈夫？ って心配してたの」
「え、ちょ、ま、待って、何のこと？」
「何のことって、ママがパパのところに行くから、その間に」
「ハ？ なに？ どういうこと？」
「ママがあ、パパのところにい、行くっていう」
「ゆっくりとかじゃなくて！ なんでそんな急に行くことにしたの？ てか、なんで？」
「急じゃないわよお、え〜っと・・・ 3月？ 2月？ それくらい？」
「それくらい？ なにが？」
「決まったのが」
「エーーーーーッ!? 聞いてない！ ぜんぜん聞いてない！」
「言わなかった？」
「言われてないっ」
「あらあ、言ったつもりだったんだけどねえ」
これは 言ってない ママの“つもり”はママの中だけ、いっつもそう！
でももう決まってるなら・・・ もう・・・ しかたないよね
「何日くらい？」
「3週間よ」
「エーーーーーッ？ 3週間もーっ？」
「パパはねえ、1か月くらいいてゆっくりしたら？ って言ったんだけど、
ママは愛里が心配だからって3週間にしたのよお」
ほぼ1か月じゃーん！ 3週間も1か月もそんなに変わらないよ、ママーっ
「パパとママ、去年が結婚25周年だったじゃない？」
そうだけ？ 今その話必要？
「でも、去年の春、そうそう！ 愛里が高校合格してすぐよ！ パパがニューヨーク

に・・・」

何も頭に入ってこない

ママの中では私がママと同じときに知ったってことになってるけど

知らないって言ったことも忘れてニッコニコしてしゃべってるけど

私はっ 今っ たった今っ 数秒前につ 知ったんだからねーっ

「それで、思い切って行くことにした・・・って言ったわよね？」

言っていないっ

まあ えっと まあ パパも1年以上帰ってきてないし まあ えっと

ママもパパに会いたかったんだろうし えっと まあ それは

え？ えっ？ ちょ・・・

「ママ！ ママがいない間、私のごはんは？」

「え？」

「掃除とか洗濯とか、私がそういうのぜんぜんできないってママ知ってるよね？」

「そうね」

「どーっするのぉおぉ？」

え？ あれ？ なに？ なんか 目に涙ためてる？ なんで？ どうしたの？

「そうね、ママが悪いのよ」

ママが悪いとは言ってないけど

「ママとパパ、結婚してなかなか子どもができなかったでしょ？」

え？ なんてその話になる？

「やっとなんか授かって、生まれてきたのが愛里ちゃん、あなたよ」

知ってるけど そういう話じゃなくて

「ママ、愛里ちゃんが可愛くて可愛くて、この子のためならなんでもできるって」

だから今はそういう話じゃくて！

「ママがなんでもやっちゃって、だから」

え 泣く？ なんで？

「あなたを何もできない子にしちゃったのよお、ママが悪いのお、ごめんねえ愛里いいい」

えええええ ママの思考経路がよくわからないいい いつもだけどお

「でもね、あ、ちょっと待ってね」

ティッシュか

「愛里ちゃん、安心して」

鼻かみながら安心してって言われても説得力ないよ

「家政婦さんを頼んだから」

カセイフサン か、家政婦さん？

「ママがいない間、毎日来てくれるから、あ・・・ 日曜日は休みだけだね」

「ええええ なんかやだあ」

「どうして？」

「見ず知らずの人が・・・」

「大丈夫よお、あちらもプロだから仕事してくれるだけ、話したりしなくていいから」

「そう・・・なの？」

「そうよ、愛里ちゃんが学校行ってる間に掃除して洗濯してくれて、
夕食も作ってくれて、食べ終わったら片付けてくれて、帰るから、それだけだから」
「それだけ？」
「そうよ、それだけ」
「あっ お弁当は？」
「それもちろんお願いしてあるから安心して」
よかった・・・って よかったのかなあ
え あれ？ 3週間・・・ あっ
「ママ！ よくない！」
「え？」
「3週間でことは、家庭科のミシン縫いがある！」
「それをお願いしておくから安心して」
「そんなこと・・・ 頼んでいいの？」
「なんでもできるのよお、すごいよお」
魔法使いじゃないんだからさあ
「あのね、ママがお願いした家政婦さん、伝説の家政婦って呼ばれてるの」
「伝説？」
「ほら、ママがお茶を習っていた先生がいたでしょ？」
習ってたのは知ってるけど 先生は知らない
「あの先生が一度お願いしたらしいの」
「はあ」
「先生がおっしゃるにはね、掃除も完璧！ 洗濯も完璧！ 料理もとっても美味しい！」
その先生 紹介料もらってない？
「そうそう！ 子どもの世話がものすごく上手なんですって！」
子どもの世話は 私には関係なくない？
「先生のお孫さんたちが懐いちゃってね、その家政婦さんがいなくなる日なんて・・・」
え 涙ぐんでる？
「お孫さんたちが別れるのはイヤだって泣いたんですって」
メリー・ポピンズの話？
「ただねえ、定期で働いてないから、その方にお願ひできるかどうかはわからなかったの」
風向き次第？ メリー・ポピンズ？
「それが！ ちょうど！ ママがいない間の3週間来てもらえることになったの！」
ママ 目がキラッキラなんだけど
「こんなことは本当にありえないんですって！ 長くて5日とかだったらしいのよ！」
「そう・・・なんだ」
「だから！ 愛里ちゃん！」
な、なに？
「安心して！」
えっと 仕事ができる・・・ とにかく・・・
「話さなくていいんだよね？」

「話さなくていいのよ、愛里ちゃんはいつも通りにしていればいいの」

「わかった」

え？ てか

「いつ家政婦さん頼んだの？」

「えっとね・・・ 3月？ そのくらいかしら、パパのどこに行くって決めてからよ」

な——んにも聞いてない

「タイミングがよかったのよお、ちょっと早くてもちょっと遅くてもその方は頼めなかったの」

「あ そう」

「うちの前に何日か仕事が入ってるらしいんだけどね、ほら、大人気！」

ほら！ って言われても

「愛里ちゃん、おみやげ何がいい？」

今聞く？ 私はママがニューヨークに行くことも家政婦さんが来ることも、

ほんの数分前に知ったばかりで、おみやげまで頭まわらないんだけどっ

「なんでもいい」

「何か可愛いのかあったら買ってくるわね！」

またフリフリでピンクでプリンセスなんだろうなあ

今はそんなことど——でもいいけど

骨折

明日で連休終わっちゃう

この連休中に覚悟決めただけね
決めたっていうか、あきらめたっていうか、ここまできたらしかたないよねっていうか

掃除や洗濯やごはん作るとか ムリだもん できないもん
埃まみれの部屋で洗濯物の山の中で餓死するよりはいい！ っていう究極論だよ
うん もうそれくらい

「愛里ちゃん！ ママさっき川村さんからいいことおしえてもらったの！」
その前にカワムラさんて 誰？
「家政婦さんがお休みの日の愛里ちゃんの食事どうしようかしらって言ったらね」
なんでそんなこと知らない人に話してるの？
「えっと、なんだったかしら？ ウー・・・ウーバーなんちゃら」
「ウーバーイーツ？」
「それぞれ！ そういうのがあるから大丈夫って川村さんが」
高校生が一人でUber頼むのって どうなんだろう
ファミレスかカフェ、なんならコンビニ弁当でいいよ
「あ！ そうそうそう！ ママちゃんとお願ひしたからね」
なにを？
「家庭科のパジャマのミシン縫い！」
ヤッ・・・タ！ それさえクリアできればいい、もうそれだけでもいい
だって家庭科のおばあちゃん先生 メチャ厳しいんだもん
留年しそうな先輩がいるって聞いたことあるくらい
フツー家庭科で留年させる？ 進学校だよ？
あのおばあちゃん先生なら・・・ させそう させる うん 怖い

明日の朝ママが出発して、夕方に家政婦さんが来る 来るのかぁ 来るよねえ

「愛里ちゃーん！」
ママ？

「愛里ちゃん！」
どうしたの？
「大変なことが起きちゃったのよおお！」
なに？ 飛行機のチケット失くした？
「あのね、あのね、落ち着いてね」
ママが落ち着いてよ
「伝説の、伝説の家政婦さんが・・・骨折して入院しちゃったの！」
「入院？」
「そうなのよ、今、たった今、紹介所から電話があってね、ママもう失神しそうだったわぁ」
そこまでのことじゃなくない？
「昨日ですって、昨日の夕方ですって！」
交通事故とか？
「ここに来る前に何日か別のお宅の仕事入ってるって言ったでしょ？ ほら、大人気だから」
ああ はいはい
「そのお宅でね、ネコが玄関の吹き抜けの梁に上って下りられなくなっちゃったんですって」
ネコ？？？
「家政婦さんに下してあげてってお願いしたらしいのね」
家政婦さんってそんなことも仕事なの？
「吹き抜けだから高いでしょ？ 脚立使って、なんとか近づけたらしいの」
ママって こういう話はメチャ正確に伝えられるよね
「ところが！ もう少しってところで猫がビョーンて跳んだのね。
もしそのまま落ちたら、玄関の床がメキシカンタイルで硬いから・・・ね？」
なんでよその家のタイルの種類まで知ってるのママ？
「家政婦さん、思わず身を乗り出してキャッチ！」
おお！
「そのときにバランス崩して脚立ごと倒れちゃって、ほら、メキシカンタイルだから骨折」
メキシカンタイルなんて見たことないけど硬いんだろうなってことだけはわかったよ
「紹介所の人のお話が臨場感があったから、ママ、その場にいたような気になっちゃったわぁ」
そこはいいんだけど
「てことは家政婦さんは来ないってこと？」
来なくてもいいけどね
三週間掃除や洗濯しなくて死ぬわけじゃないし
ごはんだって究極 Uber で あっ ダメだ！
家庭科のパジャマがーーーーっ
「愛里ちゃん、安心して」
ママが安心してっていうたびに不安になるんだけど

「その伝説の家政婦さんの娘さんが代わりに来てくれることになったの」
娘さん？
「ほら、急でしょ？　すぐに別の家政婦さんを手配できないでしょ？」
でしょ？　って言われても
「その紹介所って小さいところだから人手もなかったらしいのね」
だからって　娘？
「大手だと見積もりだなんだで時間かかるし、急だから無理よねえ？」
ねえ？　って同意求められてもさ
「紹介所の人も困ったらしいのね、そしたら伝説の家政婦さんがこう言ったんですって」
伝説の家政婦さんの話好きだね　ママ
「うちの子を行かせますって！　料金もいらないですって！」
え？
「それは困るって紹介所の人が言ったらね、だってほら、紹介所もマージン取るから」
わかったから　伝説の家政婦さんの娘がくるんでしょ
「そしたらね、だったら半額でいいって」
料金の話はいいから
「でもママはね、全額お支払いしますって言ったのよ」
うん　その話はもういいから
「だってねえ、入院費だってかかるだろうし、娘さんがお仕事してくれるわけじゃない？」
うん　だから　娘さんが来るって話だけでいいよ
「でもね、愛里ちゃん、安心して」
もういいよ
「その娘さんもかなり優秀なんですってよ」
「へえ」
「伝説の家政婦さんが入れるときって、ほら、大人気だから！　殺到するでしょ？」
「だね」
もうしゃべらせておくしかない
「それでね、事務所がたま～に間違えてダブルブッキングしちゃうんですって」
ダメじゃん　それ
「そういうときに娘さんが短い拘束時間のを引き受けてくれるんですって」
伝説の家政婦の娘って大変だなあ
「ベビーシッターとか？　お掃除だけとか？　料理とか？　評判いいんですって」
「へえ」
「ただね、まだ学生さんなんですって」
「学生？」
「大学生かしらねえ」
私は知らないよ
「だから、日中は学校に行かせてくださいっていうのが条件なの。
　　愛里ちゃんも学校行ってるからそこはあまり問題ないと思うのよ」
そうだね

私が学校にいる間に他人が家の中にいるよりは・・・ 気持ちは楽かも
「その代わり、日曜日は半ドンで働きますって」
「ハンドン？ なにそれ？」
「半ドンわからない？ そうねえ、愛里ちゃんの時代は土曜日もお休みだものねえ」
時代的なこと？ なに？
「昔はね、土曜日は学校も仕事も午前中はあったのよ」
「エーーーーツ イヤだあ」
「ママの若い頃はそれがふつうだったけどねえ」
過酷な時代を生きてたんだね ママ
「そういう半日仕事することを半ドンで言うの」
「へえ」
「ママは、学生さんだし日曜日はお休みでいいですよって言ったんだけど、
伝説の家政婦さんが、日中学校に行かせてもらっただけでありがたいからって。
紹介所の人に聞いたんだけどね、素晴らしいわよねえ、ママ感動しちゃったわあ」
ママは感動してるけど
日曜日半日家政婦さんがいるって どうなの？
でも・・・ まあ・・・ おばさんじゃなくて娘だったら
あ おばさんの方じゃなくてよかったかも 歳が近い方が気楽かも
え？ あ
「ママ、その娘さんて、パジャマ縫えるの？」
「大丈夫よ、安心して」
そうかなあ
若いからお裁縫はしませ〜んとかならない？
そうになったら私、家庭科落として留年だよ？
受験科目に家庭科なんかないのに家庭科で留年
なんでお裁縫なんてあるのよーっ
社会に出てお裁縫しないよお
パジャマなんて縫わないよお
着ないし 私はジェラピケのネグリだし 買えるし 買うでしょっ みんな買うで
しょっ
「愛里ちゃん、どうしたの？　すごく怖い顔してるわよ？」
「私がもし留年したら・・・」
「りゅ、留年？」
「ママのせいだからね」
「どうして？　どうしてママのせいなの？」
「パジャマ縫えなかったら・・・ 家庭科落とされる」
「えっ？　あ、だったらママ今晚中に完成させちゃうわ！」
「それはダメでしょ！　授業の流れどおりにやらないとバレバレだよ！」
「そうよねえ、確かにそうねえ、でもね、その娘さんは大丈夫よ、絶対大丈夫！」
「なんで絶対大丈夫って言えるのよっ？」

「伝説の家政婦さんの娘だもの！」

えっと ね

「そうだね」

それしか言えない

ママが出かけた日

ママがアメリカに行った。

朝の5時半

ママが成田に向かうのをお見送りで私も起きた

しばらく会えないから フアァァ 眠むうう

パンプス履いて振り向いたママは え？ もう泣いてる？

「愛里ちゃ〜ん」

「ママ、そんなに泣かないでよお」

「ママ行きたくなくなっちゃったああ」

へ？

「愛里ちゃんを置いてアメリカに3週間もなんてえええ」

今さら？

「やっぱりやめようかしらああ」

「マ、ママ、私は大丈夫だから（わかんないけど）心配しないでいいよ（わかんないけど）」

「でもおお」

「パパだって待ってるよ」

「パパなんてどうでもいいいいいい」

どうでもいいって

「だって、ほら、飛行機代もったいないよ、ビジネスクラスでしょ？」

「そうだけどお」

「パパが取ってくれたんでしょ？」

「そうなのよおお ママはエコノミーでいいって言ったんだけどね」

「うん、だから行った方がいいよ」

「そうなの？」

そうなの？ って

「そうだよ、あ！ 私のおみやげ！」

「え？」

「おみやげ買ってきてくれるって言ったじゃない」

「あ！」

「アメリカのおみやげ楽しみにしてるからさ」

「そう・・・ね、 そうよね、愛里ちゃんにアメリカのおみやげ買わなきゃね」

「そうだよ」

どうせフリフリのプリンセス系だろうけど

「わかった、ママ、愛里ちゃんのおみやげを買いにアメリカに行くわ！」

んっと

「うん、買ってきて」

「買ってくるわね！ 待っててね！」

「楽しみにしてるー」

あ 棒読みみたいな言い方しちゃった

「それじゃあね」

何度も何度も何度もドアの隙間から顔出して

「早く！ 遅れちゃうよ！」

「そうね、いってきま〜す」

「いってらっしゃ〜い」

もう一回寝よう

ン・・・ 今何時？ 13:17 え もう午後になっちゃった？

そりゃ寝るよお

ゆうべはいろいろ考えちゃって なかなか眠れなくて

今朝はママを見送るから目覚ましかけて

あれ？ 家政婦さん何時に来るって言ってた？ 夕方4時・・・だよ

シャワー！

ママが作っておいてくれたサンドイッチ

ママの味ともしばらく ママーーーッ これマスタードじゃなくて和辛子っ！

辛っらっ

卵サンドだけ食べよう

お皿が紙皿

私が洗うと割っちゃうから紙皿にしたんだね

なんかさあ実感ないんだよね

ママが3週間いないって

スーパーに買い物行ってるくらいのカンジ

もうちょっとしたら「ただいま〜！」って帰ってきそうな

帰ってきちゃう？ 朝の様子だと ありえる

いいけどね それでもいいけどね 私はね

ピンポーン

え？ 家政婦さん？ もうそんな時間？ そんな時間だ 4時キッカリ！ すごい
あれ？ 男の人？ 宅配？
「は〜い」
「ポ ピーポー」ーピーポー
救急車うるさい！
「今開けま〜す」
ママー 何買ったのよお？ また10個と10箱間違えてたらイヤだよ どこに置け
え？
「アッ？」
なんでそっちが驚く？ 驚いてるのは私なんだけど？
なんで なんで購買の じゃなくて 同じクラスの男子が うちの玄関の前に立っ
てるの？
え？ 目を見開いたまま私のことジューッと見てるんだけど？
なに？ フリーズ？ なに？
「あの、何かご用ですか？」
「あ？」
あ？ って 言ってる意味わからない？
「何ですか？」
「え？ あ、ちょ、ちょい」
なに？ なんか紙出して なに？
「上原・・・美智子さんは」
「母です」
「ハハ？」
「はい」
あ また何か考えてる 私の顔ジューッと見たまま考えるのやめてくれない？
「子どもは？」
「私です」
首ひねってまた考えてるけど なんなの？
「弟か妹は？」
「いません」
「いない？」
そんなビックリされても なんなのこの人？
「上原美智子さんの子どもは」
「私です」
あ 私のこと指さした
「だけ？」
「そうですけどっ」
口開けてビックリした顔して今度は上向いて なにこの人おおお？
「何のご用ですかっ？」
用がないなら帰ってよ！ 怖いよ！

なにその恨めしそうな目？ あ ため息ついた なんなのよーっ？

「これ」

さっきの紙？

人材派遣のポピンズ

「これが何か？」

「ここ」

どこ？ 指さしてるところは・・・

担当者名：森下大一

「モリシタ・・・ダイイチ？」

「ダイイチ」

「ハ？」

「俺の名前、モリシタダイチ」

「モリシタダイチ・・・ え？ モリシタダイチ？」

どこかで聞いたことがある モリシタダイチ・・・モリシタダイチ・・・モリシタ

「あっ！ モリシタダイチ！」

「俺」

「あのサンシタトリオのモリシタダイチ？」

「あ？」

1年のときのトップ3

キノシタタケル

ヤマシタトウゴ

モリシタダイチ

いつもこの3人でトップ争ってた

3人とも苗字に下がつくから、我々庶民レベル成績の生徒の中では

三下トリオという名称で有名な あの

「モリシタダイチーっ？」

「俺の名前」

「ウッソー！」

「マジだけど」

本当かなあ 10 - 3もできなかったのに？ 同姓同名？

「あの、私たちの学年に、モリシタダイチって、他にもいませんか？」

「森山なら4組に」

「森つながりじゃなくて、下！ 森 下っ！」

「森下は俺だけ」

ええええ でもおおお あ！ そうだ！

「4月の実力テストの1位のモリシタダイチは？」

「俺だけど」

「エーーーーーッ」

結びつかないっ あの三下トリオのトップ3のモリシタダイチと

この目の前の購買でなんかヘンだったこの男子が 同一人物ううっ？

「あのさ」

「な、なんですか？」

「中入っていったかな」

「なっなんでですか？」

「仕事すっから」

「仕事？ 何の話ですか？」

あ また恨めしそうに私の顔見てる またため息？ 私の顔見てため息？

「家政婦頼んだんだろ」

「え？ はい、母が頼みました」

なんで知ってるの？

「俺」

「あなたが・・・ なんですか？」

「家政夫」

ン????

「俺が、上原美智子さんに雇われた家政夫」

ナニイッテルノ???

「ポピンズから派遣された森下大一」

ポピンズ？ え？ この紙？ え？ いやいやいやいや

「ちがう、ちがうちがう、ちがいます」

「違わねえよ、俺」

「ちがいます、娘さんですから」

「娘？」

「伝説の家政婦さんの娘さんが来るんです」

「伝説の家政婦？ だれだそれ？」

「今日いらっしゃる家政婦さんのお母さんです」

「俺のかあちゃんは家政婦やってねえよ」

「ほらね！」

「とうちゃんのこと？」

「トーチャン？ トーチャンで・・・ お父さん？」

「俺のとうちゃんが家政夫やってて、おととい入院しちまって」

「え、ちょ、ま、待つて待つて待つて」

なに？ なになになに？

意味がわからない意味がわからない なに？ なに？ えっと・・・ なに？

「あのさ」

「な、なんですか？」

「中入っていったかな」

「な、なんでですか？」

「話」

「はなし？」

「かみ合っただけから」

どこの何がどうかみ合うの——？

「一回話そう」

何を？

「ほんじゃ」

入ってきちゃったけど？

なに——？ ど——ゆ——こと——？

抜けてる天然二人

ダイニングテーブル挟んで向かい側にモリシタダイチ

テーブルの上にはモリシタダイチが持ってきた紙

いちばん下の依頼人のところに ママの字でママの名前が書いてあって
上原のハンコが押してある・・・

えっと・・・ 何か考えないっていうか考えることいっぱいあり過ぎて逆に頭真っ白
何を考えればいい？ どれ？ なに？

「あのさ」

「あ、はい？」

「俺が、つうか、俺のとうちゃんが丸山のおばちゃんから聞いたのは」

「マルヤマノオバチャン？ なんですかそれは？」

「この紹介所の所長」

「はあ」

「母親が三週間出かけっから、その間子どもの世話してくれって話で」

「子どもの世話・・・とは？」

「メシ作って、掃除して洗濯してっつうか」

まあそれは・・・ たしかに・・・ ママが頼んだとおりでけど

「丸山のおばちゃんがとうちゃんに、二年生だからっつって」

二年生だけど確かに二年生だけど

「それで、とうちゃんが、そんな小せえ子ども」

小せえ子ども・・・って まさか・・・ 二年生って小学二年生だと思ったの？

「夜一人で置いとくのはかわいそうだから泊まるかもしんねえっつって」

「とまる・・・とは？」

「住み込み的な？」

「えっ、う、うち、そんな、住み込みとか、そんな部屋ないですけど」

「とうちゃん、キッチンの床でもどこでも寝れっから」

それは・・・ サバイバル？ ひとりキャンプ？ そういう趣味の人？

「俺も丸山のおばちゃんから、二年生でなんもできねえから頼むって言われて」

ママーー！ どういう伝え方をしたの？ なんもできねえとか言われてるけど？

できないけど できないけどさあっ

「それで、ここに来たっつうことで」
えっと、つまり、小学二年生が一人で留守番するから世話をする・・・ってこと？
そう思って来たってこと？
「まあ、俺もチッと混乱してっけど」
私は混乱の渦に巻き込まれて吐きそうなんだけどーっ
「仕事はキッチリやっから」
「仕事？」
「家政夫」
え ちょっと待って
「同じ高校ですよ？」
「ああ」
「同じクラス・・・ですよ？」
え？ なに？ その恨めしそうな上目遣い？
「同級生の家で家政婦って、おかしくないですか？」
「仕事だから」
「ハ？」
「そういうもんだろ仕事って」
そういうものなの？？
「俺は仕事と、そういうことは、なんつうか、きっちりケジメつけっから」
ケジメ？
「この家ん中ではただの家政夫ってことで」
「ただの家政婦なんて思えないです！」
思えるわけないでしょ！ だって
「私が聞いてたのは伝説の家政婦さんの娘さんが来るって」
「娘？」
「はい、む・す・め」
「どうちゃんダイチを行かせるっつったんだけどなあ」
知らないけど
「それに学生さんで、私の母なんて大学生かしらって言っていました」
そこはママの勝手な想像だけど 学生ってそういうカンジでしょっ
「高校生って聞いてねえの？」
「聞いてないです、ただ、学生さんって言っていました」
「おっかしいなあ、俺が行くときは高校生だっつってくれって言ってんだけどなあ」
「言ってませんっ」
「どうちゃんが来ると思って高校生の俺が行くとビックリされっからさ」
ビックリするわよ！ ビックリしてるわよ！
「もしかすっと・・・」
ハァァァって そんな大きなため息つかれても聞いてないものは聞いてないの！
「丸山のおばちゃんだ」
「え？ はい？」

「いい人なんだけどよ、抜けてるっつうか天然っつうか」
抜けてる 天然 あれ？
「肝心なこと忘れるっつうか」
それは・・・ なんか・・・ ママが頭に浮かぶんだけど？
そういえば・・・ 話が弾んでたような・・・
これは・・・
マルヤマノオバチャンだけのせいでは・・・ない・・・かも
抜けてる天然ふたり・・・ ママもかもーーーーっ
「なんつうか、まあ、こういうことになっちまったもんはしかたねえから」
「そうですよね、もうこの話は」
「割り切るっきゃねえな」
ン？
「んじゃ、仕事すっから」
「えっ！ 待って待って待って！」
立ち上がってるけど？ ちがうでしょ？
「なんかやって欲しいことあんの？」
「ハ？」
「やって欲しいことあんなら、先にやっけど」
なんで・・・ もうやること前提？
「ない・・・です・・・けど」
あるとしたら 帰って欲しい だけ
「あのさ」
「は、はい」
「嫌れえなもんってあんの？」
嫌いなもの？ なんで突然そんなこと聞くの？
「えっと・・・ 虫」
「虫？」
「あと、カエルとヘビとか、ホラー映画とか幽霊みたいな怖いのは全部嫌いです」
なにその不思議そうな顔？ わりとふつうでしょ
「あのさ」
「はい」
「晩メシ作っから、嫌れえなもんつうか食べねえもんとかねえのか聞いたんだけど」
晩メシって言った？ 嫌いなものとしか言ってなくない？ 食べ物の話だと思わな
いよ！
「ねえならテキト～に作っけど」
「はあ」
あ！
「生の玉ねぎ！」
「あ？」
「煮たり焼いたりしたら食べられるけど、生の玉ねぎは絶対ムリで、

ポテサラも生の玉ねぎが入ってるからポテサラ全体が玉ねぎの匂いがして」
「わかった」
「あ！ ピーマンも！ 食べられなくはないけど積極的には食べたいとは思わないかなあ」
「ああ」
「あ！ 唐揚げ！」
「唐揚げ？ 鶏肉食えねえの？」
「鶏肉は好きだけど、唐揚げはニンニクの匂いでウツてなっちゃって
あとイワシとかああいう生臭いのもイヤだなあ ムリ
あ、トマトも食べられなくはないけどそんなには食べたくないっていうか」
「そっか」
好き嫌い多いと思ってるよね しょうがないでしょ 嫌いなんだから
「そんじゃ買い物行ってくっから」
「はい あ？ え？」
ちょ 待って待って どんどん先に進んじゃってるんだけど？
どうしよう 買い物行っちゃった
鍵かけちゃう？
それはちょっと大人げないか 大人げないとかそういう場合？
でもさあ

ママに電話！

ママから断ってもらおう！ うん、それがいい！
あ・・・ まだ飛行機の中だ 電話通じない
着くのは夜中の12時？ 1時？
エーーーーーッ

ママーーーーッ！ どうするのよーーーーっ!?

千切りキャベツとお皿

頭の中でいろいろいろいろ高速回転で回って高速過ぎて止まってるみたいになって
ボー—ッとしているみたいな状態になっている間に・・・

モリシタダイチは夕飯を作ってしまった

早い いろいろ 私はまだ止まったままなのに

生姜焼き

ふつうに美味しそうなんだけど

高校生の男子って ふつうに美味しそう生姜焼き作れるものなの？

ていうか この千切りキャベツ

ふつうにちゃんと千切りキャベツなんだけど？

買った？ もうすでに千切りされて袋に入ってるやつ？ ママがたまに使うよね

「生姜焼きは食べる？」

「え？ はい」

「そっか」

「あのお・・・ この千切りキャベツは・・・」

「なんかかける？ マヨ？ しょうゆ？」

「じゃなくて、これを千切りしたのは・・・」

「やっぱ太てえ？」

「ハ？」

「俺あんま千切り得意じゃねえからさ」

これで得意じゃないと言う？ お店並みなんですけど？

「太くないです」

これで太いとか言ったら逆にイヤミに聞こえるよ

「とうちゃんの千切りキャベツはクモの糸みてえでさ」

クモの糸？

「俺はまだまだあは切れねえんだ」

クモの糸状の千切りキャベツってどんななの？ 見たことないよ 見てみたい

「そんじゃ、俺、洗濯してくっから」

「あ、はい」

え？

「あの、あなたは食べないんですか？」

「俺はウチ帰ってからテキト〜に食うから」
「自分で作ったのに食べないんですか？」
「家政夫は雇い主と一緒にメシ食わねえことになってっから」
ええええ？ そんな風習がまだ存在するの？
「そんじゃ食ったらそのままにしといて」
と言って去っていった
じゃなくて！
私だけのために料理って なんか重たいんだけどお
モリシタダイチが自分のために作ったついでになって方がまだ気が楽なんだけどお
てか モリシタダイチが作った生姜焼きを食べることになっちゃった私ってどうなの？
食べるけど
あ 美味しい ふつうに美味しい
きっとモリシタダイチは一年のときの調理実習ダントツ成績よかっただろうな
私はデザート専門だったけどね
最初の実習のときに「卵って、このままお湯に入れたら固まるの？」って聞いたら、
ミカリンが「ラブリンはデザート作って」って私から卵取り上げたあのときからね
デザートはできる 小学生のときにママとクッキー作ったり一人でゼリー作ったりした
から
デザートは書いてあるとーりの分量で書いてあるとーりに作ればいだけだから

ごちそうさま
あ！ 食べちゃった！
食べたら受け入れたってことにならない？ なっちゃうよね？ どうしよう
でも食べちゃったんから 今さら食べなかったことにもできないよ
そこは今はいい 作ってくれたんだから食べただけ うんそれだけ
で 食器はどうする？
そのままにしていって言ってたけど
ママが作ったときは流しまでは持っていくよ
てか洗った方がいいかなあ
中学生になったときに もう中学生だからお皿くらい洗おうって
そしたらツルって滑って割っちゃったんだよね
ママが「マイセンがあああ」って しばらくうずくまってたけど
だってツルってなるでしょ洗剤つけると
「食器はママが洗うから大丈夫よ」って あれから食器は洗ったことない
でも・・・ 洗おう それくらいはできるんだから私だって
「あっ！」
カチャーーンて床に 落ちちゃった 割れちゃった
「どした？」
あっ モリシタダイチが走ってきた！
「ケガしてねえ？」

メッチャ真剣な顔して洗剤だらけの私の手をつかんで 点検？
「ちょっと 手が滑っただけで・・・」
割れた破片を拾おうとしたらバツと手をつかまれて
「俺が片付けっから」
「こ、これくらいは」
「危ねえから」
あのときもママに言われた
「愛里ちゃんは触らないで！ ケガしちゃうから！」って
私ってそんなに不器用？ まあ・・・ね、割っちゃったしね
モリシタダイチもそう思ってるのかな思ってるよね 現行犯だもんね 犯罪じゃないけど
「あのさ」
「な、なんですか？」
あなたの仕事増やして怒ってるんですかっ
「上原愛里のお母さんのノートにさ」
「ノート？ ノートって何ですか？」
「いろいろ、なんつうか、注意書きみてえなの書いてるやつ」
ママ、そんなの作ったの？
「食器は絶対に洗わせないでくださいって書いててさ」
ママーーーーッ！ そんなことまで書かないでよーーーーっ！！
「だから、食ったらテーブルの上に置いたままにしてくれりゃいいから」
「・・・・ はい」
なんか なんかなんかだよーーーーっ

「そんじゃ俺そろそろ帰っから」
「え・・・ ああ・・・ はい」
頭が疲れちゃって なーんにも考えられない
「明日の朝は6時半には来れっから」
朝？ 朝も来るの？ てか私まだあなたを家政婦さんとして認めたわけじゃ
あれ？
「今、何時に来るって言いました？」
「6時半」
「私まだ起きてないと思います」
だからそんな早く来たって入れないわよ！ フッフッフッ
「寝てていいよ、鍵持ってっから」
「鍵を 持って いる？」
「上原愛里のお母さんが紹介所に預けてくれたやつ」
エーーーーッ ちょっと待って！ おかしくない？ おかしいよね？
モリシタダイチが私の家の鍵を持ってるとって おかしいでしょ！

「朝メシはパンがいいんだよな？」
パン？ そっち？ 私はまだ鍵問題のことが え？
「朝食も 作るん・・・ですか？」
「そういう契約だから」
いいから！ パンくらいは焼けるから！ てか私はまだあなたを家政婦として
「あのさ」
「え？ あ、はい？」
「弁当なんだけどさ」
「ベントー？」
あっ お弁当っ？
「俺ん家で作ってきていいかな？」
「ハ？」
「ここ着いてから作っと時間ねえかもしんねえからさ」
えーっつと 私のお弁当を モリシタダイチが
「エーっつ」
「あ、ちゃんと間に合うようにすっから」
そーゆーっことじゃなくてえええ
私のお弁当を同級生の男子が作るって どーっなのーっつ？
「弁当箱どこ？」
「え？」
「あ、ここか」
待って待って待って そっちはどんどん先進んでるけど 私の感情が追いつかなーっ
いっ
「弁当包むのはこれでいいの？」
あ・・・ フリフリの・・・
「それはっ 私の趣味じゃなくて！」
「これじゃねえの？」
「それですけどっ そうじゃなくて！」
「そんじゃこれ持ってくから」
聞いてる？ 聞こうとしている？
「俺出るとき鍵閉めっけどさ」
ハ？
「戸締りちゃんとしとけよ」
「は い ？」
「危ねえからよ」
私は 高校っ 二年生ですっつっ

帰った

ハアアアアアアアアア

疲れた

なんかもういろいろ

お風呂入ろう

ママのお気に入りのフランス製のバスソルトメッチャ入れて入ろう

シャワーじゃムリ 疲れすぎ

明日の授業の予習して 今何時？ 12時過ぎてる ママに電話しなきゃ！

あれ？ 国際電話って高いのかな？ あ！ LINE してママから電話してもらおっと

『ママ！ 大変なことになってる電話して』

あれ？ 既読がつかない

ママは私の LINE は速攻で開けて速攻で返信くるんだけど

『ママ！ 電話して！』

『ママ！』

『ママ！ ママ！ ママ！』

既読がつかない

なんで？ LINE でアメリカはつながらないの？

電話するしかない

『おかけになった電話番号は電波の届かないところにいるか電源が・・・』

ウソ！ 電源 OFF ったまま？

忘れてるかもおお ママだもおおん

あ パパにかけて ママに・・・

あ あああああ パパの番号登録してなかったよおおお

私からパパにかけることなんかないし いつもママ経由で話してたからべつに必要な

今必要になったよーーーっ

明日の朝かけよう

向こうの夕方や夜なら いくらママでも電源入れてるよね

ハアアアアア

疲れたっ

お弁当

ピピピピピピーピー

ピッ

6:20

アラームセットしておいた

6時半に来るんでしょ？

起きたらすでにモリシタダイチ・・・とか ムリ

えっと 顔洗って制服着て

これから3週間 ずーっと6時20分起き？

死んじゃう 死なないけど

え ちょっと待って

3週間で 私まだ受け入れてないよね？ むこうがどんどん先に進んじゃうから

あ！ 早くキッチンに行かなきゃ モリシタダイチ来ちゃう

「あっ！」

いた すでにいた

だよね〜 顔洗って着替えてたら6時30分過ぎちゃうよね・・・

「上原愛里だ」

ハ？

「マジ上原愛里だ」

目を見開いて私のことジューッと見てるううう

怖いんですけどおお

「な・・・ なんですかあ？」

「あ？ あ！ んと、おはよっス」

「おはよう・・・ございます」

マジ上原愛里ってなにいい？

今の私の気持ち わかるかなあ

同じ学校の制服着てる同じクラスの男子が

私の前に 確実にママが細かく指定した斜め三角にカットしたトーストと

目玉焼き1個にミニサラダとヨーグルトかけたフルーツ置いてるの

昨日はさあ私服だったから・・・ あれ？ 昨日モリシタダイチ何着てた？

ぜんぜん覚えてない

「紅茶だよな？」

「え？ あ、はい」

確かにママだ うん

てか フツツに朝食出してもらってるけど

私まだ受け入れてくれない？

これだとカンペキ受け入れ態勢の中なんだけど？

てかさあ 制服着てるとどう見ても同じ学校の男子としか思えない

そうなんだけど 同じ学校の男子なんだけど 同じ学校の男子だよ同級生だよ！

えっ 私のこと見てる？

「なんですか？」

「あ えっと 掃除してくっから」

キッチンを出たモリシタダイチであった

どうなのおおこの状況ってさあ？

とにかく

食べよう

お皿は・・・ 触らない方がいいんだよね

でも 流しのところまで持っていくのはいつもやってるし

それくらいは

「あーっ！ そのまま！」

えっ？

「俺やっから」

いつの間にキッチンに？

私が触らないように背中でガードしながら食器片づけてるけど

私は触るものすべて破壊する怪獣じゃないんだか・・・ 破壊した

ゆうべ ショッパナでやった

モリシタダイチの中では私は破壊怪獣 だよ

まだ7時半前

8時10分に出れば余裕だからまだ時間あり過ぎる

あーもー 早起きしなきゃよかったあ

朝から疲れちゃったあああ

ン・・・肩・・・トントン・・・ママ・・・ママ？

「ママ？」

あっ

「そろそろ出た方がよくな？」

寝ちゃってた ダイニングテーブルの上で

しかも私 今 ママって言っちゃった・・・よね？

「俺、戸締りしてから出るから先に」「私がやります！」
私の家なんだから！　なんでモリシタダイチが戸締りよ？
「戸締りは俺がすることになってっから」
「ハ？」
「上原愛里のお母さんのノートに書いてっから」
「え？」
「忘れっかもしんねえから戸締りはやってくれって」
ママーーッ！　どんだけ私のこと信用してないのよーー！
学校行くとき戸締りなんてしたことないけど　ママがいるからでしょ！
いいわよっ　わかったわよっ
「それじゃ、お先します」
「あ、弁当！」
「ハ？」
「ほれ」
モリシタダイチがフリフリのお弁当入れを私の目の前に・・・
マジで作ったんだあ・・・
同級生の男子が作ったお弁当がこのフリフリの中に入ってるんだあ・・・
「ほれって」
これを受け取るのにどれほどの勇気がいるかあなたにはわかりますか？
「どした？」
「あ、いえ、はい」
受け取ったけど
「ほんじゃ、いってらっしゃい」
いってらっしゃいって・・・
すぐに学校で会うよね？　同じクラスだよね？　同じクラスだよおお
「どした？」
「え？　あ、いえ、それじゃ・・・　また」

な～んていうのかなあ
連休前までは黒板の方にしか意識なかったよねえ
私の席のまわり知らない男子ばっかだし
なのに・・・
左斜め遙か後方にモリシタダイチが
さっきまで私の家において私に朝食作ってたモリシタダイチがいると思うと
頭の神経が左斜め遙か後方ビンビンに意識しちゃって吐きそうなんだけど
いないことにする？　連休前までは同じクラスだって知らなかったんだから
そうだよ　あのときまでは私の中ではいなかった　いないいない
いるよ　いたよ　朝礼終わったときチラッと見ちゃったよ　なんで見ちゃったかなあっ

やっと昼休み

なんかすでにかなり疲れてるんだけど

今日はいつもとは違う意味で中庭のベンチに座ってる

だってモリシタダイチが作ったお弁当をモリシタダイチがいる教室で

モリシタダイチが見てるかもって神経ビリビリになって食べられる？

神経破裂しちゃうよ 神経って破裂する？ わかんないけどそれくらいだよ

膝の上のフリフリのお弁当入れ

これはママのときと同じだから今はホッとする

中に入っているピンクのハート模様のお弁当箱も 今はホッとする

私は今からモリシタダイチが同級生の男子が作ったお弁当を食べるの？

食べるけど お腹空いてるし

食べよう！ 昼休み終わっちゃう！

え・・・

これ・・・は？

嫌がらせ？

俵型のおにぎり 形はきれい 私はこんなにきれいに作れない作ったことないし

でもね 真っ白なんだけど？ ノリとかゴマとかは？ なにこれ？

おかずがね

まずは唐揚げ そしてポテサラ 極めつけがピーマン縦に切っただけのやつ

なにこれーっ？

嫌いだって言ったよね？

嫌いなものばっかなんだけど？

しかもこのピーマン！ メッチャ存在を主張してるピーマン！

これは なに？

やっぱり嫌がらせ？

それとも 好き嫌いはゆるしませんみたいな保母さん気分？

いいわよ！ 食べるわよ食べてやるわよ！

そして不味くて食べられませんでした！ もう二度とお弁当はいりません！

そう言ってやる！ 言ってやるからね！

まずはこの真っ白なおにぎり！

あ サイズ感はピッタリだけどサイズ感はねっ でも あれ？ え？ なに？

お塩がちょうどよくて ごはんが美味しい？ どういうこと？

まあこれは・・・ お塩とごはんだけだから それはまあ・・・まだね

唐揚げ！ 絶対ウツてなる！ あれ？ ならない 美味しい なんで？

ニンニクは？ ニンニク入ってない？ ニンニク入れないで唐揚げって作れるの？

いやいやいやポテサラ ポテサラが問題！

中に・・・ 玉ねぎは・・・ わかんない、ママは小さく刻んで入れるから

小さくしてもわかるよ！ でもチョコビッとは食べないと え？ なに？
美味しいんだけど 玉ねぎ入ってないし酸っぱくないって どうして？
ママのはマヨネーズの味しかしないけど これは美味しい なぜ？
だまされないだまされないだまされない だますつもりはないだろうけど
最大の敵はこれだよ ピーマン！ なんなのこのラスボス的にドーンとさ！
食べられなくはないけど積極的に食べたいと思わないっていうのは 嫌いってこと
だよ！
どうする？ さすがにこれは・・・
でも一口も食べなかったら負けて気がする 勝負してるわけじゃないけど
吐くかもおお あれ？ え？ 美味しいんだけど？ ピーマンて甘いのか？
これピーマンじゃないのか？ なに？ なんで？

全部食べちゃった
おかずに気を取られて気がつかなかったけど イチゴが一個入ってた
イチゴは大好き フルーツの中でいちばん好き

どうしよう お弁当美味しかった
もう作らないでくださいって言えなくなっちゃった
完食しちゃったよおお

指紋認証

午後の授業は 初めてお弁当で満たされた感と
モリシタダイチが作ったお弁当で満たされるってどうなの？ って思いが錯綜して
ますます神経が左斜め遥か後方にビリッビリにいっちゃって
頭の中の歯車がギギッて止まって 先生が何を言ってるのか全然わからなかった
物理だったからね いつもそうなんだけどね
きっとモリシタダイチはこの先生が言ってること全部理解してるんだろなああって
そんなこと考えてるってどうなの？ って ぜ～んぜん授業頭に入らなかった
どっちにしる入らないけどね 物理だから

玄関の前

やっと帰ってきたってカンジ なんか疲れたああ
鍵穴に鍵を・・・開いてる！
ほらママ！ 家政婦さんを信用し過ぎだよ 鍵閉めるの忘れてるからね！
やっぱり明日からは私が
あ・・・いる！ 立ってる 玄関に立ってる
なに？ ジーッと見てるけど？
私の家に私が帰ってきただけですけど？
「なんですか？」
「あ？ あっ おかえり」
おかえりって 私の家なんですけどーっ
「ただ・・・いま」
なんでモリシタダイチにただいまって言わなきゃならないのよ私の家だよ！
それはいい！ ママに電話！
「あのさ」
「母に電話するので、あとで」
ダダダダッ 部屋に走り込んで

向こうは何時？ 明け方？ 夜中？

大丈夫！ ママは私からの電話は何時でもすぐ取るから！
前に夜中にお腹痛くなっちゃって、ママの部屋に行く余裕なくて電話したら
すぐに出てすぐに駆けつけてくれた

『この電話番号は電源が入っていないか電波の・・・』

え？ 電源入れてない？ ウソ！ ママは寝るときも電源入れてるよ
間違えたかな それとも繋がり悪い？

もう一回

『この電話番号は・・・』

ウソ なんで？ なんで？ 私ひとり置いていくなんてって玄関で泣いたのに なんで？

「電源入れてよ！ ママ！」

「あのさ」

え？ ドアの向こうからモリシタダイチの声

「な、なんですか？」

今そんな余裕ないんですけどっ ママに電話繋がらないって どーして？

「ちょっとドア開けてくんねえかな」

なによもうっ

「なんですかっ？」

ドア開けたら 目の前に携帯差し出されたけど？ なに？

「洗面台掃除してたらさ、床に落っこっててよ」

え？

「隅の方にあったから、昨日は気がつかなくてさ」

あれ？

「エーーーーッ？ ママの携帯！」

ウッソーーーー！ なんて携帯忘れるのよおママーーーーッ！

繋がらないはずだよおお どうしよおおお どうしたらいいのおおお

あ！ ママの携帯にパパの連絡先が入ってる！ パパに電話してママと話そう！

電源 早く！ 早く！

え・・・

指紋認証画面

「ママー！ なんて指紋認証なのよーー！」

こういうの弱いくせに指紋認証って 誰もママの携帯なんか見ないよーー！

落としたってどうせ大したものに入れてないじゃーーん！

もおおお どうしよおおお

え？ なに？

頭を モリシタダイチの手が 私の頭をなでてるけど

「なんですか？」

「あ？」

「この手はなんですか？」

「あれ？ 効かねえ？」

「キカネーってなんですか？」

「えっと、あの、なんつうか」

「子ども扱い？」

「あ？」

「頭ヨチヨチって子ども扱いしてますよねっ」

「やっ じゃなくて」

「私は小学校二年生じゃないですけどっ」

「じゃなくてさ」

「私は高校二年生です！」

「わかってるよ！」

「ママに電話繋がらなくてママは電話忘れていっちゃって指紋認証で開けられなくて」

あ・・・ 止まらなくなって・・・

「お皿は割っちゃうし好き嫌い多いし料理も洗濯も掃除もなんにもできないからって」

八つ当たり・・・わかってるけど・・・

「あなたはトップ3で料理も洗濯もなんでもできるからって」

止まらない・・・

「バカにしないでよ！」

「してねえよ！」

「してる！ 私のことなんにもできない子どもだってバカにしてる！」

えっ なに ガバってギョって なに？

「ちょ、放して！」

「あ、ご、ごめん」

「なんですか今のはっ？」

「ちょ、つい」

「抱っこ？」

「ハ？」

「抱っこすれば機嫌がなおると思ったのっ？」

「じゃねえ、じゃなくてさ」

「子どもじゃないって言ってるでしょーっ！」

バッチーっ

あっ

ひっぱたいちゃった

ビックリした顔で頬っぺた押さえてる手の隙間から私の指の跡

「あーっ！ ごめんなさーっ！」

え？ なんで笑ってるの？ 痛すぎて？ だよね だよねーっ

「ごめんなさい！ あの、ごめんなさい！」

「なんともねえよ」

なんともあるでしょおお 真っ赤になってるよおお

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「なんともねえって」

「私、あの、あなたは悪くなくて、あの、八つ当たりしちゃって」

「そっかあ」

なんでニヤニヤしてるの？ 本当は怒ってるよね？ だよな？

「ごめんなさあああい」

「俺は嬉しいけどさ」

え え???

「ピンタされてからが一人前つつうかさ」

「なんの・・・ 一人前ですか？」

「あっ、なんでもねえ」

なんだかよくわかんないけど えっと とにかく

「冷やします！ 私、冷やしますから」

キッチンへ

「いいって」

手をつかまれちゃったけど？

「なんともねえから」

その真っ赤な手形を なんともないとは言えないと思うんだけどお？

「ごめんなさあああい」

え？ ギュッ？ また？

「あっ！ ごめん、あの、抱っこじゃねえから」

「はあ」

「なんでもねえから」

「はあ」

私としても・・・

今は・・・

文句言えないですけどおおおお

承認手形

モリシタダイチの頬の真っ赤な手形が・・・
ママがあの紙に押したハンコみたいに
私が入承したって印に・・・ なっちゃう？ なっちゃうの？
でもあれはさあ そういうんじゃないくてさあ
でもねえ ひっぱたくのは・・・ ないよなあ
まだ知り合ったばかりで親しくもないのに てか親しくてもひっぱたくのはないよお

「あのさ」
キッチンから顔出したモリシタダイチ
あの頬の手形を・・・ ママのコンシーラーで塗り潰したい
「呼び方決めね？」
「ヨビカタ？ なんですか？」
「俺と」
私を指さすけど
「の 呼び方」
ああ 呼び方ね
「上原でいいですけど」
「それは、なんつうか、学校と仕事のケジメつかねえっつうかさ」
「ケジメ？」
「やっぱ学校の呼び方とここでの呼び方違う方がケジメつくっつうかさ」
そんなのでケジメつくものなの？ 呼び方変えても同級生ってことは変わらないよね？
「やっぱ上原と森下じゃ学校と変わんねえからさ」
えっと 私はあなたと学校で口きいたこともないけど？
購買でわけのわからないやり取りはしたけど
森下くんて呼んだことないし上原って呼ばれたこともないよね？
「俺のことはダイチで」
「えっ いきなり名前？」
「俺はぜ～んぜんかまわねえから」
いやいやいや 私がかまうよ
ていうかさあ どんどん話進んじゃってるよね 呼び方とか
あ・・・ やっぱその手形？ ハンコ・・・ そんなカンジ？

私が悪いのかあああ

「そんじゃ俺は、あの、愛里で」

「エー——ッ？　呼び捨て？　名前呼び捨て？」

「そんじゃ、愛里ちゃん」

「愛里ちゃんはママがそう呼ぶからイヤです」

「そんじゃ、愛里さん？」

「あのお、いきなり名前っていうのは、なんか・・・まだちょっと・・・」

「そっかあ」

上原でいいよお　どうせケジメなんてつけられないんだから　同級生なんだからあ

「お嬢さん」

ン？

「お嬢さんてことで」

「からかっています？」

「マジだけど」

「お嬢さんて　なにそれ——？」

「雇い主の娘さんだから　お嬢さん」

「イヤです！」

「そんじゃどうすっかなあ」

「上原でいいですから」

「それはケジメつかねえつつってんじゃん」

「ケジメって、それは」

私を見ているモリシタダイチ　頬に　真っ赤な手形・・・

「おまかせ・・・します」

「そんじゃ愛里で」

そこ——？　そこにいく——？　ちゃんもさんもなし——？

「はい・・・」

「俺、買い物行ってくっから」

「行って・・・らっしゃい」

「愛里、なんか食いてえものある？」

早っやっ

「おまかせ・・・します」

「わかった」

ニッコニコして出ていったけど

バカ　私のバカ　手を出した方が悪い

マジそれ

夕食はハンバーグ

ママのハンバーグってパッサパサでそんなに好きじゃないんだよなあ

でも嫌いってほどじゃないから嫌いリストには入れ忘れたけど　そんなに好きじゃない

でもメッチャ好き嫌い多いって思われるのはイヤだし 食べよう

「いただきます」

いないけどね どこかの掃除してるみたいだけどね

え？ フワッフワ！ 美味しい！

これってモリシタダイチが作ったの？ 作ってたよ

私は部屋にこもってたけど 午後ティー取りに来たときに何かこねてたよ

あれってハンバーグだよな ハンバーグ作っちゃうんだ

一年の調理実習のメニューにあったけど 私は淡雪寒天作ってたから 作り方知らない

でもあのときは・・・こんなにフワッフワじゃなかったよ

恐るべし モリシタダイチ！ な～んでもできちゃうんだなあ

お嫁さんいらなくない？ てかさ、こんなになんでもできる人のお嫁さんは大変だよな

関係ないからいいけど

私は・・・ どうするの？ なんにもできないけど？ 結婚できなくない？

一生独身？ でも自分のこともできないけど？ どうするの？

アラブの大富豪でメイド数十人とかなら・・・ アラブの大富豪と結婚したくはない

てか何考えてるのよ！ そんな先のこと考えてもさ てかさそんな余裕ないよ

この混乱の中でいっぱいいっぱいだよ

「そんじゃ、明日、また朝来っから」

「はい」

もう明日は早起きするのはやめよう 無駄

「あ！ あっぶねえ、忘れるとこだった」

どうしたの？ なに？ お弁当箱ならさっき手提げに入れてましたよ

「明日、家庭科あんじゃん」

「そうですね」

「パジャマ」

「ハ？」

「持って帰って縫うから」

「ハ？」

「愛里のお母さんに頼まれてっからさ」

えっと？ アーーーーーッ！ エーーーーッ？

「はい」

手を出すけど エーーーーーッ！

「裁断と仮縫いまではできてんだよな？」

「あ、あの、ちょ、ちょっと、あの、それは、あの」

忘れてたああああ！

家政婦さんに縫ってもらはずで でもその家政婦さんがエーーーーッ!?

「それは・・・ちょっと・・・あの・・・やっぱり・・・」

「俺、ちゃんと縫えっから」

そーゆーことじゃ なくてーっ

「あの・・・ 同級生ですよね？」

だからなに？ みたいな顔してるけどおっ

「同級生に宿題縫ってもらって・・・」

「俺、同級生の宿題何回もやってっから」

「え？」

「小学生んときから、算数とかさ」

算数とミシン縫いは違うでしょおおおっ

「そんなんにすんなよ」

「でも・・・」

「仕事だしさ」

えええええ仕事だからっていてもこれは・・・

「愛里」

呼び方慣れるのメチャ早すぎるしいい

「ケジメ」

「え？」

「ここでは俺は家政夫」

「そうですけどお」

「意識され過ぎっと、俺も仕事やりづれえから」

いっ意識って、まるで私がっ なにそれっ？

「わかりましたっ」

部屋からパジャマの一式入った手提げ袋持ってきて

「お願いしますっ」

モリシタダイチに突き出すと

「おう！」

受け取る顔に 真っ赤な手形

早く消えてよおおお

家庭科

今朝はいつもの時間に起きた
早起きしたって無駄だとわかったから
それに英訳の宿題にけっこう手こずっちゃって寝るの12時過ぎちゃった
BFPO ってなに？ だったよ
British Forces Post Office 英軍郵便局
そんなの今後の実生活で使う？ しかも教科書と別の教本て鬼だよお

このドア開けたらいるよね
「おう、愛里」
いたよ
「おはよっ」
モリシタダイチの顔・・・ 昨日よりは薄くなってるけど まだ手形が残ってる
「どした？」
「あ、いえ、おはようございます」
明らかに誰かにひっぱたかれたであろう跡つけて学校行くのおお？
誰かって私なんだけどさあ

私が先に出るんだよね？ はいはい
「愛里、これ」
モリシタダイチの手に・・・
フリフリのお弁当入れと 家庭科の手提げ袋家庭科のパジャマのパジャマの
「どした？」
「いえ、いってきます」
顔見れない 下向いて受け取って 玄関からダッシュ！

午前中二時間家庭科
家庭科実習室の四角いテーブルに6人ずつ座ってる
みんな縫ってきたのかな 縫ってきたよね 怖がってたもんね
あれ？ モリシタダイチは？
てか、いた？ 今まで実習室でも見たことない・・・って まわり見る余裕なかった
私の席は窓側のいちばん端の台で窓側向いてるから 後ろのどこかにいるんだろうなあ

見たくない いっそいないで欲しいっ

先生が各テーブルまわってる 恐怖の時間 みんな顔ひきつってる

「返し縫いしてませんよ！」

返し縫いって何だっけ？

「ちゃんと授業聞いてたの？」

聞いてなかった

「やり直し！」

怖いいいい

行く先々で処刑が行われているううう

服飾専門学校じゃないんだからさああ もう少しユルめでよくない？

「上原さん」

「は、はい」

「出して」

あ 出すの忘れてた 見るのがなんか・・・

「は、はい」

袋から出してすぐに先生に渡したよお

「あら」

えっえっえっ なななんですか？

「きれいな返し縫いねえ」

えっと どこ？ どれ？

「ミシン目も正確！」

そ、そうなんですかそうですか よくわかんないけど

「皆さん！」

え？

「ミシンの縫製とはこういうことです！」

えっ ちょっ 上にかかげないで！

「あとで上原さんのを見せてもらって参考にしなさい！」

ヤメテーーーー！

それはこの実習室のどこかにいるモリシタダイチが縫ったんですーーーーっ！

私じゃないんですーーーー！ モリシタダイチですーーーー！

どんな顔して見てるんだろお 辛すぎるううう

先生が満足そうな顔でウンウンてうなずいて後ろの台に移動したああ ハァァ

生きた心地がしないって言葉の意味がよーーーーくわかった

「あら、森下くん」

え？ すぐ後ろから・・・

え？ え？ え？

背中合わせに いたのーーーーっ？ 新学期から？ この前の授業のときも？

知らなかったーーーー！

振り向けない振り向けない 今後二度と振り向けなーーーい！

「頬っぺたどうしたの？」

頬っぺ・・・ あっ

「ちっと、あって」

私ですううう 私がひっぱたいちゃったんですうう

「何があったのか知らないけど、手を出すのはよくないわね」

よくないですううう ごめんなさあああい

「あら、森下くん、何もやってないじゃない」

え？

「まだ仮縫いのままじゃないの」

どういうこと？

なんで？ 私のはちゃんと縫ってたのに？

「森下くん、他の科目も大切だけど、家庭科も実生活では必要なことなのよ」

「あい」

どういうこと？

私のは先生が絶賛するほどちゃんと縫ってたのに？

なんで？ なに？ なんだか・・・

お弁当

ミニハンバーグにアスパラの・・・

お弁当もちゃんと作ってるのに どうして自分のパジャマは縫えなかったの？

まさか・・・ 縫わなかった？ わざと縫わなかった？

私と同じ人が作ったってバレちゃうから？

そういうの重たいんだけど そういうのやめて欲しい

玄関のドア開けたら

「おかえり」

顔 見たくない

横をすり抜けて部屋に入ってドア閉めた

「愛里」

ドアの向こうから呼びかけるけど

口ききたくない

「どした？」

放っというて

あああもうっ

ベッドにバタンッ

なんかもう なんかだよーっ

「愛里入るぞ」

え？
入ってきたけど？ 入っていいって言ってないけど？
私 今 ベッドに大の字のままなんだけど？
「具合悪りいんか！」
「ち、ちがいます」
「寝てんじゃん！」
「こ、これは・・・ ちがいます、あの」
起き上がらないと誤解される
「ムリすんなって」
ちょ、グイッて寝かせないでよ！
「熱は？」
ちょっとオデコに手って
「だからっ ちがいます！」
振り払った もうなんなのおお
「具合悪りいんならさ、ちゃんと言ってくれよ」
「具合はっ 悪くっ ないですっ」
「そんじゃ」
「なんですかっ」
「機嫌悪りいの？」
「はあっ？ べつにっ」
「メッチャ機嫌悪りいじゃん」
笑う？ 機嫌悪いじゃんて言って笑う？
きっと私があなたが縫ったパジャマで褒められてたときも笑ってたんでしょ！
「なぜ自分のパジャマは縫わなかったんですか？」
「あ？」
「私のパジャマは縫って自分ののは縫わなかったのはなぜですか？」
「寝ちまったんだよなあ」
「はあ？」
「愛里の縫い終わって、俺のやっかなあって思ったとき、ヤベ英訳やってねえじゃんて」
「つまり、私のを縫っていたら時間がなくなったってことですよね？」
「時間がなくなったっつうより、英訳やってるうちに寝ちまったっつうか」
「あなたのを先に縫えばよかったですよ！」
「それは違いえだろ」
「何が違うんですか？」
「愛里のは愛里のお母さんに頼まれた仕事なんだからよ、仕事はキッチリやんねえとさ」
「あなただって高校生でしょ！」
「あ？」
「仕事仕事って、まずは自分のことやってよ！」
「俺、叱られてんの？」
「叱ってるんじゃないくて警告してるの！ 警告！」

「警告？」

「あの先生はね。本気で落とすんだから！　メッチャ厳しいんだから！」

「だよなあ」

「笑ってる場合じゃないでしょ！　落とされそうになった先輩だっているって」

「それって、俺のねえちゃん」

ン　???

「ねえちゃん、頭はメッチャいいんだけど、そういうの全然ダメなんだよなあ」

え・・・っと？

「お姉さん・・・が　いるんですか？」

「いるよ」

お姉さんがいるなら・・・

「お姉さんがお父さんの代わりに来てくれればよかったんじゃないんですか？」

「だ～か～ら～、ねえちゃん家事できねえんだって」

「へ？」

「成績はずっとトップだったんだけど家庭科がなあ」

ずっと・・・　トップ？

「家庭科追試って聞いたことあっか？」

家庭科の追試・・・　家庭科の　追試ーー？

「しまいにゃキーーってなって、ダイチ！　あんたが縫ってよって、俺まだ中一なのにさ」

中一で高校生のミシン縫いを・・・？

「そんなにうまくできなかつたけどさ、ねえちゃん成績トップだから、なんつうの？」

　トップの成績の生徒を家庭科で落とすのもなあってことで大目に見てもらったっつうか」

怖い　ますますあの先生が怖くなっちゃった

トップの成績でも追試でトップの成績だったから大目に見てもらえたわけで

私みたいな庶民レベル成績は・・・　確実に落とされる　絶対落とされる

「愛里のはちゃんとできてよかった」

ニコニコしてるけど　そうじゃないよね？

「あなたは？　あなたが落とされたらどうするの？」

「落とされねえようにすっからさ」

「今日だって何も縫ってなかったじゃない！」

「来週までに縫えばいいからさ」

「縫えばいいってそんな、あ、もう私のはいいです！　自分のを縫ってください」

「そうはいかねえよ、仕事はキッチリやんねえとさ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？　落とされたらどうするの？」

「まあ落とされねえように？　なんとかすっからさ」

「なんとかって、また寝ちゃったらどうするのよーーっ？」

「ハ・・・ハハハハハハ」

「な、なんで笑ってるの？」

「だってさ・・・　愛里が俺の・・・」

なによ？ 私は真剣に言ってるんだけど？ まだ笑ってるけど？
「あなたが落とされたらっ 私のせいだって 私が思っちゃうんですっ」
「あ？」
「そんなことないとか何とか言うんでしょうけどっ そう思っちゃうんですっ」
なに？ なにその目？ そう思っちゃうわよ罪悪感感じちゃうわよ感じるでしょ！
「そんじゃさ」
「なんですかっ？」
「愛里が俺のを縫ってよ」
コノ人ハナニヲ言ッテルノ????
「俺が愛里のを縫うからさ、愛里が俺のを縫えばそれでいいじゃん」
バカなの？ トップ3つかまえてなんだけど バカなの？ バカだよな？
縫えないから家政婦さんに頼んだんですけどーっ？
バッカじゃないのーっ！

ミシン

ランドリールーム

ほっとんど入ったことない

窓際の特注のママの裁縫コーナー

あっ 私の小さいときの写真がズラーーッって

ママーー、こういうのやめてよおお

「愛里はさ」

モリシタダイチ イヤだって言ってるのに「ちょっとだけ」って無理やり連れてきた

「なんでミシン使えねえの？」

バカなの？

「使えないからです」

「使ったことあんの？」

「ないです」

「一回も？」

「ないです」

「使ったことねえのに、なんで使えねえってわかんのか？」

だーかーらー

「使ったことがないから使えないんです」

「なんで使ったことねえの？」

「怖いからですっ」

「なんで怖えの？」

なんなのよっ

「中学校の家庭科の最初のミシンの時間にっ」

なんでこんなこと言わなきゃならないのよっ

「先生が『針で指を縫った人がいるから気をつけてね』って言ってっ

それを聞いたら怖くなったからですっ」

「そっか」

納得した？ そういうことですっ

「それじゃ私はもう」

「ちょ、ちょい待って」

「なんですかっ？」

「あのパジャマの裁断と仮縫いは誰がやった？」

「私です」

「マジ？」

「あれは、授業中にやらなきゃいけなかったし、先生がまわってきて見てたし」

あなただって同じ授業受けたでしょっ！　いたの知らなかったけどさっ

「メッチャきれいにできてたじゃん」

「あれは型紙どーりに印つけて型紙どーりに切って型紙どーりに縫えばいいだけで」

「それができねえヤツもいんだけど」

「ハ？」

「俺のねえちゃんとかさ」

「はあ」

できない？　ウッソだあ、型紙どおりにやるだけだよ？

「つことはさ、愛里は不器用じゃねえんだよ」

ハ？　私は何もできませんけど？　だからあなたがここにいるんですけど？

「ミシンが怖えて思い込んでただけでさ」

「でも針で指を縫った人がいるって先生が」

「そんなんほっとんどいねえよ」

「でも先生が」

「クラスで指縫ったっやつって誰かいる？」

「それはみんなが器用だから・・・」

「俺のねえちゃん不器用だけど針で指縫ったことねえよ」

「それは、あなたのお姉さんだから、不器用といっても」

「家庭科落としかけたけど」

モリシタダイチのお姉さん・・・

私は間接的にあなたに追い詰められているような気がします・・・

「でも、私、ミシンなんて興味ないし使う必要ないし、それに・・・」

えっと、それに・・・

「だったらさ、俺が家庭科落としてもいいつうことか」

「ハ？」

「俺が愛里のパジャマ縫って、俺のを縫えなくて家庭科落としてもいんだろ？」

「ハァアアア？」

なにこれ脅し？　脅しだよ　なんでこんな・・・

「だ、だったら、あなたは自分のを縫ってください」

「愛里のはどうすんだよ」

「私は・・・　潔く落としますっ」

もういい　ミシン使うくらいなら落とす！　どーーでもいい！

「愛里が家庭科落としたら俺が料金もらえなくなっけど」

「料金？」

「家政夫の料金」

「そ、それは私からママに言いますから」

「それは契約違反になっから」

「け、契約？」

「愛里のお母さんのノートに書いてあることは言ってみりゃ契約の詳細内容ってことでさ」

なんか・・・むずかしくて・・・わからないんだけど

「それを反故にするってことは契約不履行で」

「あ、ちょ、ちょっと、何言ってるのか、ちょっと・・・」

なに？ その椅子の上をポンポンて？ 座れってこと？ 座るけどさ

「愛里は説明書通りならできんだよな？」

「説明書どーりにしかできませんけど」

「糸かけやってみねえ？」

「イトカケ・・・とは？」

「んっとさ」

ママの引き出し開けた

「あった」

説明書？

「なんでそこに説明書があるって知ってるんですか？」

「愛里のお母さんのノートに書いてあった」

「ハ？」

「俺がここでミシンかけると思ってたんじゃない？」

ママー、どんだけ細かく書いてるのよーーっ

ママのノートのせいで契約なんかで追い詰められてるよーーっ

「ここ」

“上糸のかけ方”

押さを上げて・・・ってこれか

説明書どーりにやってるけど？ できてるのか間違ってるのかもわからないけど？

針穴に糸を通して・・・

「できんじゃない！」

「説明書どーりにやっただけです」

「そんじゃ、これ」

“ポビンに糸を巻く”

ポビンは・・・ これで これをこの棒にポン

モリシタダイチが「次はこれ」って説明書指さすのを、
ただ淡々と淡々と説明書どーりにこなすだけ

「愛里、ミシンのセット完璧にできたじゃん」

え？

「一回でできんなんてすげえよ」

説明書どーりにやっただけなんだけど？

「そんじゃさ」

モリシタダイチがママの引き出しの中にミッシリ入ってる端切れを出して、

チャコペンで真っ直ぐ線を引いてミシンの上に置いて

「この線の始まりに針落として」

「針落とす？」

「ここに書いてんだろ」

あ これ？

針を落として・・・押さえを・・・

「そんじゃこのスタートのどこ押して」

「え？ 縫うってこと？ ムリムリムリ ムリです」

「大丈夫だからさ、俺がついてっから」

ええええ

「手で布押さえて」

こう？

「もっとこっち」

モリシタダイチが私の手をつかんで こんな針に近づけて大丈夫なのおお？

「この線のとおりになんか」

線のとーりに真っ直ぐ・・・

スタートって書いてるボタンを押して・・・

え？ ゆっくりなんだけど？ 手縫いよりゆっくりだけど？

針がゆっくりゆっくり一目一目・・・

「その線の終わりでストップ押して」

ストップ

これは・・・ ミシン目！

「私・・・ 縫った？」

「縫った！ 愛里はミシン使った」

お おおおおお！

なんか なんていうか

「怖くない 怖くなかった！」

モリシタダイチを見上げるとメチャ優しい目で私のこと見てる

ドキッ

え？ 今の なに？

「次は返し縫いな」

返し縫い 先生が「返し縫ができてない！」って怒ってた あの返し縫い

果たして私にできる・・・のか・・・なあ

モリシタダイチが また真っ直ぐな線を引いて

「ここに書いてあつたら」

“返し縫いのやり方”

これか

線の始まりより1cm先に針を落として・・・ 返し縫いって書いてるボタンを・・・

あ 逆に縫ってるけど？

ここで止めるって

それから？　あとはふつうに・・・

最後までいったら　また返し縫いのボタン押して1cm

返し縫いってこういうこと？

「メッチャきれいじゃん」

「線のとーりに縫っただけですけど」

「わかってねえなあ」

「え？　何か違ってます？　間違えてる？」

「すっげえちゃんとできてんだよ」

「本当？　嬉しい！」

それから、モリシタダイチは「端縫い」機能はこれとか、布に曲線書いて

「手で布まわしながらゆっくりな」とか

なんか小さい頃の遊びみたいな気分になって　楽しい　楽しいよ！

「そんじゃ、次はこれな」

モリシタダイチがモリシタダイチの手提げから出したのは

え？　私のパジャマ？　あれ？　縫ってない？　私の縫ってたよね？　あれ？

「これもただの練習」

練習　だから私の残り生地で？　え？　生地そんなに残ってた？

「そんじゃここからな」

「あのお」

「どした？」

「ミシンのスピードって、あんなに遅かったですか？」

「あれはいっちゃん遅いスピードに設定してっから」

「あのお」

こんなこと言うのってどうなの？

「もう少し・・・もうちょっとだけ早くって・・・　私にできますか？」

モリシタダイチがニッコリした

「そんじゃ、一個だけ早くしてみっか」

おお！　さっきよりスムーズ！　怖くないし

返し縫いして　タッ　タッ　タッ　これだけ線が長いとなんか・・・　終わりも返し縫い

「あのお、もうちょっとだけ・・・　早くって　ムリですよ、私、まだ」

「全然できるって、ほんじゃもう一個早くすっから」

「やっぱり早いって思ったらどうしたら・・・」

「そんなときはいったん止めてスピード落とせばいいから心配すんなって」

「はい」

あ　楽！　このスピード　ストレスフリー！

楽っのしいいいい

線のとーりに縫えばいいだけ　曲線も布をまわしながら縫ってる縫ってる

「おっし！ 今日こそまで！」
え？ あ 夢中になっちゃってた
「これで今日の分の俺の宿題は終わった」
なんのこと???
「愛里が全部縫った」
なにを？
「これ、俺のパジャマの生地」
「でも、これは私のパジャマの生地ですけど」
「だろ？ ビックリだろ？」
何の話？
「愛里と俺の生地、おんなしなんだよ」
ハ？
「愛里の見たときビックリしてよ、俺のとおんなし生地じゃんてさ」
「え？ そうなの？」
「愛里のは誰が選んだ？ お母さん？」
「私です」
「ボタンも？」
「私です」
「やっぱそっかあ」
なに？ なになになに？
「これ、俺のボタン」
これは・・・
「エーーーーッ」
私のとまったく同じボタンの色違い！ スカイブルー
グレーにこのスカイブルーってオシャレ過ぎ！
「これは・・・ あなたが選んだんですか？」
「俺のかあちゃん」
「お母さん？」
「俺はこういうのどうでもいいつつうか着れりゃいいつつうか」
そういうのってどうなの？
「安売りになってた生地買ってたらさ、それ見たかあちゃんがさ
こんなダッセー生地がウチにあることが許せねえつつって」
どんな生地だっただらおお 見たくないけどお
「そんで、かあちゃんが買ってきた」

モリシタダイチのお母さん！
会ったこともないし会うこともないと思いますけど
あなたのセンス 最高です！

ピザ

「ヤッペ！ もうこんな時間だ」
あ 7時過ぎてる
ミシンに夢中になってて時間忘れてた
「今メシ作っから」
今から？ 遅くなっちゃうよ？
「あの、今日は夕食はいいです」
「すぐ作っからさ」
「私にミシン教えてくれて遅くなっちゃったから」
「そんなん関係ねえよ」
「あの、本当に、今日はミシン教えてもらえただけで嬉しかったですから」
「晩メシどうすんだよ」
「まあそれは・・・」
Uber？ いやだなあ あ！
「ピザ食べに行きます」
「ピザ？」
「そこの通りを渡って歩いて5分くらいのところにピザのお店があるんです」
パパがいた頃はよく行ってたなあ ママはピザがそんなに好きじゃないから最近は・・・
「俺も行っていい？」
「え？ どこに？」
「そのピザの店」
「いいですけど、早く帰った方がよくないですか？」
「帰ってもどうせメシ作んなきゃなんねえしさ」
あ そっか
「はい、だったら」
「おっしゃ！」
なにそのガッツポーズ？ ピザ好きなの？
「私、着替えてきます」
制服のままだったよ

私の横を歩くモリシタダイチ

これよね！ って色合いのジーンズのパンツにジャケット 中には白いTシャツ

「その服は・・・」

「服？ あ、これ？」

「あなたが選んだんですか？」

「かあちゃん」

やっぱり！

「なんで？」

「なんでもないです」

モリシタダイチのお母さん センス最高！ メッチャ私好みのセンス！

テーブルの向こうで眉をしかめてメニューを見ているモリシタダイチ

何を悩んでいるの？ 食べたいのがいっぱいある？

だよねえ、ここのはどれも美味しいんだよお 迷っちゃう

「あのさ・・・」

「はい」

「どれがなんなんだかよくわかんねえんだけど」

ハ？

「マル・・・ゲ・・・リータとかマリ・・・ナーラとか よくわかんねえ」

「下に説明書いてますけど」

「書いてんだけどさ、どんななんか想像できねえ」

そういうもの？ 男子ってそうなの？

「それじゃ・・・ 私にまかせてくれますか？」

手を合わせて「お願い！」みたいに はいはい

「あ、お願いします」

私が好きなのはマルゲリータ、もうひとつは魚介たっぷりペスカトーレ

「これは愛里が好きなやつなんか？」

「そうです、いちばん好きなのはこっちのマルゲリータです」

「なんも載ってねえじゃん」

「載ってるでしょ！ ほら、トマトソースにモッツアレラにバジル」

「だけじゃん」

「シンプルなのがいちばん美味しいんですっ」

「塩むすびか」

「なんですか？」

「なんでもねえ」

マルゲリータ！ 美味しいいい！

モリシタダイチはペスカトーレを 熱がってるチーズの熱さに油断してたよね

「美味めえ！」

「でしょでしょ！」

「この生地は・・・ ふつうの粉じゃねえよな？ 強力粉か？」

ピザを分析し始めたけど 作るつもりじゃないよね？

家でピザなんてムリだからっ 作れるのかもしれないけど 知らないけど
窯！ 窯がないでしょ！ ここのは石窯！ まさか窯まで作る？ 作るかも・・・
いい 食べよう

久しぶりだったから余計に美味しかった！

モリシタダイチはアイスコーヒー、私はアイ스티ー飲んでるけど
なんか・・・ なんだろう？

「俺ん家ってさ、外食ほっとんどしねえんだよ」

そうなの？

「かあちゃんがさ、とうちゃんが作るメシがいっちゃん美味めえつつさ」

えっと？ お母さんは自分の料理よりお父さんが作る料理が好きってこと？

「愛里に最初に作った弁当あんじゃん」

「あ、はい」

完食しちゃったお弁当ね

「あのにぎりめし、かあちゃんがいっちゃん好きでさ」

「あ！ あの白い？」

「塩だけでにぎるやつ」

「美味しかったです」

「マジ？」

「はい」

完食したの知ってるよね

「でもなあ、とうちゃんには敵わねえんだよなあ」

えーっ？ あんなに美味しかったのに？

モリシタダイチのお父さんてシェフ？ 元伝説のシェフ？ 今は伝説の家政婦で？

「俺、一生とうちゃんには敵わねえ気がする」

常にトップ3に入っているモリシタダイチが敵わないトーチャンて どんな人？

あ・・・ 頭に浮かんじゃった なんだったっけ

昔ママが好きだったドラマの ガッシリした男の人がボブのカツラつけて

メッチャ濃いメイクして白いフリフリのエプロンつけてる なんだったっけ

あの人が浮かんじゃったんだけど

「俺が愛りん家でやってることだって、とうちゃんの真似つつうかさ」

モリシタダイチがトーチャンていうたびに あの人が浮かぶ なんだったっけ？

「愛りん家にとーちゃんが来てたらさ、完璧にやってっと思うんだけどさ」

ミ・・・ミタ・・・なんだったっけ？

「俺でごめんつつうかさ、まあ、俺で我慢してくれつつうの？」

「ミタゾノ！」

「あ？」

「あ、いえ、あの、なんでもないです」

やだあ、あれが家に来るのは やだなあ

「あなたでよかった」

あの人物陰からジューッと見てて 誰にも知られたくない秘密ぶちまけてたよね
あの目が怖かったあ
「あなたでよかったです」
「マジか」
あれ？ え？ 真っ赤な顔になって頭ボリボリ掻いてる
もしかして・・・ 甲殻アレルギー？
私 聞かないで注文しちゃった ムリして食べたのかな
「あの、大丈夫ですか？」
「あ？」
まだ真っ赤な顔
「無理してないですか？」
「ぜ～んぜんムリしてねえよ、楽しいっつうかさ」
「楽しい？」
甲殻アレルギーが楽しい？ どういうこと？
「あ、や、えっと、そろそろ帰えっか」
「そうですね」
早く帰って休んだ方がいいと思う 薬持ってるのかな？ 私の家にはないけど
モリシタダイチがお勘定の・・・
「あっ！ 私が払います！」
「なに言ってんだよ、俺が払うって」
「いえ、私が」
甲殻アレルギー発症させちゃったかも
「俺、雇われてっけどさ、こんくれえは払えっから」
「いえ、ダメです！」
困った顔しておでこボリボリ掻いてる やっぱり痒い？
「えっと、あの、これは」
ハッキリ言うのもなんか・・・ あ！
「お月謝です！」
「月謝？」
「習い事したときに先生に払いますよね？」
「したことねえからわかんねえけど、まあ」
「私は今日あなたにミシンを教えてもらいました、そのお礼です」
「んなこといいって」
「いいえ！ これは、労働に対する対価です！」
ポカンとした顔してるけど
「あなたは受け取る権利があって私は支払う義務があります！」
あなたが契約がどうのとか言ったんだからねっ
「やっぱ似てんなあ」
えっ？ だれに？ ミタゾノ？ 私があれに似てる？
「俺はあれは労働とみなしてねえから」

「でも」

誰に似てるの？

「あれは、俺が勝手にやったことだから」

「勝手では・・・ないです」

私は・・・

「救われました」

「え？」

「ミシンに対する恐怖から」

私のことジッと見てる なに？

「そっか」

ニッコリしたモリシタダイチ

結局モリシタダイチが払ってくれた・・・っていうか払わせてもらえなかった

私の横を歩くモリシタダイチ

今は・・・ 顔は赤くない

症状が治まった？

「あのさ」

「はい？」

「LINE」

「ライン？」

「愛里の LINE おしえてくんねえ？」

「私の LINE？ なぜ？」

「え、なんつうか、やっぱ、なんかのとき、連絡取れねえとき」

あ・・・ そうだよな ママみたいに連絡取れないとメッチャ困るよねっ

携帯ごと忘れて行っちゃったけどねっ

「そうですね、必要です」

「マジ？」

「はい」

道の真ん中で LINE 交換

なんか嬉しそうに携帯見てるけど・・・

アレルギーあるなら言ってよ

私が注文する段階で言ってくれたら別なのにしたよ

「あの」

「なに？」

「そういうの言わないとわからないですから」

「えっ」

「ちゃんと教えてください」

え？ 目を見開いちゃって あ！ また真っ赤になった！

知らない！ 言わないから悪いんですよ！

鈍感

家に帰ってきたけど

モリシタダイチは「もうちょっとやることあっから」って

早く帰らなくていいの？ アレルギーぶり返さない？

なにやってるのかな？

ランドリールームをこっそり覗くと・・・

アイロンかけてる あれって私の制服のブラウス・・・だよな？

アイロンなんて触ったことないよ ていうかさ、早く帰らなくていいの？

「あのお」

「アヂッ！」

あっ 私が声かけたから

モリシタダイチが流しの方に走っていくけど

「ダメーーーー！」

「あ？」

「冷やしちゃダメ！」

「ちっと火傷しちゃったからさ」

「火傷は冷やしちゃダメ！」

「冷やすだろフツー」

「そう思うんです、みんなそう思ってるの、でもそうじゃないの」

えっと キッチンの食器棚の下の扉の中に・・・ あった

「どこですか？」

「あ？」

「火傷したところ」

「ここだけど」

指・・・ 長いな・・・

「冷やすと血行が悪くなって治りが遅くなって、痕が残っちゃったりするんです」

アロエのジェル塗って

「アロエは火傷に効くっていうか消炎殺菌作用があるから」

指先用のバンドエイドは・・・ あった

「こうやって、夜寝る前も取り換えて、明日の朝も取り換えてください」

えっと

「これ持って行ってください、まだいっぱいあるから」

アロエジェルと指先用バンドエイドをモリシタダイチに・・・

え？ なに？　なんでジッと見てるの？　信用できない？

「すげえな」

「なにがですか？」

「んなこと知ってるなんてさ」

ああ　それね

「ママがおっちょこちょいでしょっちゅう火傷するんです

　ああ痕が残っちゃったあとか、まだ痛いのおおとかうるさいから

　いろいろ調べただけで　効きますから　ママで実証済みですから」

「そっか」

「あの、もう帰った方がいいと思います」

「あとちょっとだけだからさ」

「でもアレルギーが」

あ・・・

「アレルギー？」

いいよね　事実だし

「甲殻アレルギーですよね？」

「誰が？」

「あなた」

「俺　アレルギーねえけど」

「私に気を使って隠さなくていいですから」

「隠してねえけど」

「真っ赤になってたでしょ！」

「へ？」

「ピザのお店で真っ赤になって痒そうに頭ボリボリ掻いてたし」

そんな　え？　え？　みたいな顔してもごまかされないわよ

「LINE 交換したときだって真っ赤になっちゃってて」

「あ？」

「そういうの言ってくれなきゃわからないです」

「あ！」

「私が注文するとき言ってくれば魚介じゃないのを頼んだのに」

なにその放心状態みたいな顔？

私間違ったこと言ってる？　言っていないでしょ！

「愛里って・・・」

なによ？

「メッチャ鈍感かあ」

「ハアアアア？　わかるわけないでしょ！　アレルギー持ってるかどうかなんて！」

頭抱えたって　わかるわけがないでしょ！

「なんでそこんどこまで似てんのかなあ」

似てる？　何に？

「そこは似て欲しくねえんだけどなあ」

なにをひとりでブツブツ言ってるのよっ
「やっぱハッキリ言わねえとわかんねえかあ」
「わかりませんっ」
なによその恨めしそうな目？
「今かあ？　今はまだマズくねえかあ？」
またブツブツ言ってるけど
「ハッキリ言ってください！」
他にもアレルギーあるの？　なんなの？
「俺は」
「はい」
「アレルギーねえから」
「でもさっきは」
「仕事すっから」
ランドリールームに入ってっちゃった
なんなのよ？　鈍感とか似て欲しくないとか　わけわかんないよ
仕事ってもう9時過ぎてるよ？
「あの」
「アレルギーねえって」
「そうじゃなくて、もう帰った方がいいです、9時過ぎてますから」
「洗濯だけして帰ってから」
なんか機嫌悪くない？　私が何かした？

モリシタダイチが洗濯物をカゴから・・・ えっ そのカゴ・・・
バスルームの脱衣カゴ！
「ダメーーーーーッ！」
カゴ抱きかかえて　ゼーゼー
「俺なら大丈夫だって」
「じゃなくて！」
この中に・・・　忘れてた　ママがいるときと同じに　なーんにも考えないで
脱いだ下着入れてたーーーーっ！
「こ、これは・・・　洗わなくていいです」
「俺はアレルギーじゃねえっつうの！」
「じゃなくて！　アレルギーとかそういうのじゃなくて！」
「さっさと洗って帰っから」
カゴ引っ張るけど　ダメーーーーーッ！
「こ、この中には、この中には・・・　わ、私の、あの、入っているの」
「だから洗うっつうの」
「私の・・・ですよ？」
「わかってっから」
「わ、わかっているなら、そんな、私の・・・」

「仕事」

ハ？

「割り切ってっから」

割り切ってるってそんな・・・

「あのさ、そういう意識されっと仕事やりづれえつつたろ」

なに・・・それ・・・

「そうですねっ あなたにとっては仕事でしょうけどっ？」

ムカつくっ

「私にとってっ あなたはっ 高校の同級生のっ 男子なんですっ 男子っ」

「だからそういうの関係ねえって」

「あります！ 同級生の男子に下着見られるとか、まして洗われるとか」

メッチャ

「私はイヤなの！ 恥ずかしいの！ 意識するなって するでしょ！」

アッタマきてる

「あなたが同級生の男子ってことは事実なんだから！」

なによ？ なんかわからない表情してるけど どーーでもいいっ

「私のこと鈍感だって言ったけど あなただって鈍感でしょ！」

もう言っちゃうけどっ

「女の子の気持ちなんてぜーんぜんわかってない！」

カゴの中から下着取り出して

「私が洗います！ 帰ってください！」

下着抱えて部屋に入った ドアをバッターンって閉めてやった

もう 10 時過ぎた

物音がしないから帰ったよね

この下着洗わなきゃ

ランドリールーム

私の制服のブラウスがきれいにアイロンかかって下げてある

仕事ですものねっ

さてと・・・

洗濯機・・・

どうすればいいの？

使ったことない てか 触ったこともない

なんか上の方にいろいろ表示？ そういうのが書いてあるけど

どれ？ どこから？ 洗剤どこに入れるの？

洗剤は洗濯機のカゴの中にあるけど・・・ なんかいっぱいあるんだけど？

えっと・・・

ピコン

携帯？ なに？

ピコンピコンピコンピコン

だれ？

森下大一

ピコンピコンピコン

なんなのよっ 契約なんちゃらのこと？ 仕事やらせなかったから怒ってる？

ピコン

うるさい！ 電源OFF！

LINE おしえなきゃよかった

えっと・・・ 明日 NET で調べて明日やろう 宿題やらなきゃ！

なんかさあ ミシンの恐怖から救ってもらったとかさあ 楽しかったけど でもさ

ピザ一緒に食べに行ったのも楽しかったけど でもさ

なんなのあの態度っ？ 鈍感てなによっ？ 自分の方がよっぽど鈍感だよ！

もう口ききたくない！

コメノ

起きて顔洗って制服着て・・・
あのドアの向こうにあいつがいる
きっとあのゆうべの不機嫌そうな顔で
な～んにもできないお嬢さんの世話してやっていますよみたいな？
仕事ですからみたいな？

そ～っと玄関で靴履いて そ～っと玄関のドア開けて そ～っと玄関から出た

朝食なんかいらない！
あいつの作ったお弁当もいらない！

つくづく あいうえお順の席でよかったよ
永遠に席替えしないで欲しい
教室の遥か端と端だから顔見ないで済むって ここは憩いの場だよ

お昼はどうしようかなあ
学食に一人で行くのはイヤだから 購買でパン買おう

えっ？
購買の前に・・・ あいつが立っている
学食に行こう
「ちょ、ちょっと待った！」
知らない
「上原愛里！」
ヤ メ テーーーーー
大声でフルネーム呼ばないでーーーー
やだ みんながこっち見てる
これで無視したら何かあったと思われちゃう あったけど
「な・・・ なんですか？」
振り向いてあいつの胸元見た 顔見たくない
「これ」

あっ フリフリのお弁当入れ！

なんなのなんなのなんなのーっ!? こんなところで渡さないでよーっ!

「上原愛里の、家政夫が」

みんなこっち見ないでよおお

「上原愛里に渡してくれって、届けにきた」

やだもう みんなストップして見てないでよおお

これで受け取らなかつたら・・・ 逆にヘンに思われちゃう

ハメられたっ 完全にハメられたっ

「ありがとうございます」

フツツに受け取ってフツツな顔して・・・ 中庭にダッシュ！

アタマにくるーっ

どういうつもりっ? どーゆーつもりっ?

仕事だから? お弁当はちゃんと渡さないと契約違反になる?

にしてもさあっ あそこで渡す? 購買の前って! みんな見てたよ!

机の中に入れておくとかさあっ こっそり渡してくれればよくない?

どーっでもいいっ!

まあ なんていうの? あっちは仕事で作ったわけだから?

こっちもその代価として? あくまで仕事のやり取りとして?

食べればいいんでしょ!

おかず・・・ やだあ 美味しそう

これがさあ 誰が見ても「ウワッ ゲロマズそう!」だったら食べなくていいのにいい

ごはんのフタ開けて・・・ なにこれ? 海苔を切って・・・ 文字?

コメノ

コメノってなに? 「米の」ってこと?

白いごはんなんだからどう見たってお米でしょ!

これがお蕎麦だったら逆にビックリだよ!

なにこれ? バカにしてる? してるよね!

わかった おかずは食べる あくまで仕事のやり取りとしてね

こっちの「コメノ」は クレーンだね

このまま残してクレーンの証拠にしますっ

もおおっ マジイヤだあああ 美味しいってなによーっ!

玄関の鍵は 開いている ああそうですかそうですねそうですね

「おかえり」

横すり抜けて

「今日は食欲がないので夕食はけっこうです」

「具合悪りいんか」

「一人になりたいので早く帰ってくださいっ」

バッターーンてドア閉めた
なんなのよお 自分の家なのに息が詰まりそうだよおおお

もう8時 帰ったよね
そ〜っとドア開けて いないよね？ いない ホッ
ダイニングテーブルの上に ラップがかかった・・・
なにこれ 夕食いらないって言ったでしょ
いらないって雇い主が言ったんだから いらないってことでしょ
私は雇い主の娘だから私の言葉は効力がないの？
やだもうっ なんでオムライスなのよ！
オムライス大好きだからやめてほしい
しかもママのドロ〜とした卵じゃなくて ちゃんと包んであるうう
やだあ 美味しそう
どうする？ 捨てちゃう？ ええええ 美味しそうなんだけどおお
仕事！ 仕事で作っただけだよ そうだった
ここは割り切って食べよう でもなあ 食べたら負けて気がする
夕食いらないって言ったんだもん それなのに食べたら・・・ 一口だけ？
仕事として？ 作ったわけだから？ こっちも一口は食べましたよ的な？
えっ 美味しい やだあ メチャ美味しい

食べちゃった
どうする このお皿？
このまま？
「お皿に触らせないでください」ってママのノートに書いてあったって？
だからなによ！ ママは今ここにいないし あいつだっていない
私にだってお皿洗う自由と権利はあるでしょ！
洗う！
洗剤をグルグルーってかけて スポンジで あ え すべる あっ
カッチャーーン
割っちゃった
また割ってしまった
どうしよう
このまま置いておいたら 明日の朝あいつが・・・
片付けよう
えっと、この大きい破片から
えっ？
手を つかまれた けど？
えっ？ エーーーーーッ？
「な、な、なんで いるのーー？」
「俺やっから」

監視？ 監視してた？ いなかったよね？

「なんで・・・ 戻ってきたんですか？」

「弁当箱洗ってなかったから」

仕事っ そこまで仕事するんだっ

「つうのは言い訳で」

え？

「なんか、こんなんイヤだなあとって 戻ってきた」

なにそれ・・・

「いいです、私が片付けます」

「危ねえから」

「ママのノートに書いてあるからですか？」

「これは仕事じゃねえよ」

ハ？

「愛里にケガさせたくねえから」

なに・・・ それ・・・

モリシタダイチが破片を集めて 床を掃除して

私はそばで見てる・・・だけ

あ 人差し指から血 切っちゃったかな

「どした？」

「え、なんでもないです」

「ケガしてんじゃね？」

私の手をグイッて

「血い出てんじゃん」

「ちょっとだけだから」

「刺さってねえよな」

「大丈夫ですから」

モリシタダイチが食器棚の下から箱を出して

私の指に

「このアロエ、マジ効く」

え？

「もうなんともねえもん」

ゆうべ火傷してバンドエイド貼った指を立てて見せた

「おっし！」

私の指にバンドエイド貼って

「消炎殺菌作用があんだよな」

何を言っているのか わかんない

ダイニングテーブル挟んで モリシタダイチが向かい側に座ってる

私は なんか どうしたらいいのか
さっきモリシタダイチが貼ったバンドエイド触って・・・
「愛里、ごめんな」
「何がですか」
「なんか いろいろ」
「あなたは仕事でここに来てるだけですから 仕事して当然です」
「やっぱメッチャ怒ってんじゃない」
「ハ？」
「だよなあ やっぱ俺が悪りいんだよなあ」
「あなたは仕事をしているだけですから何も悪くはありません」
「怒ってんだろ？」
「怒ってません」
「怒ってんじゃない」
「わ、私が怒ってしようとなんだらうと あなたの仕事には関係ないですから」
「やっぱ俺が悪りいんだよなあ」
「あなたは仕事をしているだけですから何も悪くないですって言ってますよね」
モリシタダイチが私の顔見て 何か言いたそうにして 上見て またこっち見た
「あのさ」
「なんですか？」
「俺、愛里に、意識し過ぎだっつったけど」
言われましたよ
「意識し過ぎてたのは 俺」
「ハ？」
「愛里の言うとおりでさ、俺、やっぱ高校生の男子でさ」
だからなに？
「愛里の・・・ あの、なんつうか、洗うの、メッチャ・・・」
あ 下着
「俺のとうちゃん、かあちゃんのところに連れてきてもらったときから」
ん？
「掃除や洗濯してくれたって、かあちゃん言っててさ」
えっと・・・ 連れてきてもらった??
「とうちゃんは平気でかあちゃんの洗ってたって、かあちゃん言ってたんだけどさ」
んっと・・・？
「とうちゃんは俺にはよく昔の話すんだけどさ」
はあ
「とうちゃん、そんなときまだ20歳で、なんつうか、ヤバかったあつつててさ」
笑ってるけど・・・ 何の話なのか全然わからないんだけど
「愛里のを、俺が洗うつつうのは、やっぱ、だよなあ」
でも それは仕事で 私はイヤだったけど 仕事だから・・・
「それで、ゆうべLINEしたんだけど」

あ 何書いてるのか見てないけど
「既読つかねえからさ、いっくら待っても既読になんなくてさ」
それは・・・
「ヤッベエ、メッチャ怒ってんじゃんて 俺が悪いんだけどさ」
「あなたは・・・ 仕事しようとしただけですから」
「俺がいっぱいいっぱいで愛里の気持ち考えてやれなかったんだよな」
いっぱいいっぱい？ いっぱいいっぱい私だけど？
「さっきも LINE したけど既読つかねえしさ」
「さっき？ いつ？」
「俺が帰る途中で、やっぱこっち戻ろうと思ったとき」
「来てませんが」
「あれ？ 俺、誤送信したのかな ちゃんと愛里に送ったつもりだったんだけどなあ」
モリシタダイチが携帯出して
「やっぱ愛里に送ってるよなあ、未読だけどさ」
て チラッと私の顔見るけど 来てないものは来て・・・
「あ！」
そうだった
「電源 OFF のままにした！」
「へ？」
「多分・・・ 来てると思います」
「電源 OFF されたかああ ぜってえ既読になるわけねえ」
そんなこと言ったって ゆうべはアタマにきたから
「今朝もカンペキ無視されてさ」
それは・・・
「朝メシ食わねえしさ、弁当持ってかねえしさ、つか黙って出てっちまうしさ」
なに？ 口とがらせて なに？ 私？ 私が悪い？
「こうなったらなんとかこっち見てもらうしかねえなって」
戦い？ なんか口調が戦いモードなんだけど
「これはぜってえ購買でパン買うなって」
私の行動 正確に予測されていた
「俺、走って購買の前まで行ったかな」
だからなんで口とがらせてるのよ？
「来たもんな！」
なにそれ？ 勝ったみたいな顔して
「そしたらさ、俺の顔見たらクルッと後ろ向いて逃げようとすんじゃん」
するでしょ！
「俺、ああ言うしかなくなったじゃん」
「すごい恥ずかしかったです！」
「俺もちょっと恥ずかったけど、それどころじゃねえつつうかさ」
「あんなこと二度としないで！」

「愛里が無視すっから！」
「私のせいですか？」
「あ、俺のせい 俺が悪い」
なんか・・・ 怒ってたのに・・・ 怒ってるはずなのに・・・
「それでも俺、どうしても弁当渡したかったからさ」
だからって あそこまでするかなあっ
「弁当なら見てくれっかなって」
見る？ 何を？ あ コメノ？
「コメノって何ですか？」
「コメノ？ なんだそれ？」
「あなたが書いたんでしょ」
「コメノ？ そんなん書いてねえけど」
証拠があるのよ こっちはねっ

部屋からお弁当箱持ってきて
「これです！」
モリシタダイチがフタを開けて
「へ？ あれ？」
フタの裏を見て
「あーーーーっ ひつついてたんかよお！」
何が？
「これ、ゴメン」
「ハ？」
「ゴメンって海苔で」
「コメノですけど？」
「フタにひつついちゃってたよな」
「コメノってなに？ でした」
「まさかこうなっちゃうとは思ってなかったからさ」
「海苔でゴメンとか・・・ 軽すぎ」
「LINE 既読つかねえしよ、見てもらうにはこれっきゃねえかなってさ」
どんな顔で海苔を切ってたんだろ
「愛里」
「なんですか？」
「ごめん」
そんな顔で言われたら・・・
「ごめんな」

電源 ON にするしかないじゃん

噂

モリシタダイチから送られていた LINE

『デリケート衣類の洗い方』

1. 洗濯ネットに入れる（洗濯機の上の棚の左のカゴ）

洗濯ネットの画像－「上はこれ」「下はこれ」

ブラとパンティは別々ってことか

2. 洗剤は「おしゃれ着洗い」（洗濯機の上棚の右のカゴ）

これか

それから・・・

説明と洗濯機の画像の繰り返し

「ここを押す」って指で指してる写真と説明と写真と説明と・・・

これ いつ撮ったの？ 指にバンドエイドしてるからヤケドした後だよ

でも、送られてきたのは・・・ ゆうべの夜

あれ？ 洗濯機はうちのだけど 洗濯機の後ろの壁紙がちがう どういうこと？

まあいいや

モリシタダイチが送ってきた順番どーりにやったら 洗えた！

あとは・・・

『乾燥は浴室乾燥を使う』

えっと・・・ 浴室乾燥ってなに？

あ、動画

あれ？ ここってどこの？ うちのとちょっと違う

お風呂の中の棒 ある うちにもある これだよ

モリシタダイチの手がそこに フェイスタオル？ 挟んで干すやつをかけて

ドアを閉めて・・・ ドアの横のパネル これか

モリシタダイチの指が「ここ」って指して タイマーをピピピッて

『寝る前に乾かせば朝には乾く』

わっかりやすーーい

これはスクショして保存！ 動画も保存！

どれどれ？ おお！ お風呂の中が熱くなってきてる

これを送ってきてたのか だからあんなにピコンピコンいってたんだ
私が自分で洗うって言ったから？
だよ ね 私が洗濯機使えないのわかってたよね

この「洗いの説明書」の後には
「愛里 ごめん」
「愛里 本当にごめん」
みたいな？ 10件
最後のは「やっぱ今からそっち戻る」
読む前に戻ってきたけど 電源 OFF だったから読めるわけなかったけど
まあいいけど
いちおう「できた」って LINE する？ こんなに丁寧に教えてくれたわけだから
明日の朝言えればいいかな でも顔見て言うのもなんか・・・
12時過ぎちゃってるから寝てるかもだけど 明日の朝見るよね

『洗濯できました』送信
エッ？ 既読？ 速攻？ 誰かと LINE してた？
『ありがとう』送信
アーーーーーッ！ 間違えた！ 隣の絵文字と間違えた！
既読ついちゃったあああ
えっと・・・
『←こっちは 間違えました』送信
あ 来た
『』
よかった 笑ってる
あ また来た
『愛里やったね！ 最高』
ン？
『間違えた www ←こっち www』
わかるうう ときどきやるよねえ 今やっちゃったけど 絵文字間違えるやつ
私はよく間違えるからあんまり絵文字使わないようにしてる
前にミカリンが『2枚太っちゃった』って送ってきたとき
『そっかー』って送るつもりが『そっかー』って送っちゃってメチャ謝ったよ
『逆に笑えた』って言ってくれたからよかったけどさあ
あ また来た
『愛里 おやすみ』
どんな顔して打ってるのかな
『おやすみなさい』
なんか なんだろう なんか なんていうか
寝よう

キッチンのドア開けたら

「おはよっス」

モリシタダイチがいた

「おはようございます」

なんか・・・ ゆうべ LINE したから なんか・・・

チラッとモリシタダイチを見たら こっち見てた

「なんですか？」

「や、なんもねえよ」

またボリボリ頭搔いてる 甲殻アレルギーではない 頭痒い？ 肌弱い？

シャンプーが合わない？

「どした？」

「なんでもないです」

モリシタダイチのシャンプーの心配してどうするのよ

昼休み

今日はちゃんと持ってきましたよ お弁当

二度とあんな恥ずかしい思いはしたくないからね

「ラブリーーン！」

あれ？ ミカリンとアミリン！

「やっぱりここにいた！」

「どうしたの？」

「久しぶりにラブリンとお昼食べようと思ってさ」

「えー、嬉しい！」

「ラブリンまだ友だちできないの？」

「うん、まだ・・・」

そんな余裕なかったっていうか・・・

「ラブリン、今ね学校中で噂になってるんだけど」

「なになに？」

「サンシタトリオのモリシタダイチがラブリンにコクッたってホント？」

「ハ？」

「購買の前で、上原愛里！ 俺とつきあってください！ って大声で言ったって」

ハァァァァァ？

「ちがう！ ゼーんぜんちがう！」

「でも見たって人けっこういるよ」

いたけど いっぱいいたけど 見てたんなら わかるでしょ！

「あれは、ただ、か、家政婦さんが」

「家政婦さん？ ラブリンの家って家政婦さんいたっけ？」

「ママがパパのところに行って、その間だけ・・・」
「ああ、そっか」
それがモリシタダイチではあるけれど・・・
「で？ 家政婦さんがどうしたの？」
「私がお弁当持ってこなかっ、忘れたから、届けに来ただけ」
「それがモリシタダイチとどう関係あるの？」
本人です
「さ、さあ、たまたま、モリシ、森下くんに預けたんじゃないかなあ」
「たまたま？」
「たまたま」
「なんだあ、そうだったんだ」
「うん、そうだったの」
「うちのクラスのナッチなんかさあ」
「ナッチ？」
「友だち」
「そっか」
だよな 新しい友だちいるよね・・・
「モリシタダイチと同じ中学で、一年のときも同じクラスだったんだって」
「へえ」
「二年になる前にね、これを逃したら後がないってコクッたんだって」
「コクッた？」
「うん、そしたらね、俺には好きな子がいるからって撃沈！ かわいそ過ぎ！」
好きな子・・・ いるんだ！
「それでラブリンにコクッたって」
「だから違うってば！」
「そうなんだけど、上原愛里だったかああって嘆いてた」
「違うって言うておいて！」
「でもさあ、ラブリンが相手じゃさあ、モリシタダイチも苦労するだろうねえ」
「だから違うってば！」
「うん、違うっていうのはわかったけど、もしそうだったらって思うとね」
「ハア？」
「ほら、一年のときの学級委員長！ 森山！」
私の話聞いている？
「あれは森山かわいそうだったよねえ」
二人で盛り上がってるけど？
「ラブリンに、つきあってくださいってコクッて、どこにですか？ って言われて！」
「あれはかわいそうだったけどメチャ笑ったよね」
またその話
「でも、モリシタダイチの好きな人って誰なんだろうね？」
誰なんだろう？

「ナッチが言うにはね、モリシタダイチって中学で伝説的にモテたって」
伝説的？
「今だってけっこういるよね、この女子はギャーギャー騒がないだけでさ」
「モリ・・・シタくんで、そんなにモテるの？」
「モテるでしょ！ あのイケメンだもん」
イケメン？
「高身長でイケメンで常駐トップ3の頭脳でモテないわけがないよね」
そういうカンジで見たことなかった てか そんな余裕ないよ！
ミカリンとアミリンの言うモリシタダイチは私が知ってるモリシタダイチとは別人？
「あのー！」
え？ なんか・・・ 声？
ミカリンとアミリンが口開けて
ビックリするってこういう顔って顔で私の背後を・・・ なに？
振り向いた・・・らっ
エーーーーーッ!?
なっなっなっ なんてっ
「上原愛里の、家政夫が、ポケットとして、箸、入れ忘れたから、届けに、来た」
なに・・・
やってくれてんのよーーーーっ！
なんでここに来るかなあっ？ てか、お箸がなかったら購買で買うしっ！
なんでここに私がいるって あーーーーーっもーーーーーっ
「ありがとうございます」
冷静に受け取って クルッと背を向けた

静寂が流れる

そして・・・
ミカリンが・・・
「ラブリン・・・」
「なあに？」
「今のも・・・ たまたま？」
「そう、たまたまー」
「二日連チャンで・・・ たまたま？」
「二日連チャンでたまたまー」
「なんで？」
「なんでだろうねー、うちの家政婦さん、おバカさんかもー」
大バカだよーーーーっ！
「やったあラブリン！ 笑えるう！」
「笑えるよねー」
笑えないっ

「キャーーーーー！」

えっ？

「モリシタダイチ至近距離で見ちゃったあ！」

そこ？

「やっぱイケメンだよねえ！」

「ナッチがずーっと好きなのもわかるうう！」

「わかるう！」

わからない

私にはわからないっ

モリシタダイチがなんでわざわざ火に油注ぐようなことしやがったのかっ

わからないっ！

セリフ

玄関の前

腕組みして立っている私

敵を前にした武将みたいなっ

風林火山！ 風林ふっ飛んで火山！ 活火山！

頭からマグマ噴き出してるかもねっ

いざっ！

力いっぱい思いっきりドアを開けたら

これは 世にいうところの 土下座

生の土下座って始めて見た

一生やってろ！

土下座の横すり抜けて

「愛里！」

土下座してろよっ！

「愛里！」

腕をつかむなっ！

「ごめん！」

ごめんて言えば済むと思うなっ！ 腕を放せっ！

「愛里！ マジごめん！」

私が今 目の筋肉が引きちぎれそうなほど睨んでいるのがわかるよねっ！

「怒ってるよな」

この顔が笑ってる顔に見えるっ？

睨み過ぎて目が痛くなってきてるけどっ？

「俺さあ、今朝、なんつうか、フワッフワしちまってさあ」

フワッフワして？ フワッフワ中庭に飛んできたの？ 風船かっ！

あ 目が限界だ 一回閉じよう

「愛里が一人でいると思ったからさあ」

なぜ私が中庭にいるとわかった？ まさか 監視？ ママのノートに監視しろって？

それはないか、ママは同級生の男子が来るとは・・・

「箸ねえと食えねえから」

「教室で渡してくれればよかったんじゃないですか！」
「教室で渡していいんか？ みんな見っけど？」
そっ それは・・・
「お、お箸がなかったら購買で買いますから！」
「俺いっけど」
「ハ？」
「購買に」
「こ、購買で待ち伏せ？」
「バイトしてっから」
「ハ？」
「週2回 昼の30分」
「ハ？」
「お婆ちゃんが外でメシ食いてえからって」
え・・・っど？
「バイトつつうか、お婆ちゃんに小遣いもらって店番してるつつうか」
あれ？ あっ！
「私がお箸買いに行ったとき！」
だから！
「いましたよね？ 憶えてますか？ 私がお箸買いに行ったとき」
「あんときは・・・ ビックリした」
こーっちのセリフなんですけどっ
「なぜ10 - 3ができなかったんですか？」
「あ？」
「お釣りの計算！」
「お釣りの計算？」
「じゅうひくさんじゅうひくさんて唱えてたじゃないですか！」
「だったっけ？」
「そうですよ！ 私の顔ジーッと見ながらじゅうひくさんじゅうひくさんて」
「あ、それは、なんつうか、ビックリしてつつうか」
「私は怖かったです！」
「そっか、ごめん」
今さら謝られても・・・
「もういいです」
「そんじゃ、もう怒ってねえ？」
え？ そっちとこっちは
「よかったあ」
だから あれと今日のは
「俺さ、愛里が出てっから箸入れんの忘れたって気いついてさ」
あのさあ
「ヤッベって、ど〜こで渡せばいいんかなあって」

腕つかんだまましゃべってるんだけど？

「中休みは愛里パッと教室出てっちゃうしさ」

トイレです！ 女子トイレは混むんです！ 早く行かないと入れないんです！

「箸入ってねえってわかったら、ぜってえ購買に箸買いに来るよなあって」

なんでそう私の行動を的確に予測するかなっ

「そんで俺が愛里に愛里の箸箱渡したらさ、昨日みてえになっちゃうだろ」

そーーーだけど そーーーかもしれないけどっ

「愛里は中庭で弁当食ってっから」

だからなんで知ってるのよっ？

「あそこなら誰も見ねえかなって」

見られたよね？ ミカリンとアミリンにっ

「走ってったら一人じゃねえから、俺ビックリしてさ」

ビックリしたのは私なだけけどっ？ てかミカリンとアミリンもなだけけどっ？

「それでも見られちゃったからさ、引き返すのもなあって」

引き返してくれた方がよかった そっちの方がまだよかった

「愛里 ごめん」

そんな顔で

「ごめんな」

謝られたら

「もういいです」

って言うしかないじゃん

「お弁当食べられましたから 美味しかったから」

嬉しそうな顔でニッコリするモリシタダイチ

あのさ

そろそろ 腕 放してくれないかな

今日は宿題はなかったから 明日の予習だけ・・・ 夜やろう

なにやってるのかな？ 夕食のしたく？

ちょっとだけ覗いてみよっかな

そっとキッチンのドア開けたら

背中向けて 何かに粉つけてる

「ウワアアッ！」

あ 驚かせちゃった

「ごめんなさい」

「どした？ なんかやって欲しいことあんのか？」

「いえ、ただ・・・」

何やってるのかなあって

「今日の夕食は何かなあって」

「今夜はイワシ」
「イワシーーーーッ!？」
「イワシのかば焼きもどき」
「イワシは嫌いだって言ったじゃないですか！」
「美味めえんだって、全然生臭くねえしさ」
「イワシは嫌いなんですっ」
「それでもこれは美味めえから、だまされたと思って食ってみろって」
「だまされたらどうするの？」
「え、や、だからさ、これはマジ美味めんだって」
「保証は？」
「保証って、んっと、とうちゃんがよく作る」
「だからなに？」
「んっと、俺が大好き、メッチャ好きで」
「だったら、あなたも食べてください！」
「あ？」
「あなたも私と一緒に食べてくださいっ」
「それは・・・」
「私をたった一人でイワシと向き合わせる気ですかっ？」
「イワシと向き合う？」
「私ひとりで イワシと 向き合うって」
考えただけで
「イヤーーー！」
「わ、わかった、食う、俺も一緒に食うから」
「約束ですよっ？ 逃げないでくださいよっ」
「逃げねえ、食う」
「だったら・・・ なんとか・・・ 向き合ってみます けど」
え？ なに？ なんでジッと見てるの？
「愛里ってさ」
なに？
「たまんねえなあ」
「何がですか？」
「あ、えっと」
クルッとイワシの方向いて・・・ イワシ ヤダーーー

ダイニングテーブルの向こうにモリシタダイチ
でも私はこの目の前のお皿の上のイワシと・・・
イワシっていうか、アジの開きの小さいバージョンみたいな形だけど イワシだよ
なんか緑の なんか刻んだみたいなのがついてるけど パセリ？
パセリもあんまり好きじゃないんだけどお

「あのお・・・ この緑みたいな刻んでるのは・・・ 何ですか？」

「青のり」

青のり？ 青のりは好き・・・だけど 本体は イワシ・・・

ええええ どうしよおおお

「あのお・・・ あなたが先に食べてみてください」

「俺？ いいよ」

パクって パクって食べた 美味しそうな顔してこっち見てるけど

「美味えよ」

あなたは大好きだからでしょうけどおおお

勇気が・・・ 勇気が出ない このイワシを食べる勇気・・・

「愛里」

え？

「あっ ウグッ」

口の中に突っ込まれた！

「ひはほあああを」

しかもあなたの箸でーーーー！ あれ？ あれ？

「美味しい」

「な！」

「ウソ 美味しい なにこれえ 美味しい」

生臭くないし甘辛くて青のりの香りがして

「美味しいんだけどお」

なんで？ どうして？ なんでイワシが美味しいの？

ママが作るイワシと梅干煮たのなんて吐きそうになるのに

「美味しい！」

モリシタダイチがニッコニコして バクッて豪快！

食べた 全部食べちゃった

この私がイワシを食べちゃった

「ごちそうさまでした」

「愛里、自分の皿、持ってきてくんねえ？」

「え？」

流しに持っていくくらいはできるけど・・・ 食器に触っちゃいけないんだよね？

なんで？ いいけど 割っても知らないからね

流しの脇に置きました

それでは私はこれで・・・

「愛里」

「はい？」

「俺、なんかわかったんだよな」

なにを？

「愛里が皿割っちゃう理由」

不器用だから

「ゆうべ割れたの片付けてたらさ、すげえヌルッてしててさ」

だからなに？

「愛里、洗剤メッチャつけすぎてんじゃねえかなって」

洗剤つけるよね？ お皿洗うときつけるでしょ

「ちょっといつもやるみてえにやってみてくんねえ？」

いつもって、ほとんど洗ったことないけど やるけど

「あ！ それだ！」

どれ？

「愛里は直接ドバーッて洗剤かけるだろ？」

かけるでしょ 洗うんだから

「あのさ、最初はこうやってお湯ですすいで」

そうなの？

「そんでスポンジにこんくらい洗剤つけて」

それだけ？ 汚れ落ちる？

「そんでこうやって」

あ 落ちてる

「あとは洗剤流して・・・ 終わり」

そうやって洗うの？ 知らなかった

「やってみっか？」

「でも、割っちゃうかも」

「俺がちゃんと見てっから」

だったら・・・

モリシタダイチがやったとおりに・・・ あれ？ ヌルッてしない

お湯で流して・・・

できた！ 割らなかった！

「できんじゃん」

「あなたがおしえてくれたから」

モリシタダイチの目が・・・ なに？ 何か言おうとしてる？

「そんじゃ、あとは俺がやっから」

やっぱり手際いいよなあ

「何見てんだよ」

「あなたがフライパン洗ってるところ」

「そんなん見ておもしれえかよ」

笑ってるけど

あ そうだ！

「ミカ、じゃなくて、私の友だちが言ってたんですけど」

「なに？」

「落ちるっ!?ウウウワァーッハハハハハ」
もうっ せっかく落ち着いたのにーヒヒヒヒ
あれ? まさか! モリシタダイチはこれを好きな人に・・・
「あの」
「なんだよ」
「あなたは好きな人がいるそうですね」
「エッ」
「誰かがコクったら好きな人がいるからって撃沈させたって」
「なっ なんてそんなこと」
「女の情報網です」
「怖わっ」
この反応は・・・ いるね いる
「同じ女として、あなたに忠告してあげます」
「なっ なに」
「あなたの好きな人に、今のセリフを言ったら、あなたが撃沈します」
「えっ」
「引かれます確実に! ドーン引き!」
「マジ?」
「マジです」
「愛里は?」
「私?」
「今の・・・ ドン引きしたんか」
「私は・・・」
あ・・・ぶり返してきちゃっ・・・
「ウケちゃっ・・・たあーッハハハハハハハハ」
「そっか」
「最高なんだけどおあーッハハハハハハ」
「マジ?」
うんうん ハァァ深呼吸フーフー
「もっかい言ってやろうか」
なにそのいたずらっ子みたいな顔ォオオアハハハハハ
「せっかくおさまったのにいアーッハハハ ゴホッゴホッ」
「咳きすっほど笑うかなあっ」
「だってゴホッゴホッ」
「たまんねえな」
「はあ? ゴホッ」
「愛里のそういうとこ!」
こっちがたまらないんですけどおおお
あーフー 笑った

月に一度の地獄

復習と予習して シャワーして 下着の洗濯して 今は浴室乾燥させてる

なんか今日は楽しかったなあ

え？ ちがう、私、昼は怒ってたよ、午後の授業中も 帰ってくるまでずっと

怒ってたよね？ なんで怒ってたんだっけ？

いや もう怒ってないから

てかさあ あのときのモリシタダイチの動画撮って UP したらバズるよね

絶対バズる メッチャおもしろかったもん

ピコン

あ モリシタダイチ

『好きでもない 100 人の女に好かれるより』

やっだあ！ また笑わせようとしてるう！

ピコン

『俺が惚れてるたった一人の女に愛してほしいんだよ』

え・・・ あれ？

あんなに笑ったのに

文字にすると・・・

なんか・・・ いいなって たった一人の女に愛してほしいって

そういうのっていいなって

え どうしよう 笑えないんだけど いいなあって思っちゃってるんだけど

でもモリシタダイチは私がまた大笑いするだろうなって送ってきたわけで

だけど・・・

こんなの送る気にならないし

wwwww でやり過ごす気にもなれない

どうしよう

早く返信しないと 既読ついたのにスルー？ って思っちゃうよ スルーじゃなくて

スルーできないんだよ

どうしよう

えっと えっと

『最高』送信

笑ってると思うよね

『』送信

ピコン

『森下象一ってなんだよ w』

『象は大きいから大ってことで w』 送信

ピコン

『今のマジで笑った w』

マジで

これは本当に笑ったってことだよ

とかさ www とかさワロタって、ほぼ真顔で打つもんね

たまに本当に笑うときがあるんだけど 文字だと違いがわかんないんだよ

あれ？ 昨日の・・・

ピコン

『』

『愛リスってなんですか！ w』 送信

ピコン

『里がなかった w』

ないけどさ リスって フフフ

えっと・・・

『には』 送信

ピコン

『』

絵文字でも土下座してる 私 今は本当に笑ってるよ

『のは』 送信

ピコン

『象一でもいいっすよ！ ←』

どんな顔を打ってるの？ ハハハ

『それでは、象一、私は寝ます』 送信

ピコン

『漢字で象一はねえだろ！ w』

ハハハ 本当に笑ってるときの絵文字作って欲しい

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

『おやすみなさい』 送信

あれ？ え？ ちょっと トイレ

エーーーーー なっちゃった 一週間早いよお

明日二日目かぁ 地獄の二日目 私重いんだよねえ

アミリンなんて「生理痛ってどんなカンジ？」って うらやましいよ

寝よう

ああああ 腰が・・・ お腹が・・・
顔洗って 制服着て キッチンに
「おはよっス」
「おはよう・・・ございます」
「どした？ 具合悪りいんか？」
「いいえ・・・」
生理痛です 男子には死んでも言えないけど
「なんかあったんか？」
「なにも・・・ないです」
生理痛です
朝食・・・ 食欲ない 痛いことに意識いっちゃって
ヨーグルトだけ食べよう
「ごちそうさま・・・ いただきます」
「愛里！ 弁当！」
「あ・・・」
「今日は学校休んだ方がいんじゃないね」
「大丈夫です」
生理のたびに休んではいられないのよ
「いただきます」

朝の学活・・・
先生が何言ってるのか頭に入ってこない いつもだけど
一時間目は古文か
ああああ痛すぎて汗出てきちゃう
メッチャキツいんだけどおおお 今までの中でいちばんキツいんだけどおおお
ダメだ！
「先生、具合が悪いので保健室に行っていていいですか」

「上原さんは毎月ね」
はい
「早退しなさい、お家でゆっくり休んだ方がいいわ」
はい

早退した
家に着いた
さすがに鍵は開いてない

ハァァァもーっ勘弁してほしい
なんで生理なんかあるの？ なくてよくない？
ママなんか・・・
「川口さんの娘さんもね、生理痛が酷かったんですって
でもね、子ども生んだらすっかり生理痛なくなったんですってよ！」
ってさ、生理痛なくすために子ども生めってこと？ 私まだ高校生だよ！
なーんの解決策にもならない情報持ってきてもさあつ
ママのことはいい
ああもうっ 寝てても痛い痛いっ
「愛里」
え？
「入るぞ」
ハ？
なぜ モリシタダイチが？？？
「やっぱ具合悪かったんじゃないか！」
え・・・っど？
「なんでここにいるんですか？」
「早退してきた」
「ハ？」
「腹痛てえっつって早退してきた」
「なっ なんでーーーー？」
「愛里具合悪りいのに放っとけねえだろ！」
「バーッかじゃないっ？」
「俺、朝、聞いたよな？ 具合悪りいんじゃないかってさ」
なんで怒りモード？
「具合悪りいんならちゃんと言えよ！」
なーんで怒られなきゃいけないの？
「病気じゃないですっ」
「具合悪りいじゃん！ 早退して寝てんじゃん！」
ああもーっなんかイライラする なんで怒られなきゃならないのよっ！
「生理！」
「あ？」
「生理痛！」
もーーーーどーーーーでもいいっ
「生理痛がひどいんですっっ」
これで何も言えないよね 気まずーく去っていけーっ！
「痛み止め飲んだんか？」
えっ ひるまない？
「飲みました・・・けど」
「そっか、ちょっと待ってろ」

なに？ なんなの？ 生理痛だよ？ 生理！ 男子には死んでも言えないワード！

それを放ったのに効かない？ 鋼鉄の神経？

あ 戻ってきた

「これ」

ホカロン？ 5月にホカロン？ バカなの？

「下っ腹んとこと腰に貼って寝ると少し楽になるってさ」

ハ・・・？

「俺のねえちゃんも生理痛ひでえんだよ」

お姉さんが？ そしてそれを知っている？ どーゆー姉弟？

「生理痛は温っためっと少し楽になるんだってさ」

「はあ・・・」

「起きたら風呂入れ」

「ハ？」

「シャワーじゃなくて風呂だかんな」

「そんなことしたら・・・」

お風呂が真っ赤に染まる・・・

「水圧で抑えられっから大丈夫って、ねえちゃんが言った」

私が何を考えてたかの的確に 言語化しないでよーっ

「そんじゃ、寝ろよ」

出てったけど

なんなのよーっ！

ホカロン貼りましたよっ

貼ったら・・・ なんか・・・ 力が抜けて・・・ ハフウウウ

チョコレート

- ・起きたら少し楽になっていた
- ・お水を飲もうとキッチンに行った→モリシタダイチに風呂に入れと言われた
- ・入った
- ・メッチャ楽になった
- ・お腹が空いてお弁当を食べた
- ・ちょっと寝た→さらに楽になっていた

そして今 リビングのソファに座ってボーッとしている
生理のときってやたらと眠い やたらと食べちゃうし
ポテチなんて一袋イッキに食べて食べ過ぎて吐いちゃったことある
あれ？ モリシタダイチは？
学校に戻った？ だよ、私が病気ではないってわかったし
てかさあ 早退する？ 自分が具合悪いわけじゃないのにさ
アツマおかしいよね いや、それはひどい 心配してくれたんだから
にしてもさあ でも・・・ ホカロンとかお風呂とか メチャ助かったけど
「起きてたんか」

えっ

スーパーの袋をぶら下げているモリシタダイチが立っている

「が、学校戻ったんじゃないんですか？」

「早退したっつったじゃん」

「でも午後の授業は間に合いましたよね？」

「生活指導の先生かよ」

笑ってるけどっ？

いいです もーっいいです あなたのことは何も心配しませんっ

「愛里」

口きかない

「チョコ食う？」

チョコ！ えっ チョコ？ 食べたい食べた過ぎる

「食べます！」

ハァァァ 美味しい スーパーに売ってるレベルのチョコだけど美味しい
な〜んでなんだろう 生理中ってやたらとチョコ食べたくなる

しかもダークチョコレート それじゃなきゃダメ なぜかダークチョコレート
そしてこれもダークチョコレート
一箱5分で食べちゃったときはさすがに自分で自分に引いたけど
「生理んときってやっぱチョコ食うんだなあ」
え？
「ねえちゃんもメッチャ食ってたけどさ」
モリシタダイチのお姉さん！ 同士！
「こんくらいの箱5分くれえで食っちゃったときには 俺ちょっと引いたもんなあ」
「私も一箱5分で食べちゃったことがありますけどっ」
お姉さん！ 加勢しますっ！
「生理んときってさ、ホルモンの変化でインスリンの数値が上がって」
ン？？？
「血糖値が下がっからチョコ食いたくなるんだってさ」
え・・・っと？？？
「セロトニンとエンドルフィンの数値をあげて・・・」
生物の授業受けてる気分なんだけど・・・ ちょうど午後は生物だったな・・・
生理中のチョコの爆食いを科学的に分析・・・する？ ふつう する？
「あのお、少し食べます？」
「俺は甘いもんあんま食わねえから」
そこはフツツーなんだ
インスリンとかなんとかは関係ないんだ

夕食はサーモンのホイル焼き
冷ややつこにショウガたっぷり載せたのもある
モリシタダイチも向かい側に座って食べてる
私が言ったから
「私のこと心配して早退したのに、ひとりぼっちでごはん食べさせるんですか」って
だってさあ、一人で食べるのって、エサを与えられてる感？ そんなカンジなんだもん
そんなふうには思っていないだろうけど
「このホイル焼き懐かしくね？」
ホイル焼きが懐かしい？ あなたとのホイル焼きの思い出ってないよね？
「1年のとき調理実習で作ったよな」
そうなの？ 確実なのはそうだとしても私は作ってない
「私は作ってないです」
「あれ？ クラスによって献立違うんかな」
そうではなくて
「私はデザートしか作ったことないです」
「デザート作れんの？」
デザートしか作れないんです

「すげえな、俺はムリだ」
「書いてある分量どーり書いてある順番どーり作ればいいだけですけど」
「俺、それができねえんだよ」
「ハ??？」
こんなに料理上手なのに言う？ たかがデザートを作れないとか言う？
「塩とか調味料もこんくれえかなあって入れてたらさ」
こんくれえ？ そんな恐ろしいことを？ それで美味しく作るって逆に怖い
「先生に見つかってメチャ叱られた」
先生、味見をしてから判断してください モリシタダイチの味つけは最高です
「小さじ 1/2 とかさ、感覚狂うつつうかさ」
計らないで作れる感覚が私には永遠に理解できないけど

お皿を洗っているモリシタダイチ
「部屋で休んでろよ」
「もう大丈夫です」
「ホカロン貼ってっか？」
「はい、さっきまた貼りました」
「そっか」
モリシタダイチは 知れば知るほど わからなくなる
「あのお・・・ 聞いていいですか？」
「なに」
ちょっと勇気が要るなあ 男子に聞くってどうなの？
「なんだよ」
「あなたは・・・ なぜ生理について詳しいんですか？」
「あ？ なに？」
「なんで生理に詳しいんですかっ？」
逆に大声になっちゃったあ！
「ねえちゃんが生理痛ひでえのと PMS もひでえからさ」
PMS！ 生理前症候群！ そんなワードまで知っているとは！
「そんでどうすればいいんかなあって調べて」
姉の生理痛改善のために検索する弟！ 言葉がない
「でもやっぱ、とうちゃんかな」
お父さん？ お父さんが生理になるの？
え、なに？ トランス？ なに？
「とうちゃんがさ、院に入ってたとき」
院 院て・・・ 大学院!? そして元伝説のシェフで今は伝説の家政婦？
モリシタダイチのお父さんてナニモノっ？
「産婦人科の先生が来ていろいろ教わったんだってさ」
医学部の大学院？
だからモリシタダイチも生物学的なワードを？

「女の人はよお大変なんだよ、感謝なんてそんなんじゃよお足んねえよ」
これは・・・ お父さんの真似？
「女の人はすげえよお、すげえよなあつつてさ」
やっぱりお父さんの真似か
「どうちゃんマジでメッチャかあちゃんのこと大切にしてるしさ」
有言実行の人なんだ
「大切にしてるつつうか、どうちゃんにとってかあちゃんは世界なんだよな」
「せ、世界？」
「もしかあちゃんがいなくなったら、どうちゃんの世界は壊滅する」
そ、そんな大規模な話!?
モリシタダイチのお母さんて・・・ 地球？
「マジ！ 俺、そうなったらって考えただけで怖えもん」
「そう・・・ですか」
生理痛の話が地球崩壊の話になっちゃったんだけど
世界出されちゃったら・・・
私の生理痛なんて・・・ なんか・・・
「愛里もすげえよ」
ハ？ いえ、私はそんな地球規模の話ではなくて生理痛が辛いってだけで
「俺、どうちゃん目指してっから」
「はあ」
「だから、辛れえときは俺にちゃんと言ってくれよ」
「はあ」
「俺、どうちゃん目指してっからさ」
決意してる的な顔で言うけど
何の話なのかさっぱりわからない

そういえば午後の授業
生物の次は地学だった
なんか思い出しただけ

LINE

寝る前にお風呂に入れよって言われたから入った
お湯の中に入るとファ〜ッとしてジワ〜ンとして楽うう
下着も洗濯して 浴室乾燥してる

まだ鈍い痛みがちょっとあるけど いつもの地獄の二日目にくらべたら無だよ
モリシタダイチのおかげだよ
産婦人科医になれるんじゃない？
何になりたいのかな お父さんを目指してるって言ってたよね
伝説の家政婦？ 伝説の家政婦目指してるってこと？
モリシタダイチのお父さん
大学院入って 元伝説のシェフで 今は伝説の家政婦
そのお父さんが大切にしているお母さんが 地球
地球とは言わなかったけど 私の中では地球しか思い浮かばない
あれ？ モリシタダイチがお父さん目指してるってことは・・・
モリシタダイチも地球と結婚したいってこと？ 地球とは言っていないけど
そういえば・・・好きな人がいるんだよね？ 地球？ ではないと思うけど
モリシタダイチが好きな人ってどんな人？ ゼーーンぜん思いつかない
お父さんを目指してるってことは・・・お母さんみたいな人？ マザコン？
でも、お母さんの話はあるしないよね お姉さんの話はするけど シスコン？
でも お姉さんは地球ってカンジでは・・・なに考えてるの私？
モリシタダイチの好きな人なんてどうでもいいよ 関係ないし

ピコン

『愛里』

ピコン

『』

お風呂に入ったか？ って主治医？

『』送信

ピコン

『なんだよこれ w』

『主治医みたいだから w』送信

ピコン

『』

ハ？

『おじいさん？？？』送信

ピコン

『じいや』

じいや？？？

ピコン

『じいやはお嬢様をお守りいたしますよ』

なにこれー！ アハハハハハ

『メッチャウケる！ www』送信

ピコン

『愛里の笑い声聞こえた w』

『じいや、ワタクシはそろそろ寝ます←お嬢様のつもり W』送信

ピコン

『おやすみなさいませお嬢様』

なんかマジじいやと会話してる気分だよ ハハハハ

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

『おやすみなさい』送信

えっ ガタンて音 なに？ やだ なに？ 泥棒？

怖い どうしよう 怖い えっと どうしよう ひとりでいるの怖い

えっと えっと 今 1時過ぎてる どうしよう でも 怖い

ひとりでいるの怖い

『起きてますか』送信

ピコン

『どした？』

あ よかった

『なんかガタンて音がして怖くなって』送信

ピコン

『今から行く』

『来なくていいです』送信

『でもこのまま』送信

『ちょっとこのままいいですか』送信

あ 電話

「はい」

「愛里、大丈夫か」

「ごめんなさい、なんか心細くなっちゃって」

「俺すぐ行くから」
「いいの、いいんです、でもまだ電話切らないでほしい」
「切らねえよ ぜってえ切らねえから」
「はい」
なんか・・・ 声を聞いたら ちょっとホッとする
「まだ音すんのか」
「ううん、あの、ちょっと・・・ キッチン見てきます」
「行くな！ 無理すんな！」
「だってこのままじゃ怖くて寝れないから」
「やっぱ俺行くから」
「大丈夫、あの、声聞いていると安心するから、まだ切らないで」
「切らねえよ ずっと切らねえから」
「はい」
廊下の電気をつけて・・・
「切らないでね まだ切らないで」
「切らねえよ」
「キッチンのドア・・・ 開けました」
「無理すんなよ」
「はい、キッチンは・・・ なんともないです」
「そっか」
「リビングも・・・ なんともない」
「そっか」
「ママの部屋に行くから・・・ まだ切らないで」
「切らねえから 気いつけろよ」
「はい」
ママの部屋のドア開けて・・・
「ママの部屋・・・ は なんともない」
「そっか」
いちおうバスルームも・・・
「切らないでね」
「切らねえから」
いちおう浴室も・・・
え？ あれ？
「なんだあああ これだあ！」
「どした？」
「浴室乾燥の棒が片方外れて落ちてて」
もうっ
「これが落ちた音だったみたい・・・です」
「そっか」
「私がちゃんとかけなかったからああ」

「そっか」
「ハァァァァ」
力抜けちゃったよおお
「愛里？ どした？」
「ホッとしたら・・・ 力が抜けちゃって」
「やっぱ俺行こっか」
「ううん、もう、もう大丈夫です」
「そっか」
「はぁもう私いいっ ごめんなさい！」
「謝んなよ なんもなくてよかったからさ」
「声聞いてたから心強かったです」
「そっか」
「ありがとう」
「俺はなんもしてねえよ」
電話から少し笑い声が聞こえる
「夜中にごめんなさい」
「謝んなって」
「なんか怖くて」
「そっか」
「なんか心細くて」
「そっか」
「LINE しちゃって」
「LINE してくれて嬉しいからさ」
「でも・・・」
「じいやはお嬢様をお守りいたしますよ」
え？ あ・・・
「ぜんぜん守れてねえけど」
笑ってる声は じいやじゃないよ モリシタダイチだよ
「じいやなら・・・ 守ってくれるって思ったから」
じいやじゃないけど
「絶対・・・ 守って・・・くれるって」
あ・・・ 涙出てきちゃった
「ごめんなさい、なんか・・・ ホッとしたら」
泣いてるってわかっちゃってるよね
「愛里」
そんな優しい声で・・・
「愛里」
名前呼ばれると・・・
「ダイチーー」
止まらなくなっちゃったよおお

「愛里」
ほらまたああ
「やっと名前呼んでくれた」
「え？」
「ダイチって」
「呼びましたかあああ」
「呼んだ」
「だったら呼びましたああああ」
「だってらってなんだよ」
「笑わないでくださいいい」
「笑ってねえよ」
「そんな優しい声出すから涙止まらないんですけどおお！」
「泣きながら怒んなよ」
「生理ですから！ 感情がガッタガタなんですよ！」
「そっか いいよ 泣いても怒っても いいよ」
「はい」
ハアアア なんか・・・
「ちょっと・・・ 落ち着いてきました」
「そっか」
「ありがとう ハート」
「え？」
「みたいな気分です今 多分生理だから」
「なんだよそれ」
笑ってるけど
「それじゃ、あの、もう大丈夫ですから」
「なんかあったらいつでも言ってこいよ」
「はい」
「約束だかな」
「はい」
「愛里が切りたくなったら切っていいかな」
「え・・・」
それじゃずっと・・・
「あ、それじゃ切ります」
「わかった」
「ありがとうございます」
「愛里 おやすみ」
いつも文字で見ている言葉
「おやすみなさい」
声にすると
こんなに優しい音になるんだ

消しゴム

アラームで 目を開けたけど 眠い
あれからもちょっと怖くて でもすぐ寝ちゃったけど
フワァァァ 顔洗ってこよう
キッチンの方から音がする
いるよね いるよ なんかホッとする

ゆうべのこと ほとんど憶えてない
怖かったのは憶えてる
モリシタダイチに LINE して電話かかってきて
何か電話でしゃべってたんだけど 何しゃべってた？
浴室乾燥の棒が片方落ちてたのは憶えてる
そのあとホッとして・・・ 泣いちゃったんだよ やだあ泣いちゃった
泣きながらなんかしゃべってたんだけど 忘れちゃった
まあいいや

制服着て よし！
あれ？
「アーーーーーッ！」
スカートの裾ほつれてるうろう
ダダダダッ？
「愛里！」
ドア バンッ？
「どした？」
助けに来たぞ的な顔して私のこと見てるけど
「あの、スカートの裾がほつ・・・」
あっ ガバッて
「愛里 よかったあ」
あっちゃっ
「よかったあ」
ウグググホッ
「放して！」
ハアハアハア

「あ、ご、ごめん、今のは抱っこじゃねえから 抱っこじゃねえよ」
「そうハアハアじゃハアハアなくて・・・」
「愛里どした？ 具合悪りいんか？」
ハアハア ちょ ちよっと 待って ハアアアア
「あなたがギユウウツてバカみたいにギユウウツてするから息できなかった！」
「あ ごめん」
「死ぬかと思った！」
ン？ なに？
なんか泣きそうな顔で笑って
「朝メシできてっから」
はい

私は 今 下だけジーンズ履いて朝食を食べていて
向かい側の椅子に座ってモリシタダイチが私の制服のスカートの裾を繕ってる
どうなんだろう この構図
同級生の男子が同級生の女子のスカートの裾を繕ってるこの構図
モリシタダイチも制服着てるから余計に強調される同級生感
私が頼んだわけではないのよ ホチキスで止めようとしているのを見つけて
こういう構図が出来上がったわけであってさ
「ごちそう・・・さま」
「おう」
顔も上げずに真剣な顔で繕ってるよ
えっと 申し訳ないから食器洗います
少しは上手に洗えるようになったよ
「おっし、できた！」
「ありがとうございます」
私もあとはこのお皿を洗うだけ
「愛里、早く着替えろよ」
これで終わるから・・・もうちょっと
「ほら、早く」
あっ
カッチャーーン
お皿が落ちましたけど 割れましたけど
「今のは私じゃないですからっ」
「お 俺 俺です」

私が着替えている間に 早やっ もう片付けちゃってる
「はい、弁当」
「ありが・・・」

あ
「ゆうべは、あの、お騒がせしました」
マジお騒がせだよお
「ごめんなさい」
「謝んなよ」
「でも、あんな時間に LINE しちゃって電話してもらっちゃって」
それなのに
「浴室乾燥の棒が落ちただけで、ごめんなさい」
「なんもなくてよかったよ」
「そうですけど、なんか私、何も覚えてなくて、ベラベラしゃべってたのは覚えて」
「エーーーーッ」
「な、なんですか？」
「覚えてねえの？」
「なんかベラベラしゃべってたなあくらいで、ほとんど覚えてないです」
「ヤッペー」
「え？」
「俺、聞きちゃったよ」
「な、なにを？」
「ヤッペ、覚えてねえんだ、ヤッペー、俺聞きちゃったんだけどなあ」
「なななにを？」
え？ なにその顔？ え？ なんて笑う？
「なんて笑うのーーーーっ？」
「ウッソ」
「ハ？」
「怖いっつってただけ」
「ハァアアア？」
「覚えてねえくらい怖かったんだよな」
そうだけどっ ヤッペとか
「ごめんな」
「からかわないでくださいっ」
「それじゃねえよ」
「だったらどれですかっ」
なに？ 急にまじめな顔して なによ？
「なんもしてやれねえでごめん」
え
「なんか なんつうか ごめんな」
なにそれ
「覚えてないの？ 覚えてないんだ ヤッペー」
「なんだよそれ」
笑ってるけどさ

「じいやが守ってくれました！」
なんか・・・ 思い出しちゃった
また涙出そうだから
「いってきます」

午後イチの授業 日本史

この先生いっつも黒板の方向いてほぼこっち見ないよね 人見知り？
そんでメッチャ細かくビッシリ書くから板書取るの大変なんだけど

「上原さん」

え？ となりの席の・・・ えっと、か、川口くん？

クラス替えになって初めて話しかけてきたけど 今？ 授業中？

「これ」

消しゴム???

「上原さんに渡してくれてって森下から」

え・・・と???

「上原さん」

「あ、はい、ありがとう」

なぜ消しゴム？

しかも授業中

しかも遥か斜め後方からズーッと伝言ゲームみたいに渡ってきたということ

なぜ？ そして なぜ？

消しゴム持ってるけど？

忘れたと思った？

忘れたとしても隣に借りるし

隣って今はじめて口きいたけど

わけがわからない

どーでもいい そんな暇はない

先生！ これ以上書かなくていいからっ

中休み

速攻トイレに行ってナプキン取り換えてきた

あと一時間で帰れる～んるるん

「上原さん」

あ、川口くん

「上原さん映画好き？」

映画？ まあ、ある特定のジャンルを除いては ホラーと・・・

「うん」

「今大ヒット上映中の映画があるんだけど」

そうなんだ

「全米が泣いたって」

全米・・・

「それで、もしよかったら」

あれ 川口くんが消えた

消えたというより私と山口くんの間に立ちはだかるこれは・・・

見上げれば・・・ そこに モリシタダイチっ??? なぜっ?

「上原愛里」

フルネームで呼ぶのってどーなの?

「上原愛里」

「な、なんですか?」

マジなんなのよ???

「俺の消しゴム返してくんねえかな」

ハァアアア?

それじゃまるで私がモリシタダイチの消しゴムを借りたくて頼んで
遥か斜め後方から輸送してもらったみたいになっちゃうじゃんっ!

「どうぞ」

さっさと持って席に戻れよっ

え 消しゴムのサックの中から・・・ 何か白い小さい紙を出して
私のペンケースに入れて・・・ 去っていった

なに???

あ、えっと

「や、川口くん、ごめん、なんだっけ?」

あ 授業開始のベル

「あ、また今度でいいよ」

「うん」

化学の先生がいらっしゃいました

あの紙はなんなの? まわりに気づかれないようにそっと出して開くと

『晩メシ 何食いたい?』

なんなんだろう これ

こんなことを わざわざ斜め遥か後方から

しかも 消しゴムのサックの中に入れてって・・・

少女マンガの見過ぎだよ! お姉さんの少女マンガっ!

こんなこと現実にやるかなあっ

わけがわからない

化学の先生の言ってることもわからないけど

コクる

玄関のドアを開けたら

「おかえり」

口をきく気にさえならない

「愛里どした？　また具合悪くなったんか？」

あ　あ　あ　あーっもーっいろいろ言いたいことあり過ぎて

「どした？　声出ねえの？」

「何から言えばいいのかっ」

「言いたいとっから言えばいいからさ」

いいからさじゃないっ

「あの消しゴムはなんですか？」

「消しゴムは消しゴムだろ」

「じゃなくて！　なんで遥か斜め後方から何人もの人の手を経て送ってきたのっ？」

「今日の晩メシ何食べてえかなあと思ったから」

「そんなこと今まで聞いたことなかったじゃないですか！」

「それはなんつうか、まあ、ゆうべ？　あんなことあったし？　愛里は生理中で？」

「言い訳ですよね」

あ、バレた・・・って顔してますよわかりますよ

「しかも、中休みに、今まで来たこともないのに、私のところに来て」

「いいじゃん、おんなしクラスなんだから」

「俺の消しゴム返せって！」

「俺の消しゴムだから」

「まるで私があなたの消しゴムを借りたくて遥か後方から・・・」

なんかバカバカしくなってきた

「もういいです」

「愛里が悪りいんだろ」

「私が悪いっ？　なんで私が悪いのっ？」

「中に入れたメモ見ねえから」

「消しゴムの中にメモが入ってるなんてわかるわけないでしょ！」

「わかんだろフツー、みんなやってんじゃん」

「みんなって誰ですか？」

「え、だから、なんつうか、よくマンガン中で、やってんじゃん」

「ほーっら、やっぱり！　ぜーったいそうだと思った！」

「ほーらやっぱりってなんだよ」
「あなたは、お姉さんの少女マンガの読みすぎです！」
「え・・・」
「現実であんなことする人なんてだーれもいませんから！」
なに口とがらせて？ あ、なんか考えてる、また言い訳考えてる
「俺は愛里を助けたんだけどなあ」
「はあ？ 何から私を助けたんですか？」
「全米から」
「ハァァァァァ？」
「昼休みに川口が言ってたんだよ、俺にじゃねえけど」
「なに？」
「午後の中休みに愛里に明日映画に行かないかって誘うってさ」
たしかに映画は好きかとは聞かれたけど
「“只今大ヒット上映中全米が泣いた感動の超大作！”」
え・・・
「愛里、全米が泣いた映画観て泣いたことあっか？」
「それは、あの、え〜っと、たしか、え〜っと」
「ねえだろ」
「なっ なんて決めつけるんですかっ」
「俺さ、去年の秋か冬くれえかな、聞いちまったんだよなあ、聞こえたっつうかさ」
なに？
「愛里と友だちが休みの日に全米が泣いたっつう映画見に行ったって話しててさ」
なっなんでそんなことをっ
「盗み聞きしたのっ？」
「廊下で話してたら聞こえだろ」
あ そういえば・・・
「そんでさ、愛里が友だちに聞いたんだよ、ところであの映画の泣き所はどこ？」
「あっ」
「友だちドン引きしてたよなあ」
「あれは、たまたま私の感性に合わなかったっていうか、他のだったら」
「泣き所はどこって聞くヤツは全米が泣いたでぜってえ泣かなねえよ」
「泣くかもしれないでしょ！」
「ぜってえ泣かねえ」
「なんで決めつけるのよっ」
「俺、全米が泣いたでぜってえ泣けねえ人知ってっから」
「だれ？」
「俺のかあちゃん」
地球・・・ 地球を出されちゃったら・・・
「川口が愛里を映画連れてって、泣き所はどこ？ って聞かれたら・・・ なあ？」
「まあ・・・ たしかに・・・それは・・・」

地球出されちゃったから強気になれないいい

「な！ だからあ 俺はあ 愛里を全米から救った」

ウッ 何も言えない 地球が泣けないのに私が泣けるとか言えない

あれ？ でも・・・

「川口くんは、なんで私に全米が泣いた映画を見せたようと思ったのかな？」

「へ？」

「私、映画同好会に入ってないし、映画好きで有名とかじゃないのに」

もしかして

「私が全米が泣いたで泣くかどうかを試そうとした？」

ポカンとしてるけど？

「私をそういう実験に使おうとしてたってこと？」

「俺・・・ 今・・・ ちょっと川口に同情する」

「そうですよ！ 失礼でしょ！ 話の途中でヌッと間に入ってきて！」

「そういうんじゃないっつうか」

「まあ、実験に使われなくてよかったですけど」

え なに？ なんでそんなポーッとした顔で見てる？

「なんですか？」

「や、なんつうか、メシ作る」

あ そう

今夜はアジ！

しかも、シソをアジでクルクルって巻いて焼いてるからサッパリして美味しかった！

こんなの私に聞いたって思いつかないよ思いつくわけないでしょ！

フライパンを洗っているモリシタダイチ

私が美味しいって言うとき「マジ？」ってすごい嬉しそうな顔するけど

マジに決まってるでしょ すごいなあ 高校生の男子がこんな料理が上手って

お父さん目指してるって言ってたもんね 伝説の元シェフ？ そして伝説の家政婦

お母さんは地球 なんか規模がすごすぎて・・・

「愛里はさ」

「はい？」

「コクられたことあんの？」

え・・・

「あります」

「えっ？ あんの？」

「わ、私だって、一回や、えっと、一回くらいは・・・」

「そっか・・・ あるんだ」

あなたは自分でモテるって自覚するほどモテるから 100回はコクられてるでしょ！

「そんでつきあったんか？」

え・・・

「私の中では、あれはコクるにカウントされませんから」
「なんだよそれ コクったやつがかわいそうじゃん」
ハァアアア？
「勇気振り絞ってコクったのによ」
あなたは勇気振り絞ってコクった相手を撃沈させたんでしょ！
私のはそういうのではない
「あれをコクったに分類する人は誰もいないと思います！」
「あ？」
「状況！」
「ハ？」
じゃあ説明してあげるけどっ
「1年のとき、学級委員の森山くんと」
「今4組の森山？」
「今何組か知りませんが、森山くと日直だった日があって、
先生のところに集めたノートを届けに行ったんです、ここまでわかります？」
「ああ」
「ノート持って職員室まで歩いている最中、さいちゅうですよ？」
「ああ」
「つきあってくれませんかかって聞かれたから、どこにですかって聞いたんです」
「へ？」
「そうなるでしょ！ 廊下歩いているときに、つきあってくれませんかかって言われたら
どこか寄りたいたいところか寄らなきゃいけないところがあるのかなあって、
だから、どこにですか？ って聞いたんです」
口開けて見てるけど
「そしたら翌日！ クラスの何人かが、森山が上原にコクってあっさりフラれたって！
私フツた覚えもましてコクられた覚えもないのにそういう話になっちゃってて」
なんで口開けたまま？
「ミカ、じゃなくて、友だちに状況を説明したんです、そしたら・・・ 笑われました」
なんで笑われなきゃいけないの？ 笑われることなんかしてないのに
「それは・・・ 森山が悪りいな」
え？ わかってくれる？ わかってくれた？
「でしょでしょ？」
「愛里のこと知らなさすぎだな」
え？ どういうこと？
「撃沈じゃねえな」
え？
「自爆だな」
「どういう意味ですか？」
「やっぱ カンペキ ツボだ」
ツボ？

「たまんねえな」

ツボに溜まらない？ 何の話???

「何がツボに溜まらないの？」

「そういうとこ！」

どーゆーとこよっ？

血液について

金曜日の夜の解放感！

明日から休みー！

宿題は今夜のうちにやっしまおう土日に宿題やるとか絶対イヤ

生物の先生もさぁ帰りの学活のときにプリント持ってくるかなあ

たしかに月曜日に生物あるけどさあ

えっと・・・

血液の働きとその循環

血液の成分には、液体成分である血しょう（けっしょう, plasma、血漿）と、有形成分である赤血球 (erythrocyte)・白血球 (leucocyte)・血小板 (platelet) の血球 (blood cell) がある。血球には、酸素を運ぶ赤血球 (erythrocyte)、体内に侵入した細菌・異物を排除する白血球 (leucocyte)、血液を凝固させ止血する血小板 (platelet) がある。有形成分が作られる場所については、ヒトの成人の場合、骨の内部にある骨髄（こつずい、bone marrow）で血液の有形成分が作られる。

全然頭に入ってこない

これって確実に中間で出るよね あああムリ～

ここは・・・ 日曜日の夜でいい うん 英訳は終わったから うん

ピコン

『愛里』

ピコン

『血液型は？』

モリシタダイチもこのプリントやってたんだ やってるよね 宿題だから

なぜ私に小問題的な質問？

『ABO 式血液型』送信

ピコン

『』

なんで笑うの？ 違ってる？

ピコン

『愛里の血液型聞いた w』

ハア？

ピコン

『愛里が宿題してるのはわかった w』
『紛らわしいですよ w』 送信
ピコン
『ごめんプリントやってたらなんか聞きたくなった w』
なんかこうしてると一緒に宿題やってるカンジ
モリシタダイチはメッチャ理解できちゃってるんだらうけど
『O型です』 送信
ピコン
『俺も O型』
でもね・・・
『私のはあなたとはちょっと違う O型です』 送信
『O型の Rh マイナス』 送信
ママが Rh マイナスだかららしいけど ママは B型なんだよね
ピコン
『俺今メッチャ驚いてんだけど』
だよねえ O型の Rh マイナスってあんまり聞かないよね
ピコン
『俺も O型の Rh -』
エーーーーーッ
『マジで?』 送信
ピコン
『メッチャマジ』
『私がケガしたら血をください w』 送信
ピコン
『やるやる全部やる』
『全部くれたらあなたが輸血必要になっちゃう w』 送信
ピコン
『俺の家族全員 O型の Rh マイナス』
エーーーーーッ すごすぎ!
ピコン
『在庫たっぷりあります w』
家族全員はすごくない?
ピコン
『愛里は何月生まれ?』
『9月です』 送信
ピコン
『何日?』
それ聞かう?
『言いたくない』 送信
ピコン

『13日?』

えっ わかられてしまった!

まあそうだよね、言いたくないってそういうことさあ

『そうです しかも金曜日』送信

あれ? 返信がない? 引かれた? 13日の金曜日に引いた?

私のせいじゃないんだけどおおおっ

ピコン

あ 来た

『俺今あたまクラックラしてる』

なにそれ? しょうがないでしょ!

『俺のかあちゃんととうちゃんも9月13日生まれ』

そうなの? すごい 偶然

え? てことは モリシタダイチのお父さんとお母さんは同じ誕生日?

運命の二人! なんかもういろいろすご過ぎ

『あなたの誕生日は?』送信

ピコン

『12月25日』

エー—ツ かわいそ過ぎるううう

誕生日がクリスマスって かける言葉もないよおお

なんて返そう 「めでたいですね」? 「キリストと同じですね」?

ピコン

『かわいそうって思っただろw』

見抜かれている

『思いました』送信

ピコン

『俺ん家クリスマスやらねえからw』

クリスマスをやらない? ゴリッゴリの仏教徒?

ピコン

『かあちゃんが行事ごと好きじゃねえからw』

ピコン

『12月25日は俺の誕生日祝いだけw』

『正直に言っていていいですか?』送信

ピコン

『いいよ』

『森下家って不思議家族』送信

ピコン

『メッチャ正直で笑ったwww』

モリシタダイチには正直に言ってもいいんだ なんか 楽

ピコン

『俺には愛里の方が不思議だけどw』

ハァアアア？

『私はふつうです』送信

ピコン

『そう言うと思ったw』

言うでしょ ふつうなんだから

ピコン

『俺のかあちゃんもそう言うw』

地球も自分はふつうと言うのね 地球が

ピコン

『俺のかあちゃんメッチャ天然だけどwww』

そうなの？ 地球が天然 まあ地球は天然というか自然 え？ ちょっと待って

『それは私が天然ということですか』送信

『私は天然ではありません』送信

ピコン

『俺今マジで声出して笑った』

ハァアアア？

『クビ絞めていいですか』送信

ピコン

『』

『怒ってるんですけど？』送信

ピコン

『』

『なにこの目？』送信

ピコン

『可愛いから』

え？

ピコン

『じいやはお嬢様が可愛いのでお世話させていただいておりますよ』

こいつは・・・

『じいや出せば済むと思うな！』送信

『最高！』

なんなの？ 私をからかうためにLINEしてきた？

ピコン

『愛里とLINE してると楽しいw』

『イジれるからですか』送信

ピコン

『愛里は頭がいいから』

ハァアアア？ 常連トップ3が言うっ？ イヤミなんですけどっ

『生物のプリントがまったくわからないくらいの頭ですけど』送信

ピコン

『俺がカテキョしようか?』

『カテキョ?』送信

ピコン

『愛里がわからないところ教えられると思う』

マジで?

『お願いします!』送信

ピコン

『そんじゃ明日教えるから』

あれ? 明日は休みだよ

『明日は休みですよ』送信

ピコン

『明日も仕事』

エー—— それは

『明日は休んでいいです土曜日だから』送信

ピコン

『そういう契約だから』

『契約はいいから土曜日は休んでください』送信

ピコン

『俺が行きたいから』

あ そう

ピコン

『平日はキッチリ掃除できないから土曜日にやる』

そうですか

『わかりました』送信

ピコン

『愛里 おやすみ』

『おやすみなさい』送信

土曜日も仕事するの?

契約って そうかもだけど モリシタダイチだって高校生だよ 休みたいでしょ

私が何言ったって聞かないな うん 聞かない

お風呂入ろう

パフェ

土曜日の朝 いつもよりは遅い時間
今日は何しよっかなあ
ショッピング？ 買いたいものないし一人でブラブラするのもなあ
あ パフェ食べたい
食べたいと思ったら メッチャ食べたくなっちゃった
食べに行く？ わざわざパフェ食べるためだけに出かける？
とにかく 顔洗おう

キッチンに行ったら あれ？ 音はするんだけど・・・
あ 流しの下に首突っ込んでる
「おはよう・・・ございます」
ガツツ？
「イデッ」
「ごめんなさい！ 急に声かけちゃったから」
「おう、愛里 おはよっス」
「おはようございます」
「あぁっと、今朝メシ作っから、んと、ちょっと待ってて」
「いいですいいです 私、休みの日は朝は食べないので」
「そっか、んじゃ 11 時くれえに作っから」
休みの日まで私の食事の心配・・・
「何をやってるんですか」
「排水管の掃除」
エー—— そういうのって業者さんがやるんじゃないの？
「なんか流れが悪いっつか」
そういうのもやっちゃうの？
「あ！ これだ」
ウワッ 汚ったないかたまり！ なにあれ——？
新聞紙の上に あれ？ うち新聞取ってないよ？
パパがいたときは取ってたけど ママが捨てるのめんどうだからってやめて
これはどこから？ 持ってきた？ わざわざ？
「愛里」
「はい？」

「俺ちゃんとやっから監視してねえでいいよ」
笑ってるけど
「ジャマですか？」
「ジャマなんかじゃねえけど」
メチャ手際いいなあ
「どっか出かけねえの？」
「どうしようかなあって思ってる段階でまだ決めてないです」
「こっちのことは気にしねえで好きなことしていいかな」
「はい」
「休みなんだからよ」
あなたは働いてますけどね

モリシタダイチが排水管の掃除終わって
あの汚ったない塊から汚ったない何かを取り除いて・・・
「これか」
なに？
「これ 指輪」
指輪？
「あ！ ママの！」
そういえば騒いでたよ
「結婚指輪失くしたって それです」
「よかったあ 見かって なあ」
「はい」
ここに落としたことも気づかないで日々過ごしていたママ
モリシタダイチが来なかったら永遠に見つからなかったよ

ランチはサンドイッチ
この卵サンドがね ママが作るゆで卵つぶしてマヨで混ぜたやつとちがうの
フワッフワのオムレツみたいな
「美味しい」
モリシタダイチも向かい側に座って食べてる
「愛里 出かけねえの？」
「パフェが食べたいんですけどお」
「食いに行けばいいじゃん」
「でもパフェ食べるためにだけ一人で出かけるのもなあって」
「誰か一緒に行くヤツいねえの？」
「友だちはクラス離れちゃってから一緒に出かけるとか・・・ないかな」
「カレシは？」
いると思う？ ずっとそばにいたらわかるでしょっ

「いません」
「そうなんだ」
「あなたこそ好きな人とデートしなくていいんですか」
「あ？」
「こんなところで排水管の掃除してないで、休みの日はデートしたらどうですか？」
「まだコクッてねえもん」
「ハァアアア？」
それはなに？ 余裕？ 100人にモテるからコクッたら速攻いける的な？
「俺の顔見てなんか考えてっだろ」
考えてますよ 笑ってるけど そんな余裕ぶっこいてたらね
「誰かに取られちゃうかもしれませんよ」
「だよなあ 昨日も危なかったしなあ」
昨日？ てことは
「同じ学校の人？」
「さあなあ」
私に言ったら女の情報網で流されると警戒してるのか
「鈍感だからなあ 気づいてくんねえんだよなあ」
「それはあなたが悪いです！ そういうことはハッキリ言ってあげてください！」
「ハッキリってなんて言えばいいんだよ」
「えっと・・・ 好きです とか？」
「愛里は好きですって言われたらわかんのか？」
「それくらいハッキリ言われたら誰でもわかるでしょ」
クビかしげてフツて笑ってる
これ以上私に詮索されたくないってことか 女の情報網で流されるから
べつにいいけど モリシタダイチが誰を好きだろうと私には関係ない
「パフェ好きなんか」
ほら話題変えた
「好きです」
あ そっか モリシタダイチは甘いものは・・・
「あなたはパフェとかアイスも食べないんですか？」
「食うよ」
「甘いもの嫌いなのに？」
「嫌いっつうか チョコは飽きたっつうか」
飽きた？
「毎月ねえちゃんが食ってるしさ」
ああ それね わかる 食べたいのよ
「バレンタイン・デー」
飽きるほどもらうと？ 自慢？ モテ自慢？
「ねえちゃんの誕生日なんだけどさ」
バレンタイン・デーが誕生日？

1年の主要イベントに二人の子どもをそれぞれ生むお母さん さすが地球！

「誕生プレゼントの他にチョコ山ほどもらって帰ってきてさ」

女なのに？

「そんで、かあちゃんもごっそりもらって帰ってくるしさ」

女なのに？

「そんで、とうちゃんも職場のパートのおばちゃんたちからごっそりもらってくるしさ」

そこは男だからにしても

「そんで俺もそれなりにもらうしさ」

それなりにとは100個ということ？

「毎年家年中チョコだらけで、俺はもう一生分のチョコ見た気がする」

まあそれは・・・ そんな規模だったら・・・たしかに・・・

「愛里は誰かにチョコあげたことあんのか」

「ありますよ」

「誰に？」

「パパ」

なに？ その・・・

「笑いたいのこらえて必死に真顔作ろうとしてますよね」

「や、なんか、可愛くなって」

「パパが愛里からチョコ欲しいなあって言ったからあげたんですっ」

「可愛い娘じゃん」

「まあ一人っ子なんで ハパとママが25歳で結婚してずっと子どもができなくて」

ママに死ぬほど聞かされてるから

「ママが33歳のときにやっと私が生まれたそうなんです」

「そっか」

「パパとママにとって私は・・・ いまだに赤ちゃんなんです」

ずーっと

「ごちそうさまでした」

どうしようかなあ

出かけようと思えば全然出かけられる時間だけど

さっきのサンドイッチ食べたら なんかカフェでランチした気分になっちゃったし

ていうか その辺のカフェよりゼーンぜん美味しかったよ

「愛里」

ドアの外からモリシタダイチの声

珍しい バンッて勝手にドア開けないんだ

「なんですか？」

ドアを開けたら・・・ ウワッ 汗びっしょりなんだけど

「あのさ 風呂掃除してたら汗メッチャかいちまってさ」

うん 見ればわかる

「シャワー借りてもいいかな」

「はい、もちろん、どうぞ」

「使ったらまたちゃんと掃除すっから」

また汗かいちゃうよ？

あれ？

「着替えは？ パパのが・・・たしか・・・」

「持ってきた」

「あ そうですか」

汗をかくであろうことを想定して仕事をする プロだな

「えっと、タオルを」

「わかってっから」

「そうですよね」

洗濯してたたんでしまってるのはあなたです

仕事だけどそうだけど

休みの日に 自分の家でもないのに あんなに汗いっぱいかいて掃除して

好きな人とデートもできずに・・・ あ、まだコクッてないのか

にしても なんか あんな汗びっしょりのモリシタダイチ見ちゃったら なんか
パフェ！

パフェ作ろう

作るって言っても市販のを乗っけるだけなんだけど

シャワーの後のパフェは最高だと思う

材料買ってこよう

えっと モリシタダイチは・・・ バスルームの奥からシャワーの音がする

すぐ帰ってくるからいっか シャワーから出るくらいには帰ってこられるから

えっと・・・ イチゴとバナナはマスト だけどイチゴはあったからバナナだけ

チョコレートソースとヨーグルト用のストロベリーソース

ホイップクリーム・・・ あった！ 絞ればいいだけのやつ

インスタントコーヒーはあったよね

ちょっと溶かしてチョコレートソースに入れるとおとなの味で美味しいよね

メインのアイス どっちにする？ ストロベリーとチョコかバニラか

私はパフェのときはバニラ だね バニラ

走って あれ？ 玄関の前にモリシタダイチ？

「愛里！」

なに？ なにかあった？

「どこ行ってたんだよ！」

「スーパーです、すぐその」

「なんも言わねえでいなくなってっからさ！」
「シャワー浴びてたから」
「言えよ！」
「でもすぐ帰ってこられるから」
「電話しても出ねえしよ！」
電話？ あれ？ ない
「部屋ん中に忘れてっただろ」
あ そっか
「携帯持っててくんねえと連絡できねえじゃん！」
「ごめんなさい、でも」
「この前もあんなことあってさ、あんときはなんもなくてよかったけどさ」
なんでそんなに怖い顔してるの
「シャワーから出たら愛里どっこにもいなくてよ、俺、メッチャ心配になってさ」
「ごめんなさい」
「なんかあったらどうすんだよ！」
「でも・・・ すぐそこのスーパーだし・・・」
「それでもさ、なんも言わねえでいなくなるとさ、心配すんだろ！」
そんなに・・・
「そんなに心配ですか」
「あたりめえだろ！」
「すぐ近くのスーパーに行っただけで」
「どこ行ったんかわかんねえから心配だったんだろ！」
そんなに・・・心配って・・・
「それはあなたが私を何もできない子どもだと思ってるからでしょ！」
「んなこと思ってねえよ！」
「思ってる！ 思ってるからそんなに怒るんでしょ！」
「だから怒ってねえよ！」
「怒ってるじゃない！ フラッと何も考えないで外に出ちゃった子どもみたいに！」
「んなこと思ってねえよ！」
「だったらなんでそんな怖い顔で怒るの！」
「だから怒ってんじゃねえって」
「あなたは私がなんにもできない子どもだと思ってるんでしょ！」
「思ってねえよ！」
「私は小学校二年生じゃないです！」
「わかってっから」
「わかってない！ なんにもわかってない！」
黙って私の顔見てるけど
「私が何を考えてるかなんて、聞こうともしないで、顔見たらすぐに・・・」
くちびる嚙んでも・・・涙・・・
「私が考えてることなんて、バカみたいなことだろうけど・・・」

どうすれば止まるの・・・涙・・・

「私は、あなたが汗びっしょりで、休みなのに、私の家の掃除してくれて、

汗びっしょりになって、休みなのに だから、だから・・・」

泣きながら・・・言いたくないのに・・・

「あなたにパフェを作ろうって」

「え・・・」

「パフェを作って、一緒に食べたら・・・ ちょっとは休みの日みたいに・・・

ちょっとだけでも休みの日みたいに・・・ あなたが思えたら・・・ いいなって」

こんなこと・・・泣きながら言ったら・・・

「どうせ私は子どもです！ こんなこと、泣きながら言って・・・

こんなバカみたいなことしか考えない子どもです！」

「愛里」

「そばにこないで！ 大嫌い！」

スーパーの袋投げつけて走った

「愛里！」

腕をつかまれて

「放して！」

「愛里！」

ギュウッて

「放して！」

「イヤだ」

「抱っこすれば機嫌が直ると思ってるんですか」

「抱っこじゃねえよ」

「だったら放して！」

「イヤだ」

「放して！」

「俺さ」

放してよ

「俺、あの夜、愛里が怖え思いしてんのに、そばにいれねえでさ」

「それはもういい！」

「聞いてくれよ！ 頼むから 聞いてくれよ」

え・・・

「愛里がひとりで怖え思いしてんのに、俺はそばにもいてやれねえ

愛里がホッとして泣いたときも 電話ん中の愛里の泣き声聞いてるだけでさ

俺、愛里のことひとりで泣かせてんだよ、怖え思いした後に泣いてんのにさ

俺、なにやってんだって、俺、もし今度 愛里が泣いたときは」

私のこと抱いている身体が少し震えてる・・・

「ぜってえひとりで泣かせねえって、それなのにさ」

声が・・・優しくなっていて・・・

「俺が愛里泣かせてんじゃん」

情けないような声で笑って・・・
「愛里の涙には理由がある、ちゃんと理由がある」
私の涙には・・・理由・・・
「すんげえいろんなこと考えて すんげえいろんなこと感じて」
え・・・
「すんげえ我慢して 我慢して そんで」
やだ・・・また・・・涙・・・
「ごめんな、愛里 ごめん」
そんな優しい声で謝らないでよ・・・
「ガキは俺なんだよ」
え？
「愛里のこと心配になり過ぎてパニックって怒鳴って ガキじゃん」
顔をあげたら 情けない顔で笑っていて
「ガキは俺だよ、愛里」
そんなこと言われたら・・・
「ダイチーー」
もう
「泣いちゃったじゃない・・・泣い・・・」
「ごめんな、愛里 ごめん」
いいよ・・・もう・・・
「いいよもう！」
そんな優しい顔で見ないでよ！
「アイスクリーム溶けちゃう！」

できた！
っていっても、ただ乗っけただけ
「できました！」
モリシタダイチの前にストロベリーパフェとチョコ&コーヒーパフェ
「スゲーー！ マジ パフェだ！」
「乗っけただけですけどね」
「メッチャきれいじゃん！ 店みてえじゃん！」
「まあ見た目だけはこだわるっていうか」
「愛里、こういうの上手なんだなあ」
「まあかっこよく言えばコーディネートは得意です」
「コーディネート！ マジすげえ！」
「市販のものを乗っけただけなんですけどね」
「食っていい？」
「早く食べてください、溶けちゃう」
モリシタダイチがストロベリーの方を・・・

「マジ美味え！」
「市販ですから」
「それでも組み合わせがメッチャ絶妙っつうかさ」
「あんまりバカみたいに褒めると複雑な気持ちになるんですけど」
「なんで？」
「全部市販のを乗っけただけだから！」
笑ってる
「こっちのも食べてください 溶けちゃう」
「おう」
今度はチョコ&コーヒーパフェを・・・
「これ、ただのチョコじゃねえ！」
「チョコレートソースにちょっとだけインスタントコーヒー溶かしたんです」
「愛里、天才じゃね？」
「天才じゃないです」
「いや、これは天才だって！」
「さっき私を泣かせたことを褒めちぎることでごまかそうとしてますよね」
え？ なに？ なにその含み笑い？
「なんですか？」
「たまんねえなあ」
なにが？
「好きです」
「どっち？ ストロベリー？ チョコとコーヒー？」
え？ なんで笑ってるの？
「やっぱなあ！」
「何がですか？」
「全部 好きです」
全部市販のなんだけどね

生物のプリント

ダイニングテーブルの上に生物のプリント
私の横にモリシタダイチ
マジで家庭教師の時間っぽくて気が滅入る

「愛里」

「はい」私の声すでに死んでいる

「このプリント全部読んだか？」

「はあ、まあ・・・読みました」

「どう思った？」

どう思った？ どう思ったって・・・

「血液の働きとその循環のことだなあって」

「頭に入った？」

入ってたらあなたに教えてもらわないんですけど

「入りませんでした」

「だよな」

だよな？ それは私の頭が悪いから頭に入ってこないのは当然なこと？

「文章ってさ、それ書いた人の頭ん中とおんなしだと思っただよな」

え・・・っど???

「これ書いた人の頭ん中はこれみてえにズラーッとまとまりがねえっつうか」

このプリント書いたのが誰だか知らないし誰でもいいしどーでもいいんだけど

「そんで、この人は何が言いてえのかっつうのを見つけてく挑戦っうかさ」

挑戦 意味がわからない

「俺が、俺なりに？ こうじゃねえかなって思ったのがこれ」

ノート

■血液の働き：全身の細胞へ酸素や栄養分を送る→細胞が活動できる

■血液の成分：液体成分と有形成分

あれ？ わかる メチャ入ってくる

■有形成分＝血球 (blood cell)

・赤血球 (erythrocyte)：酸素を運ぶ

- ・白血球 (leucocyte)：体内に侵入した細菌・異物を排除する
- ・血小板 (platelet)：血液を凝固させ止血する

なんかすっごいスッキリ整理されてストーンて入ってくる

■液体成分：血しょう（けっしょう, plasma、血漿）

- ・成分：水（約90%）

少量のタンパク質（約7%）グルコース・タンパク質・脂質・無機塩類など

- ・血しょうのタンパク質：アルブミン (albumin) やグロブリン (globulin) など
- 血液の重さの55%が血しょう（=55%が水分）

さすが常連トップ3

あのお経みたいな文章をここまで明確にしてしまうとは！

「これは、俺のとうちゃんのやり方なんだけどさ」

お父さん？ 家事だけではなく生物まで！ さすが大学院卒！

「とうちゃん、数学とかまあ理数系の問題、クイズみてえでおもしれえんだってさ」

クイズみたいでおもしれえ？

「クイズやってるみてえにワクワクすんだってさ」

ワクワクする？

「とうちゃん、ねえちゃんが小学校入るまで読み書きできなくてさ」

ん っと？

「書いて読めたのが、ひらがなとかタカナと」

それは・・・

「漢字は自分とかあちゃんの名前と、大根の大きえだったって」

大根 それは・・・ もしかして・・・ 学習障害？

「ねえちゃんが小学校入って、最初はひらがなじゃん、一緒に声出して読んでさ」

そうやって克服していったってこと？

「そんで、気いついたらねえちゃんと一緒に勉強してて」

自分で克服していったんだ！ すごい

「なんつうの？ 今まで模様には見えなかったのが読めるって感動したっつって」

ヘレン・ケラーの「ウォォオラー」的なこと？

「そっからメッチャ楽しくなって、ねえちゃんが中学んときも高校んときも、

ねえちゃんの参考書とか夢中になって読んでてさ」

夢中になる？ 参考書読むのに夢中になる？ なれない永遠になれない

「問題集なんて全部解いちまってさ」

問題集を全部解く ムリ 私にはムリ

「ねえちゃんが大学受験の勉強してるときにさ、わかんねえわかんねえって」

うちの高校の万年トップがわからない問題ってどんななの？ 見たくはないけど

「そしたらとうちゃんがヒョイって見て、これはこうなんじゃねえの？ つって」

ハ？

「一瞬で解いちまってさ」
一瞬でっ 万年トップがわからない問題を一瞬でっ
「かあちゃんが、いっそヒトミと一緒に受験したら？ って笑ってさ」
受験？ 大学院入ったってことは大学は卒業したよね
「あの、あなたのお父さんはどこの大学を卒業したんですか？」
日本ならあそこで海外ならあそこだよ？ それ以上のところってどこ？
「どうちゃん大学行ってねえよ」
「へ？」
「つか、小学校も行ってねえんだって」
小学校も行ってない・・・のに大学院には入った どういうこと??
「小学校入ってすぐにすんげえイジメに遭って、それで怖くて学校行けなくなったって」
え・・・
登校拒否になるほどのイジメに遭って小学校も行ってない・・・
だけど大学院には入った・・・
どーゆーこと？
「あのお・・・あなたのお父さんは小学校にも行ってない」
「行ってねえってさ」
「なのに、大学院には入ったんですよね？」
「大学院？」
「前に言ってたじゃないですか 院に入って産婦人科の先生の授業を受けたって」
「ああ！ 大学院の院じゃねえよ、少年院」
「ショーネンイン？」
ショーネンインしょうねん・・・少年院 えっ 少年院？
「少年院の院？」
「少年院の院」
「エーーーーー」
これは・・・んっと・・・どこから・・・
「やっぱそうなるんだなあ」
「そうなる・・・とは？」
「俺がこのこと言うとみんな引くんだよなあ」
ハ？
「引くっていうより足され過ぎちゃってるんですけど」
「あ？」
「あなたが私に与えた情報は時系列バラバラで断片的な情報過多で、
なんか、この生物のプリント読んでるみたいなカンジになっちゃって」
ポカンと見てるけど
「それって、あなたの頭の中が時系列バラバラで断片的な情報過多ってことですよね？」
「へ？」
「こっちのノートみたいに簡潔にパッとわかるようにまとめてから話してください」
そうだよ！

「いっそのこのノートに書いてください パッと！ わかりやすく！」

なに？ なにジューッと見てるの？

「そっか」

「そうです」

「そんじゃさ」

「はい？」

「知ってっか？」

「何を？」

「イカの血が」

イカの血？

「青いって」

イカの血が青い

「知りませんでした」

「そっか」

「それは、あなたのお父さんと何か関係があるということですか？」

「ねえよ」

え？ えっと・・・

「あ！ 試験に出る？」

「出ねえよ」

「それじゃ・・・ なに？」

「愛里は知ってっかなあって聞いただけ」

ハァアアアア？

「イカの血なんてどーーーーでもいい！」

メッチャ笑ってる

私は真剣に話してたのにーーーーっ

もういい！ 宿題しよう

■ヘモグロビン (hemoglobin)：赤血球に含まれる赤い色素タンパク質 鉄を含むので赤い

ヘモグロビンの役目：肺で酸素 O₂ と結合して酸素を運搬する

「愛里」

私は勉強しています

「あ・い・り」

私は勉強しています

「晩メシ 何食べてえ？」

無視！

「オムライスにすっか？」

え・・・ 無視

「そっか オムライスは食いたくねえのか」

あーもーっ

「食いたいですっ」

笑ってる

カンペキ遊ばれてる ムカつくーっ

でも今私はモリシタダイチのノート無しでは宿題ができないっ

あれ？

でもさ・・・なんでイカの血は青いの？

検索

イカなど、いくつかの動物では、銅 Cu をふくむタンパク質のヘモシアニン (Hemocyanin) が血液を介して酸素を運ぶ役目をしている動物もいる。ヘモシアニンをふくむ動物の血液は青い。この青色は銅イオンの色である。

えっと、つまり・・・

・ヘモシアニン-銅を含むたんぱく質

・銅イオンの色が青い

ってことか

なに調べてるのよ私もさーっ！

イメージ変更

シャワー浴びて下着を洗濯して 只今絶賛浴室乾燥中
あの夜以来二回は確かめるからね あの棒をちゃんとかけたか 二回！

モリシタダイチのお父さん・・・

・小学校に入ってすぐイジメにより不登校

学校行けなくなるくらいのイジメって ひどくない？ ひどいよ

なんなのそいつら！ だいたいさあっ・・・って、私がここで怒ってもしようがない

・お姉さんが小学校入学まで読み書きができなかった

ひらがな・カタカナ、漢字は自分とお母さんの名前と大根

それはそうだよ、小学校行けなかったんだから お父さんのせいじゃないよ

漢字だって自分の名前とお母さんの名前と・・・なんで大根？ まあいいけど

・お姉さんが小学校入学して一緒に勉強－読み書きができるようになる

これってつまり小学校からやり直したってことだよ

基礎って大事だもんね 私もやり直したい せめて高校入ったところから

中学かな 中学から理科とか数学がなんか苦手になって・・・私のことはいいよ

今さらどうしようもないもん 受験科目だけ頑張っあとは落とさないくらいに？

えっと・・・

・お姉さんと勉強していくうちに勉強が楽しくなる

勉強が楽しい？ クイズみたいとかワクワクするって言ってたよね？

わからない その感覚は永遠にわからない

・お姉さんの大学受験問題の難題を一瞬にして解く

え・・・ すごくない？

学校も行かないで塾にも行かないでこの光速的進歩ってなに？

天才 だよな天才 数学をクイズだって言う時点で天才

なんか・・・ モリシタダイチとお姉さんが頭がいい理由がわかった気がする

ヘモシアニン！

ちがう！ それはイカだよ、しかも色素たんぱく質だよそれじゃないよ

DNA！ まだ授業ではそこまでやってないけど

そしてお母さんが地球でしょ

私とは別世界の人類ってカンジ

でも・・・ モリシタダイチは・・・ なんだろう なんか・・・

まあいい

・少年院に入る

少年院に入ったってことは・・・何か悪いことしたんだよね

なんかピンとこないっていうか 私のまわりに少年院入った人いないし

それにモリシタダイチには、お父さんが少年院入ってた的な？

そういうの全然ないっていうか、だから余計にピンとこないっていうか

でもさあ そうなると私の中のモリシタダイチのお父さんのイメージがねえ

今まではあのボブのカツラ被った人だったんだけど

これは違うってこと？ だよな だったらどんな？

あ！ ママが好きな俳優で、誰だっけ、ママがドラマ観てて、

好き過ぎてそのドラマのスタンプ買って送ってきたことあった！

「見て見て～」って

どう反応していいかわかんなくて既読スルーしたら二度と送ってこなかったけど

どこだっけ？ えっと・・・上の方・・・ あった これ？ こっちってこと？

ピコン

『愛里』

いつも愛里で始まるよね 私に送ってるんだから名前いらぬのに

『は～い こちら愛里でございま～す』送信

ピコン

『www なんだよそれメッチャウケた www』

『中継先の女子アナの真似 w』送信

『あなたからの LINE はいつも私の名前で始まるから』送信

『上原の愛里さーんみたいな w』送信

ピコン

『愛里の名前可愛いから w』

『子どもっぽいけど w』送信

ピコン

『誰がつけたの？』

『パパとママで相談したらいいんですけど』送信

『特にパパが将来海外に行ったとき向こうの人が呼びやすいからって』送信

『アイリーンとか？ そういうカンジで w 海外行く予定ないけど w』送信

ピコン

『俺のかあちゃんがメッチャ気に入る w』

お母さん？

ピコン

『かあちゃん、ねえちゃんの名前、沙羅とか世界で通用する名前にしたかったって w』

『おねえさんの名前はなんていうんですか？』送信

ピコン

『一美（ヒトミ） 世界一の美人になりますようにだっけさ w』

世界一！

やっぱり地球は世界を視野に入れるのね

ピコン

『俺の名前の大は世界一の大物になるようにってかあちゃん言ってた w』

世界一の大物！ 生まれてすぐに世界を背負わされたんだ さすが地球！

ピコン

『でもさ俺が中学のときにとうちゃんがポロッと行ったんだけど』

ピコン

『大が生まれたときは俺はまだほとんど漢字が読めなくて

一美のときは4個あったけど大のときは名前に使えんのが残ってなくて』

ピコン

『かあちゃん、俺が書ける大根の「大」使って大って』

大根？ あ 大根の大は書けるって言ってた

ピコン

『父親が息子の名前書けないのは悲しいだろって

この子も父親に名前書いて欲しいよって』

ピコン

『かあちゃんは本当に優しいよなあって結局ノロケなんだけどさ w』

ピコン

『俺は、エーッ 俺の名前は大根の大かよ！ って www』

“父親が息子の名前を書けないのは悲しいだろ”って

“この子も父親名前書いて欲しいよ”って・・・

イジメで小学校に行けなくなって読み書きができなかったモリシタダイチのお父さん

自分の子どもの名前を書けることはあたりまえなのに、あたりまえじゃない

お父さんにとってはすごく嬉しくてすごく・・・

あ なんか涙・・・

モリシタダイチのお母さんは お父さんにあたりまえのことをさせてあげたかった

生まれてきた子どもにもあたりまえのことをあたりまえにしてあげたくて

あなたの名前は世界一の大物よりすごくすごく大きくて・・・

『大の中には いーっばい愛が詰まってる』送信

あれ？ 返信がない 私なんか余計なこと言った？

勝手に感動されて引いてる？

ピコン 来た

『』

ハートに矢・・・ グサッ？ 傷ついたってこと？

え？ なんかわかんないけど 傷つけたのかな だよ

謝ろう とにかく 謝ろう

『グサッって傷つけたってことですよ？』送信

『ごめんなさい！ 傷つけるつもりはなかったんですそうじゃないんです』送信

ピコン

『愛里の絵文字の解釈が独特過ぎてマジで笑った www』

どーゆーこと？

ピコン

『何やってた？』

何って・・・

『あなたのお父さんについてのノート作ってました』送信

ピコン

『どうちゃんについてのノート？ www』

『あなたの話がまとまりがないから自分で整理しました』送信

ピコン

『www』

マジ謝ってよ 生物のプリントよりわかんなかったよ

ピコン

『んで整理できた？ w』

『だいたいはできました』送信

ピコン

『どういう結論が出た？ w』

『あなたのお父さんは天才』送信

ピコン

『なんだその結論 www』

『私は間違っていない！』送信

ただ・・・

『ひとつだけ正直に言っていいですか？』送信

ピコン

『いくつでもいいよ w』

『あなたのお父さんが少年院に入っていたと聞いて

今までの私の中のあなたのお父さんのイメージが違っていたのかなって』送信

ピコン

『どうちゃんのイメージ？』

『正直に言っていいですか？ 怒らないって約束してくれますか？』送信

ピコン

『ぜってえ怒らないよ w』

だったら

『今までの私の中のあなたのお父さんのイメージはこれでした』

送信

『でも、これではなく、こっちの方なのかなって』

送信

『合ってますか?』送信

あれ? 返信がない 怒った? 怒らないって約束したよね?

なにこの返信のなさ! 怒らないって約束したじゃん!

ピコン

やっと来た

『死ぬ』

死ぬ? どういう意味?

ピコン

『笑い過ぎて息できなかった wwwww』

笑い過ぎて? なんで笑うの?

『真剣に聞いたんですけど』送信

ピコン

『いちいち笑える wwwww』

いちいち笑える? ぞーゆー意味よっ

『もういいです』送信

ピコン

『愛里』

もう中継アナの真似はしませんよ!

ピコン

『愛里は 愛でできている』

どういう意味? 愛里から愛取ったら里だけになっちゃうよ

ピコン

『最高!』

ハートがグルグル回っている・・・ どういう意味で使ってるの?

『もうひとつ言ってもいいですか?』送信

ピコン

『いいよ』

『私、絵文字がどういう意味合いで使われるのかよくわからなくて』送信

『人によって使う意味が違う気がして』送信

『これは何に見えますか? →』送信

ピコン

『無表情?』

だよね みんなそう言うんだけど

『私は目の細い人なのかと思っちゃったんです』送信

ピコン

『愛里』

なに?

ピコン

『俺、愛里に殺される』

ハ?

『笑い死にする wwwww』

ハアッ？

『Die!』送信

ピコン

『マジ死ぬ wwwwww』

『寝ます!』送信

ピコン

『愛里は明日予定あんの?』

寝るって言ってるのに無視?

『まだ何も決めてません、あなたは?』送信

ピコン

『とうちゃんの病院』

そうか、入院してるんだもんね

『あなたがお見舞いに行ったら喜びますね』送信

ピコン

『どうかな w かあちゃんが行けば泣いて喜ぶだろうけど w』

『あなたのお母さんは付き添っているんですか?』送信

ピコン

『かあちゃん出張で一ヵ月帰って来れない w』

一ヵ月も出張?

『遠いんですか?』送信

ピコン

『ニューヨーク』

ニューヨークーッ?

エーッ なんか エーッ

『遠いですね』送信

ますますわけがわからないんだけどおお?

お父さんが少年院でお母さんがニューヨーク

森下家って どーゆー家族なの?

お花とお弁当箱

天気の良い日曜日ってなんにもないのにウキウキする。
どっしようかなあ どこか出かける？ どこに？ 駅ビルの雑貨ショップ？
一年のときはミカリンやアミリンとよく行ったよ、見るだけでも楽しかった。
あそこに行こう、それから・・・ カフェ？ あとは・・・
まず着替えよう

ワンピース着ちゃった
薄いブルーのワンピースに白のショート丈のカーデ
愛里お気に入りのコーデです
ママが買ってくるのはねえ フリフリばっかだからさあ
「愛里」
え
「入っていっかなあ」
えっ ど、どうして？
ドア開けたけど・・・
「おはよっス」
「今日お休みですよね？」
「ああまあ、うん、半ドンだけど」
「ハンドン？ ハンドンってなんだったっけ？」
「どうしたんですか？」
「愛里どっか出かけるのか？」
「出かけるっていうか、駅ビルに雑貨見に行こうかなあって」
「そっか」
「あの、今日はお父さんのお見舞いに行くんですよ？」
「ああまあ、うん、行く」
なに？ なんか様子が・・・
「あのさ・・・ とうちゃんに花買って持ってこっかなあと思ってんだけどさ」
入院にはお花だもんね
「喜ぶと思います」
「そんでさ・・・ 俺、花とかあんまわかんなくてさ」
男ってそうだよな パパなんかチューリップとバラしかわからないもん
「どこで買っていいのかもわかんねえしさ」

「この辺だと駅ビルの中にフラワーショップ入ってますよ」
「そっか」
わからないよねえ 男はあんまりお花買わないよね
「それで、あの、どういうの買ったらいいかわかんねえつつうかさ」
「スタッフさんに相談したらアドバイスしてくれますよ」
「そう・・・かもしんねえけど」
「かもじゃなくて、ちゃんとしてくれるので安心してください」
なに？　なんで私の顔見てため息つくの？
「あのさ」
「はい？」
「愛里選んでくんねえかな」
「私？　なぜ？」
「なんつうか、愛里センスいいしさ」
「プロのスタッフさんの方がずっと詳しいですから」
「つか、愛里が選んでくれたらとうちゃん喜ぶんじゃねえかなって」
「へ？　なぜ？」
「なんつうか、あ　ほれ　俺が働いてっこのお嬢さんが選んでくれたって」
意味がよくわから・・・　あれ？　あ！
「親孝行？」
「あ？」
「あなたが働いてる家の娘があなたのお父さんのためにお花を選ぶということは、
　あなたがしっかりと働いて信頼されているという証？」
「それ！　マジそれ！」
「わかりました！」
「マジ？」
「私がどこまでできるかはわかりませんが誠心誠意尽くして選びます！」
「なんだよそれ」
笑ってるけど
「あなたのお父さんのノートを作ったら」
会ったことはないし会うこともないにしても
「あなたのお父さんへの尊敬と感動でいっぱいになってるんです」
なに？　黙って見てるけど　ヘンなこと言った？
「とうちゃんマジ喜ぶよ」
「だといいですけど」
「マジ喜ぶ」
「それじゃ行きましょう」

フラワーショップ大好き！
あのバラも素敵だしあのピオニーも可愛い！

ブーケになってるのもあるけど 私はあんまり好きじゃないなあ

「予算はいくらですか？」

「予算？ まあテキト〜に」

テキト〜にって！

「テキト〜に選んだら大変なことになりますよ」

「へ？」

「あのバラなんて」

モリシタダイチの耳元に

「一本千円するんですよ」

「マジッ？」

「予算決めてください」

「え・・・ そんじゃ・・・ 千円？」

あのね

「千円じゃほとんど何も買えません」

「マジ？」

「私、あのバラ一本買うしかないですけど？」

「そっか、そんじゃ、愛里にまかせる」

ハ？ 丸投げ？

「だったら私、あのバラ 10 本買いますけど？」

「え・・・ マジ？」

「買わないけど」

「ビックリさせんなよお」

笑ってる場合ではないっ

「だから、ここまでならっていう予算言ってください」

「えっと・・・ そんじゃ・・・ 2,000・・・円？」

「わかりました！」

2,000 円ならなんとかね

「あ！ これ、ミントじゃね？」

え？

「とうちゃん、ベランダで育ててんだよ、かあちゃんに頼まれたからなんだけどさ」

「他にはどんなものを育ててますか？」

「えっと・・・ ローズマリーとかラベンダー？」

そうか

「全部かあちゃんに頼まれたからなんだけどさ」

それだ！

ミントと・・・ラベンダーあった、ローズマリーはないな ブルーベリーがある

この中に小さな白い花を少し・・・ 可愛くない？ 可愛いよね

「花瓶はどれくらいの大きさですか？」

「ねえよ」

「ない？」

「ペットボトルでいっかなあって」

「ハァアアア？」

これだから男ってさ ペットボトルって ありえないでしょ！

あ レジのところに小さな花瓶が売ってる これだ！

「すみません、これをこの花瓶に合うサイズに切ってください」

「はい、税込みで2,500円になります」

「はい」

お財布からバンとお金出した！

「愛里、なにやってんだよ、俺買うから」

「これは、私からのお見舞いです」

「んなことしなくていいよ」

「親孝行！」

「あ？」

「あなたが働いてる家の娘からお見舞い、お父さん喜ぶます、ですよ？」

なに？ また黙って見てるけど

「どうちゃん、マジ喜ぶよ」

喜んで欲しい

「愛里、ありがとな」

「親孝行」

「あい」

笑ってる

「はい、これ、私からのお見舞いです」

「ありがとな」

「それじゃ」

「あ、ちょ、愛里」

「はい？」

「んっと・・・ あ、これ、あの、なんでこれ選んだのかなって」

「あなたの言葉がヒントになりました」

「俺の言葉？」

「ベランダでミントやラベンダー育ててるって言ったでしょ？」

懐かしいんじゃないかなあって、入院していると、したことないからわかんないけど

お家が恋しくなるんじゃないかなあって」

黙って私の顔見てるけど 言ってる意味わかんないかな？

「だから、ベランダで育ててるミントやラベンダーだったらお家にいるみたいなの？」

あと、ブルーベリーは葉っぱが大きいから緑がいっぱいで、

入院していると緑とかそういう自然が恋しいかなあって、お花はアクセントっていうか」

「愛里は・・・ すげえな」

「すごくはないです、これが精いっぱいです」

「すげえよ、どうちゃんマジ喜ぶよ」

「だといいですね」
「愛里は、あの、これからどっか行くんか」
「その雑貨ショップをプラッと覗いて 気が向いたらカフェでお茶して帰るだけです」
「一緒に行く」
「ハ??？」
「俺もその、雑貨の、行く」
「お父さんのお見舞いに行くんですよね？」
「まだ時間あつから」
「でも、私、何か買いたいものがあるとかじゃなくてプラッと」
「プラッと行こう」
「でも、あのショップ、女の子のものしかないですよ？」
「いいよ」
いいよって
「なぜあなたも行くんですか？」
「え、だから、なんつうか、あ！ 俺、そういう店入ったことねえからさ」
なんか・・・ 意味わかんないんだけど
「どなんかなあって」
ただの雑貨だけど
「俺一人じゃ、なんつうか、入れねえじゃん」
「まあ・・・ そうですけど」
「愛里がいれば入れるっつうか」
「今・・・ですか？」
「今」
「お父さんのお見舞いに行く日なの？」
「まだ時間あるつつったじゃん」
「はあ」
「ほれ、行くぞ」
なんなのモリシタダイチ？ なんかよくわかんない

私にピッタリくっついて女の子の雑貨の中を歩くモリシタダイチ
メッチャ気になるんだけどおっ
気楽に見れないんだけどおっ
どうしようかなあ もう出ようかなあ
あれ？ お弁当箱がある
ステキ～ こういうのがいいんだよ あんなピンクのハート模様じゃなくてさ
このベビーブルーにフタが白の ステキ！ お揃いのお箸ケースもある
これにしよう！
「これ買ってきますから」
さっさと買ってさっさと出よう

えっ？ モリシタダイチがお弁当箱とお箸入れを私の手から・・・
そして走ってレジ？
そんなに急いでるなら一緒に入らなくてよかったのにな 頼んでないし！
「これ、買います」
レジの人にグイッと差し出してるけど
「あの」
「なに」
「あとは私がやるので、あなたはお父さんのところに行ってください」
「ハ？」
ハ？ じゃないのよ ハ？ は私だったよずっとさ
「これ買ったら帰ります、カフェも行きません、だから早くお父さんのところへ」
「これは俺が買う」
「ハ？」
「税込み 3,250 円になります」
あ、お財布
「俺が買うつつたろ」
ハア？
さっさとお金出しちゃってるけど
「あの、お花のお返しだったらそういうのは」
「お返しじゃねえよ」
「でも」
「これは俺が使うんだろ？」
「ハ？？？」
「これに愛里の弁当作って入れんのは俺じゃん」
「それは・・・そうですけど」
「だからこれは俺が買うんだよ」
意味が通ってるようで全然通ってないんだけど
あ もう包んでモリシタダイチの手に渡ってしまった・・・

「はい」
お弁当箱とお箸入れが入ったショッピングバッグを渡された
「ありがとう・・・ございます」
「これは俺が使うんだからありがとうとかいらねえんだつつうの」
「はあ」
なんかいろいろ謎だけど・・・
「それじゃ」
「愛里」
今度はなにがいい？
「なんですかあ」
「一緒に来てくんねえかな」

「どこにですかああ」
「どうちゃんどこ」
「ハ？ なぜ??？」
「どうちゃんに愛里会わせてえつつうか」
「なぜ？」
「あ、逆か」
何が何の逆??？
「愛里に、俺のどうちゃんに会ってほしい」
「なぜ？」
「なんつうか、会ってほしい」
全然意味がわかんないんだけど
「あの・・・でも・・・こんな急に・・・心の準備っていうか・・・」
「準備とかいらねえよ」
「そういう問題じゃなくて・・・」
「フツターのどうちゃんだからさ」
私がつまめたノートの結論ではフツターではない 天才なんですけど
「あの、ちょっと、怖いっていうか」
「俺のどうちゃんぜんぜん怖くねえよ」
「そういうのじゃなくて」
「マジ怖くねえって」
「あなたのおとうさんが怖いとかそういうのじゃなくて」
高校二年生にもなってって思われるだろうけどっ
「すごい人見知りなんです！」
今こうやって告白してることも恥ずかしいんですけどっ
「初めての人にはまったく口がきけなくなくて、顔が、なんていうか、
すごい無表情になっちゃうんです！」
「無表情？」
「はい、なんか、怖いって言われるくらい無表情になるらしくて、だから」
「目の細い人？」
「え？」
「あの絵文字みてえな顔になんの？」
笑ってるけどっ
「そうです！」
「いいよ」
「いいよというのは、だったら来なくていいよということですか？」
「目の細い人のまんまでいっつうこと」
「ハア？」
「口きかねえで黙ってていいからさ」
「それで行く意味があるんでしょうか？」
「愛里が来てくれっだけでどうちゃん喜ぶ」

あ・・・ 親孝行・・・

私が行くことがモリシタダイチの親孝行になぜなるのかわからないけど

「わかりました・・・ 行きます」

「マジ？」

「目の細い人でいいなら」

笑ってるけど

「私が今すごい勇気を振り絞っていることだけはわかってください」

「ありがとな」

「え、あ、いえ」

「そんじゃ行こ！」

「え？」

モリシタダイチが私の腕をつかんでチケット売り場に走る

「ちょ、ちょっと」

私の腕をつかんだままチケット買って・・・

逃げると思ってるのかな 逃げないよ 逃げたいけど

なんなんだろう よくわかんないーい

お父さん

電車の中

モリシタダイチと並んで座ってる

なぜ私は今電車に乗っているんだろう

行くって言っちゃったからだけど

なんで行くって言っちゃったんだろう

よくわからない

だいたい今日のモリシタダイチの行動のいちいちがよくわからないっ

な〜んかヘンだったよね

カシャッ

え？

横を見たら モリシタダイチが携帯こっちに向けてた

「今 撮りましたよね」

「撮った」

「私、メッチャ気い抜いてたんですけどっ？」

「自然でいいじゃん」

「自然とかそういうのじゃなくてハァァって気を抜いてたのにそれを」

カシャッ

「ハ？」

「怒ってる愛里」

笑って画面見せるけどっ

「もういいです」

目の端にまだ携帯向けているのが映っている

だったら私だって

カシャッ

「ほら、盗撮男！」

見ろ！

「すげえ！ ブレてねえ」

女子の撮影能力舐めんなよ！ 場数が違うのよ男子とはね！

「愛里は自撮りすんの？」

「自撮りはしないです、友だちと遊びに行ってみんなで撮るくらいかなあ」

え？ なに？ なにグイッて寄って

カシャッ

「今のはなんですか？」
「自撮り」
「言って！ 撮るなら言って！」
「そんなもっかい撮る？」
「あ、ムリ、私、もう一回とか、そういうの逆に硬くなっちゃうので」
「どうすりゃいいんだよ」
笑ってるけどさ
「電車の中で写真撮ります？ 旅行とかじゃないのに」
「いいじゃん撮ったって」
「撮ってもいいですけど私を巻き込まないでください」
カシャッ
「巻き込まないでって言いましたよねっ」
「巻き込んでねえよ、愛里を撮っただけ」
電車の中じゃなきゃクビしめたいなあ
「いいよ」
「ハ？」
「クビしめても」
えっ 読心術？
「やっばそう思ってたんだ」
笑っている
「もういいです」
どうしてくれよう
そうだ！
「動画で～す」
「動画？」
「ほら動いて」
なにそのふざけた顔！ しかもこれさ・・・
「ほら！」
「俺の顔、犬になってんじゃない！」
メッチャ笑える！
「愛里の動画も撮っていい？」
「絶対イヤ、かまえてるけどやめて！」
「もう撮っちった」
そうだと思いますよっ
笑ってるけど
「それ全部削除してくださいね」
「なんでだよ」
「そんなヘンなの残ってるのイヤだから」
「しねえ、ぜってえ削除しねえ」
なにそのケンカ売るみたいな言い方っ

「愛里は削除すんの？」

私？

「しません、証拠ですから」

「証拠ってなんだよ」

「犯罪の！ 盗撮男の！」

笑ってる

笑ってるけど・・・

どんどん近づいていく・・・下りる駅に・・・

なんか・・・緊張してきちゃった・・・なんか・・・呼吸が・・・

「愛里の手ってさ」

私の手？ え、握った

「細っせえよなあ」

やだ・・・手に汗かいてるのに・・・

「マジ細っせえなあ」

ギュッと握って・・・

でも・・・握ってもらっていると・・・なんか・・・ホッとして・・・

なんかギュッと 私も・・・

わかったんだ 私が 緊張してるって

だから 私の手が細いとか言って

いつもそうだった

初めてお習い事に行くときとか ママとパパの知り合いの家に行くときとか

ママが手を握ってくれて 私はギュッとママの手を握って

なんか なんかイヤだ 自分が 小さい頃と同じことしてる

指の力抜いて モリシタダイチの手からスッと手を抜いた

そびえ立つ病院

ここにモリシタダイチのお父さんがいる

フーーーー 深呼吸してお見舞いに行くってどうなの？

「こっち」

モリシタダイチが病院の中に入っていった

入院病棟って始めて来る

モリシタダイチが歩く後ろについていく私

ドッキドキしてるんだけどおおお

口きかないでいいって言ったよね 無表情でいいって

どっちだろう

ボブのカツラ被ってる方？ それともグラサン？

「ここ」

森下一男

モリシタ・・・ イチオ？　なんて読むのかな？
世界一の男？　メッチャ男気ある名前
てことは・・・　グラサンの方？

「とうちゃん」

「ダイチ！」

あれ？　声が・・・

「来てくれたんかよ　休みなのによお」

「休みだから来れたんだっつうの」

似てる！　モリシタダイチとお父さん　声そっくり！

どっちがどっちかわかんないくらいそっくり！

「愛里」

こっちこっちみたいに手招きするけどお

顔見れないから床見て中に入って・・・

「失礼します」

「とうちゃん、俺が働いてっこのお嬢さん」

「は・・・はじめまして」

「ダイチが働いてっここって」

「上原さんの」

「あ！　俺が行くはずだった」

「ああ、そこのお嬢さん」

「へ？　あれ？　小学二年生じゃねえの？」

どっちがどっちなのかわかんない　声が似すぎてて

「お嬢さん」

え　今のどっちだろ

「は、はい」

え・・・

なに　この　イケメン！

お父さん・・・じゃないよねお兄さんだよねメッチャイケメンなんだけどおおお！

「なんかよお、俺がこんななっちまってよお、ごめんなあ」

イケメンに話しかけられてるんですけどおおお

「いいえ・・・　そんな・・・」

やだ　ニマニマしちゃう

なんかこっち見て微笑んでる顔が　イケメンなのよおおお！

「俺が行けりゃよかったんだけどよお」

あなたが来たら・・・　私・・・　ボワ～ってし続けてしまったかもですう

「とうちゃん、これ、愛里がとうちゃんにつて」

あなたとは露知らず

「俺に？」
粗品でございますう
「お嬢さん」
イケメンが感激した顔って イケメン！
「愛里がさ、とうちゃんがベランダで」
「アイリ？」
はい、私ですう
「アイリって、ダイチが好きな子とおんなしなま」
「とうちゃん何言ってんのかなあ、なんかおかしくなっちゃまってねえかなあ」
「1年んときから俺に言ってたじゃん、アイリつつう」
「あれ、入院すつと意識混乱すんのかなあっ」
なに？ なんの話？
「それでもよお」
「とうちゃんっ しっかりしてくれよっ」
「俺はバカだけどよお」
ハ？ あなたがバカ？ あなたは天才ですよ！
「ダイチが言ったことはちゃんと憶えてっぞ」
「とうちゃんっ いいからっ その話はいいいからっ」
あ・・・れ？ こうやって見ると・・・
モリシタダイチって・・・ 鼻から下が・・・ イケメンそっくり！
目はちょっと違うけど 全体的に 引きで見ると・・・
エーーーーーッ モリシタダイチって イケメン！
知らなかった 今はじめて気がついた モリシタダイチって イケメン！
そういえばミカリンたちが言ってた モリシタダイチはイケメンで
そういうふうに見てなかったから ぜんぜん気がつかなかったけど
確かにイケメン
でも なんか こちらのイケメンを見ているような気持ちでは見れないっていうか
モリシタダイチは私にとってはモリシタダイチであって
「愛里？ どした？」
「え？ あ、なんでもない・・・です」
「やっばアイリってよ」
「とうちゃんっ！」
なぜモリシタダイチはこちらのイケメンに怒鳴っているの？
いいけど そんなことはどーでもいいけど
イケメンのお父さんお父さんとは思えないけど と イケメンの息子
なにこの親子ーーーーっ？
え？ イケメンが私を・・・
そんな慈愛に満ちた美しい目で見られると とろけちゃうんですけどおお
「似てんなあ」
似てる？ 何に？

「な～んか似てんなあ か・・・お？」

顔？ えっ もしかしてあの絵文字の顔になってる？ 目の細い人になってる？

「じゃねえなあ」

よ・・・かった・・・

「なんか見てっただけでよ、な～んか夢見てんじゃねえかなあつつうか」

夢？

「なんかそういうカンジつつうかよ、やっぱかあちゃんに似」

「とうちゃんっ 脚の具合はどうなんだよ？」

なんでモリシタダイチはいちいちイケメンの言葉を遮るのよ？ 失礼でしょ！

「それがよ、先生がよ、すんげえ治んの早えつつってよ」

「マジ？ よかったなあとうちゃん」

「ダイチごめんなあ」

「なんで俺に謝んだよ？」

「俺がこんななっちまって、ダイチに苦勞かけちまってよお」

「苦勞なんてしてねえよ」

「それでもよお」

息子とお父さん、お父さんとは思えないんだけど、こういうふう会話するんだ

お父さん・・・とは思えないけど、モリシタダイチが息子に見える

私にはモリシタダイチはモリシタダイチなんだけど、やっぱ息子なんだなあ

ガラガラガラーーーッ

え 部屋のドアがもんのすごい音で開いて

立っているのは

誰？ この美の塊は 誰っ？

女神

世界中の美を集結させたみたいなの
美しすぎてもはや吹き飛ばされそうな威圧感を感じる
迫力あり過ぎて もはや人間の領域を超えた
女神？ ちょっとヴィランズ入った女神？

「カズオ！」

え？

「ねーちゃん！」

ねえちゃん？ イケメンのお姉さん？

「かあちゃん！」

え？ モリシタダイチのお母さん？

えっと、イケメンのお姉さんでモリシタダイチのお母さん？

え・・・っと えっと？

「なにやってんのよ！」

イケメンの傍に女神が

「脚立から落ちたって、脚悪いのになにやってんのよ!？」

すっごい迫力で怒る顔も 美

「ねーちゃんが来てくれるなんてよお」

イケメンがトロンとした目で女神を見ている

「来てくれるなんてよじゃないわよ！ ビックリしたんだから！ 入院したって、

もーっ なにやってんのよーっ！」

「かあちゃん仕事は？」

「大山たちにまかせて飛んできたわよ！ 仕事どころじゃないでしょ！」

えっと・・・ ニューヨークにいたのよね？

「ヒトミから聞いたときには心臓止まるかと思ったんだから！」

「ねえちゃん知らせちゃったの？」

「知らせちゃったじゃないわよ、だいたいダイチが」

あ モリシタダイチの方を向いた

「ダイチ、いたの？」

エーっっっっっ 気がついてなかったのおおおお？

「ダイチ！ あんたなんで知らせてこなかったのよっ？」

「どうちゃんが、かあちゃん心配すっから知らせんなっつって」

「知・ら・せ・な・さ・いっ！」
お・・・おお・・・ 迫力が・・・ 美の怖い顔って迫力度がレベチ・・・
「私がつ 出張から帰ってきてから知ったらどうなったと思う？」
モリシタダイチが固まっている・・・！
「それくらい考えなさいっ！」
女神の逆鱗 て言葉が浮かんじやった
「ダイチんこと叱んねえでやってくんねえかなあ」
ハァァ 一言で空気が柔らかか〜くなるうう
「俺が悪りいんだよ」
あなたは悪くないですうう・・・って言いたくなっちゃううう
「まあ、ちょっと、パンパンになっちゃってて、言い過ぎたけど」
女神のお怒りすら静めてしまううう
「ミサト、心配かけてごめんなあ」
ミサト？ さっきはねえちゃんて・・・
「なに謝ってんのよ、バカ」
あれ？ 女神の声にチラッと女が・・・

イケメンの枕元に座る女神
愛してるーって目で見つめあうイケメンと女神
なにこの構図？ 絵になり過ぎてるんだけど
ファッション誌？ 私、今、ファッション誌見てる？
そして傍らに引きで見るとメチャイケメンのモリシタダイチ・・・
美が大渋滞して車酔いしそうなんだけどおおお
なにこの一家？ 美過ぎて 逆に怖い

あっ 女神がこっちを向いた
「ダイチのカノジョ？」
メッチャカジュアルな言い方・・・も するんだ
「ミサト、アイリちゃんつってダイチの」
「かあちゃんっ あのさっ」
だからさあ どうしてモリシタダイチはイケメンの言葉を遮るかなあっ
「俺が今働かせてもらってっこの お嬢さん」
「そうなの？」
「ああ」
「ウッソー」
「ウ、ウソじゃねえよ」
「だってダイチの好みドストライクじゃない！」
何ノハナシ？？
「かあちゃん、あのさ、えっと、あのさ」
「カノジョでしょ！ ダイチがカノジョ連れてくるなんて初めてよね」

なにか・・・勘違いをされていらっしやるような・・・
「俺もよお、前っからダイチが言ってたアイリつつう」
「どうちゃん！」
何が繰り広げられているの？ 森下家って・・・わかんない
あ 女神が視線を・・・
「このアレンジメントは・・・ダイチではない絶対ダイチではない」
見ただけでわかるんだ・・・すごすぎる
「誰？」
「上原のお嬢さん が 選んで買ってくれた」
上原のお嬢さん？
「あなたが？」
「は、はい」
人見知りだからではなく 迫力に声が出ない
「これはどういうコンセプトで？」
なんか なんていうか 審査？
「俺がっ 上原のお嬢さんにつ」
モリシタダイチ・・・
「どうちゃんがペランダでミント作ってるつつたら、他には何作ってるって聞いて、
そんで入院したら家が恋しいんじゃねえかって、そんで入院したら緑が恋しいつつう
か
なんかそういうカンジで選んでくれた」
ザックリ過ぎるけど代弁ありがとうございます 声が出なくて
「そう」
なんかなんていうの、プレゼン？ 聞いている重役的な？ わかんないけど
「あなた」
あ こっち見た
「アレンジメントひとつに、それだけの洞察力とイメージ力が使えるなんて」
そんな大したことじゃないんですけどおお
「すごいわ、かなりセンスがある」
褒められてるんだろうけど目力すぎて怒られてるみたいな気になるうう
「かあちゃん、俺と上原のお嬢さんはそろそろ帰っから」
「あんたも？ なぜ？」
「今日は半ドン」
「あ、そう」
なんか・・・ホッとした
「しっかり稼げよ若造！」
男前な女神・・・
「おいっす」
「上原のお嬢さん」
「あ、は、はい」

「今度うちに遊びにいらっしゃい」
ニッコリ笑う顔が・・・ 美し過ぎて発光してる！
「ありがとうございます」
「お嬢さん」
あ イケメン
「あんがとなあ」
「いいえええ」
とろける

病院の外に出て・・・

なんか・・・ 今までみたことのない美の集結を見てしまった的な・・・

「愛里」

愛里？

「なんだよ？　なんでジッと見てんだよ？」

「さっきは上原のお嬢さんと呼んでましたよね」

「あれは、なんつうか、とうちゃんとかあちゃんが、勘違いっつうか、なんつうか」

なんつうかばかり言ってるけど

「私、ひとりで帰れるので、あなたはお父さんとお母さんのところに戻ってください」

「仕事あっから」

「なんの？」

「愛りん家に決まってるだろ」

「今日は日曜日ですよ！」

「半ドンだっつったろ」

「ハンドンてなんですか？」

「半日休みもらって半日働くことだよ」

エーーーーーッ

「いいですから！　今日は休んでください！　お母さんも帰っていらしたし」

「かあちゃんととうちゃんは二人っきりになりてえんだよ」

「だからって働かなくても」

「そういう契約だから」

契約契約って

「私は、同じ高校生なのに、あなたが日曜日働かなきゃいけないって、悲しいです」

「え？」

「せめて日曜日くらいふつうの高校生でいて欲しいです」

「つか、ふつうの高校生だけど」

ああ言えばこう言うっ

モリシタダイチが働いてるけど働かない状況にする？　どうやって？

私が寝る？　寝てる間に掃除とかしちゃうよ

「なに睨んでんだよ」

笑ってるけど

笑えない状況にしてやるっ

あ！ これだ！

「あなたは今からまた私のところで働くってことですね」

「そう言ってんじゃん」

「だったら、私がやって欲しいことをしてくれるってことですか」

「なんでもするよ、愛里がしてほしいっつうなら、なんでもすっから」

「私、カフェに行きたいです」

「カフェ？」

「今日は買い物の後カフェに行こうと思ってたのにあなたに連れられてここに来ただけ
どっ」

「あ、はい」

「カフェにつきあってください」

なにその顔？

「上原のお嬢さんっ は、カフェに行きたいんですっ」

なによ、フッて笑って フッてなによ？

「わかりました、上原のお嬢さん」

わかればいいのよ

「わかったよ、愛里、カフェ行こう」

モリシタダイチが私の手を握った

それは 人見知りで怖がってるからじゃなくて

なんでだ？

カフェ

どうしようかなあ
ここのストロベリータルト
すっごく美味しいんだけど すっごく大きいんだよねえ
前に来たときはミカリンたちとシェアしたけど
一人じゃ絶対食べきれないよなあ
「すんげえ顔でメニュー睨んでんじゃん」
笑うけどっ
「ここのストロベリータルト、すごく美味しいんですよ」
「頼めばいいじゃん」
「でもすごく大きくて一人じゃ食べきれないから」
「残ったら俺が食ってやるよ」
「でも甘いものは苦手って」
「チョコだけだっつったろ」
そうだった チョコは見飽きた 家の中チョコだらけ
あのイケメンと女神と引きで見るとチョーイケメンのモリシタダイチ
うん 今ならメチャ納得する

私の前にアイスティー モリシタダイチの前にはアイスコーヒー
このテーブルの光景を撮ったら「穏やかな日曜日のカフェ」だけど
なんか突然異次元に飛ばされて戻ってきましたみたいな気分
「愛里、今日はありがとな」
「あ、いえ、お父さんにお会いできてよかったです」
メッチャ目の保養したよお
「あなたのお父さんとあなたの声ってそっくりですね」
「みんなそう言う」
「最初どっちがどっちかわからなかったくらい」
「かあちゃんもそう言ってさ、とうちゃんに話してるつもりで俺だったみてえな？
紛らわしい！ って怒んだよ、んなこと言われてもなあ」
モリシタダイチのおかあさんを見たから光景が見えるみたいで
「顔も、鼻のここから下がそっくりで、目はお母さん・・・かなあ」
「らしい」
「だから引きで見ると」

「引き？」

「あ、いえ、なんでもありません」

引きで見るとチョーイケメンとか、それじゃ近くならどうなんだよって話に
近くだと・・・ あ、チョーイケメンだ！ イケメンだよ！

でもねえ、こうやって話しているとモリシタダイチはモリシタダイチなんだよなあ
「なんだよ？」

「え？」

「なんで俺の顔ジッと見てんだよ」

「え、あの、親子だなあって」

「ぜってえ違うこと考えてただろ」

笑っているが 当たっている

あ そういえば・・・

「あの、聞いてもいいですか？」

「いいよ」

「お母さんが入っていらしたとき、お父さんがねえちゃんって言って、
お父さんのお姉さんなのかなあって思ったら、あなたがかあちゃんて」

「あれはどうちゃんのクセ」

「クセ？」

「どうちゃんさ、かあちゃんに出会ってからずっと名前呼ばせてもらえなくてさ」
名前を呼ばせてもらえなかった？

「私の 名前は 呼ばないで！ って言われたつってさ」

お おお・・・ あの目力で・・・ それは呼べないかも

「ねえちゃんのこと妊娠して結婚するかってときに名前呼んでいいって言われて」
モリシタダイチのお姉さんを妊娠して結婚決めたとき？

それじゃ、つき合ってたときは名前呼ばせてもらえなかったってこと？

「そんなときには逆に照れくさくてなかなか呼べなかったつってた」

「それまではなんて呼んでたんですか？」

「ねーちゃん」

あ・・・ だから

「そんで今でもクセで呼んじまうらしい」

えっと

「お母さんの名前は・・・」

「ミサト」

だよね そう呼んでたよ

「そこに“ね”の要素がないんですけど」

「要素？」

「ミサトだったらみーちゃんとかになりますよね」

「ああ！ それはなんつうか、どうちゃんホームレスだったからさ」

え???

「ホームレス？」

「かあちゃんが勢いで連れてきちゃったんだってさ」
笑ってるけど
「ホームレスって・・・ 勢いで連れてきちゃえるものなんですか？」
「かあちゃんならやるかなあって」
「ああ・・・ たしかに」
妙に納得する
ホームレスを勢いで連れてきちゃうという理解不能なことも
かあちゃんならという一言で納得させてしまう女神！
「ホームレスみてえな人って、女の人のこと、ねえちゃんって呼ぶじゃん」
「はあ」
呼ばれたことはないけど
「最初はそういうねえちゃんだったらしいだったらしいけど、
名前呼ぶなって言われたから、そのままねえちゃん、ねーちゃんて」
つまり・・・ 愛称 みたいな？
「それでもさ、心ん中では名前呼んでたんだってさ」
「心の中？」
「やっぱ好きな人の名前呼びてえじゃん」
「はあ」
「とうちゃんからその話聞いたとき、俺は心に硬く誓ったもんな」
なにその顔 子どもみたいで笑える
「俺はどうちゃんの轍はぜってえ踏まねえって」
てつ？
「好きな人ができたら速攻で名前呼ぶぞって」
「速攻？」
「私の 名前は 呼ばないで！ なんつうヒマねえくらい速攻で」
「だったら、あなたの好きな人にコクッたら速攻で名前呼ぶってことですか？」
「どうだろうなあ、できかなあ、できっと思うか 愛里」
「そうですねえ、あなたなら・・・ できると思います」
なに？ 目が半笑いな？ 私の言葉は信用できない？
「だって、あなたが最初に来た日、なんだっけ、ケジメ？ それで呼び名とか言って、
速攻で私の名前呼んだでしょ？ 正直速攻過ぎて早やって思いましたけど、
でも今ではあなたに愛里って呼ばれるのに慣れちゃったっていうか」
「マジ？」
「はい、あ！ お父さんの病室で私のこと上原のお嬢さんて言ったでしょ？」
「あれは、まあ、なんつうか」
「ずっと愛里って呼んでるのに、突然上原のお嬢さんて、なにそれ？ でした」
ちょっと口とがらせて笑ってる
「だから、あなたの好きな人も名前で呼んでも大丈夫です」
「そっか」
まあ私は経験ないからスッカスカのアドバイスだけど

「愛里は好きな人できたら名前と呼ぶんか」
「そういう経験ないからわかんないけど・・・」
そうだなあ
「呼べないかも」
「なんで？」
「だって、たとえばその人が上原だとして、最初に上原さんて呼んで、
そしたら、つきあうことになっても・・・ そのまま上原さんかも」
「名前呼びたくねえの？」
「呼びたくないっていうより、切り替えどきがわからないっていうか」
「切り替えどきってなんだよ」
「だってずっと上原さんて呼んでたのに、突然下の名前とか、ムリ
もしかしたら・・・ 結婚しても上原さんて呼んじゃいそう」
「なんだよそれ」
笑ってるけどさ
「あなたは、あなたの好きな人があなたの名前呼べなかったら悲しいですよね」
「呼んで欲しいけど、それでも、そばにいれりゃいいっつうか」
「そばにいれればいい？」
「名前呼ばれなくても、そばにただで、なんっつうか、しあわせっつうか」
そばにただでしあわせ・・・
なんか なんだかわかんないけど 衝撃受けたみたいな・・・
なに？ なんか胸のところが・・・ 落ち着かないっていうか・・・
え なにこれ・・・
「あの・・・」
「なに？」
「え、いえ、あの」
なにこれ・・・ やだ・・・
「愛里？」
なんだろう これ・・・
「どした？」
心配そうなモリシタダイチの顔を見ると・・・
なんか・・・ なんだろう・・・ 苦しくなって・・・
「ストロベリータルト遅い！」
それしか言えなくて
「それかよ」
笑ってるけど
私は笑えなくて
でもこのヘンな感覚を感じたくなくて
氷が溶けてきてるアイスティー飲んだ

ストロベリータルト

ああ ストロベリータルト！

イチゴが丸ごとゴロゴロほぼイチゴみたいに積まれてて美味しそう！

でも・・・ これ、切るのむずかしいんだよね

「どうやって半分に切りましょうか、ナイフとか持ってきてもらいます？」

「愛里が食って、いらなくなったらあとは俺食うから」

「それはイヤです、なんか子どもが食べ残したのをお母さんが食べるみたいで」

「なんだよそれ」

笑ってるけど

「あの、一緒に食べますか？」

「あ？」

「前に友だちと来たときは一緒にフォークで好きに取ってシェアしてたんです」

え、なに？ その顔の意味がわからない

「あ！ 男子ってそういうのイヤですか？」

「イヤとかじゃねえけど、愛里はいいんか？」

「はい、あなたがイヤじゃなければ」

「俺はいいけどさ」

「だったらそうしましょう」

えっと、それじゃ

「いきますよ、これは戦いですからね」

「戦い？」

「自分の好きなところを相手に取られないようにゲットする戦いです」

「なんだよそれ」

笑ってるけど女子にとっては真剣勝負なんだから

「それじゃ、はじめ！」

このいちばん大きなイチゴを

「あ！」

取られたああ

勝利に満ち溢れた顔してこっち見てる

じゃあ次はこのイチゴかな

「愛里」

「はい？」

グッて

「なんれ・・・」

やっぱ美味しいい

「なんでいつも隙をついて私の口に突っ込むの？」

「そんじゃ、俺が、愛里、あ〜んつつたら食う？」

「それは・・・ ちょっと恥ずかしいけど」

「な！」

な！ じゃないよもう

「あ、美味え」

「でしょでしょ！」

口にイチゴ入れたまま頷いてる

「イチゴがいーっばいで、この生クリームが軽くてイチゴの味を引き立てるっていうか」

「ほんじゃイチゴ買って食べばいんじゃね？」

それは たしかに そうかもしれないけど

「たまにはこういう形でイチゴ食べたいですから」

「そっか」

笑ってるけど

いーじゃん！ 実質だけとかさあ、そうじゃなくてもさあ

「愛里はイチゴ好きなんだな」

「好きです、フルーツの中でいちばん好きです、あとはメロンとか桃かなあ

酸っぱいのが嫌いで、オレンジとかグレープフルーツとか、

最悪なのがキウイで、ママが毎朝ヨーグルト・・・ あれ？」

朝食のヨーグルト・・・ 私、最近・・・ 全部食べてる

ママは「ビタミン摂らなきゃね」って、グレープフルーツやキウイ入れて、

いつも除けてイチゴだけ食べて、それがあたりまえになっちゃってて

最初の朝は・・・ ママの朝食を忠実に再現してたけど

次の朝からは・・・ イチゴしか入ってない！ どうして？ どうしてわかったの？

「どうしてわかったんですか？」

「何をだよ」

笑ってるけど

「私が朝のフルーツのヨーグルトがけのイチゴ以外は嫌いだって」

「残してたからさ、嫌れえなんかなあと思って」

たった一回で？

「なんだよその顔？」

「怖いっ」

「なにが」

笑ってるけど

「あなたのその神がかった洞察力が！」

「誰でもわかんだろ、メッチャ端に寄せててさ」

そうだけど寄せてるけど

「愛里の方がすげえじゃん」
「何がですか」
「とうちゃんの見舞いの花」
「あれはあなたがいっぱいヒントをくれたからです」
「俺のかあちゃん褒めてたじゃん」
「はあ」
褒めていたみたいではあるけど・・・ あの目力がすご過ぎて・・・
「かあちゃん本気じゃねえとぜってえ褒めねえからさ」
「本気？」
「そう思ってねえのに褒めたら相手のためになんねえつつって」
なんか 人材教育的な？
「かあちゃん、うちん中でもカチッと仕事モードのスイッチ入るときがあっさ」
「仕事モードのスイッチ？」
「俺、一年んときバイトしてえつつったんだよ」
高校入るとバイトする子けっこういるよね
「ふつうさ、まあ俺はふつうがよくわかんねえんだけどさ、友だちの話聞いてっさ、
バイトしてえつつうと、あ、そうとか、そんなんしてるヒマあったら勉強しろとかさ」
ママだったら絶対ダメっていうだろうなあ 私はバイトなんてできないけど
「かあちゃんに言ったらさ、バイトをする目的と理由を述べなさいつつさ」
就職面接？
「そんで社会勉強のためつつたら、却下！ つつたんだよ」
「きゃっ・・・か？」
「そんで、ちょっと時間置いて、自分の力で金を稼いでみてえつつたらさ、却下！」
えええええ なんだったらいいのおお？
「そんで、これはもう本当のこと言うっきゃねえなと思って、
好きな子ができて、まだコクッてねえけど、その子のために使う金は、
やっぱ自分で稼げてえつつたんだよ」
その子のために使うお金は自分で稼ぎたいって・・・ 一年のときから・・・
「そしたら了解！ つつさ」
そう思うほど好きなんだ・・・
「やっぱかあちゃんには本音しか通じねえつつうかさ」
そんなに 本気で すごく 好きなんだ
「いつ・・・ 告白するんですか？」
「え？」
「あなたの好きな人に」
なに？ なんて黙っちゃうの？ なんて私のこと見てるの？
「この仕事が終わったら」
え・・・
この仕事が・・・ 終わったら・・・
私の家の仕事が終わったら・・・

そうか・・・ そうだよな あと二週間で終わるんだもんね
そうだよな・・・ 私の世話してたら・・・ つき合う時間ないもんね
「二週間後が・・・ 待ち遠しいですか？」
「ちょい複雑かな」
私には本音は言えないよね
今 私のところで仕事してるんだもんね
「成功するといいですね」
「どうかな」
するよ そんなに好きでいてもらえるなら
「撃沈すっかもしんねえなあ」
伝わるよ その人に
「撃沈したら、俺、立ち直れねえかもしんねえなあ」
笑いながら言うけど
断られたら 立ち直れないほど 好きなんだ
なんか・・・ なんだろう・・・ なんなんだろう・・・
胸のところが・・・ 重たい・・・
「愛里、まだいっぱい残ってんぞ」
「なんか、もう、お腹いっぱい」
「そんじゃ俺全部食っちゃおうよ」
「はい」
「もう一個だけ食べよ」
モリシタダイチが フォークに刺したイチゴを私に・・・
食べたけど・・・
食べたら・・・
なんかわからないけど・・・
私 こんなことしてて いいのかな
モリシタダイチは 私とじゃなくて その好きな人と
私とは 仕事だから

モリシタダイチが「ここは俺が払う」って
私がカフェに行きたいって言ったんだから私が払いますって言ったら
「これは森下家の男の漢気だから」って
おとこぎってどういうこと？
「イチゴはさ、森下家の男の漢気つつうかさ」
ますます意味がわからないけど
「ごちそうさまでした」
「おう」
いいのかな 私にお金使っちゃって 好きな人のためにバイトしてるのに
必要経費？

そっか そうだよね このカフェもハンドンて言うから
私が行きたいって言って だからここに来て だからこれも仕事で
全部仕事で

カフェを出て 並んで歩道を歩いて
モリシタダイチがこうやって私といるのは仕事で
信号が青になって
「愛里行くぞ」
私の手を握って走る
これも 私の世話をしているだけで
私の手を握っているこの手は・・・
本当は 好きな人の手を握りたくて
だけど 仕事だから
なんか なんだか
「ちょっと」
髪の毛直すふりして手を放した

女神降臨

家に着いたら4時過ぎてた
モリシタダイチは夕食の材料を買いに行った
着替えよう

このワンピース着てよかった
雑貨ショップ覗くだけのつもりで着ただけど
なんかいろいろあって・・・
疲れた・・・ちょっと・・・横に・・・な・・・

「愛里」

ん・・・

「愛里」

モリシタ・・・ダイチ・・・の・・・声・・・

「愛里」

え あ 爆睡してた

モリシタダイチの顔がメッチャ目の前

「あ、はい」

夕食？ なに？ 頭まだボーッとしてる

「あのさ、かあちゃんから電話あってさ」

「えっ な、なんかあったんですか？」

「や、あの、ここに来てえつつうんだよ」

「ハ？」

「愛里と話がしてえつつって」

「私と？ 何の話ですか？」

「俺が聞いても上原のお嬢さんと直接話すからつつってよ」

上原のお嬢さん

「どうする？ 愛里がイヤなら俺断わっから」

「いえ、あの、いらしてくださいって伝えてください」

「マジいいんか？」

「はい」

「そんじゃ電話してくる」

モリシタダイチのお母さんが私に・・・

なんだろう

いつもよりはちょっといい普段着着て待ってたら

女神降臨

「ごめんなさいね、急で」

「え、いいえ」

「私、思いついたら速攻行動しないと気が済まないのよ」

そう言って微笑む顔が優しくて ちょっとホッとした

「かあちゃん、コーヒー？」

「あんたは家に帰りなさい」

「ハ？」 え？

「俺まだ仕事あんだよ」

「家に帰ってごはん作って」

「ハア？ 俺まだ仕事なんだよ」

「いいから」

モリシタダイチがイライラしてきて 女神は平静なまま・・・

「愛里の晩メシ作っから帰れねえよ」

「この子も連れて帰るから」

「え？」 え？

「この子の分も作って待ってなさい」

えっと・・・ どういう？

モリシタダイチがキョトンとしていて私もキョトンで

「Are you listening? 」

英語？

「聞いてっけど意味わかんねえ」

自然？ 英語入るの自然？

「かあちゃん何するつもりだよ」

女神がニーッコリ笑った・・・！

「Trust me Babyboy」

「してっけどさ」

なんだろう・・・ この母と息子の会話・・・

「それでも俺は愛里の」

「あいり！」

って言ってゆーっくりモリシタダイチの顔を見た

モリシタダイチが固まってる

「へえ、あいり！」

固まったまま動かないんだけどお

私の名前がどうかしたんですかあああ

あ 私の方向いた

「上原のお嬢さん」
「は、はい」
「あなた、あいりっていうの？」
Yes って言えばいいのかな
「はい」
「可愛い名前ね」
「あ、ありがとうございます」
「かあちゃん、俺ここにいつから」
あ ああああ 女神の目が――！
「あんたがいたらこの子が本音を言えなくなる！」
え？
「なんだよ・・・ それ」
私の本音って なに？
「私は今からこの子に提案をする、この子が気兼ねなく自分の意見を言える」
なに？ ビジネス？ なに？
「そういう場を作ってあげられないの、あんたは？」
お おおお・・・ 重役会議を見ているような気分・・・
あ モリシタダイチが口とからせて 何も言えない・・・とは！
「わかったら行きなさい」
モリシタダイチが心配そうに私を見てる
大丈夫です 大丈夫
「そんじゃ、行くけど」
「はい、ご苦労様！ あんたの今日の業務は終了！」
「なんでかあちゃんに言われねえとなんねえんだよ！」
フフンと鼻で笑う女神
「愛里、ちょっと」
こっちに来いと？ でも、あの
「行ってあげて」
「あ、はい」

玄関の前で・・・
「愛里、かあちゃんあんなんで言い方キツイけどさ」
なぜ英語が入るのか聞きたい
「冷たくはねえんだよ、みんながいいようにって考える人だからさ」
本当に trust してるんだ 信頼 これくらいはわかる
「それでも、なんかあったら、すぐ俺に連絡してくれよ、すぐ来っから」
「はい」
モリシタダイチが私の手を握った
これは・・・ どういう意味なんだろう これも・・・ 仕事？

「さよならの挨拶？」
「あ、はい」
「ガキでしょ」
「え？ だれがですか？」
「ダイチ」
「えっ いいえ全然」
「あなたの前だとかっこつけてんのよ」
フフッと笑う女神
「さっきの見たでしょ、小学生のガキが駄々こねてるみたい」
そして豪快に笑う女神
「Well... then あっ」
英語入ったああ
「ごめんなさいね、あっちから戻ってすぐは切り替えがうまくできないのよ」
あ そういうこと
「単刀直入に言うわね」
「はい」
「あなた、うちに来ない？」
「うち？」
「私の家」
「えっ えーっ？」
「これは合理的かつ利便性のある話なの」
「は・・・あ・・・」
「私の家に来た場合のあなたにとっての利便性」
なんか・・・ モリシタダイチのノートみたい
「夜は私もいるから安全性を確保できる」
「はい」
「高校生が一人でこの家にいるのは危険性が非常に高い」
「はい」
「ダイチの姉の部屋が空いているから、あなたのプライバシーは確保される」
「はい」
「そして、この家より私の家の方があなたとダイチの学校に近い」
「そうなんですか？」
「歩いて15分くらいかな」
エーっっっっ てことは モリシタダイチは遠回りしてたってこと？
「ダイチの姉もダイチもあの高校を選んだのは家からいちばん近いから」
「へ？」
「ギリギリまで寝ていたいんでしょ」
笑ってるけど
私はパパが行って欲しいっていうから必死になって勉強してやっと入れたのに
入学理由が家からいちばん近い？ なにそれえええ

「次はこちらの利便性」

「はい」

「私は家事がいっさいできないの」

「え？」

「全部カズオ、私の夫がやってくれているのよ」

そうなんだ

「でも私の夫は今は入院して家事ができない」

「はい」

「私もこっちに帰ってきたから、家事をしてもらわないと困る」

「はい」

「ダイチが朝ここに来て仕事して学校に行ってここに戻って仕事して、

家に帰ってきてまた家事をする、それはかなりの負担になる」

「そう・・・ですね」

「あなたが私の家に来たら、家事は一度で済む」

「はい」

「この家の掃除は、お母様が戻っていらっしゃる前日にダイチにやらせるから」

そこまで考えてるんだ

「料金に関しても、まあ本当はもらわなくてもいいんだけど、

それだとあなたが気兼ねするだろうから半額もしくは1/3ということで、

その辺は紹介所の所長と、お母様が戻っていらした相談するからあなたは心配しないで」

「はい」

「どうかしら？」

明解で私にわかりやすいように端的に、そして押しつけがましが全然なくて、この人は、モリシタダイチが言ってたように、みんながいいように考えてくれてるどこをどう考えても断る理由なんてないくらい私にとって理想的な話・・・

昨日までの私なら速攻で「行きます！」って言ったと思う

ううん、カフェに行く前までの私なら・・・

“名前を呼ばれなくても そばにいるだけでしあわせ”

“好きな人のために使うお金は自分で稼ぎたい”

“撃沈したら立ち直れないかも”

そこまで好きな人がいるモリシタダイチ

モリシタダイチの家に私が行ったら モリシタダイチは・・・

ちがう

モリシタダイチの家にいったら 私は・・・

「とって・・・ ありがたいですし、とって理想的なお話なんですけど」

もっと切り替えができなくなって

もっと こんななんかわからない重たい気持ちになってしまう

契約終了

「ダイチさんの家には行きません」

「そう」

「すみません」

「謝らなくていいのよ、それがあなたが出した答えなんだから」

私が出した・・・ 答え

「理由を聞いてもいいかしら」

理由・・・

「あの、母との契約は、通いで家事をしてくれるというだけで、

もともと夜は私一人ということで、ダイチさんのお家の事情が変わったら、

それは、もう、そちらの事情を優先してくださってかまわないので・・・」

「愛里さん」

「はい」

「本音を言ってくれないかな」

え・・・

女神の目は・・・ 私の心を見透かしているようで・・・

“かあちゃんには本音しか通用しねえ”

「今のは・・・ 却下ですか」

「却下？ ハハハハ」

女神が笑って そして

「そうね、却下」

なんかわかった

この人の「却下」は 本当の気持ちを言って楽にさせてくれるための言葉だ

「ダイチさんとなると・・・ 切り替えができなくなってしまって」

「切り替え？」

「仕事と・・・ 学校の」

「仕事と学校、そう」

「はい」

「それで？」

「昨日までは・・・ っていうか、カフェに行くまでは」

「カフェ？」

「今日ダイチさんのお父さんのお見舞いに行った帰りにカフェに行って」

「カフェ」

「あ、でも、それは私が行きたいって頼んだので、ダイチさんは仕事と一緒に」
「仕事と一緒にカフェ、なるほどね」
女神がうんうんみたいに頷いて
「それまではそんなこと感じたことなかったんですけど」
「そんなこと？」
「なんか・・・イヤな重たいカンジで」
「何かあったの？」
「あったっていうか・・・ダイチさんが、あっ、これはちょっと・・・」
「ダイチには言わない」
え？
「約束する」
女神の目は・・・真っ直ぐで・・・
「あなたがこれから私に話してくれることはすべてダイチには言わない」
なんかホッとして
「ダイチさんには・・・好きな人がいるんです」
「そう、それで？」
「その人は・・・名前を呼んでくれなくても、そばにいただけでしあわせで」
「そばにいただけでしあわせ」
女神が少しだけ微笑んで
「その人のために使うお金は自分で稼ぎたいって思うほどで・・・
もしその人に告白してフラレたら立ち直れないって言うくらいで・・・」
「それは誰から聞いたの？」
「ダイチさんです、カフェで聞きました」
「あなたは、ダイチが好きな人は誰なのか知ってるの？」
「知りません、でも、前からチラッとその人の話はしていました」
「たとえばどんなこと？」
「えっと・・・鈍感だって」
「鈍感」
「はい、なかなか気づいてくれないって」
「そう」
「あと、これも今日ダイチさんが言ってたんですけど、お父さんが、あ・・・」
「いいのよ、なんでも言って」
「あの、お母さんの名前をずっと呼ばせてもらえなかったって」
「ハハハハ、そんなことまで！」
「ご、ごめんなさい」
「いいのよ、言いたいことなんでも言って、その方が理解できるから」
「はい、えっと、それで、自分は好きな人ができたら速攻で名前呼ぶって決めたって」
「ハハハハ」
「あとは・・・」
「ちょっといいかな」

「はい」
「さっきダイチはあなたのこと愛里って呼んでたけど」
「はい」
「いつから愛里って呼ばれるようになったの？」
「ここに来て・・・すぐです」
「初日ってこと？」
「はい、あの、仕事と学校のケジメをつけるために呼び方を決めようって」
「ケジメ」
「ダイチさんのことはダイチって呼べて、俺は愛里って呼ぶって、それからです」
「えっとさ、ちょっと話ズレてもいいかな」
「はい」
「あなた、鈍感て言われたことない？」
「あります、ダイチさんに言われました」
「ああ、そう、ああ、なるほど」
なるほどって 何を納得したのかな？
「それで、あなたはダイチのことをダイチって呼んでるのね」
「それが・・・できなくて」
「森下くん？」
「あなたは・・・とか、あなたの・・・とか」
「あああ そう はいはい」
なんだろう 精神分析？ 今ので何かわかっちゃう？
「ダイチには好きな人がいる」
「はい」
「それと、あなたが仕事と学校との切り替えができないこととどう関係があるの？」
「ダイチさんは、この仕事が終わったら・・・好きな人に告白するそうです」
「へえ」
「それを聞いてから、ダイチさんが私にしてくれていることは全部仕事でやってるのに、
仕事だからなのに、そう思えてなかったっていうか・・・」
「たとえばどういうこと？」
「え・・・っと、あ、小さいことなんですけど、信号を渡るときに手をつないでくれて」
「信号を渡るときに手をつなぐ」
「それは私の安全を守るっていうか私の世話をするっていう仕事なのに、
それが仕事なのか何なのかわからなくて、なんか・・・」
あれ？ 女神が上向いて顔しかめて・・・ なにか考えてる
私もうまく説明できてない？
「あのさ」
「はい」
「ダイチがあなたに仕事としてやってきたこと、書き出してみようか」
「書き出す？」
「ノートか何かある？ あと赤と青のペン」

「はい」

私が思いつく限りのことを書いたノートを女神が腕組みしながら見ている
なんか・・・ レポート提出してチェックされてるみたいな気分なんだけどお
「なるほど」

何かわかった？

「ダイチが家政夫としてやるべきことは」

女神が赤いボールペンで○をつけていく

「掃除・洗濯・料理、ゴミ捨てなどの雑事、つまり家事全般」

「はい」

「家庭科のパジャマを縫うのはお母様からの要望だから仕事」

「はい・・・」

「他のこっちは」

女神が青いボールペンでグワーッって囲んで

「ダイチが個人的にやったこと」

「個人的・・・とは？」

「ダイチがやりたくてやったことであって仕事ではない」

「それは・・・ サービスということですか？」

えっ 女神が口半開きにして私を見てる

「これは・・・」

なに？ なになに？

「相当だわね」

「相当？」

「このピザ屋に行ったのは？」

「私、ミシンが怖くて使えなかったんです」

「そうなの」

「なんで怖いって聞かれて理由を言ったら、私が怖がらないように少しずつ、

ダイチさんが教えてくれて、ミシンが怖くなくなって使えるようになって」

チラッと女神を見たら優しい顔で私を見てる

「それで遅くなったので、夕食はいいですピザ食べに行きますって、

そうしたら、俺も行っていいかって、帰ってもどうせごはん作らなきゃだからって」

女神がフンッと鼻で笑った

「ヘタな言い訳」

言い訳？

「いえ、あの本当に遅くなったので夕食はいいですって言ったんです」

「あなたのことじゃないの、ごめん気にしないで」

「はあ」

「二人でピザを食べて、支払いは？」

「ダイチさんです」

「なるほどね」

「あの、私は、ミシンを教えてもらったので私が払いますって言ったんですけど、
ダイチさんが、雇われてるけどこれくらい払えるって」
「それはそうなるわよね」
「それって必要経費ってことですよ？」
「必要経費？」
「ピザも今日のカフェも、私が行きたいって言ったから」
「あなたが行きたいって言ったら、どうして必要経費になるの？」
「ダイチさんは仕事で私についてきてくれたからです」
「えーっと・・・ ピザを食べに行ったときも今日のカフェも労働時間外よね」
「ピザのときは・・・ 残業？」
え？　なんでまた口半開きになってるの？
「あの、今日のカフェも、ハンドンっていうので・・・」
「えっとさ、またちょっと話ズレてもいいかな」
「はい」
「あなたはデートしたことある？」
「ないです」
「ああああ　そう　はいはいはい」
なんでこんなこと聞くのかな？　何かの心理テスト？
「デートってね、基本、男性がご馳走してくれるのよ」
「それは知ってます」
「だったらわかるでしょ」
「何をですか？」
「このピザもカフェもデートでしょ」
「それは違います、ダイチさんには好きな人がいるんです」
「それは聞いたけどっ」
え　なんかイライラしてる？
「この situation がデートじゃなければ何っ？」
「えっと・・・ 時間外労働？」
あれ？　女神が後ろにのけぞって上見ちゃったけど？　なにになになに？
「ちょーっとダイチがかわいそうになってきたな」
かわいそう
「そうなんです、ダイチさんは仕事で私とピザ食べたりカフェに行ったのに、
私・・・　そういうの忘れちゃって、楽しくて・・・」
「楽しかった？」
「はい、だから、私の中で仕事と学校のケジメがちゃんとつけられてなくて、
ダイチさんが仕事だからとかケジメって言ってるのに・・・」
「これはダイチが悪いな」
「いえ、ダイチさんはお金をもらってるからちゃんと仕事するって」
「そういうことじゃないのよ」
私の言い方が悪いのかな

「あ！ ダイチさんは仕事だけど私の家で仕事するのは楽しいって」
「そりゃそうでしょうよ」
「あの、ダイチさんはそう言ってくれているのに、私は休みの日なのに、
同じ高校生なのに汗びっしょりになって掃除してるのが、なんか悲しくて」
「悲しい？」
「それで、パフェを作って一緒に食べれば少しは休みの日の気分になれるかなって」
「あなた、パフェを作れるの？」
「市販のものを乗っけるだけです」
「どんなパフェ？」
「えっと、ストロベリーパフェとか・・・」
「食べたい！」
「え？ 今ですか？」
「作れる？」
「はい、材料はまだあるので」
「作って」
「はい」

冷蔵庫を開けたら新しいイチゴが2パック入ってた よかった
女神にふさわしく上品で豪華にホイップクリーム絞って

女神がストロベリーパフェをジッと見ている
審査されてる気分でドッキドキするんだけど
「美しい」
ハァァ よかった
「味のコンビネーションも絶妙」
「市販のもの乗っけただけですけど」
「そこなのそこ！」
どこ？
「たとえばこのアイス、単体で食べたら、まあふつうって味でしょ」
単体で・・・ まあ、確かに
「イチゴはそのままでも美味しいけど、クリームとアイスと組み合わせることで」
えっと・・・ 私のパフェを審査してもらいに来たんだっけ？
「あなたはすごい感性を持ってるわよ」
「か・・・感性・・・」
「カズオ、私の夫に持ってきてくれたアレンジメント、あれもそう
ひとつひとつは冴えないハーブなのに、あの組み合わせによって、
小さなハーブガーデンを創りあげた」
小さなハーブガーデン！ ステキなネーミング！
「あなたは確かにダイチの気持ちには驚異的に鈍感だけど」
驚異的？ 驚異的に鈍感？

「感覚は鈍くない、むしろ・・・ What to say... Brand new！」
brand new・・・真新しい まっさらな
「そう、Brand new な感覚だから、ダイチの言葉のとーりにとらえちゃってる」
「言葉のとおり？」
「仕事 ケジメ」
だってそう言うし そうだし
「事は単純なのよ」
単純？
「ただ、あなたのその驚異的鈍感さと、ダイチのバカ加減がグッチャグチャにして」
何ノコト？
「たしかに、今、私の家に連れて来るのは得策ではないわね」
「はい・・・」
「それで、明日からどうする？ ダイチの負担が増えることは事実だけど」
明日から・・・
「あの、契約は・・・ 今日で終わりにしていいですか」
「今日？」
「ダイチさんにそんな負担はかけさせたくないです、それに・・・」
私も、ダイチさんといるともっと切り替えができなくなりそうで
これ以上は・・・
「苦しいです」
「そう、わかった」
「すみません」
「謝る必要はないのよ、あなたは言ってみれば契約者代理人なんだから」
なんのことなのか よく わからないけど
「ダイチから連絡が来るかもよ、ていうか、絶対来ると思うけど」
「ダイチさんとは・・・」
もっと苦しくなりそうで・・・
「もう連絡は取りたくないです」
「わかった、ダイチに伝えておくわ」
「はい」
「そうね、一回離れた方がいいわね」
離れる そうだよな
「あなたは、単純に素直に自分の気持ちを感じる時間が必要」
「私の・・・ 気持ち？」
「仕事とかケジメは頭から Delete して！」
消す なぜ？ わかんない
「ダイチは、あのバカは、頭冷やす時間が必要っ！」
怒ってるけど・・・？
「明日から二週間、一人で大丈夫よね？」
「はい、多分、はい」

「私は大学入ってから一人暮らしを始めて、作るのはトーストとカップメンくらい、
あとは外食やお弁当買ってきて食べてた、料理全然できないから」
そう言って笑う女神　なんか私だけじゃないんだってホッとする
「あなたは二週間だけだしね」
「はい」
「掃除や洗濯もテキト〜でいいわよ、自分が不快じゃない程度で」
テキト〜でいい！　おお！
「夜はちゃんと戸締りしてね」
「はい」
「あと、これ、私の名刺」
バッグから・・・
「行ってみれば同じ高校の父兄ってことだから、おとなが必要なときに連絡して」
「ありがとうございます」
「まあ、心細くなったら連絡して、同じ高校の父兄だからね」
「はい」
「それじゃ、またね」
「ありがとうございます」
女神が振り向いて
「愛里さん」
「はい」
「あなたは大丈夫よ」
そう言って微笑んだ
なんか・・・　涙がジワッと出てきちゃった

Better than nothing

ゆうべは携帯の電源 OFF にして寝た
LINE 来るはずなのに来るかもって思っちゃうのがイヤだったから
電源 ON にしたら やっぱり来てない
そうだよ 仕事だったんだもんね 契約終了したら 来ないよね
トースト焼いて、冷蔵庫開けてヨーグルトとイチゴ出して・・・
ヨーグルトのフタ開けて、器に移すのとか なんかもめんどくさいな
イチゴ三個だけ洗ってディップみたいにつけて
おお！ なんか自由！
そうだよ どうやって食べたってこれは私しか食べないんだから 自由！
お昼どうしようかな 購買は・・・ イヤだなあ
バス停の近くのコンビニでサンドイッチ買っていこう

生物の時間

モリシタダイチが作ってくれたノートは置いてきた
なんか・・・ 持ってる場所見られたくない
私のことなんか見てないだろうけど なんか・・・
いつか 左斜め遙か後方を意識しない日が来るのかな 来て欲しい 早く
「上原」
えっ
「はい」
「血液の色素たんぱく質は」
色素たんぱく質・・・ えっと・・・えっと・・・
「ヘモシアニン」
「上原、それはイカだ」
え？ あっ
みんな笑ってる イヤなあ 笑ってるよねきっと どうでもいいのかな
「上原」
「は、はい」
「それじゃ、なぜイカの血は青い？」
「銅が含まれているから・・・です 青いのは銅イオンの色です」
「すごいな」

これしか覚えてないんだけどお
「まあ試験には出ないけどな」
「はい・・・」
やだもう　なんでイカの血なんか・・・
あのとき　モリシタダイチが言ったから
調べちゃって
なんか・・・　イヤだ
あのときのことなんか　覚えてないよねきっと　覚えてないよ

中庭でコンビニの卵サンド
ママのと同じ卵つぶしてマヨで混ぜたやつ
まあこんなもんだよねって味
ゆうべは・・・
何も食べる気になれなくて　予習しても頭に入ってこなくて
このサンドイッチ　まずい
イチゴ持ってくればよかったかな
そうだよ　明日イチゴ持ってこよう　おお！　自由だ！

午後の授業は相変わらず頭に入らなくて　物理だから　物理だからだよ
帰りの学活終わったら速攻で教室出て　帰ってきた
鍵　閉まってる
あたりまえだよ
モリシタダイチがいないのがあたりまえ
ママがパパのところに行く数日前までは存在も知らなかったんだから
知っちゃった・・・
忘れよう　忘れる　きっと忘れるよ　いつか　できるなら今忘れたい

なんか食欲なくて　コンビニでサラダ買って来たけど　生の玉ねぎ入ってたあ
捨てよう
イチゴ食べよう

英訳の予習もしたし　シャワー浴びて　下着洗ってる
シャワー浴びたらちょっとスッキリした
NETでいいもの見つけたんだよね
たまたま出てきて　なにこれ？　って見たんだけど
服をかけたままシューッと蒸気出すだけでシワが取れちゃうアイロンみたいなもの
制服のブラウス洗ったら　それでやればよくない？
明日学校の帰りに駅ビルの中の電気屋で買ってこよう

まあね ママがブラウス4着買ったから 余裕っちゃ余裕なんだけどね
よかったよお 4着あって あわてて洗濯してとかしなくていいもん
4着買って来たときには引いたけど 今はママありがとう！
あれ？
これは・・・ パジャマ！
アーーーーーッ！ 明日家庭科だったーーーー！ 忘れてたーーーー！
てか、この手提げは モリシタダイチのなんだけど
私のは モリシタダイチが持ってるってこと？ どうしようどうしようどうしよう
連絡する？ ええええ 今はなんかムリィィ
縫わないよね 私のは もう契約終わったんだから
モリシタダイチのは？ ここにあるんだけど？ 取りに来る？ もう10時過ぎてる
よ
来ないよ どうするの？ どうするのーーーー？
先週は私のを縫って自分の縫えないで先生に叱られて・・・
モリシタダイチが家庭科落としたら・・・ 私のせい？ 私のせいじゃん
えっと、先週のは・・・ あのとき知らないうちに私が縫ってたから
ええええ あのときはモリシタダイチがいたから縫えたけど
どうしよう 縫う？ でも・・・
Better than nothing
さっきの英訳に出てた 「何もないよりはマシ」
それか？ それだ
全然縫ってないよりは・・・ マシ・・・かなあ？
あとでほどこいて自分で縫い直してくださいだよ
やる？ やるしかないよね 落としたらカンペキに私のせいだもん
なんかそんな責任取りたくないし取れない
糸はそのままだから縫えばいいだけ縫えばいいだけ
モリシタダイチが書いた線のとーーーーりに 返し縫いして線のとーーーーりに
とにかく線のとーーーーりに・・・

で き た

いいのかなあこれでいいのかなあ
わかんないけど Better than nothing だよ
たたくて手提げに入れて・・・
どーなんだろう 縫わなかった方がマシとかないよね？
今さら考えたって縫っちゃったんだから！
疲れた 寝よう

火曜日の朝って なんかユウーーーーツ
あ、そうだ、イチゴ持っていくつもりだった

あとは・・・ コンビニでシュークリーム買う？
シュークリームのクリームにイチゴつけたら 絶対美味しい！ 自由！
タッパーは・・・ あれ・・・ これって・・・
モリシタダイチが買ったお弁当箱
どうする？ ここにあっても・・・
モリシタダイチは自分が私のお弁当を作って入れるために買ったんだよ
もう作らないからこれはもう・・・
パジャマの手提げの底に入れて 返そう

教室に入ったら 私の机に私のパジャマの手提げ袋が下がってた
そうだよね 近いんだもんね 私より先に来れるよね
なんか・・・ ポイッとカンジでここにぶら下がってるカンジがして・・・
いいけど それでも全然いいけど
モリシタダイチのはロッカーに入れてきちゃった どうする？
取りに行って渡す？ ムリ もうみんな来てるし
あ 家庭科室に先に入ってモリシタダイチの席の足元に置いておこう

ダッシュで家庭科室入って速攻モリシタダイチの席の足元に手提げ袋置いた！
「上原さん」
え？ あ 川口くん
「早いね」
「あ、ちょっと、早く着いちゃった」
川口くんて 同じテーブルだったの？
「上原さんのちょっと見せてよ」
「え？ あ・・・ 今日はちょっと・・・」
もう叱られる覚悟はできてる てか、最悪落ちる覚悟も
「ちょっとだけ」
「え、あの」
ちょ 勝手に え？
「やっぱり上原さん上手だね」
縫ってある・・・
「この前も褒められてたよね」
なんで？
まだ契約期間のときに縫っていた？ そうか そうだよ

先生が処刑に回っている
私は・・・ もう処刑されないことはわかっている 来た
「上原さんは・・・ うん、相変わらずきれいに縫えてますよ」
これは・・・ モリシタダイチが縫ったもので・・・ 私ではなくて・・・
「森下くん」

いよいよだあああ

「何してるの 出さない」

「あいっす あっ？」

え？ あってなに？ そんなにひどい？

「森下くん、これは・・・」

あああ 縫わない方がマシの方だったかあああ

「こんな正確に縫えるなんて」

え？

「ヘリと縫い目の間隔がまったく同じ！」

え？

「どこもゆがみもないし、すごいわ」

え・・・

「みなさん！ 森下くんの縫い目を見て参考にしないで！」

ここまで縫える人はなかなかいませんよ！ 高校生でもやればできるのよ！」

私・・・

縫えたんだ・・・ ちゃんと・・・

私のミシン・・・ 褒められた・・・

ミシンで褒められたんだよ？ ミシン怖かったのに 縫えないと思ってたのに

泣きそう ていうか もう必死で涙こらえてる

モリシタダイチが褒められているときに 私が泣いたら・・・ へんだよ

嬉しい・・・ 私 できるんだ ミシン

モリシタダイチが教えてくれて 教えてくれたから・・・

私が正確に縫えたのは モリシタダイチが書いた線が正確だったから

私はその線のとーりに縫っただけ

でも 褒められた よかった

午後の英訳

これが終わったら今日の授業はお終い！

先生が一人ずつあてて読ませて訳させて

この先生ランダムにあてるから気を抜けないんだよ

えっと次の文は・・・

“Although what he has done was not perfect, it was better than nothing”

彼がやったことは完璧ではないが、やらないよりはマシだった

確かに やらないよりマシだった てか 褒められた

「次は森下」

あ・・・

「“What she has done was perfect, it was really perfect”」

え？ あれ？ どこ？ そんな文ないけど

「森下！ 何やってるんだ、そんな文はどこにもないだろ！」

だよね

「あ、ちょい間違えました、Although he has done was...」

え・・・ さっきの英語・・・

彼女がやったことは・・・ 完璧だった 本当に完璧だった・・・

どういう・・・こと

違うよね 違うよ 間違えたって言ったから

違うよ だって

契約はもう終了したんだから

ついでのお弁当

今日が燃えるゴミの日だって朝気がついた
冷蔵庫に貼ってあるゴミの日のチラシ？ ポスター？
私の中ではほぼ冷蔵庫の模様くらいにしか思ってなかったやつ
あれ見たら 水曜日は燃えるゴミって今日じゃーん！
掃除はさあ クイックルワイパーでテキト〜に？ やっちゃってるけど
ゴミはさあ、溜まるのはイヤだもん
大変だったよ 分別ってなにっ？ あそこまでやる必要がある？ あるんだろうけど
必死になって分別してゴミ置き場に持って行って・・・ってやってたら
もう少しでバスに乗り遅れるところだったよ
てことで コンビニでお昼買えなかった
購入しかないよね いるかな 週二でバイトって言ってたから いないかも

ちょっと遠くから購買見たら いない よかった
てか 誰もいないけど？ まあいいや
棚の中の・・・ どれにしようかな・・・ ミックスサンド これだ
「すみませーん」

あっ

目の前に ヌッと

いい 関係ない ミックスサンドをケースの上に置いて

えっ ドンッて なにこれ？

パジャマの生地・・・ ヒモがピンク・・・ なにこれ？ お弁当入れ？

どうでもいい てか なんかわかんないからさっさと買ってここから逃げよう

ミックスサンドをつかもうとしたその瞬間

バーンて ミックスサンド手で払いのけたんだけど？

ミックスサンド飛んでっちゃったんだけど？

どーゆーこと????

なんか・・・ わかんないけど・・・ 怖いから・・・ 逃げよう！

「上原愛里！」

ヤ メ テー~~~~！

みんな見てるもうなんなのになんなの？ 返事しないとなんかあったと思われるよね

でも振り向きたくはないっ

「なんですか」

メッチャ冷静な声 出た よかった
「上原愛里のっ 元家政夫がっ 上原愛里にっ 弁当作ったって 持ってきた」
なにどうということ？ 意味わかんない
みんな見てるけど 見てるけど
怖いから 逃げよう！ 走る！
なんかもうホラー映画より怖いんだけどおお！
へ
アーーーーーツ 手を つかまれ た
う 動けない 恐怖で 動けない
「愛里！」
なにになになにもうなにーーーーっ
「これ！」
グイッて
「弁当！」
怖いからゆーっくりモリシタダイチの顔見たら・・・
メッチャ怖い顔してるんだけどおおおお
「な・・・なんですか？」
「弁当作ってきた」
「ハ？」
「愛里に弁当作ってきた」
「なぜ？」
「愛里に食って欲しいから」
「なぜ？」
「愛里にっ 俺が作った弁当食って欲しいから！」
なんでキレ気味？
えーーーーっと
「あのお・・・ 契約 終了しましたよね？」
「これは、だから、これは、仕事じゃねえよ」
「仕事じゃないのになぜ私にお弁当作るんですか？」
「食って欲しいから」
なんかもう・・・ 怖いいいい
「あ・・・ あなたが、私に、お弁当を、作る、義務は、ないです」
「義務じゃねえよ」
「だったら何なんですか？」
「愛里に弁当作りたかっただけっつうか」
意味がわからないい
「もしかしたら、あなたの中に私の世話をしなければいけないっていう」
「世話じゃねえよ！」
だったらなんなのよーーーー！
「あ・・・」

あ そうだ
「あなたには、好きな人がいますよね？」
「いる」
「だったら、その人にお弁当作ってあげた方が」
「作ってんじゃない！」
つまりは・・・ なに？ こういうこと？
「ついでってことですか？」
「あ？」
「その人のお弁当作るついでに私のを作ったってことですか？」
「ちげえよ」
「ついででお弁当作られても嬉しくないし作ってもらう義理もないです！」
「ついでじゃねえつつってんだろ！」
「だからもうあなたとの契約は終了したんですからっ」
「そういうんじゃないって」
「仕事モードのスイッチ切ってください！」
「そんなスイッチ入れてねえよ」
「だったらこれはなに？」
「弁当」
あ———— 頭おかしくなりそう
「けっこうです」
「ほい」
いや渡せってことじゃないのよ
「いません」
「なんで」
「食べたくありません」
「購買のミックスサンドよか俺の弁当の方がぜってえ美味えと思うけど」
ハア？
「愛里、俺の弁当美味えつつってくれたじゃん」
それは・・・
「はい、契約していたときは、美味しく、いただきました」
「そんじゃ、ほれ」
グイッて！
なんなの？ バカにしてる？
「意味がわからない！」
「だから愛里に弁当食って欲しいつつってんだろ」
「その意味がわからない！」
「なんて言えばわかんだよっ！」
なんでイライラした声で言われなきゃいけないの？ 私が何したっていうの？
なんかもう好きな人に作ったついでにお弁当作られたってなんかもう
「あなたのお弁当なんか二度と食べたくない！」

「え・・・」

「手を放してください」

やっと放したけど

跡つくくらいつかむかなあ

「失礼します」

なんなの？ 契約切られたから怒ってる？ それで嫌がらせ？

なんでここまでされなきゃいけないの？

もう私にかまわないでよ！

好きな人に作ったついでとか バカにしてる

左斜め遙か後方でどんな顔してるのか知りたくもないけど

もう契約終了したでしょ いつまで仕事モードなのよ

それでも・・・ 仕事のときは・・・ 私だけのためにお弁当作ってくれてた

すごく美味しくて 頭にきたときもあったけど 美味しかったから全部食べちゃって

仕事のときは私だけのためだった

海苔でゴメンて、コメノだったけど、あれだって私だけのためだった

なのに・・・やだ・・・涙・・・授業中なのに・・・止まらない

「先生、目がゴミが入ったので保健室行ってきます」

トイレで泣いて 泣きやんだけど 途中で入るのがイヤだったから

中休みになって戻ってきた

「上原さん」

あ、川口くん

「はい？」

「目、大丈夫？」

「うん、もう大丈夫」

「真っ赤になってるよ」

「すごく痛かったから」

「大変だったね」

「うん、でももう大丈夫」

「あのさ、先週言いそびれたんだけど」

先週？ なんだっけ？

「全米が泣いたっていう大ヒット上映中の映画があるんだよ」

全米が・・・

「もしよかったら今度の土曜日に行かない？」

「川口くん、私、全米が泣いたって映画苦手なの」

「え？」

「なぜかわからないけど苦手なの」

「そうか、だったら別な映画探しておくよ、ホラー映画は？」

「ホラーはダメ絶対ダメ」

さっきもリアルホラーだったし

「それじゃ、何かおもしろそうなのがあったら誘うね」

「ありがとう」

全米が泣いたで泣けない私が・・・なんでさっきはあんなに泣いたんだろう

予行練習

今日はコンビニでちゃんとおにぎり買ってきた
昨日の夕食はスーパーで買ったお弁当チンして食べたんだけど
スーパー行ったのにイチゴ買うの忘れたあああ
朝もヨーグルトだけ イチゴ食べたいいい

「ラブリーーン」

あ、ミカリンとアミリン

「ねえねえ、今メッチャ噂になってるんだけど」

「なに？」

「上原愛里が購買で万引きしようとしてモリシタダイチに捕まったって」

ハァァァァァ？

「してないし！ 万引きなんてしてないから！」

「だよねえ、おかしいと思った」

「私がナッチから聞いたのはちょっと違うんだけど」

なんかもう・・・ あんなことするからーっ

「モリシタダイチが灰色の物体を上原愛里に渡そうとして逃げられたって」

たしかに灰色だったけど・・・

「なにそれえええ時限爆弾？」

時限爆弾の方がまだマシだった てかモリシタダイチと共に爆発して欲しかったっ

「本当はどうなの？」

えっと・・・

「なんかね、間違えたみたい」

「間違えた？」

「私じゃない人に渡すものを私に渡そうとするから違いますって」

「逃げたの？」

「逃げるっていうか、ただ立ち去ったっていうか」

「モリシタダイチが追いかけたって言ってたけど」

「追いかけたっていうより・・・ 確かめたってカンジ？ 本当ですか？ 的なの？」

「な～んだあ、噂ってアテにならないよねえ」

「ならないならない、全然違う」

あーーもーー 腹立つ

「あ！ 話変わるんだけど」

あれから・・・

家に帰ってきて大泣きしてピザ何種類も取って食べまくったら気持ち悪くなって
吐いちゃって 寝てた

今日も 学校休んじやった

バカみたい こんなことで学校休むって

でもさあ なんかもう全身の力抜けちゃって なーんにもする気になれないんだもん

学校行く気力も授業受ける気力も スーパーに行く気力もないくらい

お腹空いたけど 何が食べたいのかもわかんない

ピンポーン

なに？ 受信料のなんとか？ 勧誘？ 無視する？

いちおうモニター見てみよう

え？ なんで？

女神！

「突然来ちゃってごめんなさいね」

「え、いえ」

「これ」

女神がなんか高級そうな紙袋見せて

「私のお気に入りの懐石料理のお店の松花堂弁当、食べない？」

「食べますうう！」

「こっちは、私のお気に入りのパティスリーのストロベリームース」

「食べますうう」

はあああ 久しぶりにまともなごはん食べた気がするううう

ストロベリームースも品がある味で美味しい

あれ？ 今日・・・ 平日だよ

「あの、会社は・・・」

「有給取ってカズオの、私の夫のところに行く予定だから」

「あ、そうなんですか」

「その前にちょっと顔見に寄っただけ」

「ああ、そうな・・・」

あれ？ なんで私が学校休んでるって知ってるのかな？

「ダイチからね、電話があったの」

え

「あなたが今日学校に来てないって」

え・・・

「具合が悪いのかもしれないし、まあ、自分のせいかもしれないって」

それは・・・

「昨日うちに帰ったら、ダイチが頬っぺたに真っ赤な紅葉つけてて笑っちゃった！」

あ・・・

「何があったの？」

「え・・・」

モリシタダイチのお母さんにモリシタダイチのことを言うのはどうなんだろう

でも このままじゃ 吐き出さないと苦しくて

全部話した お弁当のことも予行練習のことも全部

「なるほど！」

全部話したら なんか楽になってる

「そういえば・・・が多すぎた」

「そういえば？」

「昨日・・・おととい・・・その前の夜だから火曜日の夜、ダイチがミシン使ってたの

チラッと見たらパジャマの生地だったから家庭科の宿題してるのかなと思ったんだけど、

その前の晩もパジャマ縫ってたのよ、あの子いつもギリギリに宿題するから」

えっと・・・ 火曜日の前の晩て・・・ 家庭科の前日

あれは・・・ 前の日に縫ったってこと？ 契約切れてるのに？

「あれはお弁当入れ縫ってたのね」

灰色の物体って言われてますけど・・・

「それとね、水曜日の朝、お弁当作ってたのよ」

あ・・・ ついでのお弁当・・・

「私はダイチのお弁当は食べないから」

「食べないんですか？」

「私はカズオのじゃなきゃダメなの、ダイチのはな～んか物足りないのよね」

あれで物足りない イケメンが作るお弁当って 五つ星のお店並み？

「私はいらぬわよって言ったら、自分の分だって」

本当は好きな人とついでに私のお弁当です

「あの子、自分の分だけじゃめんどくさいって作らないから」

そうなんだ でも好きな人とついでに私のお弁当は作るんだ へえ

「どうしちゃったのかなとは思ったんだけど、私も出かける時間だったからね」

「そう・・・ですか」

「そういうことか」

そういうことです、ついでのお弁当渡されて 私は万引き犯扱いされました

「おとといの晩に、かあちゃん、俺はド直球でいくことにした！ って」

ド直球投げる前に私で練習しようとしてましたっ

「何の話？ って思ったけど、それはあの真っ赤な紅葉か」

「でも、あれは、私を練習台に使おうして、それで」
「練習台ではないと思うわよ」
「だったら何ですか？」
なに？　なんでジッと見てるの？
「なににせよ、あなたのお友だちの前で言ったっていうのはねえ」
「ですよね？」
「ダイチも緊張でパンパンだったんだと思うけど」
「だから私を練習台に使お」
「いくらパンパンでもねえ、お友だちの前って、それはないわねえ」
「ですよねですよね？」
「バカ超えて脳みそあるのあんた!?!って言いたいわね」
「そうですよねえ！」
ああ　わかってくれる！　さすが女神！
「まあバカは放っときましょう！」
「はい・・・」
放っておきたい　てかもう消えて欲しい
「ところで、なんか・・・　部屋が、この前来たときよりかなり・・・ね」
「はあ」
「ちょっとバスルーム見せてもらっていいかな」
「え、あ、はい」
バスルームを点検する女神
「昔の私のバスルーム見てるみたいで懐かしい」
と笑う女神
そして・・・
「あのね、新しい家政婦雇いましょう」
「あ、新しい？」
「こういうことは合理的に考えた方がいいのよ」
「合理的に・・・」
「どうせあと1週間とちょっとだから、私が雇う」
「えっ？　いえ、そこまでしていただかな」
「あなたのためじゃないわよ」
私のためではない？
「誰のため・・・ですか？」
「私のため」
女神のため???
「気になっちゃうとスカッと解決しないと気が済まないの」
とはいえ・・・
「新しい家政婦が来ればあなただって家事から解放されるでしょ？」
「はあ」
「ゴミの分別できる？」

「あ、え、なんとか・・・」
「私、あれ大嫌いなの、めんどくさいわよねえ」
「はい、とーっても」
「カズオがいるようになってからは一回もやってない、分別からの解放！」
分別からの解放　されたい！
「どうかしら？」
「よろしく申し上げます」
「了解」
出た　了解
「ただね、急に依頼するからどんな家政婦が来るかわからないけど」
「どんな？」
「たとえば、ほら、私がちょっとハマったドラマ、おかつぱのカツラかぶった
メイクの濃いゴツツイ男の・・・ あー一名前出てこない！」
「ミタゾノ？」
「それ！　もしあんなのでも、家事さえきちんとしてくれればいい、そうよね？」
「はい」
「そして雇い主は私」
「はい、ありがとうございます」
「私が雇い主だから、あなたがクビ切ったりはできないわよ」
「はい」
「ただし、仕事の手を抜いたらすぐに連絡して、速攻クビにする」
「はい」
「それじゃ、明日からでいいかしら？」
「あ、明日？」
「私、思い立ったら速攻で行動しないと気が済まないのよ」
「あ、はい」
メチャ速攻
「それじゃ、私は行くわね」
「あの、いろいろありがとうございます」
「いいのよ好きでやってるだけよ」
「でも、私なんかこんな親切にしてくださって」
「私、親切じゃないわよ、気に入った人にしか手は貸さない」
「気に入った人？」
「あなたのこと気に入ってるから」
おおおお
「女神様ー！」
「なにそれ！」

帰っていく後ろ姿に後光が見える！

新しい家政婦

ハァァァァ よく寝た！

昨日女神が一瞬で問題解決してくれたからホッとして熟睡できたあ

キッチンの方から音がする もう来てるのか

どんな人かな？ メリー・ポピンズは望まない

汗ダッラッダラかいた巨漢のおばちゃんでもいい

最悪ミタゾノでもいい

私をゴミ分別から解放してくれて掃除洗濯してくれてまともな食事作ってくれるなら

見た目なんかどーーでもいい！

キッチンのドア開けて

「おはようございます」

え ん え・・・・・・・・っ

こ れ は な に

「森下美里からっ 派遣されたっ 森下大一ですっ」

え・・・・・・・・っ

Uターンして部屋に走って

女神の名刺 これだ

女神に電話 出て出て出て出て出て出てー！

「はい、森下です」

「あ、う、う、上原、愛里です」

「あら、愛里さん、おはよう」

「あの、あの、あの」

「家政夫はもう来たでしょ？」

「あれ、あれは、あれは、モリシタダイチなんですけど」

「そうよ」

「そうよって、モリシタダイチですよ？ ダイチさん、あなたの息子ですっ」

「私が雇ったのよ」

「ななななんでモリシタダイチが」

「急だったから空いてるのは森下大一だけだったの」

「だけだったって、あの、でも、モリシタダイチは」

「愛里さん、仕事よ」

「ハ？」

「森下大一は仕事であなたのところに来てるだけ」

「だけって、でも」

「森下大ーが仕事の手を抜いたら連絡ちょうだい、速攻クビにするから」

仕事の手を・・・ 抜く わけ なーーーい！

「あれはあなたの家政夫なんだから、やって欲しいことはなんでも頼みなさい」

「エーーーーーー」

「信号渡るときに手をつないでもらったっていいのよ、仕事なんだから」

「それは ええええええ」

「それじゃ、私は夫のリハビリにつき合うから、またね」

メッチャ軽やかな声で電話切られた

なんだろうなあ

女神だと思ってたんだけど ヴィランズなのかなあ

なにかなあ 思考能力が なんていうかなあ

何を考えればいいのかも考えられないほど考えられない

どうしよう キッチン行く？ 行ったらいるよ？

なんでいるのーーーーっ？

女神が雇ったから・・・

なんで受けた？ 私のことド直球の練習台にしようとしたほど あ コクッた？

コクッて 成功して スッキリして 清々しい気分になったから？

そうか そうかも そうだよ

昨日私が学校休んでるときにコクッたんだよ

だからなんていうの？ 心に余裕ができて？ 練習台にしようとした私の心配？

だから女神が来た？ それか

だったら私も家政婦さんとして？ やって欲しいこと遠慮なく言える うん

仕事だもん 仕事でいるんだから 女神も仕事だって言ってたよ

うん それだ

キッチンに行ったら モリシタダイチ、じゃなくて家政婦、家政夫？ さんが

何か作ってる あ メチャいい匂い

遠慮なく遠慮なく

「お腹が空きました」

「今作ってっから すぐできっから」

あ そう

この卵サンド 見ただけでわかる 絶対美味しい

ほら美味しい

卵サントはこれだよねえ

美味しくて泣きそう 泣かないけど

どうする？ 出かける？ どこに？ カフェ？ もうカフェみたいな卵サンド食べ

たよ

あ ミカリンが見せてくれたワンピースのショップ！

駅の近くにあったよね あそこに行く？

でもねえ ああいうところに一人で行ってもつまらないんだよねえ

誰か行って これどう？ とか こっちは？ とかさ

でも実物見たいよなあ 見たいけど一人じゃなあ

あ 家政婦じゃなくて家政夫

ついてきてもらう？ 仕事だから

そうだよ 女神が言ってたよ やって欲しいことなんでも頼みなさいって

だよ ね そうだよ 仕事なんだから

「あの」

「なに」

「出かけたいんですけど」

「行ってらっしゃい」

行ってらっしゃいじゃないのよ

「一緒に出かけたいんですけどっ」

「俺と？」

他に誰がいるのよ？

「そうです」

「お、おう」

女の子の服しか置いていないショップ

あのワンピースはどこかなあ あ！ あった！

やっぱり可愛い！ え こっちのも可愛いんだけどおお

どうしよう えええ迷ううう どっちがいいかなあ

あ 聞く？ 家政夫に 仕事なんだから

「こっちとこっち、どっちが似合うと思いますか」

「へ？ お、俺に聞いている？」

他に誰に聞くのよっ

「どっち？」

「んっと・・・ どっちも可愛い」

ったく！ それじゃ決められないから聞いているの！

「どっちが私に似合うと思いますか？」

「え、どっちも似合う」

なんて言えばいいのかなあっ

「あなたならっ どっちのを着て欲しいと思いますかっ？」

「俺？」

「あなたです」

「俺は・・・ こっちの白い方」

なるほど

だよね 画像で見たときはピンク可愛いと思ったけど たしかに白の方がいいかも

「わかりました」

これにしよう セールになってるしい ヤッター

「これ、お願いします」

「プレゼントですか」

「い」「はいっ」

ハ？ なに言ってるの？ 私が着るんだっつうの

「プレ・・・ゼントでよろしいですか？」

ほら、店員さんも

「はいっ」

ハァアアア？ 私が自分で着るものをラッピングしてもらったって

「プレゼント用にお包みしますか？」

「いいえ」「はいっ」

だからさあっ

「プレゼント用をお願いしますっ」

なんなんだろう？ もうどうでもいいけど

「お会計は6千580円になります」

「はい」「はいっ」

じゃなくて これ私が買うんだけど？

まあいい、一万円札さようなら でもあのワンピースなら成仏しがいが

え ちょ 待って

なんでこの人が出してるの？ 私のだってば！

どうする？

「あの、あとで清算します」

「清算？」

「お金返します」

「いらねえよ」

ハ？

「プレゼントだったじゃん」

わけがわからないんだけどおおお？

あ 必要経費？ あとで請求するってこと？

だったら うん

「ありがとうございます〜す」

結局は私が・・・っていうか、ママが払うからね

なんだろう 仕事って割り切ったら メッチャ楽なんだけど！

学校での呼び名

夕食はハンバーグ！

モリシタダイチも一緒に食べてる

これは以前の契約のときに私がそうしてって言ったから

「どうしたらこんなにフワッフワにできるんですか？」

「とうちゃんから教わったとおりに作ってっだけ」

「へえ」

「こねるときに」

「あ、製作工程の話はいいです、私は聞いてもわかんないし作らないので」

笑ってるよ

「つまり、このハンバーグは森下家伝統の味ってことですよね」

「伝統じゃねえよ、とうちゃんに教えてもらったただけだから」

「あなたが伝統にしていけばいいじゃないですか」

「へ？」

「あなたが将来息子に教えていって、その息子がそのまた息子に教えれば」

「なんで息子限定なんだよ」

笑ってるけどさ

「なんか伝統って父から息子ってイメージがあるから」

「俺の息子？」

「そうです」

「そっか」

なんか嬉しそうな顔してる 私はこのハンバーグと再会できて嬉しいよ！

フライパンを洗ってる私の家政夫モリシタダイチ

「なに見てんだよ」

「見てるっていうか、ちょっと考えてて」

「何を？」

「学校ではどうしたらいいのかなって」

「どうしたらって何を？」

「あなたと私は学校ではほとんど口きかないし、きくとすると、ああいう過激な」

「過激」

噴き出してるけどさ 私はまじめに考えてるの！

「もっと自然な方がいいんじゃないかなあって」

「自然？」

「ここではこんなに話してるのに、学校では知らない人みたいな？
そういう極端さがあなたに奇妙な行動をさせてしまうのかなって」

「奇妙？」

「購買で！ 突然ミックスサンドパーンてやって」

「あ・・・」

「あのときのこと、なんて言われてるか知ってますか？」

「なに？」

「上原愛里が購買で万引きして森下大一が捕まえたって！」

「あ？」

「もうひとつは森下大一が灰色の物体を上原愛里に渡そうとして上原愛里が逃げた、
時限爆弾じゃないか？ とか」

「マジかよ」

笑ってる場合ではないのよ

「だから、学校でもここと同じ・・・ まあ、もっと自然に話をした方がいいかなって」

「俺はいいけどさ、愛里はいいの？」

「私が提案したんですけど？」

「俺、今、学校でなんて言われてっか知ってる？」

「なんですか？」

「上原愛里にコクッてビンタ食らった森下大一」

「エーーーーーッ？」

「そんなんで俺と話せっか？」

「あなたが私を予行練習に使おうとするからーーーーっ」

「予行練習じゃねえよ！」

「だったら何ですか？」

「え、あ・・・それは、あ！ 上原愛里に報告があるって」

「報告？」

「そう言おうと思ったら、愛里の友だちがいたからちょい緊張しちまったっつうか」

「エーーーーーッ？」

そういえば・・・ 女神もダイチが緊張してとか言ってた・・・！

「私、ひっぱたいちゃったじゃないですか！」

「まあそれは、まあ、全然いいんだけどさ」

なんだそうだったのおお？

どうしよう あ！

「私、女の連絡網で流します、本当の事情と私が勘違いしてひっぱたいちゃったって」

「んなことしないでいいよ」

「でも、あなたの汚名が・・・」

「汚名！」

笑ってていいの？ 私だったら永遠に学校行けないけど

「なんつうか、まあ、愛里が俺と自然に話してくれたら、まあ」
「あ！　　ですね、自然に話をしていれば、あれ？　あの噂は違うかもって」
「ああ、うん、まあ」
「それじゃ・・・　呼び名はどうします？」
「呼び名？」
「学校でお互いを呼ぶときです」
「今までどおりでいいんじゃないの？」
「あなたが私を呼ぶときは上原愛里ってフルネームで、メッチャヘンなんですけど」
「ヘン？」
「でも・・・　上原さんって呼ばれてもなんかぎこちないっていうか
　　私も森下くんとか言ったこともないし・・・」
「だよ・・・な」
「もう・・・　愛里でいいです」
「へ？」
「その方が自然だから今も自然だし、私もあなたから愛里って呼ばれるの慣れちゃっ
　　たし」
「マジ・・・　愛里でいいの？」
「はい、私はあなたを・・・えっと・・・」
　　上も下も呼んだことなかったー！
「あのお・・・　名前呼べないかもお」
「いいよ、名前呼ばなくても、いつつもみてえに、あなたわあとかでさ」
「なにその、あなたわあって、そんな言い方はしないでしょ？」
「俺は愛里にあなたって呼ばれんの慣れた」
「そうですか、それじゃ月曜日からはそういうことで」
「おいっス」

「そんじゃ俺そろそろ帰っから」
「はい、明日はお休みですよ」
「半ドン」
あ・・・　ハンドン　そうだった
「愛里は明日なんか予定あんの？」
「ないです、川口くんが映画観ないかって言ったのは今日だったし」
「川口に誘われたんか？」
「誘われたっていうか、全米が泣いたを観ないかって言われて、
　　私はどういうわけか全米が泣いたは苦手だって言ったら、ホラーは？　って、
　　ホラーは絶対ムリって言ったら、何かおもしろい映画探しておくねって」
え　なに？　　なんで口とがらせてるの？
「川口くんて、映画オタクなのかなあ」
「オタク？」
「よくいるじゃないですか、私の推しを見てくだ〜いみたいいな

自分が好きな映画を推したくてしょうがない的な？」
え？　なんでポカン？　いたのよ、中学のときそういうオタクな子が！
「まあ・・・かもな」
「今度また映画推されたらどうしよう」
「断れ！」
「へ？」
そんな・・・強く・・・
「ハッキリ断った方が川口も・・・なんつうか、いいんじゃないね」
あ、そうか　そうだよな
「はい、他の映画オタクを探してくださいって言います」
「そこまで言わなくてもいいとは思う」
「あ、そう・・・ですか」
「えっと、そんじゃ俺帰る」
「はい」
「また・・・明日」
「はい」
よかった　全部仕事だと思ふとこんなに楽なんだ！

シャワー浴びて下着洗って乾燥してる
浴室きれいになってたあ！
シャワーヘッドもピカピカで鏡に着いたボティシャンプーの跡もきれいになってて
私もいちおうザッとシャワーで流してたけどね
家政夫さんがいるって最高！
ピコン
え？　森下大一？
『愛里』
『はい』送信
ピコン
『明日とうちゃんの病院行くんだけど』
そうか、日曜日だもんね
ピコン
『愛里も一緒に来てくれないかな』
なんで？
ピコン
『とうちゃんとか見舞いに来るのはかあちゃんと俺だけで』
ピコン
『先週愛里が行ってくれたらメチャ嬉しそうだったから』
そうか・・・　そうだよな　お見舞いに来る人が少ないと淋しいよね
『行きます』送信

ピコン

『マジ?』

『マジ』送信

ピコン

『ありがとう』

ありがとうって 本当にお父さんのこと思ってるんだね

『行く前に花を買いたいです』送信

ピコン

『とうちゃん喜ぶ』

ピコン

『そんじゃ明日愛里んところに10時に行く』

『わかりました』送信

ピコン

『愛里 おやすみ』

なんだろう なんか・・・ 愛里おやすみが・・・ すごく懐かしくて

『おやすみなさい』送信

あれ? ちょっと待って

『私がひっばたいちゃったときの報告って何ですか?』送信

ピコン

『忘れた』

忘れたー? その程度だったの? ひっばたいちゃったじゃん

『ひっばたいてごめんなさい』送信

ピコン

『愛里のピンタは』

ピコン

『痛くないw』

女神が紅葉の葉っぱって言ってたけど 痛くない?

『もうひっばたかれるような誤解される言動は慎んでください』送信

『』

土下座! ハハハハ

『おやすみなさい』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

この1週間の騒動はなんだったの? だよ

またもお見舞い

昨日買った白のワンピース 可愛い！ やっぱ可愛い！
上着は・・・ 薄いピンクのカーデ？ 甘すぎるな こっちは？
ジーンズのショート丈のジャケット おおおお！ よくない？ メチャよくない？
襟元がちょっと淋しいなあ ネックレス？ ん・・・っと ない どれも合わない
中学のときに買ったのばっかだから子どもっぽいんだよなあ
帰りにアクセ買いに行こうかな
「愛里」
あ 来た
「は～い」
え これは・・・
私とまったく同じ色のジーンズジャケットに白のTシャツ、下はジーパンだけど
モリシタダイチも私のことジッと見てるけど・・・
ある意味 丸被り
「あなたのその服は・・・ 誰がコーディネートしたんですか？」
「今日愛里も連れてくつつたら、かあちゃんがこれ着ろつつて」
「やっぱり！」
「やっぱりってなんだよ？」
「あなたにはそのコーデはできない、そのセンスの良さはあなたにはムリ」
「なんだよそれ？ 俺けっこうセンスあんだけど」
「あなたが排水管の掃除してたときの恰好！」
「あれは作業用だからさ」
「横に線が入った緑のジャージ」
「あれは中学んときの」
「上は煤けた赤い胸のところにヘンな模様がついたTシャツ！」
「だからあれは作業用だつうの」
「今日あれを着てきたら 私 5m は離れて歩きました」
情けな～い顔で笑って
「これ着てきてよかったっすよ」
「よかったです」
さあ！ まずはフラワーショップ！

ハァァァ 視界いっぱい広がる花と緑！ アドレナリン？ 出まくる
あれ？ これって・・・ イチゴの造花

「あの、今日はお父さんメインっていうより私の好みで選んでいいですか？」

「愛里にまかせっから、俺はセンスねえんだろ？」

「ないですね」

笑ってるけど 私の意識はもう花に行っちゃってる

このイチゴの造花を・・・ コデマリ？ ちょっと違う これ！ ガーベラ！

白いガーベラの中にいくつかりばめて・・・

可愛い！ メッチャ可愛い！

「これを、こういうカンジでまとめて花瓶に入れればいいだけにしてください」

本当はね、本物のイチゴがいいんだろうけど、すぐシナッてしちゃうからね

「3,580 円になります」

モリシタダイチがそばに・・・

「ここは私の領域です！ 入ってこないで！」

「なんだよそれ」

笑ってなさい ブーケができあがったら笑えなくなるから

できた！

「見て！ ストロベリーパフェみたいでしょ？」

「すげえ」

パシャッ

「今 写真撮りました？」

「撮った」

「もっと近くで撮らないと！ ブーケにもっと寄って」

「愛里がそれ持ってっところ、なんつうか、似合っつから」

「なんで私まで？」

「記録用」

「何の記録ですか？」

「またいつクビにされっかわかんねえからさあ」

なにそのイヤミな言い方！

「私はクビにしたままです、あなたは今、森下美里さんに雇われてるんです」

「かあちゃんに感謝っスよ」

「そうですよ、でなかったら、あなた今失業中でしたよ」

「失業中って」

笑ってるけどさ

「俺、高校生なんスけどね」

そうだった

電車の中 隣りに座っているモリシタダイチは・・・ あ 居眠りしてる

パシャッ

「あ、え」
眠そうに目をこすってる
「今さ、俺の写真撮らなかった？」
「撮りました」
「寝てっとこ撮んなよ」
笑ってるけど
「これは報告用ですから」
「誰に報告すんだよ」
「あなたの雇い主に、私を守ることを忘れて居眠りしてますって」
笑ってる
「俺、また失業すんじゃない」
「しますね」
なんでそんなに笑う？
「愛里さ、なんかちょっと変わったっつうか」
「変わった？」
「なんつうか、前はチョコッと壁があったっつうか」
「だから言ったじゃないですか！ 私は人見知りだって」
「俺にも？」
「まあ、特に最初は・・・ だんだん慣れてはきましたけど・・・」
「マジか」
「今は慣れましたから、あなたに」
「マジ？」
「はい、もういるのがあたりまえっていうか」
「え」
「空気みたいな？」
「俺、存在感メッチャ薄いじゃん」
「空気ないと 死にますよおおお 私たち」
怖〜いカンジで言ってやった
「そっか」
あれ？ 酸素って
「O \square ？」
「酸素？」
「それじゃ・・・ O \square は？」
「オゾン」
「なんかもうおんなじみたいなのばっかで覚えられな〜い」
「メッチャ・・・」
「メッチャなんですか？」
「可愛いっス」
「可愛いとか言われても化学の成績あがらないですけどね」
なんで手をたたいて笑う？

「愛里」
ン・・・ あ 寝てた
「そろそろ着くよ」
「あ、はい」
ン？
「私が寝てた写真 撮りましたか？」
「撮ってねえよ」
「私の目を見て言ってください！」
「え、撮って ねえけど」
「絶対撮った！ 目が泳いでたもん！」
「ほれ、着いた着いた」
もーっ ごまかして！ まあいいけど

「ダイチ！ 来てくれたんかよ」
「どうちゃん、キブス取れたんだって？」
私はまだ入り口に立っている 人見知りだからじゃなくて
この まったく同じ声の二人の会話を聞くのが好きで
「愛里！」と手招きするモリシタダイチ
「こんにちは」
「お嬢さん！」
相変わらずのイケメン！
「どうちゃん、これ、愛里から」
「あ、イチゴ」
「ああ、イチゴ」
「そっかぁ」
イケメンが愛しそうな目でアレンジメントを見てくれる！
「お嬢さん、あんがとな」
あ そうか この人が・・・
ン？ て顔で私を見ているこの人が・・・
あれを・・・
「愛里？ どした？」
「え・・・ あの・・・ 言ってもいいですか？」
「なに」
「この方が森下家伝統のハンバーグの創始者なんだなって」
え モリシタダイチ ベッドに顔うずめて笑ってるんだけど 事実でしょ？
「お嬢さんハンバーグ好きなんか？」
「はい、ダイチさんが作ってくれるハンバーグがフワッフワで、
お父様から教わったって、あの伝統の味、大好きです」

「マジ？」
照れてる顔もステキ
「あら、愛里さん」
おお、女神！
相変わらず入ってくるだけで部屋中が光り輝くオーラ！
「今日のコーデ、いいわね」
「ありがとうございます！」
自信作です！
「愛里さん、ちょっと」
女神が私を入口の方に呼んで、小声で
「どう、新しい家政夫は？」
「顧客満足度 NO.1 です」
「ハッハッハ それはよかったわ」
「なんかもう全部仕事だと思えば楽で楽で」
「そう」
「このワンピースも昨日ダイチさんがプレゼントだってお金払ったんですけど」
「あら、そう、とっても似合ってるわよ」
「はい、あの、そういうのも経費で落ちますよね？」
「経費？」
「このワンピースのお金とか」
「ああ・・・ まあ、それは私が雇い主だからまかせて」
「はい！」
「あなたは、ダイチがご馳走してくれたり何か買ってくれたら喜ばしいだけ」
「はい！」
なんかもう
「全部仕事だと思えば好きなこと言えて好きにいろいろ頼めちゃってます」
「よかったわ、本当によかった」
「女神様、ありがとうございます！」
「だから、なにそれ ハハハハ」
「あ、見てください」
さっき撮った写真
「モリシタダイチ、私を守るという仕事の中に電車の中で居眠りの証拠写真です」
「あらあ、これは問題ねえ」
女神が大きな声で
「愛里さんを守らないで居眠りって、クビ切っちゃおうかしら」
モリシタダイチがキョトンとした顔で
「か、かあちゃん、チコッとだけだって、それを愛里がさ」
フツと鼻で笑う女神 この笑い方がちょっとヴィランズ入ってるけどステキ
「しっかり働けよ！ 若造！」
「おいっす」

「なんか・・・」

あ イケメンが声を発した

「夢みてえだなあ」

そう言って 本当に夢を見ているような顔になってる

「俺なんかんどこによお」

俺なんか？ いえいえ、あなたはチョーイケメンで天才ですよ

「ミサトがいてくれてよお、ダイチもいてくれて」

あ 私を見た

「ダイチのカノジョまでいてくれんなんてよお、夢みてえだなあ」

そこは誤解してるけど浸っている最中だからスルーしておこう

「またとうちゃんの夢みてえが始まったよ」

そう言って笑うモリシタダイチ

「いいのよ、一生夢見させてあげるんだから」

女神はそう言ってイケメンを愛しそうな目で見てる

「かもしんねえなあ、夢かもしんねえなあ、そんでもいいなあ」

そう言って夢を見ているような目で愛しように女神を見つめるイケメン

なんか・・・ 愛が部屋中にあふれて・・・ 泣きそう

感動したまま病室を出た

「あの、なんか、ごめんな」

「何がですか？」

「とうちゃん、愛里のこと俺のカノジョだって思い込んでるっつうか」

「そんなことはどーでもいいんです」

「え？」

「あのときは私も一瞬あれ？ って思いましたけど、あのままお父さんを、
なんていうか、あの愛でいっぱいの中の中にいさせてあげたかったっていうか、
あ、ちがう、私が、お父さんのあの愛がいーっばいの夢の中にいたくて、
お父さんがあの言葉で私を入れてくれたってカンジで・・・」

あ・・・涙・・・

「あの言葉で、私もあの愛がいっぱいの・・・中に・・・いられて・・・

あ、これ・・・悲しくて泣いてるとかじゃなくて、大丈夫です・・・

すごく・・・ 嬉しかった」

「そっか」

「あなたのお父さんとお母さん、すごいですね、なんかこう、魂同士がギュッと、

あ、ダメだ、これ以上なんか言うと声出して泣きそう」

「そっか」

モリシタダイチの“そっか”が少し鼻声で

モリシタダイチも感動してるのかなって

「やっぱ愛里だな」

え？

「やっぱ愛里だ」

なんのことなのか全然わかんないけど

鼻水止まらないから モリシタダイチの顔見れなかった

指輪

私の家がある駅に着いた

「あなたは先に帰っててください」

「愛里どっか行くんか？」

「アクセ見に行きます」

「あくせ？ あくせってなんだよ」

これだから男子って

「アクセサリー、指輪とかネックレスとか」

「ああ！ そんな俺も行く」

「なぜ？」

「愛里を守る し・ご・と」

あ そっか

「それじゃ行きましょう」

う————ん

これは・・・ 可愛いけど、なんか違うんだよなあ

こっちも形はいいけど、色がなんか違う

なんていうのかなあ シンプルなんだけどパッとそこに目がいくみたいなの？

あ、こっちのピンキーリング可愛い

艶消しのシルバーの中に小さなサファイア、ガラスだけど、可愛い

千円？ 安い つけてみる？ あ 可愛い でもなあ ピンキーリングつける？

つけない きっとつけない

「出ましょう」

「え？ 買わねえの？」

「はい、出ましょう」

「おいっす」

どうしようかなあ このまま帰る？ せっかく出てきたし

「カフェ行きたいです」

「おう」

この前のカフェはなんかイヤだったから 今日はべつのカフェ

なんか最近カフェ巡りできてる
ミカリンたちとはあちこち行ったんだけど あれ？
私 まだ友だち一人もできてない！ いいのかなあ でもべつに困ってないしねえ
「愛里？」
「はい？」
「なんか黙ってっから」
「私・・・ まだクラスで友だち誰もいないんですけど」
「あ？」
「お昼も一人で食べてるし、でもべつに淋しいわけではないんですけど
休みの日にどこかに・・・って、あ！ あなたとあちこち行ってますよね」
「ああ、まあ」
「だったらいっかあ」
「なんだよそれ」
「あなたは友だちとどこかに行ったりしないんですか？」
「あんまねえな」
「友だちいないんですか？」
「いるっちゃいるけど、休みの日の一緒にとか、ねえな」
「それじゃお休みの日は何してるんですか？」
「まあ、仕事ねえときは家でゴロゴロしてるっつうか」
「エーー つまんない」
「つまんねえって、そんなもんじゃねえの？」
「そんなもんなんですか」
「それでも最近はお愛里といれっから」
「え？」
「あ、なんつうか、あ、雑貨の店とかさ、服とか、さっきのアク、アクセとかさ」
「ああ！ そうですよ、男子が一人で行ったら引かれますよね」
「あ、ああ、なんつうか、新しい体験つうか」
「私も男子とああいうお店入るの初めてです」
「マジ？」
「前に友だちが言ってたんですけど、カレシとああいうお店に入ると、
つまんなそうな顔されるから焦ってゆっくり見れないって」
「そっか」
「でも、あなたと行くとそんなことないからすごく楽しいです」
「マジ？」
「はい」
「愛里が行きてえところには俺はどっこまでもついていきますから」
「はい！」
仕事最高！
「なんであの店でなんも買わなかったの？」
「アクセの店？」

「女の子ってああいうとこ行ったら必ずなんか買うのかなあって思ってたからさ」
「まあ、せっかく来たんだからって買う人もいるかもだけど・・・
これは私の体験なんですけど、まあこれでいっかなあって買ったものって、
結局そんなにつけないんです」
「へえ」
「一目見て、これ！ 絶対これ！ これしかない！ って思ったのはけっこう長く使う」
「一目見て？」
「そうです、言ってみれば、一目惚れ」
「一目惚れ」
「そういう感覚って、言葉ではうまく説明できないけどメッチャ大事っていうか」
「マジそれ！」
「ですよ！ マジそれですよ！」
わかってもらえるなんて感動！
「あのさ、女の子って、指輪、好きなんかな」
「指輪？ 好きですね」
あのピンキーリングのデザインでふつうのがあったら買ったのになあ
ピンキーリングはしないからなあ
「たとえばさ、たとえば、愛里が、指輪もらったら、嬉しいんかな」
指輪をもらう・・・
「そこが問題なんです」
「問題？」
「ほら、よく動画で流れてくるでしょ？ パカってパカって開けるやつ」
「バカッ？」
「えっと、プロポーズ！」
「あ・・・ああ」
「動画だとみんな喜んでるけど、本当はどうなのかなあって」
「あ？」
「だって、たとえば、男の人が100万円で買った指輪だとして、
パカって見せられた瞬間に、ウワッ ダッサ！ って思っちゃったらどうしようって」
ポカン？ 意味がわからない？
「だって、100万円ですよ？ 相手は100万円もかけてくれたのに、
デザインダサって思っちゃったら、申し訳ないっていうか」
え？ まだポカン？
「だからあ、私に100万円もかけないで！ って思っちゃう」
なんでますますポカン？
「なんかその、100万円分の反応ができる自信がない」
「はあ」
「なんか100万円とか重たすぎてムリ」
え なに？ 笑いこらえてる？ なんで？
「そんじゃ、愛里は」

なんで笑いこらえながらしゃべろうとしてるのよ？

「婚約指輪はいらねえっつうこと？」

「婚約指輪とか遠い先のことだからあんまりピンとこないけど」

「けっこうリアルに考えてっけど」

笑う？

「それじゃ、たとえばあなたが私に 100 万円の指輪を贈ったとしますよねっ」

「あ、はい」

「私が、エーッ ダッサ！ って言ったらどうします？」

「笑う」

「笑ってる場合じゃないでしょ！ 100 万円ですよ？」

「まあ・・・ 100 万の指輪贈れるようにがんばっけど」

「頑張るとかそういうことじゃなくて！」

なんて言えばわかるかなあっ

「それじゃ、あなたが贈って私が受け取ったとします」

「あ、はい」

「その指輪を排水溝の中に落っことしちゃったら？」

「排水管外して見つける」

ああ・・・ ママの指輪見つけたもんね

「でも、何回も落っことしちゃったら？」

「何回でも見つける」

え しぶとい

「それじゃ、家の中のどこかにはあると思うけど、失くしちゃったら？」

「見かかるまで探す」

「あなたって・・・ けっこう忍耐強いんですね」

「俺も最近、俺ってけっこう忍耐強えんだなって思ってる」

「ですね」

「ああ」

「まあそれなら・・・」

あれ？ 何の話だっけ？

「こうすりゃいいんじゃないかねえの？」

なに？

「愛里に指輪贈るときは愛里に選ばせる」

「あ！ それだ！」

「な！」

「でもそれだと、パカッとしたとき私はその中身を知っているということですよ」

「まあそれは・・・ そうだけど」

「サプライズ感はないですよ？」

「どっちか取るっきゃねえんじゃないかねえの？」

「どっちか？」

「サプライズ感か好きなデザインか」

「そっかあ」
どっち？ どっちだろう・・・ どっち？ ええええ
「なんか・・・ めんどくさいんで、どっちもいらなかなあって」
「ハ？」
「なんかもうフツツに言ってくれるだけでいっかなあって」
なにその・・・
「笑いこらえようと必死になって眉間にシワ寄せるのやめてください！」
くちびるプルプルさせてるんだけど？
「そんじゃ・・・」
笑いこらえながら必死にしゃべろうとするな！
「まあ、たとえば、たとえば俺が、結婚してくださいつつたら」
笑いながら言う話題かなあ
「そんだけでいいつつうこと？」
「まあそうですねえ、100万円分の反応する自信ないし、失くしちゃうかもだし」
え・・・ 私って・・・
「なんか・・・ 私って、つまらない女ですね」
なんでのけぞって爆笑するの？
「それじゃあっ ちょっと笑ってないで聞いて！」
涙流して笑う？
「それじゃ、あなたはどっちにするんですか？」
「どっち・・・って・・・」
声かすれるほど笑う？
「サプライズかカノジョの好きなデザインか！ どっち？」
「俺は相手がして欲しいことすっけど」
「サプライズして欲しいって言ったら？」
なに？ なんでハ？ みたいな目で見てるの？
「なんつうかさ、サプライズって、なんかわかんじゃん」
「わかる・・・とは？」
「あ、やるなつつうかさ」
「やるな・・・とは？」
「なんつうか・・・ これはコクられんなつとかさ」
「わかるものなんですか？」
「わかっだろ、呼び出されたらさ」
おお・・・ 経験者は語る
「わかっても行くんですか？」
「いちおう行くけど」
「それで、つき合うこともあるってこと？」
「ねえよ」
「エーッ つき合わないのに呼び出されたら行くの？」
「ちゃんと断んなきゃ悪りいじゃん」

「まあそれは・・・そうですけど」
「俺さ、とうちゃんとかあちゃん見て育ってっからさ」
あのお父さんとお母さんの あの愛いっぱい空気の中にずっと・・・ いいなあ
「命賭けて惚れた人じゃねえと、つき合う気になんねえっつか」
だよね あの愛いっぱい空気
「命賭けて惚れたらさ」
なんかすごい目でこっち見るけど
「俺はぜってえあきらめねえ」
「そう・・・ですか」
「ぜってえあきらめねえから」
私に宣言されても
「わかりました、あきらめないでください」
って言うしかないじゃん
「おう」
命かけて惚れた人・・・
「そうですね、あなたのお父さんとお母さん見てたら・・・」
あ・・・ また泣きそう
「命賭けて愛されたくになります」
「おう」
「あの愛いっぱい空気の中にずっといたいです」
「マジ？」
「はい」
「そっか」
「帰りましょう」
「おう」

あたりまえのようにモリシタダイチが払ってくれて
「ごちそうさまでした」
「おう」
ちょっと照れたみみたいな顔して
通りを歩いて 信号が青に変わったら
「愛里、行くぞ」
私の手を握って
私もな～んにも考えないで握り返して
手を握ったまま家まで帰ってきた

なんか なんだろう しあわせってカンジ

ドライカレー

夕食は・・・

ガパオライス？ 香りは・・・ キーマカレー？

「これは・・・ なんですか？」

「ドライカレー」

ドライカレー？

あ・・・

「美味しい」

「マジ？」

「これもお父さんからの伝統の味ですか？」

「これは俺」

「えっ モリシダイチオリジナル？」

「なんだよそれ」

オリジナルでこんな美味しいものを作れちゃうんだ

「前に古本買いに行って、近くに古いサテンがあってさ」

「サテン？」

「喫茶店」

喫茶店で今も存在してるんだ

「そこで食ったら美味かったから、こんなかなって作って」

一度食べただけの味を、こんなかなで再現？

「そっからたまに作っけど」

「あなたのお嫁さんになる人って」

「えっ」

「かなり高度な料理の腕前を持ってないとなれませんね」

「そんな俺が作りゃいいんじゃない？」

「でも、お嫁さんの手料理を食べたいとか思いませんか？」

「うちはとうちゃんが作ってて、かあちゃん一回も料理したことねえからさ」

一回もない？

「逆にお嫁さんの手料理っつうのが想像できねえ」

お嫁さんの手料理というのが想像できない？

「それじゃ、私みたいななーんにもできない人でもいいってこと？」

え？ 黙っちゃった？ さすがに私レベルはムリ？ レベルゼロはムリか

「それは、あの、俺は、そんなん、なんつうか」

さすがにレベルゼロはムリって言えないよね、レベルゼロ目の前にしてさ
「あ、えっと、こ、これさ」
話題変えようとしてる 言ってくれていいんだけどねレベルゼロの自覚あるから
「弁当に入れても美味めえんだよ」
「お弁当にカレー？」
「汁気ねえから」
「それって最高じゃないですか！ お弁当でカレーが食べられるなんて最高！」
「そんじゃ今度作っから」
「これはもう残ってないってことですか？」
「まだいっぱいあっからお替りできるよ」
「じゃなくて、明日のお弁当にこれは？」
「今晚と明日の弁当とおんなしでいいんか？」
「ぜーんぜんいいです！ だってこれ美味しいし、お弁当でも食べたい！」
「そっか」
なんか嬉しいそうな顔
あ、そういえば・・・
「聞いてもいいですか？」
「いいよ」
「購買でミックスサンドパンしたとき」
「え」
「なんで私にお弁当を作ってきたんですか？」
「それは・・・ 愛里に俺が作った弁当食って欲しかったから」
「私、今はスッキリ割り切れてますから、本当のこと言ってください」
「言ってんじゃん」
「あなたの好きな人のために作ったついでですよ？」
「ハア？」
「本当のこと言ってください、あのときはまあなんかモヤッとしましたが、
今は逆に？ 本当のこと知ってサッパリしたいっていうか？」
「あのさ」
「はい」
「俺、愛里にしか弁当作ってねえよ」
「あのときですよ？ 契約切った後の」
「愛里にしか作ってねえって」
「なぜ？」
「愛里に俺の弁当食って欲しかったからっつってんじゃん」
「契約切れた後なのに？」
「そんなんどうでもいいっつうの！ 俺は愛里に俺の作った弁当食って欲しかった！」
キレル？
「怒ってます？」
「え？」

「私が受け取らなかったから」
「あ、いや、怒ってねえよ、あんときは俺も、なんつうか、ごめん」
「そうですよ！ ミックスサンドパンで突然ドンッて、ホラーでしたよ！」
「ホラー・・・」
「ホラー映画よりホラーだった」
「あ、ごめん」
そっか 私の分しか作ってなかったんだ そっか
「あのおきのお弁当は何が入ってたんですか？」
「オムライス」
「オムライスってお弁当にも入れられるの？」
「入れられる」
「エー——ッ 言ってよ！ オムライスだって言ってよ！」
「言ったら食ったか？」
「え・・・」
「俺の弁当なんか二度と食いたくねえつつあったけど？」
「え～？ 言ったかなあ？ 忘れちゃったなあ」
「俺は愛里が記憶力メッチャいいの知ってっけど？」
「私の記憶力？」
「イカの血」
イカの血？ あっ
「あれはあなたがイカの血が青いとか言うからなんか調べちゃって、
そしたらそれしか覚えてなくて、メッチャ恥かっちゃったじゃないですか！」
「俺はすげえと思った」
「すごくないでしょ、イカの血なんて試験に出ないのに覚えちゃって！」
「俺はイカの血は青いっただけなのにさ、愛里ちゃんと調べて憶えたからさ」
「だからあっ イカの血なんて」
「イカの血液たんぱく質は？」
「え・・・ ヘモシアニン」
「ほれ！」
「何がほれですか？」
「愛里の記憶力メッチャいいじゃん」
「イカの血で私の記憶力を査定しないでください！」
笑ってるけど
そっか 私のお弁当しか作ってなかったんだ オムライス・・・ 言ってよお
ていうことは・・・
「あなたは、毎朝、私とあなたのお弁当だけ作ってるってことですか？」
「俺のは作ってねえよ」
「ハ？ なぜ？」
「まあ、中学んときまではとうちゃんが作ってくれてたけど」
イケメンはお弁当まで作る そして息子に伝承されるお弁当作り

「うちは高校入ったら自分でテキト〜にっつうカンジだからめんどくせえっつうか」

「でも私のお弁当は作るんですよね」

「作る」

「それなのに自分ののは作らない」

「作んねえけど」

「お弁当って、一個作るのと二個作るのとでは時間とか手間とか二倍になる？」

「手間も時間も一緒」

「それなのにあなたの分は作らない」

「まあいっかなあって」

なんかおかしくない？

「明日からあなたの分も作ってください」

「へ？」

「私一人分だけって、なんかイヤです」

「ハ？」

「今だってこうやってあなたが作ったごはんを二人で食べてますよね」

「食ってっけど」

「だったら同じお弁当食べたいです」

ポカンな顔で見てるけどさ

「私、学校であなたがどこで何をしてるのかぜーんぜん知らないんです」

「おんなしクラスだけど」

「そうだけど！ 授業中どんな顔して授業受けてるのかも見たことないし」

「この顔だけど」

「そうだけど！ どこで何しててもいいけど、同じお弁当だったら、

ああこの校内のどこかでこれを食べてるんだなあってわかるじゃないですか」

「俺が何食ってっか知りてえっつうこと？」

「じゃなくて！」

なんて言えばわかるのかなあっ

「あなたは私がやって欲しいことをなーんでもやってくれるんですよね？」

「なんでもするよ」

「だったら、明日からあなたの分のお弁当も作ってきてください」

「お・・・いっす」

これ言えばよかったんだ

仕事 最高！

フライパンを洗っているモリシタダイチ

明日からまた学校か

あれ？ 私、木曜日は早退して金曜日は休んじゃった

物理や化学はどうでもいいけどどうでもはよくないけど、

英訳どこまで進んだのかな、一年のときはミカリンたちにノート貸してもらったけど

友だちが・・・ いない

あ 同じクラスの男子がいる 目の前でフライパン洗ってる

「あのお」

「どした？」

「金曜日の英訳のノートって・・・」

「英訳？」

「貸してもらえたりします？」

「いいよ、今から取ってくっか？」

「明日でいいです、次は火曜日だから」

「他の科目はいらねえ？」

「え？ 他にも貸してくれます？」

「いいよ」

ヤッ・・・ターーー！

しかもトップ3常連のモリシタダイチのノートならカンペキ！

私の家政夫 モリシタダイチ カンペキ！

オーダー

「そんじゃ、そろそろ帰っから」

「はい」

あれ？ その手提げは・・・

「それ、私のパジャマです」

「え、ああ、俺いつもギリだから早めに持ってくる」

「じゃなくて、私、もうミシン使えますから自分で縫います」

「え、や、これは、あれだよ、契約」

「それは私がミシンを使えなかったからで、今は使えるので私が縫います」

「や、だから、それはさ、なんつうか、ちげえっうか」

「ちがう・・・とは？」

「あ！ あれだよ！ 違い！」

「違い？」

「あの先生、手が変わっとさ速攻でわかるからさ」

「手が変わるってなに？」

「縫った人が違えと速攻でバレるっつうかさ」

「エーーーー、そうなの？」

「おう、俺はずっと愛里の縫ってたじゃん」

「はい」

「そんで愛里は俺のを縫ってたじゃん」

「はい」

「それが途中で変わっと、気づかれちまうと思うんだよなあ」

「気づかれる？」

「これは縫った人が違えなあつってさ」

「気づかれたら・・・ どうなるんですか？」

「俺と愛里は 家庭科落とす」

「エーーーーーッ ヤダーーーーッ」

「だからさ、こうなったら、俺は愛里のを縫うから愛里は俺のを縫えよ」

「え・・・」

「それっきゃねえんじゃねえかなあ、家庭科落とさないようにすんのはさ」

「それしか・・・ない」

「それっきゃねえな」

「でも・・・ あなたのパジャマ、私が縫っていいんですか？」

「いいから言ってんじゃん」
「自信ないです」
「この前、先生にメッチャ褒められてたじゃん」
「あれは、あなたが書いた線が正確だったから、そのとーりに縫っただけで」
「すげえ上手だったよ、マジ」
なんか　すごく嬉しそうな顔してるけど
モリシタダイチが教えてくれたから縫えただけでさ
「俺は最後まで愛里のパジャマを縫う」
「はあ」
「愛里は最後まで俺のパジャマを縫う」
「はあ」
「つことで決まり」
なんかよくわかんないけど　家庭科落としたくないから
「わかりました」
「俺のは明日持ってくっから」
「はい」
「そんじゃ」
「はい」
なんか・・・　どうなのこれ？
でも家庭科落としたくない
モリシタダイチの言うとおりにしよう
お姉さんが落としかけたんだもんね　その辺の事情に詳しいんだよねきっと
少なくとも・・・　私の家庭科の成績は安泰だ！　ヤッタ！

明日の予習終わってシャワー浴びて下着洗って干して
なんか最近日曜日充実してるよね　してる
今日なんて感動だったもんね　全米が泣いたの一億倍感動だよ
インスタ・・・　私は見る専門だからなあ　みんなよくいろいろ UP できるよね
モリシタダイチのあの犬のエフェクト使った動画 UP したらバズるかな
やめておこう　誰が見るかわからない
あれ？　この唐揚げ美味しそう　モリシタダイチの唐揚げに似てる
唐揚げ食べたい　なんかもう脳内唐揚げなんだけど
あさってのお弁当？　明日のお弁当がいいなあ　でもドライカレーも食べたいし
唐揚げ食べたーい　でもドライカレーも食べたい
あ　オーダーする？
でももうこんな時間だしねえ　鶏肉なかったらムリだよな
いちおう聞いてみる？
『今森下家の冷蔵庫に鶏肉はありますか？』送信
ピコン

『あるよ』

ある！

『明日、ドライカレーの横にちょこっと唐揚げ入れるとかできますか？』送信

『楽勝』

楽勝なんだ！ ヤッターー！

『ありがとう』送信って アーーーーーッ！

『間違えました←こっちはです』送信

どーして絵文字の場所って移動するかなあっ

ピコン

『マジウケた wwww』

ピコン

『オーダーありがとうございます』

シェフ マジでシェフだよ

『私のシェフ』送信

ピコン

『俺は愛里専属シェフです w』

私専属シェフ いいなあ

ピコン

『クビにすんのだけは勘弁してくだせえ お代官様』

なにそれ ウケるんだけど

『ウケる w』送信

あ そうだ

『明日はあなたのお弁当も絶対に作ってくださいね』送信

ピコン

『はい』

なんで土下座 ハハハハ

『急に唐揚げ頼んじゃってごめんなさい』送信

ピコン

『なんかもう一品作ろうと思ってたから』

ピコン

『オーダーありがたっス w』

『最高のシェフ！』送信

ピコン

『痛み入ります』

ピコン

なにこれー！ メッチャ笑う！

『おもしろすぎ wwww』送信

ピコン

『俺のとうちゃんだろ？ w』

ヤメテー ハハハハ

『全然違いましたw』送信

ピコン

『こっちか』

ピコン

なんで私が送った画像保存してるかなあっ 笑うんだけどお

『申し訳ございません』送信

『あなたのお父さんメーローッチャイケメン』送信

ピコン

『なんでハートの目なんだよ！w』

ピコン

『俺にもハートの目くれよ！w』

なにそれ ハハハハ

『』送信

ピコン

『弁当にハートの目かよ！w』

『明日のお弁当ドライカレーと唐揚げ作ってくれるって言ったから』送信

『サービスですw』送信

『』

ピコン

『サービスでも嬉しいっス』

ハハハハ

キリがないな 一晩中やっても飽きないかも

『それでは おやすみなさい』送信

ピコン

『愛里 おやすみ』

お弁当のおかずのオーダーできるとか 最高なんだけど！

愛里専属シェフ なんかいいなあ

あのホラーだったときのお弁当も 私の分しか作らなかつたって

そっか 私のだけだったんだ

オムライス・・・ 言ってよおおお まあ言えなかつただろうけどさあ

寝よう

初日

「おはようございます」

「愛里、おはよっス」

イチゴのヨーグルトがけ！ お久しぶり～ 美味しい

「私、あなたが買っておいてくれたイチゴ食べちゃって」

キッチンで洗いものしてるモリシタダイチがチラッとこっち向いた

「買おう買おうと思ってもいっつも忘れて、だから久しぶりのイチゴです」

「愛里のイチゴは俺が買う」

「お願いしまーす！」

私はすぐ忘れるから

「ほい、弁当」

「ありがとうございます」

「唐揚げも入ってっから」

「ありがとう！」

このお弁当入れ、あのときは恐怖でよく見れなかったけど 可愛い！

グレーのパジャマの生地にピンクのヒモ

これだよねえ フリフリとかじゃなくてさ

「これはあなたが縫ったんですか？」

「おう」

「こういう型紙って売ってるんですか？」

「知らねえけど、まあ弁当箱に合わせてテキト〜に作った」

型紙無しで適当に？ ムリだ私には絶対にムリ

あ、そうだ

「あなたの分のお弁当見せてください」

「ちゃんと作ったっつうの」

「見せて」

「ほれ」

なに これ

スーパーの袋？ 中に・・・ タッパー タッパー？ タッパー？

しかもかなり使い古した タッパー？

「お弁当箱持ってないんですか？」

「中学んときはあったけど」

「それに入れなかったんですか？」
「古くなっちゃまって、とうちゃんが漬物とか入れんのに使ってっから」
ええええ だからって タッパー
あの美味しいドライカレーと唐揚げが・・・ かわいそ過ぎる
「なに」
「なんでも ありません」
「メッチャなんかある顔してっけど」
笑ってるけど こういうのってゆるせないっていうかさ
あ！ そうだ、そうだったよお
「あの」
「なに」
「今日が初日ですけど」
「なんの？」
「私とあなたが、学校で、自然に、なんていうか、話すっていう」
「あ・・・ ああ・・・」
「できますか？」
「お、おう」
どーなんだろう 購買であんなカンジだし 中庭でもあんなカンジだったし
「消しゴム輸送とかしないでくださいね」
「え？」
やろうとしていたな
「大丈夫ですか？」
「おう、まかせろ」
まかせていいのかなあ な～んか どうなんだろう
「正直、私からあなたのところに行ける自信はないです」
「お、俺から行く」
「もうすでに緊張してませんか？」
「ぜ、ぜんぜん、なんともねえし」
そうかなあ
「まあ、とにかく、先に行きます」
「おう」
どーなーなんだろう

廊下歩いていると みんなが私のこと見てる気がするんだけど 気のせい？
教室入って チラッと左の後ろの席見て モリシタダイチはまだ来てない
「上原さん、おはよう」
「川口くん、おはよう」
「もう大丈夫？」
「なにが？」

「木曜に早退して金曜は休んだからさ、かなり具合悪いのかなって」

あ そうだった

「うん、もう大丈夫」

「よかったね」

「うん、ありがとう」

なんか遠い昔な気がする

あれはなんだったんだろうみたいな土日だったから

一時間目が終わって中休み

次は・・・ 生物か

「上原さん」

川口くんやたら話しかけてくるけど

「なに？」

「あのさ・・・」

なに？ また何かの推し映画？

「森下が上原さんにコクッてピンタ食らったって」

あっ

「本当？」

「え、あ、あれは、ちょっとちがうっていうか、あの」

「愛里」

え？ あ モリシタダイチ

「これ、英訳のノート」

「ありがとう」

「他の科目のはあとで」

「うん、ありがとう」

モリシタダイチ！ グッジョブ！ ちょっと歩き方がぎこちないけど

「上原さん」

川口くん、もうピンタの話はやめてくれないかな

「今、森下、上原さんのこと、愛里って・・・ 呼ばなかった？」

「呼んだ」

「上原さん、森下とつき合ってるの？」

名前読んだら速攻つき合うに結びつく？ 映画の観過ぎだよ川口くんっ

「友だち」

「友だち？ え、それじゃコクッたっていうのは？」

「報告、報告するって言ったの」

「報告？」

「そう報告」

「でも、森下、木曜に真っ赤な手形つけてたけど」

「知らない」

「知らない？」

「私、早退したから」
「そうか、だったら上原さんじゃないのか」
「私じゃない」
私だけど
「そうか」
「そう」
「あのさ、今日の放課後に」
「愛里」
なぜまた来た？　こんなに頻繁に来たら逆に不自然だよ
「今日一緒に帰ろう」
一緒に　帰ろう？？？
「一緒に帰ろう」
顔メッチャ怖いんだけど
「放課後速攻で帰ろう」
速攻？　なに？　よくわかんないけど
「う、うん」
「おう」
またきごちない歩き方で去っていくモリシタダイチ
なに？　そして　なぜ？
「あ、川口くん、ごめん、なんだっけ？」
「あ、ううん、なんでも・・・ない」
「あ、そう」

お昼休み！

お弁当入れを開けると　あれ？　丸い小さな入れ物　お弁当箱とお揃い
こんなの買った？　あれ？　たしかお弁当箱とお箸入れだけだったような
モリシタダイチが買った？　あの女の子の雑貨しかないショップで？　なぜ？
まあいいや、何が入ってるのかな？
イチゴ！　しかも何個も！　だよね、お弁当箱だけだとイチゴ一個しか入らないもん
やっぱり買ったのかな？　だとしたら・・・　家政夫の鑑だよ
お弁当箱のフタを開けると・・・　ドライカレー！　上に紅ショウガ？
そして唐揚げ！　レモン添え　もー最高なんだけどお！
写真撮っておこう
美味しい！　ドライカレーも唐揚げも美味すぎるううう
モリシタダイチもこの校内のどこかで食べてるのかな　食べてるよね
LINE 送る？　OFF ってるかなあ　まあいいや送ろう
画像送信して　『美味しい』送信と！
はああもうさあ　お弁当でカレー食べられるって最高じゃない？
しかも特別注文の唐揚げ付き！

ピコン

あれ？ 森下大一

『』

フフ 喜んでる

そういえば、モリシタダイチと学校でLINEするって初めてだよ

さすがに授業中は禁止されてるけどね てか 私は学校でLINEも電話もしたことないよ

なんかさあ こうやってると どこにいるんだかわかんないけど つながってるカンジ

なんかもうなんかいろいろしあわせなんですけどおお！

昼休みが終わって席について、チラッと・・・ていうか、かなり身体左にねじって

モリシタダイチの方を見たらモリシタダイチもこっち見てて

いつもの「おう」って言うときの顔したから思わずフツて笑っちゃった

やっと同じクラスにいるって実感わいた やーーーっただよ 遅すぎだよ

学活終わった

さあ速攻で

「愛里」

え？ モリシタダイチ？

「一緒に帰ろう」

その言い方がさあ ぎこちないっていうかさあ

顔も怖いしさあ

私、行くところがあるんだど

あ 川口くんがこっち見てる

「うん、帰ろう」

私の言い方も棒読みだけどさ

廊下歩いていると なんかみんなに見られてる気が・・・ 気のせい？

あ！ モリシタダイチを見てる？ だよね、自覚あるモテ男だもんね

こうやって黙っているとイケメンだけどねえ 黙っているとね フツ

「なに」

「なんでもない」

あとは とにかくずーーっとなんもなかったまま校門まで歩いた ホッ

「私、行きたいところがあるので先に帰っててください」

「俺も行く」

「なぜ？」

「愛里を守る し・ご・と」

「これはダメ、これだけはダメ」

「なんでだよ」

「内緒」

「なんだよそれ」

笑ってるけど私にとっては重要任務なのよ 任務じゃないけど

「そんじゃ先帰ってっから」

「はい」

「なんかあったらすぐ連絡しろよ」

「はい」

さあ、行こう！

ハンズってそんなに来たことないけど

男性用のお弁当箱は・・・ あそこだ

やっぱ男性用って大きいんだなあ なにこれ 懐かしのアルミ弁当箱？ デカッ

えっと・・・ なんか黒が多いなあ 黒じゃなくてさあ

あ これは？ 白でフタがブルーグレー メッチャおしれ！

お揃いのお箸入れは・・・ あった

フルーツ入れるのは必要なあ 必要だよねモリシタダイチが買ったってことは必要

おしゃれ！ こんなお弁当箱持ってる男子がいたら惚れるよね

お弁当箱では惚れないけどさ

少なくともタッパーはない あれはない あれはひどい

私の美意識が許さない

お弁当箱入れは・・・ ほぼ黒 もしくはカーキ

こういうミニトート型はいいけど 色がなあ

でもスーパーの袋よりは・・・ でも色がなあ

とにかく お弁当箱セットだけ買おう うん

買った！

任務遂行！ 任務じゃないけど

帰ろう！

救われた

鍵 開いてる

ドアを開けたら

「おかえり」

いる

「ただいま」

モリシタダイチが私が持ってる紙袋をチラッと見て

「なんだ買い物かよ」

ホッとしたみたいに笑ってる

「フッフッフッ」

「なんだよ」

笑ってるけど

「ちょっとこっちに来てください」

キッチンのカウンターに紙袋から取り出してドンッ

「弁当箱？」

「そうです」

「今のはあんま好きじゃねえってこと？」

「じゃなくて！ これはあなたのお弁当箱です」

「俺の？」

だって

「ハッキリ言わせてもらいますけど、あなたのあのタッパー！

使い古した汚ったないタッパー」

「汚ったねえって」

笑ってる場合じゃないでしょ

「見るのもイヤです！」

「あ？」

「明日からこれを使ってください」

「これ・・・ 愛里が買ったんか」

「そうですよ、あなたに新しいお弁当箱買ってきてくださいって言ったら、

どんなダッサいものを買ってくるか考えただけでゾッとする」

「ゾッとするって・・・」

笑いごとではないよね

「あの排水管掃除してたときの恰好を見たら誰でもそう思いますよ」

「だからあ、あれは作業用だっつったじゃん」

「とにかく、あなたにはセンスがない」

なに、笑いこらえてる？ 笑っちゃうくらいセンスないわよ

「ですから、明日からはこれを使ってください」

「そっか」

「そうです」

「ありがとな」

「私のためです、私の美意識の崩壊を防ぐため！」

メッチャ笑ってるけど あのタッパーはないからっ 絶対ないからっ

あ、そうだ

「丸いフルーツ入れ、買ってくれたんですよね」

「ああ、まあ」

「イチゴがいっぱい入ってて嬉しかったあ」

「そっか」

「だから、ほら、あなたにもありますから」

「おいっす」

あとは・・・ お弁当箱入れ

自分で縫ってくれないかなあ

夕食は豚肉でお野菜巻いて焼いたやつ 美味しかったあ

フライパンを洗っているモリシタダイチ

「あのお、今日の反省会をしたいんですけど」

「反省会？」

「ていうか、あなたに不可解な言動と行動があったんですけど」

「不可解？」

「最初に私のところに来て英訳のノートを渡してくれたときはグッジョブって」

え？ なんて笑う？

「なんて笑ってるの？」

「や、グッジョブがちょいツボったっつうか」

笑ってる場合じゃないんだけど

「次に、また来ましたよね」

「行ったけど」

「もうちょっと間を置いた方がいいっていうか、次の休み時間とかそれくらいで」

「緊急事態が発生したんだよ」

なに？ まあそれはいいとして

「しかも、一緒に帰ろうとか、今まで言ったことないじゃないですか」

「今まで話したことねえもん」

まあ・・・ そうだけど

「でも、速攻で帰ろうとか、川口くん何か言いたそうだったのにあれは失礼で」

「俺はっ」
なに、急に大声で なに？
「愛里を救ってやったんだけどなあ」
「何から？」
また全米とか言う？ 川口くん今日は全米言わなかったよ
「やるだろうなあっつうサプライズから」
やるだろうなというサプライズ？
「なんですかそれ？」
「あんとき、川口は、愛里を、放課後呼び出して」
「呼び出す？ どこに？」
無理やり映画？
「校舎の裏」
「なぜ？」
「校舎の裏つつたら決まってるだろ」
「なに？」
「コクる」
「告知？」
「なんで告知になんだよ」
「だって川口くん映画オタクだから、なにかの映画の告知とか」
え なんてそんな情けなさそうな顔で笑いこらえてる？
ハァァァってため息つく？
「愛里につきあってくださいって言うつもりだったんだよ」
「誰が？」
「川口だっつってんじゃない！」
「え・・・ エーーーーーッ」
「だから 俺は 愛里を救ってやったっつうの」
「なーんで川口くんが私にコクるの？」
「好きだからに決まってるじゃん」
「ハァァァ？ ほぼ口きいたことないし、口きくときは映画の話しかしないけど？」
「知らねえけど、それはやっぱ好きだから話しかけてたんじゃねえの」
「ないないない！ そんなカンジゼーんぜんなかったもん」
「愛里は鈍感だかんなあ」
「ハァァァ？」
「愛里は鈍感だから気づいてねえかもしれねえけどさ」
なんでキレ気味に鈍感鈍感て言うのよっ
「愛里にコクりにえ男けっこういんだよ」
「どこに？」
「クラスでも、学校ん中でも」
「私の知ってる人？」
「愛里が知ってっかどうかは知んねえけど」

「私、男子とほぼ話したことないけど」
「話さねえでも好きなんじゃねえの」
「ハァアアア？ 私のことなんにも知らないのにどうやって好きになるの？」
「愛里がきれいだからだろ！」
こいつは・・・
「あなた、今、カンベキに、私のことバカにしましたよねっ」
「バカにしてねえだろ」
「私、きれいなんて言われたこと一度もないです！」
なに ポカン？ ないものはないんだもの！
「怖えな」
「怖い？」
「まあそういうことだから」
「どういうこと？」
「だからあっ 川口が放課後愛里にコクろうとすんのから愛里を救ったっつうの！」
「なんで・・・ 川口くんが私にコクろうとしたと、あなたは知ってるんですか？」
「俺のまわりのヤツらが川口と愛里が話してんの見て言ってたんだよ」
「なんて？」
「ほらほらほら、もうすぐ川口が上原さんに放課后来てくれっつうぞ、
校舎の裏でコクるっつってたよな」
「ハ？」
「つってたんだよ」
「ええええ 明日からどんな顔して川口くんと話せばいいんですかあ？」
「フツツーにしてりゃいいんじゃないの」
「フツツー？」
「なんも知らねえふりっつうか」
「あなたが今言わなかったら私は知らないで済んだんですけどっ」
「そんな愛里はコクられっけど」
「でも、もう未遂で終わりました」
「今日がダメでも明日があるじゃん」
「え・・・」
「どうすんだよ、コクられたら」
「ええええ もし・・・そうになったら・・・ あなたも来てください」
「なんで川口が愛里にコクるところに俺が行くんだよ」
「だって一人じゃ怖いから」
「上原愛里さん」
「え、な、なに」
「コクるときは 必ず 1対1 なんすよ」
「メッチャ ホラーーーー！」
泣きそう 怖い
「お願いだからこれからも守ってくださいね！」

「ぜってえ守もっから」
「約束ですよ？」
「ぜってえ守る」
「よかったあ あなたがいてくれて本当によかったです」
「マジ？」
「はい、あなたがいなかったら私生きていけないかも」
「え」
「なんですか？」
「あ、や、おう、ぜってえ守ってやっから」
「ありがとうございます！」

「そんじゃ、そろそろ帰っから」
「はい」
「俺のパジャマ、ミシンのそばに置いといた」
「は・・・い、全力は尽くしますけど・・・」
「テキト～でいいよ」
「テキト～にやったら あなた家庭科落としますよ」
「あの、英訳のノートは借りたままでいいんですか」
「俺、明日の予習もやってっから」
「早っや」
「そんじゃ」
「はい」
「愛里」
「はい？」
「弁当箱、ありがとな」
「私のためです」
笑いながらドアを閉めた

あああああ 危ないところだったあ！
モリシタダイチがいなかったら・・・ 怖すぎるううう
一生私の家政夫して欲しいくらいだよおお

ミニトート

パジャマ、明日まで縫う分終わりました！
モリシタダイチが書いた線がメッチャ正確だから楽勝だったよ
楽勝まではいかないけど
ミシン片付けよう
ちょっと待って
モリシタダイチのお弁当箱入れ どうする？
自分で縫ってくれないかなあ 私より一億倍上手なんだからさあ
でも あのシワシワのスーパーの袋に入れて平気って・・・
縫わないな 縫わないよね 縫わない
ええええ あのステキなお弁当箱があああのシワシワのスーパーの袋の中？
でも型紙ないし ちょっと検索してみよう

なんかよくわかんない
ヒモを通すところの脇の縫い方がぜんぜん頭に入ってこない
トートバッグは？ あれなら直線だからできるんじゃない？
できそう
動画と画像もあるし
・・・で、けっこう時間かかったけど、なんとかできたああ
口のところが閉じるようにボタンとループ
縫い糸をパジャマのボタンの色と同じにしたから
モリシタダイチのパジャマのボタン、一個つけちゃおう
モリシタダイチ、余分なボタン持ってるかな
先生が失くすといけないから余分に用意しろって・・・ あった！
ボタン付けはできるんだよね ボタン付けだけ
できた！ ミニトート！
ステッチがスカイブルーで真ん中のボタンもスカイブルー
可愛くない？ 可愛い
型紙ないから自信ないけど
あのシワシワのスーパーの袋よりマシ・・・だよ
メッチャ時間かかった
早く英訳やらないと！

英訳、ここまで進んだのか
でも、ここまではやってたから・・・ あ、ここ間違えてた
モリシタダイチのノートはわかりやすい！
予習もすごいなあ こんなに進む？
あれ？ この訳・・・ 違わない？
Why don't you apply for a new job?
モリシタダイチは
「なぜ新しい仕事に応募しないのですか」
でも、Why don't you って、～したらどう？ みたいな意味のはずなんだけど
私が違う？ この文章の流れからいくと「～したらどう？」なんだけどなあ
どうする？ この成績庶民レベルの私が常駐トップ3の訳を添削？
でも、私、英語は得意なんだけど、科目別だとトップ10には入ってるけど
モリシタダイチの訳の下に小さく書いておく？
「新しい仕事に応募したらどうですか？」
どうなんだろう まあスルーしてくださいってカンジ

シャワー終わって部屋に戻ると
ピコン
森下大一
『愛里』
『は～い』送信
・・・・・・・・・・・・・・・・ あれ？ 返信がないんだけど
『寝ちゃいましたか？』送信
ピコン
『しあわせに浸ってましたよ w』
しあわせ？
ピコン
『愛里に愛里と呼びかけるとは～いと言ってもらえるしあわせっすよ w』
なんのこと？
『酔っぱらってます？ w』送信
ピコン
『俺未成年』
ピコン
『酒飲めない w』
あ そうか ハハハ
『明日のお弁当のメニューは何ですか？』送信
ピコン
『企業秘密です w』
なにそれ ハハハ

『楽しみにしてます w』送信

ピコン

『今日は追加オーダーはございませんかお客様 w』

『明日はシェフのおまかせコースにしておきます w』送信

ピコン

『』

イチゴは入ってるってことだよ

『』送信

ピコン

『愛里のは俺が買う！』

『お願いします』送信

あ そうだ

『明日のあなたのお弁当必ず今日買ったお弁当箱に入れてください！』送信

ピコン

『はい 汚ったねえタッパーには入れません www』

『笑った www』送信

ピコン

『愛里が言ったんだけど www』

『事実だから w』送信

ピコン

『はいそうです汚ったねえタッパーです w』

『英訳のノートありがとう』送信

あの訳のことは言った方がいいのかな

でも自信はないんだよなあ

ピコン

『愛里の役に立ててしあわせッス』

『森下大一さん おやすみなさい』送信

ピコン

『愛里 おやすみ』

なんかさあ メッチャしあわせなんだけどおお

寝よう

お弁当箱入れ

「おはようございます」

「愛里、おはよっス」

あ、先にあれを渡しておこう。

「あなたのお弁当箱見せてください」

「持ち物検査かよ」

笑ってるけど 私は真顔です

「愛里が買ってくれた弁当箱に入れました、ほれ」

やっぱり シワシワのスーパーの袋だ

「その袋から出してください」

「マジあの弁当箱に入れたっつうの」

「出してください」

「あい」

ほら、お弁当箱はこんなにステキなのに、あのシワシワのスーパーの袋で台無し

「いいですか、タイトルは、Better than スーパーの袋です」

「タイトル？」

「せっかくステキなお弁当箱になったのに、あなたはこのシワシワのスーパーの袋に入れてきました、入れてくるだろうなあと思ったらやっぱり入れてきました」

「あ・・・あい」

「ゆうべパジャマを縫った後に、できればあなたが自分で作ってくれないかなあって、私のはあんな可愛いのを作ってくれたんですから作れるでしょ？」

「ああ、まあ」

「でも、あなたはあの汚ったないタッパーをこのシワシワのスーパーの袋に入れても平気な人です、作るわけがない！ これはもう、ちょっと待ってください」

モリシタダイチのパジャマの手提げからミニトート出して

「これです」

モリシタダイチの目の前にジャーーンてカンジで掲げた

「今日からこれがあなたのお弁当箱入れです」

モリシタダイチがジーッとミニトート見てる 縫い目が汚い？

「型紙がなかったから、動画と画像と作り方のサイトを見て作ったので、まあできるだけ真っ直ぐに縫うようには頑張りましたが、そこは」

「愛里が・・・作った」

「はい、だから縫い目とかそういうのには」

「愛里が？」
「そりゃあなたが縫うよりはひどいかもしれないけど、スーパーの袋よりはまだ」
「愛里が・・・ 俺のた、俺の弁当箱のために作った・・・んか」
「不満かもしれませんがこれでも精いっぱい縫ったんだから、ていうか、少なくとも」
「ヤベエ」
え？ そんなひどい？
「スーパーの袋よりはマシじゃないですか？」
「ヤッペー」
そこまで？ そこまでかなあ
あれ？ 私 抱っこされてる？
「たまんねえ！」
言動と行動の意味がぜんぜんわからないんだけど
「愛里」
抱っこされたまま
「はい」
「メッチャ嬉しい」
あ よかった
「愛里が俺に、なんか作ってくれとか、ひとつかけらも期待してなかったっつうか」
ひとつかけら？ まあ・・・ そうだろうけど
「頭ん中に1ミクロンも浮かんだことねえっつうか」
まあそうだろうけど 1ミクロンで・・・
「なんかもう奇跡が起きたっつうか」
喜んでるみたいではあるけど なんかディスられてるような
「愛里」
やっと腕を放した
「最高っスよ」
目がイッチャってるみたいだけど
「そうですか、よかったです」
「おう」
「では、今日からはそのスーパーの袋には入れないでください」
「入れねえ！ ぜってえ入れねえ！ 一生愛里が作ってくれたのに入れっから！」
一生までは・・・
でもまあこれで モリシタダイチのお弁当箱関連の問題は解決された！

「ほい、愛里の弁当」
「ありがとうございます、それじゃ、あ・・・」
そうだ忘れるとこだった
「これ、英訳のノート、ありがとうございました」
「あ、それは、あの、教室で、まあ、取りに行くからさ」
「ここで渡した方が早くないですか？」

「まあ、なんつうか、愛里が持ってってくれた方が、忘れねえっつうか」
こいつ・・・
「あなた、このノートを私のところに来るための小道具にしようとしていますね」
「え・・・」
「目が泳いでますよ」
「いいじゃん、そんぐれえ」
居直ったな
「まあいいです、私も貸してもらって助かりましたから 大目に見ます」
笑ってるよ
「それじゃ、お先に」
「おう」

教室に入ったら、すでに川口くんが・・・ いた！

「上原さん、おはよう」
「お、おは、よう」
私、今 完全に顔ひきつってた
「上原さん」
「は、はい？」
あ 声裏返っちゃった
「あのさ」
「愛里」
あ 来た
英訳のノート 先手でスッて差し出してやった
ほら 目が「え？」になった
「ありがとう」
「え お、おう」
ざまあみろって顔してやったら
なんだよって顔して笑った
あ！
「昨日の生物のプリント、またわからないんだけど」
「おう、そんじゃ今日教えっから」
「ありがとう」
「そんじゃまたな」
「うん」
なに このスムーズ感 学校でこのスムーズ感！

家庭科のパジャマは私のパジャマつまりモリシタダイチ製作は
「あいかわらずきれいな縫い目ですよ」

モリシタダイチのパジャマつまり私製作は
「見事に正確な縫い目です」
つまりはモリシタダイチの書いた線が見事に正確
モリシタダイチ一人勝ちってことだよ 勝負してるわけじゃないけど

お昼休み
今日のお弁当は何かなあ
キャーキャー！ オムライス！
一人で拍手しちゃった
お弁当でオムライス！ メッチャしあわせ
やっど やっど食べられる お弁当にオムライス！
写真撮ろう
ピコン
森下大一？
『愛里お手製弁当入れ最高！』
ピコン
写真撮ってる ハハハ
私が作ったミニトート写してないで中身よ中身
『森下大一シェフ特製オムライス最高』送信
写真も送信
ピコン
写真
なにこれー！ ミニトートと自撮りって！ ハハハハハ
私も送る？
えっと自撮りってあんまり オムライスと私・・・
カシャッ
顔下半分切れちゃったけど 送信
ピコン
『』
何にハートの目なんだかわかんないけど なんか笑える！
オムライス 美味しい！
イチゴも いっぱい入ってる
昼休み 充実しまくり！

英訳の授業
モリシタダイチにノート借りたからついていけるけど
借りてなかったら永遠に追いつけなかったよ
次は・・・

Why don't you apply for a new job?

ここだ

「次、森下」

あ モリシタダイチがあてられた

「新しい仕事に応募したらどうですか？」

えっ 私のを採用？ えええ 責任取れないよおお

「よし」

よし？

「ここはよく間違える構文で、なぜしないのかと訳してしまうが・・・」

お おおお よかった

後ろ振り向きたいけど やめよう あまりに遠すぎる

学活終わりました

火曜日ってメッチャ大変な授業詰まってるから疲れるう

帰ろう

「上原さん」

あ・・・ 川口くん

「話があるんだけど」

話・・・

「屋上に来てくれないかな」

屋上・・・

「愛里」

あ えっと

「帰ろう」

えっと・・・

「愛里 帰ろう」

これは・・・

「川口くん、先に屋上に行っててくれる？ すぐに行くから」

「あ、うん」

川口くんが走って出ていった

「愛里 どうすんだよ コクられっぞ」

「私・・・ コクられてきます」

「ハ？」

「私だったら、自分の気持ちを相手に伝えたいです、届かなくても」

逃げてたけど

「それに、あなたが言ったから」

「俺？」

「ちゃんと断らないと相手に悪いって」

モリシタダイチが私のことを黙って見て そして

「そっか」
「だからちゃんと断ってきます」
「大丈夫か？」
「はい、なんとか・・・」
「俺、ついてってやるっか？」
「森下大一さん」
「あ？」
「コクるときは 必ず 1対1 なんすよ」
モリシタダイチが笑った
「愛里は記憶力いいなあ」
「あなたが言ったことはなんだか憶えちゃってて」
モリシタダイチが 何か言いたそうにしてて
「なんですか？」
「イカの血液たんぱく質は？」
イカ？
「ヘモシアニン」
「やっぱ記憶力いいじゃん」
「こんな状況のときにイカの血っ？」
でもなんかちょっと ちょっとだけ緊張ゆるんだかなちょっとだけ
「そんじゃ、俺先に帰ってけど」
「はい、あ、ちょっと」
モリシタダイチの手をつかんじゃった
「ちょっとだけ握らせてください、正直吐きそうです」
「吐きそうって ハハハ」
モリシタダイチが私の手をギュッと握り返して
「吐いたら吐いたでおもしれえじゃん」
モリシタダイチの笑った顔見てたら・・・
「すぐ帰るから 家で待っててくださいね」
「待ってっから」
「それじゃ、いってきます」
「いってらっしゃーい！」
ふざけやがって！
屋上に走ったよ！

虫

屋上という少女マンガのベタな設定のような場所で向かい合う私と川口くん

「上原さん」

「はい」

「僕とつき合ってください」

今 私は 自覚があります これはコクられています

「ごめんなさい」

「そう言われると思っていた」

「え？」

「でも言えてよかった」

「うん、あの、ありがとう」

「僕こそ、ありがとう、ここに来てくれて」

「あのクラスになって、最初に話しかけてくれたのは川口くんだから」

「え？」

「私、まだ一人も友だちいなくて、だから、話しかけてくれてありがとう」

川口くんがニッコリした

「あのね、私、正直映画館で映画ってあんまり観ないんだけど、

川口くん、Netflixとかアマプラ観る？」

「観るよ、かなり観てる」

「今度おもしろいのがあったら教えて、全米が泣いたとホラーじゃないので」

「うん、いいよ」

「できればドキュメンタリー」

「アリの生態っていうのがあるよ」

「アリはダメ！ 虫はダメ絶対ダメ虫はやめて！」

「上原さんて、おもしろいね」

おもしろい？

「すごくきれいでさ、近寄りがたかったけど、話すとおもしろいよ」

「あ・・・そうなの」

「それじゃ、上原さん、また明日」

「うん、また明日ね」

川口くんがニッコリして、コクンて頷いて出ていった

走って走って玄関のドア開けたら
モリシタダイチが待っていた
「愛里」
なんか なんか 抱きついちゃった
「おかえり」
うんって頷くことしかできなくて なんかホッとしちゃって
「ちゃんとできたんだな」
うん
「すげえな 愛里は」
顔をあげたら優しい目で私のこと見てる
「友だちができました」
「友だち？」
「あのクラスで初めての友だち」
「そっか」
「はい」
「え、ちょ 待って 俺は？」
「ハ？」
「俺は友だちじゃねえの？ あのクラスではさ」
「あなたは・・・」
友だちって言うより 家政夫？ ……って言うより
「空気です」
「なんだよそれえ、メツチャ存在感ねえじゃん」
「あなたがいると息ができます」
なんかね なんか そうだから
「そっか」
「はい、O \square ではないです」
「オゾンじゃなくてよかったっすよ」
あ・・・ 抱きついたままだった
「着替えてきます」

今日の夕食は、なんて言ったっけ、ジャージャー麵風・・・そうめん
「そうめんには早えけど、棚ん中見たら消費期限が切れそうなのがあったからさ」
消費期限 そうめんの消費期限見るんだ 見たことない 茹でたこともないけど
あ 美味しい！
「美味しいです」
「マジ？」
「私、ふつうのそうめんてあんまり好きじゃないっていうか、こうやってタレにつけて、
でも途中からタレが薄くなっちゃって、どこが美味しいのかなって」
「え、ちょい驚いてんだけど」

「なんで？」
「かあちゃんとおんなしこと言ってっからさ」
女神と！ 光栄すぎる！
「かあちゃんが好きじゃねえから、うちはふつうのそうめんつうのが出てこねえっつうか、
逆に俺はふつうのそうめん知らねえからどんなんかなあって」
ふつうのそうめんを知らない？
「これとか、トマトとシソの冷製パスタみてえのとか、まあそんなんぼっか」
「えええ、いいなあ」
「愛里が食べてえつつたら、俺がいつでも作っから」
「最高！」
「おう」
「あ、話変わりますけど、川口くんが」
え？ なにその口とがらせ？
「どうしたんですか？」
「なんもねえよ」
あ そう
「川口くんがNetflixとか」
え メッチャ機嫌悪そうなんだけど
「何か怒ってます？」
「怒ってねえよ、なんで？」
「タコみたいに口とがらせてるから」
「タコ!？」
そういえば・・・
「タコの血液たんぱく質も・・・ヘモシアニン」
「メッチャ・・・ ハハハハ」
「笑わないでよ！ 私、イカとかタコの血液たんぱく質ばかり頭に入っちゃって、
人間のってなんだっけ・・・ヘモ・・・ヘモ・・・ あ ヘモグロビンだ」
「正解です」
「生物落としちゃったらどうしよう」
「愛里には俺がついてんじゃん」
「そうですよね？」
「ぜってえ落とさねえようにすっから」
「ありがとうございます！」
「おう」
「あ、さっきの話、川口くんが あ、またタコ」
くちびる嚙んでタコ化抑えてる 笑える
「なんだよ？ 川口がなんだよっ」
「アリの生態の映画があるって」
「アリ？」

「だから虫ダメ絶対ダメって言ったんですけど」
え　なんで笑いこらえてる？　何かおかしいこと言った？
「なんですか？」
「俺がここ来た日にさ、愛里に嫌れえなもんあんのかって聞いたらさ」
「あ！」
「虫つってさ」
あれは
「俺　一瞬頭真っ白になったもんな、嫌れえな食いもんが虫？　つてさ」
「あれはあなたが嫌いな物はとしか聞かなかったから！　食べ物って言ってない！」
笑ってる
「あなたは虫は平気なんですか？」
「平気」
メッチャ平気って顔して平気って言った
「それじゃ、もし、今、私が、アーーーーッ虫！　あそこに虫！　つて言ったら？」
「捕る」
平然と言う？
「本当に捕ってくれますか？」
「捕る」
「うちはママも虫が大嫌いなんです」
私もできるだけ冷静に説明しないと
「虫が出ると二人でキャーーーーッってなっちゃって、虫ーーーー！　つてなっちゃって
ママなんかこーんなに腕伸ばしてシューッって」
なんか説明してるだけでゾワゾワしてきた
「殺虫剤の缶空っぽになるくらいシューッだから二人でゲッホゲホしっちゃって、
そして、あれが・・・dieしたとき、あ、killed？」
「なんでそこだけ英語なんだよ」
「日本語だとリアル過ぎて、ちょっと・・・」
え　なに　くちびる噛んで　まあいい
「そして、ママがゴム手袋はめて・・・これ以上は・・・　言えません」
爆笑？　笑いごとじゃないのよ笑えないのよ
「愛里の再現がメッチャリアルで・・・　俺、見てる気になった」
「それくらい嫌いだということをお伝えしました」
「メッチャ伝わった」
「伝わってよかったです」
「だよなあ」
でしょ？
「愛里はボケ〜ッとしてっからなあ」
ハ？
「悪い虫いっぺえ寄ってくんだろなあ」
「エーーーーッ？　イヤですっ絶対イヤです！」

「ポケッとしてっと悪い虫すぐに寄ってくんぞ」
「イヤーーーーーッ」
「俺が全部退治する」
「え？ 本当に？」
「ああ、一匹も近づけねえ」
あなたがいてよかったあ！
「俺が愛里を守っから」
「約束ですよ？」
「約束する」
「指切りしてください」
「小学生かよ」
「これは指切りという名の 契約締結 です」
政経の授業でやったばかりの言葉使ってみました
「わかったよ」
モリシタダイチが私の小指に小指をからませた
「あなたが私にしてほしくないこと NO.1は何ですか？」
「ハ？」
「針千本飲ますみたいな実行不可能なことより、リアルな方が約束守るから」
「そっか」
「あなたが私にして欲しくないことは何ですか？」
「愛里が・・・」
私のことジッと見てる 何？ 何ですか？
「愛里がまた俺のクビ切ることっスねえ」
またケンカ売るみたいな言い方して！
「あなたの今の雇い主は森下美里さんですから私はクビは切れません！」
何回言えばいいのよ
「かあちゃんにメッチャ感謝っスよ」
「私も感謝です」
虫問題まで解決です 女神様！
「では、契約成立ってことで」
「おう」
「本当に虫やっつけてくれますよね？」
「愛里に頼まれねえでもやるっつうの」
よかったあ！

ギャップ

フライパンを洗っているモリシタダイチ

またあの煤けた赤い T シャツ さすがに下はジーパンだけど

「あなたのその赤い T シャツ」

「あ？」

「どこで買ったんですか？」

「近所のスーパー」

スーパー なぜスーパー スーパーで服買う人っている？ いるけど目の前に

「なんで？」

「誰が買ったんですか？」

「俺」

だろうね 女神では絶対がない

「なぜあえて赤を買ったんですか？」

「なぜあえて赤・・・つうのは？」

「他に色はなかったんですか？」

「憶えてねえなあ、これがいっちゃん安かったから買ったんじゃね？」

安かったから そういう基準

「だったら、たとえば金色の T シャツがいちばん安かったら買う？」

「買わねえだろ金色って、んなダッセーの」

笑ってるけど あなたが今着てる赤もメッチャダッセーのよ

「なんでそんなこと聞くんだよ？」

「どうしてあなたがそのダッサい赤い T シャツを買ったのかなあって思ったから」

「だからさあ、これは作業用だつったじゃん」

「作業用を買ったんですか？」

あ 黙った 作業用じゃなかったんだ はいはい

「そんじゃ愛里はさ」

なんか知らないけど居直った

「俺に何色着てほしいんだよ？」

そうだなあ・・・

「白とかブルーグレーも似合うかなあ、黒もいいかも」

「黒ってさ、洗ってるうちに煤けちまうんだよなあ」

あなたのその赤もメッチャ煤けてるけどね

襟元なんかもうダル～ンて伸び切っちゃってるし

え なに？　なんで「え？」みたいな顔でこっち見てるの？
「なんですか？」
「なんつうか、今の愛里の顔、かあちゃんが俺のこと見てるときの顔に似てた」
女神に？　おお！　光栄です！
「かあちゃんがそんな顔して見てさ、んつとにあんたはダッセー服ばっかだなんて」
女神、わかります、メッチャわかります
「んなさあ、服なんて着れりゃいいじゃん」
着れりゃいい　前も言ってた　着れりゃいい
「わかりました」
「え、わかってねえよな、今のバツッて俺のこと切ったカンジすんだけど」
「切りました」
「切んなよ！」
「それじゃ言いますけど」
「おう、なんでも言えよ」
「服なんて着れりゃいいっていう人と私とでは永遠に平行線だなんて」
「へ？」
「永遠に交わることはないなっていうか」
「え、あ、そんじゃ愛里は高っけえ服がいいつうことか？」
「ほらね」
「何がほらねだよ？」
「値段の問題じゃないんです」
「何の問題だよ？」
「ほらね」
「だからさあ、ほらねって言われてもわかんねえよ」
「私は、たとえば1,000円のTシャツ」
「Tシャツに1,000円はもったいねえだろ」
「わかりました　もういいです」
「あ、うそ、ちげえから、1,000円のTシャツ、はい」
「あなたのそのTシャツいくらでしたか？」
「んつと・・・　500円くれえだっかな」
500円の価値もないと思う
「だったら500円のTシャツ、同じ500円でも探せばステキなのがある」
ある・・・はず　どうなんだろう
「なかったらどうすんだよ」
「買わない」
「それでもTシャツ全部擦り切れちまって買わなきゃなんねえときってあんだろ」
擦り切れる？　そこまで着る　ああそう
「もういいです」
「だからさあ、そのバツッて切る言い方すんなよお」
切りたくなるよ！

あ 口とがらせてる 何か考えてるな
「そんじゃさ、俺が愛里に 500 円渡して、俺の T シャツ買ってくれつつたら？」
「買いますよ、あちこち探してこれならステキじゃない？ っていうの買います」
「なかったらどうすんだよ？」
「もし 500 円ではそういうのがなかったとして、600 円ならあるとしたら
私は 100 円足して 600 円のを買います」
「めんどくせえ」
「ほらね」
「だからそのほらねつつうのやめれって」
「あなたはわかっていない」
「な、なに」
「安いからいっかあで 500 円のを買ったら、それは 500 円をトイレに流すのと同じです！」
「トイレ」
笑ってるけど その T シャツはトイレから引っ張って出したくらいの まあいい
「100 円足して、これならステキっていうのが買えたら、その 100 円にはメッチャ価値がある！
500 円をより価値あるものにする 100 円！ さあどうする？」
なに？ なんて黙ってこっち見てる？ 言ってる意味がわからない？ だろうけど
「愛里ってさ」
なによ？
「やっぱいいよなあ」
「何が？」
「なんつうか、金銭感覚つつうか」
金銭感覚？
「そういうの私メッチャダメだから！ レシートなんてバッグに入っているとジャマだから
すぐ捨てちゃうし、小さいときお小遣い帳つけたことあるけど一回で終わっちゃったし、
ママは家計簿つけてるけど私はあんなめんどくさいこと絶対ムリ！」
「そんなん、やれる方がやればいいんじゃない？」
「やれる方・・・とは？」
「たとえばさ、まあ、たとえばだけど、たとえばさ」
たとえばメッチャ多いんだけど
「俺と愛里が結婚したとする、たとえばだからたとえば」
「はい」
「俺はそういうのやれっから、俺がやればいいんじゃない？ つつう話」
「まあそうですけど」
「だろ？」
「今 家計簿の話をしてるんじゃないんですけど」
「愛里が家計簿なんつったから」
「私のせい？」

「あ、や、俺 俺です」
「まあここまで話してわかったことは」
「おう」
「私とあなたの服に関しての感覚はやっぱり永遠に平行線だということです」
「んな見捨てんなよお」
「捨てる前に拾ってないですけどっ」
なんで身体折り曲げて笑うの？
「もういいですっ」
モリシタダイチと服の話なんかした私がバカだった
あの煤けた赤いTシャツ着てシンクを掃除して あれ？ あれ？
手で首から下隠すと・・・
「愛里？」
ほら！
「なにやってんだよ」
笑ってるけど
「あなたの首から上・・・ メチャイケてます」
「え、あ、え、ああ！ 顔？ イケメン？」
「顔ではないです」
「なんだよそれ」
「まあ顔もいいですけど」
「マジ？」
「ヘアーカットが」
「ヘアーカット？」
「なにげな〜いカンジですけどメッチャ高度なカット技術ですよ」
「そうなんか？」
「そうなんかって、カットしてもらうときに何てオーダーしてるんですか？」
「まかせてっけど」
おまかせ？ おまかせでそんな神ワザ的カットしてくれちゃうの？
「どこでカットしてるんですか？」
「オカマのおっちゃんところ」
「オカマのおっちゃん？」
「俺のかあちゃんの昔からの友だちっつうか」
へえ、そうなんだ
「小せえときからそこだからさ」
「なんていうお店ですか？」
「知ってっかなあ La Moda Shin」
らもーだしん ラモーダ・・・
「エーーーーーッ La Moda Shin？」
「あ、知ってた」
あそこは・・・

伝説のお店と呼ばれていて新規のお客は取らないすべて紹介者が必要
スタッフは精鋭ぞろいで常に予約はいっぱい
オーナーでトップスタイリスト Shin にカットしてもらえるのはほんの一握りの選ばれし
民

「俺は近所でじいさんがやってる床屋でいっかなあって」

床屋？ おじいさんがやってる床屋？

「近けえし安いからさ」

近い 安い モリシタダイチの基準は常にこれ

「それでも、かあちゃんがさ、あんたが何着ようと知ったこっちゃねえけど、

髪だけはシンシンとこで切ってもらえ！ ってうっせえからさ」

「お母さんが・・・正しいと思います」

「そっかなあ、そんな変わんなくね？」

床屋と La Moda Shin をそんなに変わらなくねというモリシタダイチ 逆に怖い

「なに？ なんだよ」

「え、いえ、あの、あなたはどのスタイリストにカットしてもらうんですか」

「シンシンおじさん、おじさんつうと怒っけど」

笑ってるけどさ

「シンシンおじさん・・・とは？」

「その店のオーナー」

「エーーーーーッ！ Shi Shi Shin にーーーーっ？」

「ただのおカマのおっちゃんだよ？」

あのレジェンドを・・・ただのおカマのおっちゃん・・・扱い・・・

ていうことは・・・

「あなたのその髪は Shin がカットした・・・」

「そうだけど」

Shin がカットした髪を見られることすら奇跡と言われているカットが・・・

「ちょっと見せてもらっていいですか」

「いいよ」

そばに行って

やっぱりすごい！

正直髪まで見てなかったっていうかそんな余裕なかったっていうか

「ちょっと触ってもいいですか」

「いいよ」

これは・・・ 段差なんてないみたいになめらか！ すっごーい

「前髪もいいですか」

「いいよ」

ここ ここだよね この流れが えっ

手 つかむ？

モリシタダイチが 私のこと 見て ずっと

この目 女神に似てる でも 私にはモリシタダイチの目で

なんか 顔 近づいてない？　なんか メチャ近く

「あっ！」

跳ねた

え、なに？

「あああああ」

どうした？　恐怖映画みたいな顔してるけど？

やだ何か後ろにいる？　いない

え　フルマラソン終わったランナーみたいな恰好でゼーゼーしてる

「大丈夫・・・ですか？」

大丈夫みたいに手をあげて

どうしたんだろう　なんか怖いんだけど

「フーーーーーッ」

あ　顔あげた

「生物　やっか」

「は　い」

わけわかんない

モリシタダイチの首から上と首から下のギャップもわけわかんないけど

煩惱

モリシタダイチのノートを見ていると
「私って生物メツチャできんじゃないね？」という錯覚に陥る
あぶないあぶない ちがうから
でも・・・ あのとあのあれはなんだったんだろう
どンドン顔が近づいてきて突然後ろに飛び跳ねてゼーゼー苦しそうにしてたけど
生物教えてもらってるときに何回も大丈夫ですかって聞いても大丈夫だって
あ 貧血？ 貧血で私の方に倒れそうになって・・・ そうかも
私が心配しないように黙ってた？ えええ 言ってよ
そういうのはさ、正直に言ってくれた方がいいよ
黙ってたら逆に何なのかわかんなくて心配しちゃうよ

シャワーも浴びて下着も洗って干して
いつもなら LINE がくる時間なのに 来ない
やっぱり具合が悪いのかな 寝てる？ そうかも
それならそうでもいいんだけどさ なんかモヤモヤする

『森下大一さん

具合が悪くて寝ているならそのまま寝ていてください
私はあなたが黙っていたらあなたが具合が悪いこととかいろいろわかりません
もしかしたらそれは私が鈍感だからなのかもしれないけど
だったら余計に言ってくれないとわかりません
あなたがいつも私に何か黙ってるカンジがして
いろんなこと言えないと信頼してもらってないのかなって思います
確かに私は頼りないからっていうか自分では何もできないから信頼できないかもだけ
ど
私はもっとあなたのこと知りたいです』

こんなの送信したってねえ てかこんなの送られてもねえ
削除しようアーーーーーッ 送信押しちゃったああああ
スルーしてくださいスルーをお願いしますいっそ電源 OFF にして欲しい
あ 既読 ついちゃった・・・
笑ってる？ ハア？ とか思ってる？ 思うよね 何書いてんのよ私もさあ

ピコン

えええ 見るの怖い

『上原愛里さん』

ピコン

『さすがに鋭くてちょっとビックリですよ』

鋭い？ これ あ 鋭だ 鈍ではない

ピコン

『そんじゃ正直に言います』

ピコン

『俺は自分の器の小ささに落ち込んでましたよ w』

器の小ささ？

ピコン

『メッチャ小せえ w』

ピコン

『煩惱だらけっス w』

煩惱って何だったけ？ 倫社でやったような・・・ あ これだ

“煩惱：貪り・怒り・愚かさの三毒に代表される悪い心の働き”

仏教ってよくわかんないよ

器の小ささって・・・

『あなたの器はどれくらいの大きさですか？』送信

ピコン

『メッチャ小さいっス』

『たとえばどれくらい？』送信

ピコン

『イチゴ一個しか入らないくらいっスよ』

なんだ

『イチゴが一個入るなら私は嬉しいですよ』送信

『一個も入らないより一個でもあれば嬉しい』送信

あれ 返信がない 何かヘンなこと言ったかな？

ピコン

あ 来た

『俺マジで泣きそうになった w』

泣きそうになった？ なぜ？

ピコン

『もし一個も入らないくらい小さかったらどうスカね？ w』

『器に入れないでそのまま食べさせてください』送信

ピコン

『なんか俺 悩んでたのバカみてえ w』

ピコン

『愛里はすげえ』

何かすごいこと言った？ 言ってないよ

ピコン

『煩惱まみれの俺っすけど精進しやす w』

『あなたが煩惱まみれでもダサイ赤の T シャツ着てもそれはどうでもいいです』送信

『あなたがそばにいてくれないと私は困ります』送信

ピコン

『やっぱあの T シャツダサイっすかね w』

『ダサイです』送信

『でもそれがあなたのセンスということだと思います』送信

ピコン

『ぜってえいいとは思ってねえよな w』

『見慣れました』送信

ピコン

『メチャ笑った www』

ピコン

『俺、愛里のこと信頼してっから』

ピコン

『英訳のノート』

ピコン

『ぜってえ愛里の方が正しいって思った』

なんか 嬉しい

ピコン

『愛里 ありがとう』

『自信はなかったんですけど正解でよかったです』送信

ピコン

『英訳だけじゃなくて 全部』

全部？

ピコン

『俺は幸せ者です！』

『私もです』送信

あ そうだ

『明日のお弁当にポテサラ入れるってできますか？』送信

ピコン

『www オーダー承りました！ www』

『』送信

ピコン

『なんだよこれ www』

『嬉しくて踊ってるところ w』送信

ピコン

『愛里マジおもしろえ www』

『あなたと LINE してると楽しいから』送信
『私から楽しみを奪わないでください!』送信
ピコン
『つかそれ俺が言いたいんだけど w』
『煩惱の沼に落っこちて LINE してくれなかった w』
ピコン
『助けてくれてありがとうございます浦島太郎さんw』
『あなたは亀よりこっち』
ピコン
『俺の血は赤いっすけど w』
『きっと青いです銅イオン入ってます』送信
ピコン
『愛里最高!』
何が最高なのかわかんないけど
『それでは、森下大一さん おやすみなさい』送信
ピコン
『愛里』
・・・・・・・・・・・・・・・・ なんだこの間?
『おやすみ』
よかった
てか 煩惱? 煩惱で落ち込む?
モリシタダイチは何を目指してるの?
とにかく
寝よう

「おはようございます」
「愛里、おはよっス」
煩惱まみれのモリシタダイチ
「なに」
「なんでもありません」
あれ? イチゴのヨーグルトがけのイチゴ メチャ量多くない? いいけど
そうだ 聞かなきゃ
「あの、聞いてもいいですか?」
「なに」
「あなたの進路のことなんですけど」
「進路?」
「あなたは将来お坊さんになりたいんですか?」
「お坊さん?」
「煩惱がどうか精進がどうか言ってましたよね」

「あ、それは・・・ そういうんじゃねえっつか」
「それじゃお坊さんになる予定はないってことですか？」
「ねえっス」
「ああ、わかりました」
ハァァ イチゴ美味しい
「あの」
「坊さんになる予定ねえから」
「じゃなくて、今朝のヨーグルトがけのイチゴ、いつもより量が多いですよ」
「ああ、まあ」
「それは、あなたの器には一個しか入らないから、せめてこれにはいっぱい入れたと」
その顔は 当たりか
「愛里はよー！」
「なんですか？」
「俺のことからかってんだろ」
「見たままの印象を言っただけです」
「そうっスよ、俺は煩惱まみれの器の小せえ男っスよ」
「いいですよ、いいって言ったじゃないですか」
「おう」
「あれからちょっと考えたんですけど」
「そんなん考えんなよ」
「煩惱って」
「いいつうの」
「なくなるものですか？」
「俺は煩惱まみれなうなんでわかんねえっス」
「煩惱をなくして行きつく先って何でしょう」
「んなこと考えなくていいんじゃねえかなあっ 早く食っちまえよ」
「あなたは今煩惱まみれなんですよ」
あ 泣きそうな顔で笑ってる
「そうっスよ、煩惱まみれっスよ」
あ・・・ やだ・・・ なんか・・・ 頭に浮かんじやって・・・
「なに笑ってんだよ」
モリシタダイチは真剣に悩んでるのに・・・ こんなこと・・・
「言えません」
「言えよ、愛里が言ったんじゃん、なんでも言ってほしいってよ」
「え・・・ それじゃ・・・ 言いますけど・・・」
「おう」
「煩惱まみれの方が・・・」
ああもう・・・ 本当にごめんなさいだけど・・・
「ウンチまみれよりいいかなって」
ごめんなさい

「あなたが・・・ あっちまみれじゃなくてよかったです」

「愛里は・・・」

「あっちまみれだったら、絶対近づきたくないです」

なんか声も出さないで 笑ってる？ 泣いてる？

「煩惱まみれの方でよかったです」

「そっか」

「はい」

え 肩震わせて 泣いてる？ あ 笑ってるんだ

「えっと、それじゃ、お先に」

えっ ギュッ？ なぜ抱っこ？

「これは・・・ 抱っこですか？」

「抱っこじゃねえよ」

それじゃなに？

「煩惱まみれっすからね、俺」

「ああ、そういうことですか」

よくわかんないけど

「んじゃ、いってらっしゃい」

「いってきます」

なんだろう 今 ギュッてされたときに ドキッてしたんだけど

煩惱が移った？ 心臓ヤラレるやつなの？

ええええ 煩惱・・・ 怖わ

盗撮問題

「上原さん、おはよう」

「川口くん、おはよう」

なんか 楽に話せるな

「あのさ、これドキュメンタリーじゃないんだけど」

え 犬？ 犬が出てくるの？

「予告動画があって」

え ヤバ

「川口くん、これ、予告だけで泣きそうなんだけどお」

「あ、こういうの好き？」

「好きっていうか、絶対泣くのわかるから避けてる系」

「でも、これはハッピーエンドだから、あ、ネタバレしちゃった」

「いいの、私、結末知ってる方が安心して観れるから」

「あと、これなんだけど」

少女マンガ実写化

「川口おいっす」

「森下、おはよう」

来た来た

「ねえねえ、これ、あなたが好きなやつですよ」

「あ これってねえちゃんが読んでたマンガじゃね？」

「森下少女マンガ好きなの？」

「あ、や、そういう」

「すっごいっばい読んでるみたいなの」

「愛里」

「おねえさんのマンガいーっばい」

「愛里いっす」

「それじゃ、これも」

「あ これもねえちゃん読んでた」

なんかすっかり映画同好会なんだけど

モリシタダイチの顔見たら ちょっとだけ煩惱消えた？ みたいな顔してる

お昼休み

お弁当のフタ開ける前からワクワクする

おお！ ポテサラ入ってる！ この揚げ物は何だろう

まずは写真

あ サクッと メンチカツ！ 美味しい！ 外はサクッと中はジューシー

ポテサラも美味しい！ 追加オーダーしてよかった！

LINEしよう

まずは画像送って・・・

『メンチカツ美味しいホテサラも最高』送信

そうだ イチゴを一個フルーツ入れのフタに載せて・・・ 写真

おお！ なんか映えてない？

これも送信

ピコン

『このイチゴの写真待ち受けにしていい？』

『いいですよ』送信

ピコン

なにこれ ハハハハ

イチゴかじった自撮りって

ピコン

『愛里も自撮り送ってくれよ』

だから自撮りあんまり得意じゃないんだけど

イチゴ一個顔の前に・・・ アゴのどこ切れちゃったけど 送信

ピコン

『』

ピコン

『』

どんな顔して送ってるんだろ 笑える

ごちそうさまでした！

「ラブリーーン」

ミカリンとアミリン

「ねえねえ」

グイッとベンチに引き戻されちゃった

私食べ終わっちゃったんけどな

「川口くんがラブリンにコクッたってホント？」

どこの誰がチクッた？

「コクッたっていうより、友だちになったってカンジ」

「友だち？」

「うん、今はすごく仲いいよ」

「なんだそうなんだ」

「うん」

「あのさ、ナッチがさ」
「ナッチ？」
「ほら私たちと同じクラスでモリシタダイチにコクッて撃沈した」
ああ あのナッチ
「昨日学食にモリシタダイチがいてね」
学食で食べてるんだ
「なんかね、携帯見てニヤニヤしてたって」
ニヤニヤ？
「しかもね、しかも、自撮りしてたって」
え・・・
「モリシタダイチが自撮りだよ？」
してたね
「動画もあるの」
「どっ動画っ？」
「ナッチが撮ったの、ほら」
ナッチ・・・ ほぼストーリー
「ほらほら、携帯見てニヤニヤしてるでしょ」
「ぼ、ぼやけてるから・・・よくわかんない」
「遠くから撮ったからちょっとボヤケてるけどさ」
遠くから・・・ もはや文春砲並み
「ここここ！ ほら、自撮りしてる！」
こんなカンジで自撮りしてたんだ
「カノジョかな」
「だよね」
いえ それは 多分 私
「ねえ、このミニトートさ、可愛くない？」
「私もそう思った」
本当？ 嬉しい
「カノジョが作ったのかな」
「じゃない？ ほらミニトートと自撮りしてるもん」
いえ それは 私が作りました
「ラブリンにもこの動画送るね」
「え、あ、それは」
「おもしろいから、はい、送った」
メッチャ複雑な気持ち
「ナッチがさ、明日はもっと近くの席で撮るって張り切ってたよ」
えっ
「今日はジャマが入って撮れなかったからって」
それは・・・ 危険だ かなり危険だ メッチャ危険！

玄関のドアを開けたら

「おかえり」

自分が危険にさらされていることを知らないモリシタダイチ

「話があります」

「え おう」

ダイニングテーブルを挟んでモリシタダイチと私

「ちょっと・・・っていうか、かなり怖い話なので」

「あ？」

「あなたは今 とっても危険な状態にあります」

「それってさ」

え？ 気づいてる？

「また俺の煩惱の話か」

「煩惱なんてどーでもいい！ まみれるならまみれてやがれです！」

「なんだよそれ」

笑ってる場合ではない笑ってる場合ではないのよモリシタダイチ

「あなた、盗撮されています」

「あ？」

「学食で携帯見てニヤニヤしたり自撮りしてるところを動画で撮られてるんです！」

「なんで？」

「なんでって、理由は知りませんが撮られてるんです！」

「へえ」

「へえじゃないでしょ！ もっと危機感持ってください！」

「なんで？」

「だからあっ あなたが携帯持ってニヤニヤしたり自撮りしてるところを撮られてるんです！」

「学食だから、誰かは見てんじゃね？」

ハアアアアアアア

「白目向くようなことじゃねえだろ」

「それじゃ・・・ あなたは盗撮されてもいいということですか」

「正直言うけど」

「はい？」

「慣れてっから」

・・・・・・・・ 慣れて・・・・・・・・ いる・・・・・・・・

「小学校んときから」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あんま気分はよくねえけど、いちいち文句言うのもめんどくせえっつか」

「そう・・・ですか」

パパラッチ慣れた芸能人みたいなカンジ？ わかんないけど・・・

「んなたいしたことじゃねえって」
たいしたことではない・・・ そうか・・・って ちがう！
「たいしたことですよ！」
「だからさあ」
「小学生のときとか中学生のときとか、高校、一年のときも？」
「ああ」
「それはまああなた一人の問題でしたけど、今は違いますよね？」
「愛里がイヤっつうこと？」
「私は関係ないでしょ！」
「そんじゃなに？」
「あなたが好きな人！ あなたのカノジョ！」
「ハ？」
「もしその人があの動画を見たらすごく」
「愛里はその動画見たんか」
「見ました」
「そんでどう思った？」
「ああこういう顔で LINE 見てたのかあ、こういう顔で自撮りしてたのかって」
「だったらいいじゃん」
「私の反応はどーでもいいんです！ あなたの好きな人が見たら！
メッチャショックで傷ついて怒って泣いて死にたくなっちゃって」
なに なにその危機感ゼロの顔で私を見てるのよっ
「時間からしたらどう考えても私との LINE ですよ？ カノジョわかりますよ？」
なに？ なにそのおもしろいものでも見てる顔？ 私がパニックしてるから？
あ そっか 私がパニックることはなかった 私には関係ない話だった
「もういいです」
「そんじゃさ」
いいですよもう 私は関係ないし あなたのカノジョがどうなろうと知りません
「もしも、もしもだけどさ、もしも、愛里が俺のカノジョだったら？」
「だったら？ って何ですか？」
「もしも愛里が俺のカノジョで、俺が、まあ浮気？ してたらどうする？」
「私があなただのカノジョだとして？」
「もしも、だったらどう思う？」
「私が・・・あなたの・・・カノジョだとしたら・・・」
モリシタダイチのカノジョだとしたら・・・んっと・・・
「怒る？ 泣く？」
えっと・・・モリシタダイチが・・・
あれ？
「ない」
「ない？」
「これは私の体感ていうか感覚っていうか」

ずっと感じてきた感覚だと・・・

「あなたは仕事で私のそばにいてくれますけど、それでも、私のためだけに、お弁当作ったり、いろんなことしてくれて、なんていうか・・・あなたの全神経が・・・私だけに向いていて・・・その中にいると・・・息が楽にできるっていうか、すごくホッとして、私のことだけ見てくれてるって、そこには何も入る隙間もないっていうか、そんなことも考えなくていいっていうか」言葉にしていくうちに・・・なんだろう・・・ちょっと・・・悲しくなって「だから、あなたが他の人となんて、ないです」

「そっか」

「はい」

そうだよね・・・だから・・・

「私が余計な心配する必要なかったです」

え　なんで　泣きそうになってるの

「着替えてきます」

今日の夕食は具だくさんのオムレツ

美味しい　もういちいち美味しい

「愛里、ケッチャップ口んところについてっぞ」

「え？」

こっち？　あ　ちょっとついてた

「取れました？」

「まだついてる」

モリシタダイチが指で　指を・・・私のくちびるの上にゆっくり

「イデッ！」

フッフッフツ

「噛むか？　思いつきし噛むか？」

「な～んか煩惱感じちゃったんで」

「えっ」

「あ、私、煩惱の意味ほぼわからないで言ってるだけですから」

「あ・・・　ああ、そっか」

噛まれた指見てる　痛いんだろうな　けっこう強くかじってやったから

「そうだ、あなたの動画見ます？」

「愛里持ってんの？」

「友だちが転送してきましたから、その友だちは撮影してないですけど」

「へえ」

「見ませんか？」

「べつに見たくねえよ」

「見ましょう、あなたが世間からはどう見えているのか」

「なんだよそれ」

ほらほらどうよ？

このニヤニヤした顔と一人で自撮りしてるある意味イタイ高校生男子

「これってさ・・・ 昨日じゃね？」

メチャ冷静に見てる 私だったら昨日なのかいつなのかわからないでパニックる

「そうらしいです」

「へえ」

「明日はもっと近くで撮るそうです、今日はジャマが入ったとかで」

「ジャマ？」

「なんか知りませんがそうらしいです」

「川口か？」

「川口くん？」

「俺、端っこの席に座っててさ、そしたら川口が横に立ってさ、

なんか知らねえけど突然映画の話始めてさ、ここ空いてっから座れよっただけで

後ろの方チロチロ見ながら、まだ、まだって、なんかヘンなやつだなあって」

それは・・・

「川口くんが盾になってあなたを守ってくれたんですよ！」

「んなことしねえでもいいのに」

「我々一般ピーポーは、あなたのように盗撮慣れしてませんから」

「盗撮慣れはしてねえよ」

「慣れてるって言ったじゃない」

「まあ・・・ 慣れてっけど」

否定しないところがすごいよ

「川口くんはあなたのナイトですね」

「ナイト？」

「騎士です、命を懸けて姫を守る騎士」

「俺、姫かよ」

「騎士川口とダイチ姫、ラブコメできそうですねアハハハハハ」

「誰が見んだよ」

「私 見ますアハハハハハ」

「愛里、頭ん中でぜってえヘンなの想像してっだろ」

「はい ハハハハハ」

「愛里の想像力って・・・ メッチャ怖え」

「え、グフッ」

「今何想像した？」

「あなたが・・・金髪の縦ロールの・・・ハハハハハハ」

「マジ怖え！」

「もしかしてこれって煩惱ですかアハハハハ」

「笑いながら言うか」

「だって・・・マジ消えない・・・アハハハやだフーーフーーフー」
「愛里」
「はいい」
誰か笑い止めてえええ
「愛里の煩惱のとらえ方、ほぼ間違っつぞ」
「えっ」
間違えている？
「どうしよう 倫社 落とすかも」
「あ？」
「助けてください」
「倫社は覚えるっきゃねえんじゃね？」
「覚えられないです、あんな大昔の人が言ったことなんて、だからなに？ って」
「あ？」
「デカルトの？ 我思う故に我ありって、それで自分が存在してるかどうかって、
つねればよくない？ つねれば痛いからわかんじゃね？ みたいに思っちゃうと・・・
ぜーんぜん覚えられなくて」
え なんで突っ伏して 肩震わせて デカルトバカにしたから怒り？
あ 笑ってる 笑ってる？ 笑う？
顔あげた なにその恨めしそうな目
「まあ、とにかく」
絶対笑いこらえてるよね
「盗撮に関しては」
ほら くちびる震えてるもん
「俺がなんとか、まあ、考えとく」
あ くちびる嚙んだ
「そうですね、もしものときには・・・ 川口くんに・・・助けてもら・・・」
「愛里！ もう考えんな！」
「はいいいい」
はあああ もう なんかもう 何の話かわかんなくなっちゃった

夜の野原から

呼吸：異化反応＝分解することでエネルギーを取り出す反応
呼吸はグルコース（ $C_6H_{12}O_6$ ）を分解しピルビン酸・・・

ぜーったい覚えられない

なにこの化学式？ 暗証番号かよ！ ってカンジ

ピコン

あれ？ 今日はちょっと早い

『愛里』

『はい』送信

ピコン

『姫は何をしていましたか』

あなたは騎士川口のダイチ姫だけどねグフッ

『質問です』送信

『グルコースの化学式は？』送信

ピコン

『 $C_6H_{12}O_6$ 』

あ もうレベル違う 即答って

ピコン

『愛里が何やってんのかわかったw』

『脳みそこんなカンジ→』送信

ピコン

『そんじゃ少し散歩しませんか』

散歩？

ピコン

動画？ 動画ってことは今じゃないよね

これは・・・ どこだろう

暗くてよく見えないけど 外だよね

「愛里、ここは俺ん家の近くの野っ原で」

モリシタダイチの声

「小さいときはとうちゃんと散歩にきて、最近はどうちゃんと二人で話す、

なんつうか、俺とうちゃんの秘密基地、基地じゃねえか、ただの野っ原」

そういえば、モリシタダイチがどこに住んでいて

私の家から帰ったら何をしてるか全然知らない
「なんか愛里に見せたくなくてここに来た」
照れ笑いか LINE なら「w」かな
「見えっかなあ」
映像が上の方に あ ちょっとブレて酔いそう
あ なんか白い丸 月？
「月がきれいっス」
月を見せてくれるため？
「つことで」
あ 自分の顔写してる
「以上 森下大一でした！」
ちょっと照れ笑いして切れた
なんだろう なんか 淋しくなってきた
『月を見せてくれてありがとう』送信
『あなたとあなたのお父さんの秘密基地も w』送信
『でも』送信
でも・・・
『正直に言っていていいですか？』送信
ピコン
『いいよ』
『できるなら本当に一緒に見たかった w』送信
ピコン
『』
あ 傷つけた？ せっかく送ってくれたのに？ だよねえ
ピコン
『愛里はいつも俺のハートを射抜くぜ w』
『それは 傷ついたってことですよね』送信
ピコン
『愛里の絵文字の解釈独特過ぎ w』
ピコン
『』
目の細い人と言わせようとしてるよね
『無表情』送信
ピコン
『正解は 目の細い人 w』
バカにしやがってー
『これは？ 』送信
ピコン
『俺なんだろう？ w』
『タコです』送信

ピコン
『引っかけ問題かよ w』
『ふつうです w』 送信
ピコン
『愛里、ちょっとだけ電話していい?』
『いいですよ』 送信
かかってきた
「愛里」
「はい」
「なんかここで愛里の声聞きたくなった」
ピッ 切ってやった
ピコン
『愛里どした?』
ピコン
『俺なんか言った?』
だってさ
『電話で済ませないでください』 送信
『いつか必ず私をそこに連れていってくれるって約束してくれたら』 送信
『電話に出てあげますよ』 送信
ピコン
『ぜってえ連れて来る』
ピコン
『俺はぜってえ愛里をここに連れて来る』
『だったら電話に出ます』 送信
速攻!
「愛里はよー！」
「意地悪?」
「たまんねえ」
また出た たまんねえ
「愛里」
「はい」
「愛里」
「なんですか?」
「たまんねー！」
声大きいよビックリしたよ
「明日の弁当の追加オーダーはないっスか?」
そうだなあ
「タコ」
「タコ? タコは買ってねえなあ」
「ウソです冗談です ハハハハ」

「なんだよ」
なんだよって声が　なんか　メチャ優しくて
ちょっと　次になんて言っていていいかわかんなくなって
「あの」
「なに」
なにって声も優しくて
「えっと・・・　いか」
「イカ？　イカも買ってねえな」
「じゃなくて、呼吸は異化反応・・・ですよ」
「そっちか」
笑う声も
「異化反応です」
「そういうの考えなくても・・・　呼吸していいんですよ」
「みんなほとんど考えてねえと思うよ」
笑ってる
「そうですよね」
「なんで？」
「なんか・・・　ちょっと苦しくなって」
「なんかあったんか？」
「何もないけど、なんか、苦しいです」
沈黙が・・・
何言ってるの私？
「えっと、あの」
「吸え」
「え？」
「俺は愛里の空気なんだろう？」
あれ・・・　なんか・・・　涙出るんだけど・・・
「俺は愛里の空気だ　吸え！　いっぱい吸え」
なんで泣いてるんだろう
「愛里」
「はい」
あ　声で泣いてるのわかっちゃうかな
「愛里のそばにいつからさ」
もうやめてよお　もっと泣いちゃう　なんで泣いてるんだろう
「いてくれますか」
「いるよ」
「グルコースを分解してふたつのピルビン酸にするまで？」
「なんだよそれ」
笑ってる
「何言ってるのかわからないですけど、プリント読んだだけだから」

携帯から笑い声が聞こえる

「正直、俺もちょい苦しいっス」

え

「そこ、野原ですよね？」

「ああ」

「いっぱい呼吸してください、草が光合成で酸素出してますから」

「今、夜だから光合成はしてねえと思う」

「あ、そうだった」

笑ってる

「それじゃ私はそろそろシャワー浴びてきます」

「おう」

「おやすみなさい」

「愛里 おやすみ」

優しい声　すごく優しい

ピッ

なんか今夜の LINE は 楽しいって言うより 苦しい？ 悲しい？ ちがうな
煩惱？ 煩惱がわかんないからよくわかんないな

こころ

「おはようございます」

「おはよっス」

あれ？　なんかそっけないっていうか　こっちあんまり観ないっていうか

「あの」

「どした？」

ほら　こっち見ない

「照れてます？」

「ハ？」

「照れてますか？」

「なんで俺が照れんだよ」

「ゆうべ、あなたの大切な場所の動画送ったり電話してきてたまんねえとか」

あ　固まってる

「乙女っていうか」

「乙女えええっ？」

「あ、違う、乙女っていうより・・・」

これ？

「夜中に思ったことそのまま書いて、朝見たら叫びたいくらい恥ずかしいみたいな」

その恨めしそうな目は　アタリですね

「そのせいで私も情緒不安定になりました」

「え　俺のせい？」

「いえ、なんかわかりませんが」

「愛里」

「はい」

「なんか今日トゲトゲしてねえか」

「してますか？」

「なんかキツイツウか」

「なんかヘンなんです」

「ヘン？」

「なんか・・・わかんないけどおお・・・」

「あ、愛里、どした？　なんで泣いてんだ？」

「わかんないですう」

だからあ

「ヨシヨシって言いながら抱っこしないでください！」
「どうすりゃいいかわかんねえからさ」
「どうもしなくていいです こうしてると・・・ ちょっと楽になりました」
「そっか」
心配そうに見てる
「ごめんなさい」
「謝んなよ」
「でも嬉しかったです」
「え？」
「動画送ってくれて電話かけてきてくれて」
「さっきは乙女つつったじゃんよ」
「そうですけど、なんか私の乙女心も刺激されちゃって」
携帯のファイル あった
「イチゴの花言葉調べちゃったりして」
あきれたような顔で笑わないでよ
「イチゴの花言葉は、あなたは私を喜ばせる ù 幸福な家庭 ù 尊重と愛情 ù 先見の明
　　すごくステキな花言葉だなあって」
「そっか」
「イチゴが好きでよかったあ」
「わかったから早く食えよ」
「はい」
あれ？ この人・・・ 今日盗撮されるんだ
まあいい 本人がなんともねえよっ言ってるんだから 私は知らない

「上原さんおはよう」
騎士川口
「おはよう」
なんか言いたいな 言ってしまいたい
「川口くん」
「なに？」
「私の中であなたの愛称決まった」
「愛称？」
「騎士」
「あ！ もしかして」
そう、あなたがモリシタダイチを守ったから
「シドニアの騎士好きなの？」
ン？？？
「僕も好きなんだよ、タニカゼナガテがモリトの・・・」
何を言ってるのか全然わかんない

「川口おはよっス」
現れたダイチ姫
「森下おはよう」
そして騎士川口
あ・・・ ダメだ・・・ 笑いが・・・
「上原さん、どうしたの？」
話しかけないで・・・ もっと笑っちゃう・・・
「川口、放っと思ったほうがいい」
やだもう・・・ 止まらない・・・
「でも泣いてるよね？」
「笑ってっから」
「えっ？ 笑ってるの？ 涙出てるよ？」
「俺とおまえのラブコメ想像して笑ってっから」
「ラブコメ？」
「あああもーっ ハハハハハハ」
「な、笑ってっだろ」
「上原さんて、おもしろいね」
「メッチャおもしろえよな」
ハァァァァァ？
「私はふつうです、二人の方が・・・ グフッ」
「上原さんて想像力が豊かなんだね」
「豊か過ぎて怖えよ」
いいから・・・ 私にかまわないで・・・ フーッー おさまった
「森下、今日も昼は学食？」
「ああ、まあ、どうかな」
「学食行くなら僕も一緒に行くよ」
守ろうとしている・・・ グフッ
「上原さん？」
「放っと思ったほうがいい、情緒不安定だっつってたから」
誰のせいよっ？
睨んだらフッて笑って自分の席に戻っていった
いっそあの浸ってる動画みんなに転送してやろうかっ
いや、あれは盗撮ではない 自撮りだ

お昼休み

今日のお弁当は・・・ あ！ タコさんウィンナー！ 赤いのじゃないけど
私がタコって言ったから？ フフフ 可愛い
卵焼きとアスパラの・・・ え？ えっ？
「なっ なんでここに？」

「学食だと盗撮されんだろ？」
「だからって、ここは・・・」
「いいじゃん、いっつも晩メシ一緒に食ってんだから」
「それはそうですけど」
「タコさんウィンナーを見て喜んでいる上原愛里」
携帯？ あっ 動画撮ってるー！
「盗撮しないで！」
「どんな顔して食ってんのか見たかったから」
「ああそうですか」
同じお弁当 あれ？
「あなたのタコさん、ちょっと焦げてますよね」
「ちっと焦がしちまった」
「卵焼きも端っこの方ばかり」
「食えりゃいいじゃん」
そうかもしれないけど
「活きのいいタコさんをあげます」
1個お箸でつまんでモリシタダイチのお弁当箱へ入れ・・・ようとしたらっ
「パクッて！ 私のお箸ですけどっ」
「俺が作ったタコさんですけど」
睨んだら 笑ってる
まあ いっか
「愛里はいっつもしあわせそうな顔して食うよな」
「だって、あなたが作るものは全部美味しいから」
「そっか」
「しあわせです」
「そっか」
「いっつもここであなたのお弁当食べてしあわせな時間なんですけど、
二人で食べると楽しいですね」
「おう」
「学食で食べると盗撮されるから逃げてきたんですか？」
騎士川口が守ってくれるけど フッ
「ちげえよ、あと2回だからさ」
「2回？ 何が？」
私のこと見て微笑むだけのモリシタダイチ
「明日も俺ここ来ていい？」
「いいですよ、私専用の場所じゃないんだから」
「そっか」
盗撮は避けられると思う

現国 夏目漱石 ころ

な～んかよくわかんない てか つまらない てか 暗い

中学のときにやった「吾輩は猫である」の方がおもしろかったな

「歯が餅の肉に吸収されて」ってところがメチャリアルでおもしろかった

あ 頭 飛んでた

「漱石が教師時代、I love you を『月がきれいですね』と訳したという逸話があるが」

え？

「あれは都市伝説的なものであり・・・」

月がきれいですね？

モリシタダイチの動画・・・ 月がきれいっス

いやいやいや、あれは違う お父さんとの秘密基地を見せるために・・・

なんだろう

だったらいいなって ちょっと

なわけない だって モリシタダイチには・・・

ころ マジわかんないんだけど

ナポリタン

今日の夕食は・・・ ナポリタン！

「美味しい！」

「マジ？」

「日本人はやっぱりナポリタンですよね」

「なんだよそれ」

笑ってるけど

「私、小学生？ 中学生？ のときに、ナポリタンはイタリアのナポリ発祥じゃなくて、日本の喫茶店が始めたみたいなこと知ってビックリして」

「へえ」

「イタリアって北部と南部では食文化が違うらしいです」

「そうなんか」

「南部は魚介類も豊富だし農産物も豊富で、トマトソースやオリーブオイル、日本でイタリア料理って思われてるのは主に南部のものだそうで、北部は企業の本社とか工業地区が多くて、バターとかそういうギトツとしたカンジ？」

「そんなによく知ってるな」

「地理の試験勉強してたら、ついこっちに迷い込んだじゃった・・・だけです」

笑ってるけど

「私のパパは、まあ食通？ だからけっこう有名なお店とか連れていってもらってたしかに美味しいんですけど、さすが！ みたいなカンジですけど、なんかよそ行きの味っていうか、ホッとしないっていうか」

え なに？　なんでジッと見てるの？

「なんですか？」

「怖え」

「怖い？」

「俺のかあちゃんもおんなしようなこと言ってっからさ」

女神も！　またまた光栄です！

「とうちゃんと出会う前は、けっこういい店食べ歩きしてたらしいんだけどさ、とうちゃんと出会ってからは外で食う気になんねえつつって」

「わかります」

「わかんの？」

「はい」

「今も仕事で会食とかあんだけど、帰ってくっと速攻でとうちゃんの握りメシ食ってさあほホッとすつつってさ、高っけえメシ食ってきた後でとうちゃんの握りメシって、

なんかおもしれえなって」
「あなたのお母さんはあなたのお父さんの味に出会ってしまったからです」
「あ？」
「自分のためだけの自分のためだけに作ってくれたおにぎり、しかも美味しい
　　ホッとして心もお腹もすべて満たされてしあわせ！ って なりますよ」
「へえ」
「へえって、わかりませんか？」
「俺は食えりゃいいつつうか」
食えりゃいい 着ればればいい ああもう この人はっ
「なんだよ、なんでそんな顔して見てんだよ」
「いいです、あなたに言ってもわかりませんどーせわかりません」
「だからさあ、そうやってバツツと俺を切り捨てんなよ」
「だったらまあ言いますけどどうせわからないと思いますけど」
「どうせって」
情けない顔で笑ってるけど、食えりゃいいって人にはわからないっつの
「高級だろうと五つ星だろうと、それはお金を払った人なら誰でも食べられます」
「はあ」
「だけど、あなたのお父さんのおにぎりは、お母さんのためだけに作った
　　この世でたったひとつしかない、しかも愛がいーっばいのおにぎりなんです」
なんかジッと見てるけど わからないでしょうよ
「はああお父さんの腕の中に帰ってきたあ、これだよねえみたいな」
この顔はわかってないよね
なんて言えばわかるのかなあ わかる気がしないけど
「えっと、たとえば・・・ あ、そうだ！ あなたが作ってくれるお弁当！」
「弁当？」
「あなたは仕事とはいえ、私のためにだけ作ってくれるじゃないですか」
「あ・・・まあ」
「このお弁当は私のためにだけ作ってくれた、しかも超絶美味しい！
　　ああ、ホッとする、ああ、美味しい、ああ、しあわせ！ ってなるんです」
なに まだわからない？ てか、なんでそんなシリアス路線な目で見てる？
「ホッとするんですよ、ああやっばこれだよねえって、一生これ食べたかった」
なんか全然反応ないんだけど？
「他のものが食べられなくなるんです！」
生きてるかなあ
「ここに五つ星シェフが作ったお弁当とあなたのお弁当並べられて、
　　さあ、どっちを食べる？ って言われたら、私は迷いなくあなたのお弁当です！」
あれ？ なに？ 席立って出てっちゃった？
ええっ？ 私 何か悪いこと言った？ 言っていないよね？
あ 戻ってきた
「悪い、目にゴミ入っちゃってさ」

目にゴミ？　　そういえば確かに
「目が赤いです」
「あ、ちょっと、かなり痛てえつつうか」
「目薬ありますよ」
「もう取れた」
「言ってくださいよ！　　突然立ってどこか行っちゃうからビックリした」
「悪い」
「私何か悪いこと言ったかなあって」
「言ってねえよ、全然言ってねえ」
「そうですか？」
赤い目で私のことジッと見てるけど
「私が言った意味、わかりましたか？」
「メッチャわかった」
よかった
「目が痛てえくれえわかった」
それはゴミが入ったからでしょ！
あれ？
「アーーーーッ！　　ケッチャップがーーーー！」
「どした？」
「私っていつもこう！　　いーーーーっもこう！」
「愛里？」
「お気に入りの白のトップスやワンピース着たときに限って、なぜか限って！
　　ケッチャップやお醤油こぼしちゃう、ああああもう」
「取れっから」
「え？」
「すぐならシミになんねえで取れっから」
「すぐ？」
「できればすぐ」
「ここで脱げはいいですか？」
え？　　吹き出す？
「部屋行って着替えて持ってきたら取っから」
「ええええ　　神！」
「いいから早く着替えてこいよ」
「はい！」
美味しいナポリタンにシミ取りまで！　　最高！

古いハブラシって言われたからママのを持ってきちゃった
クレンジングオイルもママのを持ってきちゃった
タオルを挟んで洗剤とオイルつけてトントンて　あ　落ちてる
「リコピンは水溶性だからさ、すぐ繊維に浸透しちゃうつつうか」

化学？　なんかわかんないけど私はシミさえ取れてくれればいい
「よっしゃ、あとは洗濯すりゃきれいになっから」
洗濯用の網に入れて洗濯機まわして
「あとは俺やっとくから」
ああもう頼りになる！
「ありがとう！」
え？　なんで抱きつく？
「愛里」
耳元で・・・
「愛里はよ」
なに？
「んっつによ」
だからなに？
「俺、涙出るくれえ・・・」
涙？
「困っちゃうよ」
困る？
「ガキでさ！」
「ハァアアアア？」
笑って腕放した
そんなことを言うために抱きついのか　こいつはっ
「ケチャップついたらさあっ」
怒ってる？
「俺がぜってえ取ってやっからっ」
「はあ」
「好きなだけ食べよ！」
「はあ」
「俺が作ってやっからさ！　好きなだけ食べよ！」
言ってることと怖い顔して怒鳴ってるカンジがバラッバラなんだけど
「だから、なんつうか、そういうことだよ」
どういうこと？　なんかわけわかんないんだけど
「怒ってます？」
「怒ってねえよ！」
カンペキ怒った口調で言われてもさあ
「なんかよくわかりませんが、私はあなたのナポリタンが好きです」
「そっか」
「ホッとします」
「おう」
なんかちょっと照れてる？　なぜ？　まあいいけど

闇歴史

フライパンを洗っているモリシタダイチ

それをボーーーーーッと見ている私

「愛里」

「え、あ、はい？」

「愛里は・・・ 水族館とか行きてえとか思ったりすんの？」

水族館・・・

あそこには・・・

「愛里 どした？」

え・・・ 言う？ 言ったら・・・ でも・・・

「なんだよ、なんで怖え顔で黙ってんだよ」

「水族館には・・・ ト라우マがあります」

「水族館にトラウマ？」

「トラウマっていうか、私の闇歴史っていうか・・・」

なんか口あけてなんかわかんない表情して私を見てるけど

「聞きたいですか？」

「聞きてえ」

即答？

「聞いたら、あなた、二度と私と口をききたくなくなりますよ」

「それはねえから」

なぜ断言できる そんな軽いことではないのよ

「では・・・ 言います」

これを知っているのは私と一緒にいった三人だけ

「中学のとき、友だち三人と水族館に行ったんです」

蘇るあの・・・

「南のさかなたちっていうコーナーがあって、あの・・・ 赤とか黄色とか」

「ああ」

「青い魚がいて、他のみんなは、きれい！ って言ってたんですけど、

私、説明書きを見てしまって、それは沖縄では食用だって書いていて、

それで私、つい、これって食べたら美味しいのかなって言っちゃったんです

みんな黙っちゃって・・・」

ちょっと顔見れないな

「チンアナゴって知ってますか、あの地面からユラユラ、紐みたいな」

「知ってる」

なんか声震えてる・・・ だよね・・・ 怖いよね

「みんなが可愛いって言ったのと同時に、ウワッキモ！ って言っちゃったんです

なんか三人の視線が・・・ まあ、ちょっと、他にもいろいろあるんですけど」

なんか思い出すだけで気持ちが重たくなるよ・・・

「最後におみやげコーナーに行って・・・

みんなはイルカのぬいぐるみや小さいぬいぐるみがついたキーホルダーを

可愛い！ 欲しい！ って見てたんですけど、私はそういうのは全然興味なくて、

欲しいとは思いませんでした、欲しいとは思わなかったんですけど、

タコの足のメッチャリアルなキーホルダーがあって、

うわっメッチャリアル！ この吸盤のどこなんてキモいくらいリアルって見てたら、

愛里怖いって言われたんです、愛里怖い、その日の私のすべてを物語る言葉です」

黙っちゃってる 黙っちゃうよね こんな・・・

「それ以来私は・・・」

「俺・・・」

ん？ え？ 笑ってる？ 笑ってる 笑う話じゃないよね？

「メッチャ愛里と水族館行きてえ」

ハ？

「俺、水族館とか」

笑って震えながら言う？ てか、なぜ笑ってる？

「興味ねえつつうか、魚泳いでんの見てどこが楽しいのかって」

なんで笑ってるのかな 私の話聞いてた？

「それでも、愛里となら、水族館行きてえ」

私の話がうまく伝わってない？ いや、そのまんまを話したよね話したよ

「私と 水族館へ 行きたい と」

「行きてえ」

「今の話、ちゃんと聞いてましたか？」

「俺ぜってえ愛里と水族館行く」

この人 アタマおかしいのかな

「そうですか」

なんかわからないけど もうこの話はここで終わりにしたい

モリシタダイチは なぜ突然水族館の話をしたのかな

あ そうか 好きな人と行こうと思ってるんだ

それで私にどんなカンジ？ って聞こうと思った だよね

ぜんぜん参考にならなかつたよね てか あんな話なぜ私もした？

モリシタダイチ、大丈夫ですよ、あなたの好きな人はちゃんとした反応してくれます

その人だけではなく、私以外の女の子は期待どおりの反応すると思う

なんであんな話しちゃったかなあ

落ち込んでるよ 落ち込んでる場合じゃないんだけど
明日の化学の予習しないとなんだけど
なんで英単語は覚えられるのにたったこれだけの元素記号が頭に入らないかなあ
もういい シャワー！

ピコン

『愛里』

最近はこの文字見るだけでモリシタダイチの声が聞こえるよ

『はい』 送信

私の声は聞こえるかな

ピコン

『明日の弁当、追加オーダーありますか？』

『明日はシェフのおまかせでお願いします』 送信

ピコン

『承りました w』

明日は何かなあ

ピコン

『愛里』

ピコン

『俺さ』

ピコン

『すっげえ宝掘り当てた気分』

宝？ 掘り当てた？

『どこを掘ったんですか？』 送信

あれ？ なにこの間？ トイレ行った？ LINE 中に？

トイレしながら LINE されるのもイヤだけど 見えないけど

ピコン

『マジで大笑いした wwwww』

わからない モリシタダイチの笑いのツボが謎過ぎる

『何を掘り当てたんですか？』 送信

ピコン

『愛里』

『はい』 送信

ピコン

『だから愛里』

だから？

『はい』 送信

『呼んだんじゃねえんだけど wwwww』

えええええええ 意味がわからない

ピコン

『月がきれいですね』

クイズ？

『夏目漱石』送信

ピコン

『ぜってえそう返ってくると思った wwwww』

『現国の先生が言ってましたから』送信

『そして私調べました』送信

ピコン

『何を？ w』

『本当は夏目漱石はそう言ってないそうです、日本人たるものそんな図太い言い方するな

月がとっても青いからとでも言っておけて言ったとか書いてました』送信

『でももし月がとっても青いからって言われたら』送信

『この人、目がヘンなんじゃないかな？ 眼科行った方がよくない？ って思う』送信

『夏目漱石ってよくわかりません』送信

ピコン

『想像してみてください』

何を？

ピコン

『夜中に一人で携帯見て声出して笑っている男子高校生』

夜中に一人で・・・ ウワッ

『キモッ』送信

ピコン

『それが今の俺です wwwww』

『正直キモイです』送信

ピコン

『笑わせてんのは愛里なんすけど w』

私？

『あなたの笑いのツボが謎です』送信

ピコン

『俺のツボは愛里です』

私？

『よくわかりませんが、あなたが楽しいならよかったです』送信

ピコン

『俺は愛里といると楽しい』

『私もあなたといると楽しいです』送信

『でも』送信

『夜中に一人で携帯見て笑っているのはキモイです』送信

ピコン

『愛里といると』

ピコン

『しあわせです』

私といると しあわせ

私といるとしあわせ？ 本当？

『私もあなたといると』送信

『しあわせです』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『月がとっても青いから』

完全にイジッてる

『あなたの場合』送信

『精神科に行ってください』送信

ピコン

『たまんねえ！ www』

何がたまらないのかわかんないけど・・・

『私といるとしあわせの部分もイジったんですか？』送信

ピコン

『マジ』

そっか よかった

『私はそろそろ寝ます』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

『おやすみなさい』送信

明日のお弁当は あれ？ 明日って・・・ 金曜日

明日が最後のお弁当？ 実感ない

まさか・・・ モリシタダイチ・・・

私が好きだって言ったもの全部詰め込んでこないよね？

オムライスにハンバーグにドライカレーにポテサラに・・・ とにかく全部

イヤだなあ メッチャ最後感

そういうのやめてほしい

おまかせって言わなきゃよかったかな

もう遅いよ

寝よう

最後のお弁当

「おはようございます」

「愛里、おはよっス」

なに？　なんでジッと見てるの？

「何ですか？」

「あ、や、なんでもねえ」

もしかしたら　この人・・・

イチゴのヨーグルトがけを食べながら

キッチンに立っているモリシタダイチを・・・

さっき私をジッと見てたのは・・・

やっぱり　私の好きなものすべて詰め込んだお弁当を作ってきたんだ

ほら！　愛里の好きなもの全部入ってるよ！　みたいなの？

サプライズ～イズみたいなの？

どうしよう　そのサプライズにうまく応えられる自信がない

予測できちゃってるものを、まったくわからなかったみたいに・・・　ムリ

でもねえ　私を喜ばせるためにギュウギュウに詰め込んで大変だったと思う

だけどねえ　なんか予測できちゃったからねえ　どうしよう

「愛里？」

「え、あ、はい」

「なんか・・・　元気ねえけど」

「いえ、あの、元気です」

「なんか顔引きつってっけど」

顔に出てる？　今から？

「えっと、なんていうか、あ、化学の元素記号が、なんか、覚えられなくて」

「そっか」

「はい」

「愛里はウソがクッソ下手だな」

「えっ」

「本当は？」

言えるわけないでしょ！

「言えよ」

どうする？　言えない　でもウソ下手って

「あの・・・　自信がないです」

「なんの？」

「あなたのご期待に添えるかどうか」

「あ？」

「とにかく、私なりに、頑張ってみます」

首ひねりながら笑ってるけど

「愛里、弁当」

この中に・・・ 私の好きなものフェスが・・・

「どした？」

「え、いえ、ありがとうございます」

「愛里、どした？」

「いえ、あの、お先に」

「ああ」

ごめんねモリシタダイチ！ サプライズにはうまく応えられないと思うけど
あなたの作ったお弁当が好きってことは本当だから

「上原さん、おはよう」

「川口くん、おはよう」

ちょっと 川口くんに聞いてみる？ ちょっとだけ

「川口くん、水族館行ったことある？」

「あるよ」

「南の魚で、沖縄では食用の青い魚・・・」

「イラブチャー？」

「名前は知らないけど青い沖縄では食用の・・・」

「美味しいらしいよ」

「え？ そうなの？」

「僕も食べたことはないけど、刺身でも美味しいんだって」

「そうなんだ」

川口くんとは話が会いそう 一緒に水族館行っても

「でも僕が興味あるのは深海魚でさ」

「深海魚？」

「テラマチオキナエビスっていう肉食性の巻貝がいてね」

川口くんのこういう・・・なんていうか・・・マニアックなところが・・・

まあいいけど いい人だから

「川口、おはよっス」

「森下、おはよう」

「何の話してんだよ」

「深海魚」

深海魚の話なんてしてないよ！

「愛里は深海魚に興味あんの？」

「私は・・・ ないですけど」

この人が ほら 私の目を見て 目で指してるよねっ この人！

ああ！ みたいな顔した

私が深海魚なんかに興味ないってわかるでしょ！

昼休みの中庭

お弁当箱

この中に 愛里の好きなものフェスが開幕されようとしている

あ 来た

なんか震える うまくサプライズできるかどうか

「愛里、食わねえの？」

「え、あ、食べます」

深呼吸 フー---

オープン！

あれ？

「おむすび？」

俵型の三種類のおむすびが並んでる おかずもあるけど

えっと これから

「美味しい！」

梅？ おかか？ 緑の小さいネギも入ってて 酸っぱくなくて美味しい

こっちは・・・ タラコかな

「美味しい！」

明太子が外側に少し中にも入ってて、焼いてる？ 外側の明太子がプチプチして

「私、明太子好きなんですけど、ちょっと生臭いって、でもこれは生臭くない」

「中のはマヨ混ぜて、明太子にはレモンかけてトースターで水分飛ばした」

こっちの黄色いのは・・・

カレー味！ 中にあのドライカレーがちょっとだけ入ってる

「メッチャ美味しい！」

こっちのおかずのこれは・・・

「これは何ですか？」

「タコの唐揚げ」

タコの唐揚げ？ タコってお刺身かお寿司でしか食べたことなかった

「あ！ 美味しい！ 外側のなんていうか味が最高！」

こっちは・・・ 鶏肉の手羽？ なんていうの？

「なにこれ！ すっごい美味しい！」

「鶏肉をハチミツとレモンで焼いただけ」

「甘じょっぱくて、でもしつこくなくて最高なんだけど」

こっちのサラダは・・・ アスパラと人参ときゅうりを・・・ 中華風？

「これ、いっくらでも食べられちゃう」
なんかもう全部私好み！
「すごくすごく美味しいです！」
「そっか」
モリシタダイチが嬉しそうにニコリして
「これは全部森下大一オリジナル」
「モリシタダイチオリジナル？」
「とうちゃんは作ったことねえやつ」
「あなたが創始者？」
「んな大げさなんじゃねえけど、愛里に食べて欲しかったっつうか」
「最高です最高！」
「かあちゃんはその握りメシ、クッソ不味いっつったけど」
笑ってるけど
「お母さんにとってお父さんのおむすび以外はクソですから」
でも
「私にはこのおむすびたちは、なんていうか、宝です！」
「そっか」
「はい」
「愛里に食べて欲しい俺のオリジナル、まだまだあんだけど」
「食べたい！ モリシタダイチオリジナル！」
「そっか」
「はい」
あれ　これが　最後のお弁当だ　そうだった
「このお弁当に・・・　モリシタダイチがいっぱい詰まっています」
「なんだよそれ」
笑ってるけど
「私には・・・　世界でたったひとつの　私だけの」
モリシタダイチ
「お弁当です」
「愛里のためだけに作ったから」
「はい」
私のためだけの・・・　最後のお弁当
「愛里」
「はい？」
あっ　イチゴ　口に　半分だけかじっちゃったら
モリシタダイチが残りを食べちゃった
「私のイチゴ半分食べた！」
いたずらっ子みたいな顔して笑って
「そんじゃ、俺のイチゴ」
私の口の前に

最後だもんね 最後だから

モリシタダイチがそっと入れてくれるイチゴを・・・

「美味しい」

「そっか」

「イチゴ大好き」

「そっか」

あなたがいっぱいいっぱいくれるから

「しあわせです」

優しい顔で私のこと見ていて 何も言わないで ずっと見ていて

「何か言ってくださいよ」

「俺は・・・」

あなたは？

「しあわせをかみしめてるんすよ」

私は

「私のしあわせをかみしめます、あなたのお弁当」

最後のお弁当

「最高にしあわせです」

「そっか」

「はい」

モリシタダイチが詰まったお弁当箱

空っぽになっちゃった

「ありがとう」

モリシタダイチが私の手の上に手をおいて ギュッてにぎった

ある まだ空気はある まだ ここにある

まだいっぱい ある

進路

玄関のドアを開けると

「愛里、おかえり」

モリシタダイチがいる

「ただいま」

まだいる　ここにいる

今日の夕食は・・・揚げ物

これは・・・コロッケ！

「美味しい！」

「愛里はポテサラ好きだからコロッケも好きかなと思ってさ」

「そのとーりです、大好きです」

「かあちゃんが揚げ物あんま好きじゃねえから、とうちゃんはあんま作んねえけど」

「あなたはお家では料理しないんですか？」

「とうちゃんの手伝いはする、まあなんつうの見習いみてえな？」

見習いの域を遥かに超えてるけど

「俺が中学んとき、かあちゃんがとうちゃん連れて旅行行っちまってさ、
有給消化すんのと、なんつうか、二人っきりになりたかったみてえで
一週間いなかったときがあってさ」

モリシタダイチがお父さんとお母さんの話をする・・・のを　聞くのが好き

「そんなとき、ねえちゃんは高校生で、俺がねえちゃんのメシ作んなきゃなんねくてさ」

「お姉さんは作らないですか？」

「ねえちゃん、家事とか全然できねえつつったじゃん」

あ　そうだった　なんか親しみ持ちちゃう

「あれ作れこれ食いてえつつって、俺まだ中学生なのにさ、必死こいて作った」

モリシタダイチの中学生の頃って　どんなだったんだろう

「おかけで？　とうちゃんが作らねえようなんも作れるようになったっつうか」

「おかけで、私はこんな美味しいコロッケ食べられます」

モリシタダイチが嬉しそうに笑った

「あなたのお姉さんは今大学生なんですか？」

「大学っつうか、メディカルスクールに行ってる」

「メディカルスクール・・・とは？」

「日本の医学部みてえなとこ」

えっ 医学部？

「最初は日本の大学にいたんだけど、尊敬する先生がいるからつって、
アメリカの大学入って単位ガンガン取って卒業して入ったつうカンジ」

別世界

「産婦人科医になりてえんだってさ」

「そう・・・ですか」

親しみ持ってごめんなさいって思っちゃう

「ねえちゃんが生まれたとき、かあちゃん死にかけたんだってさ」

「えっ」

「大量出血で一瞬死んだ的な？」

言葉・・・出ない

「そんなとき、とうちゃんがたまたまかあちゃんとおんなし血液型だってわかって」

O型のRh マイナス！

「とうちゃん、もうこれ以上はダメですって言われても、俺の血全部使ってくれて」
全部・・・あ・・・涙・・・

「まあこの話はねえちゃんがかあちゃんから聞いたんだけどさ

とうちゃんは、そんなときのことほとんど憶えてねえんだよなあ」

あの愛がいっぱい二人に・・・ そんなことがあったんだ・・・

「それもあって、ねえちゃんは、かあちゃんみてえな目に遭う人が、

できればなくなって欲しいからつって、産婦人科目指してる・・・らしい」

「あなたのお姉さん・・・ すごい方ですね」

「すごくねえよ、家にいるときなんかほとんどゴロゴロ寝てばっかでさ」

言葉とは違って モリシタダイチがお姉さんを好きなのが伝わってくる

「あなたは・・・ 何になりたいんですか？」

「俺は・・・」

え なに？ 私の方見てるけど 質問したの私なんだけど？

「大切な人が、なんも考えなくていいような安心していただけるような」

ん？

「金のこととかいろんなこととかなんも心配しねえで暮らしてけるみてえな」

えっと

「職業は？」

「なんだっていい」

なんだっていい？ 意味がよくわからない えっと

「どこの大学の何学部目指しているんですか？」

「大学かあ、行くかどうかわかんねえなあ」

「ハ？」

「高校出て、これだつうとこがあったら就職すっかもしんねえし」

「しゅーーしゅくっ？」

「なんで？」

「え、あ、だって、常連トップ3なのに就職って・・・」
「就職してえってなったら、やっぱ成績いい方が仕事見つけやすいかなって」
「エーーーーー」
「なんだよそれ」
笑ってるけど 笑ってるけどさ
そういう理由で常連トップ3にいれるものなの？ レベチ過ぎるよ
「愛里は、やっぱ、大卒じゃなきゃイヤなんか？」
「大卒じゃなきゃイヤ・・・とは？」
「なんつうか、結婚する相手は・・・ 大卒じゃなきゃイヤっつうか」
「そんなことまで考える余裕ないです！ 私が大学入れるかどうかですから！」
「愛里は大学進学すんの？」
「はあ、まあ、いちおう」
「どこ？」
「どこって、まあ入れるかなあってところなら」
「何学部？」
「まあいちおう・・・ 英文学科かなあって」
「英文学研究してえのか」
「研究はしたくないです、入れそうなのが英文学科かなあってだけです」
「卒業したら何してえの？」
「まあ・・・ 就職かなあって」
「どんな仕事？」
「どんなって・・・ まあ、私を採用してくれるところがあるならって」
あるのかな？
「あのさ」
「はい？」
「愛里は将来何してえの？」
ハア？
「何がしたいのかわかってたら大学行きませんよ！」
「あ？」
「あなたのお姉さんと違って私には明確な目標はなくて、てか、わからなくて、
だからって、あなたのように高校卒業したら就職なんて、この私ができるわけがない！
自分のことだってできないんだから！」
ポカンと見てるけど
「将来何がしたいかわからないからとりあえず大学行って大卒の肩書をつけないと
社会に出てもなーんにも需要がないレベルの人間がいるんです、ここに！」
「そんじゃ」
なに？
「嫁さんは？」
「嫁さん？ 誰のですか？」
「誰のって・・・」

「そこがいちばんの問題点なんです！」

「あ？」

「私は家事なんてなーんにもできない！」

あなたがいちばんよくわかってるよねっ

「そんな女をお嫁に欲しいなんて人はいない！」

「いたら？」

「いない！」

「いたら？」

「アラブの大富豪でメイド数十人いて、まあ気まぐれで？ 私を第三、第五夫人？

それくらいじゃないと、てか、問題はもしそうだとしても」

なに　なんか　笑おうとしてる？

「もし、そうだとしても、私はアラブの大富豪とは結婚したくない！」

私に選ぶ権利なんかなくても！　アラブとかムリ！」

なんかおもしろがってる？　私は真剣に話してるんだけど？

「そしてもっと問題は、一生独身だとして、私は自分のことができない」

どーーしたらいいんだろ

なんか・・・　将来のこと考えたら　どーーんてしてきた

「愛里はさ」

はい？

「好きなことだけしてりゃいいよ」

「ハ？」

「愛里が楽しいとかしあわせて思うことだけしてりゃいいよ」

それで生きていければ苦労はないよまだ苦労してないけどあなたは常連トップ3で就職

するかもとかいう余裕あるかもしれないけど私にはまったく余裕ないからっ

「そうですか」

レベルがかけ離れてると、進路に関してはまったくかみ合わないのかも

フライパンを洗っているモリシタダイチ

「愛里はいつも俺が洗いもんすんの見てんだな」

洗いながらそう言うモリシタダイチ

「なんかホッとするから」

フツて笑うモリシタダイチ

「愛里はさ」

「はい？」

「花選んだり、なんつうかまとめるっつうか」

「アレンジですか？」

「なんで上手えの？」

「なんでって、うまくはないけど好きです」

「そういう勉強してんのか」

「小学校6年生のときにフラワーアレンジメント教室に行っていました」
「そうなんだ」
「いろいろなお習い事させられたんですけど、全然続かなくて、
でも、フラワーアレンジメントだけは楽しくて続けてたんですけど、
中学になって、勉強が忙しくなって・・・」
あなたと違って必死に勉強しないと今の高校には合格できなかったからね
「そういうのになりてえとか思わねえの？」
「そういうの・・・とは？」
「そういう花の先生とか花屋とかさ」
この人は・・・ 路頭に迷っている私の進路をなんとかしようとしているのだろうか
「思いません」
「へえ」
「花屋を舐めてはいけません」
「あ？」
「お花に囲まれて仕事できるなんてしあわせ！ なんてそんな甘いものじゃないんです」
「調べたんだ」
あ ちょっと笑った 調べたけど
「花屋は過酷な肉体労働なんです」
「へえ」
興味ないな いいけど
「重たい花の箱を運んだり水の入った重たいバケツを運んだり
冬でも冷たい水に手を突っ込んで、手なんてあかぎれだらけで」
私には
「ムリです」
だから花屋になったらどうかなんて進路相談の先生みたいな考えは捨てて！
「それでも花は好きなんだ」
「好きです」
趣味だから趣味！
「そんじゃ花もらったら嬉しい？」
「まあ嬉しいですけど、でも、あれはダメです」
「あれ？」
「よくあるじゃないですか、誕生日に君の年の数だけの赤いバラを贈るよみたいな」
「あ？」
この人には無縁の世界か そうだよな あのダッサイ赤のTシャツだもんね
「そういうのがあるんですそういうことする、なんていうか、人種がいるんです」
なに なんてそんなおもしろいもの見てるような顔してんの？
「たとえば、たとえばですよ、あなたが私の17歳の誕生日に赤いバラを年の数だけ」
そんなこと絶対しないと思うけど 好きな人にはするのかな まあいいけど
「それが17本だとして、私は、つい、これは一本2,000円はするから、つまりは・・・」
えっと、いくら？ 2,000円17・・・

「3万4千？」

暗算早やっ

「そうです、3万4千円を私にって思うと、その金額に見合う反応をする自信がない」

なんで口に手をあててるの？ あきれてる？

「そんじゃ愛里にはどんな花贈ればいいんだよ」

「え、まあべつにスーパーに売ってる花でも」

「スーパー？」

なにその目見開いて笑ってるんだかなんだわかんない顔？

「まあ、はい、もらったら私がなんとかアレンジするっていうか」

しゃべってるうちにどんどん落ち込む

あ 黙っちゃった 黙ってジーーーーッと私を見てる えっと

「あ、でも、どこのお花屋さんにもあるんですけど、仏壇用の花だけは・・・」

あ 口あいた

「昔あったんです！ ママがなんだったかの記念日だから、

　　パパに帰りにお花買ってきてって行ったら、パパが仏壇用のお花買ってきちゃって、

　　あのボヤッ~としたママがキレました、あのママがキレるってビックリしちゃった」

え 笑ってる 何かおかしいこと言った？

「たまんねえ！」

この人の反応は・・・よくわかんないっていうか・・・

「そうですか」

とにかく、私の進路は心配しなくてけっこうです！

土曜日

金曜日がもうすぐ終わる

明日はモリシタダイチは1日中ここにいる

仕事だけど また排水管掃除するのかな

ピコン

『愛里』

『はい』送信

ピコン

『俺は愛里が選ぶ花 好きだ』

だから花屋になるとかはさあ

ピコン

『とうちゃんのために選んでくれた花』

ピコン

『とうちゃんすげえ喜んでた』

それは嬉しいよね 嬉しい

『ふたつめのイチゴのは完全に私の趣味でしたけど w』送信

ピコン

『イチゴはとうちゃんにとって、すげえ大切なものなんだ』

そうなの？

ピコン

『今は俺にとっても』

モリシタダイチにとっても？

ピコン

『イチゴは森下家の男の漢気 w』

あれ？ 前もどこかで言ってたよね

ピコン

『愛里の花には愛がある』

私の花には 愛がある

なんかウルウルしてきちゃった

『そんなこと言ってもらえて嬉しいです』送信

ピコン

『マジで』

私は・・・ そうか 私は

『私のお花の目標は』送信

『お花の大先生になることではなくて』送信

『映えするお花を売ることでもなくて』送信

『あなたのお弁当みたいになりたいです』送信

ピコン

『俺の弁当？ w』

『その人のためだけにその人のことを思って作る』送信

『そういうお花』送信

あれ？ 返信がない

伝わらなかったのかな 漠然とした？ うまく表せないんだけど なんて言えば

ピコン

『かあちゃんが』

ピコン

『愛里の感受性は恐ろしいほど鋭いつつたけど』

ピコン

『俺は今それをモロ食らってヤラれてる w』

ん？ どういうこと？

『あなたのお母さんは今日もお父さんのところに行っただけですか？』送信

ピコン

『だと思っ』

だと思っ？

『まだ帰ってきてないんですか？』送信

ピコン

『かあちゃん月曜からとうちゃんの病院の近くのホテルに泊まってる』

そうなんだ あれ 月曜から？ え ちょっと待って

“私もこっちに帰ってきたから、家事をしてもらわないと困る”

そう言ってたよね

『それじゃ、月曜日からあなたは一人なんですか？』送信

ピコン

『かあちゃんにこき使われなくて済んでます w』

え・・・

“ダイチが朝ここに来て仕事して学校に行ってここに戻って仕事して、

家に帰ってきてまた家事をする、それはかなりの負担になる”

まさか・・・ でも・・・ そこまでは・・・

ピコン

『愛里は日曜日なんか予定あんの？』

あるわけ

『ないです』送信

ピコン

『そんじゃ日曜の半日、俺にくれませんか』

日曜日の半日 半ドン 仕事だよね

『もちろんです』送信

ピコン

『そんじゃ予約な w』

予約って 仕事で来るのに フフ

『予約受付ました w』

ピコン

『』

なにそれ 笑える

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

『おやすみなさい』送信

土曜日の朝

起きて顔洗ってキッチンに行くと

モリシタダイチが換気扇の掃除してる

「おう愛里」

「おはようございます」

「おはよっス」

換気扇の掃除 ママは業者に頼むけど モリシタダイチならやるよね

またママが失くした何かが見つかる？ あんなところに何か置き忘れたら怖いよ

「換気扇掃除してんの見てて楽しいんかよ」

笑ってる

「換気扇掃除自体は楽しくないですけど」

あなたが掃除してるのを見るのは好き

「あ、ジャマだったらあっち行きます」

「ジャマじゃねえよ全然」

「そうですか」

ウワッ ギトギト

「これって取れるものですか？」

「こんくればならすぐ取れっから」

こういうのって自分でやらないとかなあ 社会人になって一人暮らしとか

一人暮らしなんてできるの？ できないよ え 一生ママと暮らすの？

ぜーんぜん先が見えない

「なんか考えてんだろ」

「えっ」

「愛里はすぐ顔に出っからさ」

そんなに？

「何考えてたんだよ」

「こういうのって自分でできなきゃダメかなあって」

「愛里はなんもしなくていいよ」

「そうですかねえ」

「俺が全部やっから」

今はね 私が考えてるのは社会人になってからのことなんだよ

「これが終わったらお風呂の掃除ですか？」

「するよ」

「それで汗びっしょりになるんですよね」

笑ってる

「パフェ食べますか？」

「作ってくれんの？」

作るっていうか市販のを乗っけるだけだっば

「はい」

「食いてえ」

「それじゃ材料買ってきますから」

「おう」

「携帯も持っていきますから」

「おう」

「だから、キレないでくださいよ？」

「あ？」

「前、キレたから」

「あれは・・・ キレたんじゃねえって、なんつうか俺が・・・ ごめん」

「いいです、もうそれは、ちょっとからかっただけです」

「愛里はよ！」

フッ

スーパーから戻ったら

「おかえり」

「ただいま」

「キレてねえだろ？」

子どもみたいな言い方して 笑える

ハァァァ フワッフワの卵サンド 美味しい

土曜日のランチの楽しみ

なに？　なんでジッと見てるの？

「なんですか？」

「しあわせそうな顔して食ってんなあとと思ってさ」

「あたりまえですよ、こんな美味しい」

私のためだけに作った
「卵サンド食べてるんだから」
ちょっと照れたみたいに笑ってる
「あなたはこれといった職種の希望はないって言いましたけど」
「ああ」
「カフェとかレストランのシェフになるのだけはやめてください」
「なんだよ突然」
「だって、そうなったら・・・」
私のためだけじゃなくなって・・・
「お客様いっぱい、私、入れなくなりますから」
やだ、何言ってるの私 何考えてるの私
「それは100パーねえから」
100パー？ よかった
「俺は愛里にメシ作んのだけでいっぱいっばいよ」
「なにそれ？」
笑ってる
100パーないんだ よかった

予定どおりお風呂掃除してやっぱり汗びっしょりになってシャワー浴びて
パフェの時間
今日のパフェは、いちばん上のイチゴにホイップクリームでハート描いてみた
「あ、え、あ、これ、あの、ハート？」
「はい、汗びっしょりになってお風呂掃除してくれた感謝のハートです」
「あ、そっか、おう」
なんかジッと見てるけど
「早く食べないと溶けちゃいますよ」
「写真撮っていい？」
「いいですけど」
だったら私も
「撮ります」
ふざけた顔してストップモーションしてるけど
「動画で一ーす」
「なんだよ、だったらそう言えよ、俺、バカみてえじゃん」
「バカみたいな顔を撮りたかったから」
「いっくらでも撮れ、ほれ」
白目向いて ハハハハ

今日の夕食はイワシ

だけど前のとはちょっと違う

「これは・・・ 前のかば焼き風とは違いますよね」

「これは森下大一オリジナル」

モリシタダイチオリジナル お父さんのレシピじゃないんだ

「メッチャ生姜と醤油と酒とみりんに漬けて小麦粉つけて焼いたやつ」

美味しい！

「外はサクッて中はフワッて美味しいです」

「そっか」

「正直に言っていていいですか？」

「いいよ」

「私、前のも好きでしたけど、こっちの方がもっと好きです」

「マジ？」

「はい」

「イワシもあなたに料理されて嬉しいと思う」

「なんだよそれ」

笑ってるけど ママの梅干と煮たやつ食べたらあなたもそう思うよ

あれは・・・ 永遠にムリ

モリシタダイチが帰る時間

「そんじゃ明日」

「はい」

「9時くれえに迎えに来っから」

9時？

「朝の9時？」

「愛里の時間くれるつつったじゃん」

「日曜日はお父さんの病院に行く日ですよ？」

「かあちゃんが、とうちゃんの二人きりでいてえから来んなつつった」

え？ 二人きり そうか・・・って

「それじゃ、午後からお休みってことですか？」

「午後は仕事すっから」

「え？ え？ え？」

「そんじゃ」

って行っちゃったけど

半ドンだよ？

なんで午前中？ 休みなのに？

なんだ？？？

まさかの

どこに行くんだろう

ゆうべの LINE でもおしえてくれなかった

あのカフェ？ ストロベリータルト？ ワンピ買った店？ 雑貨ショップ？

どこに行ったとしてもサプライズはできないんだけど

今日はブルーグレーのワンピに薄手の白のショート丈カーデ

白のワンピ着ようかなって思ったけど、先週お父さんのところに行ったときに

「愛里」

来た来た

「はい」

ドアを開けたら え

白の T シャツにブルーグレーのジャケットにグレイッシュなジーパン

なんていうか・・・ ある意味丸かぶり ヘタすると色を合わせたペア的な

女神だ

「今日の服もあなたのお母さんが選んだんですね」

「俺」

ハア？

「フッ」

「なんだよその鼻でフッて」

「あなたにそのコーデができるわけがない」

「俺だって」

「着れりゃなんでもいいって言うあのダッサイ赤の T シャツ着てるあなたにはムリ」

「マジ俺だって」

どこまでウソを押し通すつもり？

「愛里が前に、俺に似合うのは白とかブルーグレー？ とかなんとか言ったじゃん」

「言いましたけど」

「だから俺は前にかあちゃんが買ってきた服引っ張り出して着てきたっつうの」

「マジで？」

「マジだっつうの」

「へえ」

「なんだよその冷てえへえはよ？」

「行きましょう」

「俺だっつってんじゃん」

「いいから行きましょう」
どうでもいい カッコいいから

ここは
「これは何ですか？」
「書いてんじゃん、水族館」
それは私だって読める そういうことではなく
「どういう意図でここに連れてきたんですか？」
「愛里と水族館行きてえつつったじゃん」
言ったけど
「私 あなたに話しましたよね 私の闇歴史」
「聞いた」
「だったらなぜ水族館に連れてくるのっ？」
「愛里と来たかったから」
いや、だからさ
「あなたはそんなに水族館が好きなんですか？」
「全然 興味ねえけど」
「ハァァァァ？」
「それでも愛里となら行きてえなって」
意味がわからない
「俺、愛里に聞いたよな」
「ハ？」
「日曜の半日俺にくれって」
「聞かれましたけど・・・」
「愛里、もちろんですって言ってくれたよな」
「言いましたけど・・・」
それは仕事で来ると思って
「半日はさ、俺の休みだからさ」
「そうですよ、それを」
「俺のために使ってくんねえかな」
あなたのために・・・
「わかりました・・・ ただしっ」
よく聞いて よーーく聞いて
「私が最初から最後まで無反応だとしてもいいんですか？」
「全然いいよ」
「おさかな可愛いとかきれいとか言わなくてもいいんですか？」
「逆にキモいし」
キモイ？ 私がおさかな可愛いって言ったらキモイ？
「俺は愛里と一緒にいられたらいいだけだから」

一緒にいられたらいいなら家でもよくない？ なんで水族館なんか
落ち着こう ちょっと落ち着こう フーーーーー
せっかくここまで来たんだし電車料金までモリシタダイチが払ってくれちゃったし
そう言えば・・・ モリシタダイチと出かけるときって電車料金 今そこじゃない
「わかりました」
「そんじゃ入ろ」
「ちょっと待ってください、私の入場料は自分で払います」
無視？ 聞こえないふり？
電車の中でも「どこに行くんですか？」って聞くと聞こえないふりしてたけど？
言えないよね水族館なんてさ 私、速攻で下車したよ言ってくれればさ
いや、もう入るとは決めたんだから
「こっち見てください！」
モリシタダイチの体をグイッて
「私の入場料は 私が 払います！」
「聞こえねえなあ」
聞こえるでしょ！
「2千300円ですよ あなた2千300円をすべて無駄にするんですよ？」
笑ってる ただ笑ってる
「千円札を二枚ビリビリに破いて100円玉を粉々にするようなものですよ？」
「どっからそういうイメージ湧いてくんだよ」
笑ってるけどさ
「いいからほら！」
私の手をにぎってグイッてそのまま
「川口くんと来た方がよかったんじゃないですか」
「なんで日曜に男二人で水族館なんだよ」
「川口くん深海魚好きだから、そのコーナーでは喜んでくれますよ」
笑ってる

えっと・・・ 入ったけど
他の人たちはどういう反応してるのかな
なんかニコニコしてる あそこの女の子たちはキャッキヤ言って
どうして魚を見てあんなに喜べるんだろう
あ ちがう 人間を見に来たんじゃなくて魚を見に来たんだ見たいと思わないけど
なんていうか・・・ なんか孤立感？
私だけ他の人たちと同じ反応ができない 何かが欠落してるのかな なんだろう
「愛里」
「ウワッ」
「なんでそんなに驚くんだよ」
笑ってるけど
「すみません、ちょっと考えごととしていて」

「水族館で考えごとかよ」
笑ってるけど
「あの・・・ ちょっと・・・ 手を・・・ いいですか？」
ミリシタダイチが私の手をにぎった
「あの、正直に言っていていいですか？」
「いいよ」
「私だけ他の人と同じ反応ができないってどこか欠落してるっていうか、
なんで魚を見てあんなに喜ぶのかわからないっていうか・・・
ちょっとなんか・・・ 心細くなっちゃって」
「俺がいんじゃない」
「え？」
「俺も魚見て喜んでねえから」
そうなんだ よかつ え？ だったらなんで水族館に
「愛里、こっち」
手を引かれるままに着いたのは 大きなガラスの水槽の前
「ほれ」
指さすけど
「これ、全部イワシ」
イワシ？
おお！ ひとつの生き物みたいに集合体で泳いでる
「これは・・・」
きれいって言えばいいの？ すごいわって言えばいい？ でも・・・
「正直に言っていていいですか？」
「いいよ」
「これをあなたが料理したら美味しくなるだろうなって」
「あ？」
「それしか思い浮かびません」
あれ？ となりの人がドン引いてる ほらあ こうなるんだってばーっ
「これ全部料理して愛里に食わずには一生かかんだろうな」
一生・・・
「私が食べる一生分が泳いでるってことですね」
あ またとなりの人がドーン引きしてる
「あの、イワシはもういいです」
イワシは
「あなたが料理してくれたのを見る方が好きです」
笑ってる

深海魚のコーナー・・・ コーナー全部が薄暗い・・・
チラッと見ただけでなんか・・・
「あの・・・ 深海魚って深海にいるんですよね」

「ああ」
「すごい水圧なんですよ」
「ああ」
「それをどうやってここまで運んだんでしょう」
「それは」
「いいです説明しなくていいですぜんぜん興味ないんでしゃべってないとなんか」
見れない・・・
「あの・・・ 私、走っていいですか？」
「あ？」
「なんか・・・ 気持ち悪い！」
モリシタダイチが私の手を握って一緒に走った・・・てか
モリシタダイチの足が速いから私が引っ張られてるカンジだけど
川口くんごめん！ 私は深海魚ぜったい好きになれない！

ハァハァ お化け屋敷みたいだった
あ 魔の南のおさかなコーナー
いた あの青い魚
これだよ 私の闇歴史の・・・ この魚が悪いわけじゃないけど
これが食用・・・
「これって、川口くんが言ってたんですけど、お刺身にしても美味しいらしいです」
「へえ」
「でも、私はどうしてもこの青に抵抗があるっていうか」
チラッとモリシタダイチを見たら なに？ その慈悲にあふれた目？ 憐れんでる？
「ハッキリ言えますけど、私はお刺身ならタイとかマグロとかヒラメの方がいいです」
「メッチャ高級なネタばっかじゃん」
笑ってるけど
「それくらいしか名前わからないだけです」
「そんじゃ、ウニは？」
「ウニ好きです軍艦巻き」
「そんじゃタコ」
「タコも好きです、でも、今はあなたのタコの唐揚げがいちばん好き」
「そっか」
「はい」
「次行こっか」
「はい」

淡水魚コーナーでは、生物の先生にそっくりのナマズを見つけてしまった
「ヤベエ、今度からあの先生見たらナマズにしか見えなくなんじゃん」
モリシタダイチはそう言って笑った
きれいにライトアップされたクラゲのコーナーで、

小学校4年生のときにクラゲに刺された話をしたら、
「俺、クラゲに刺されたって人初めて見るわぁ」と感心された
痛いよメッチャ痛かった

一階に戻ったら行列ができてた

「イルカショーあるらしいよ」

イルカショー・・・

「愛里見てえ？」

「あなたが見たいなら・・・」

「俺はべつに、愛里が見てえなら」

「私・・・ お話した中学のときの、あのときも見たんですけど」

「見飽きたっつうこと？」

「いえ、あの、泣いちゃったんです」

「泣いた」

「はい、あの、行く前にたまたまテレビのドキュメンタリー見ちゃって、
イルカとトレーナーさんの地道でとにかく地味なことをひたすら何度も何度も、
新人トレーナーさんが悩んで泣いたりそういうの、それ見ちゃったから、
イルカショー見たとき、イルカよりトレーナーさんの苦勞っていうか、
今こんなに満面の笑顔をして見せてるけど、あんな苦勞してるんだなあって、
友だちが大喜びしてる横で号泣しちゃって・・・ 引かれました」

チラッとモリシタダイチを見たら ジッと私のこと見てて

だよ ね イルカショー見て素直に楽しめない女 引くよね

「愛里は・・・」

「はい、メッチャズレて」

「たまんねえな」

「ハ？」

「そんじゃイルカショーはいいな」

「あなたはどうぞ見てください、私はこのあたりで待ってますから」

「俺はべつに、愛里が見てえかなって思っただけでさ」

なんか・・・

「あの、正直に、正直に言ってもらえますか」

「いいよ」

「私と水族館にいて・・・ 楽しいですか？」

「メッチャ楽しい」

そう言うしかないよね 水族館目玉のイルカショー見れないのに楽しいとか

「愛里は？」

「え？」

「俺と一緒に水族館にいて楽しいか」

「楽です」

「楽？」

「私が何を言っても引かないでくれるし」
本当はドン引いてるのかもしれないけど
「メッチャおもしれえもん」
おもしろい？
「次どこ行く？」
どこと言われても・・・ あれ？ この階段の下・・・
「引退したイルカのコーナー？」
ショーを引退したイルカ？ どんな引退生活？
「行きてえの？」
「ちょっと見てみたいです」

階段下りると 他に人が誰もいない
大きな水槽の中に二匹のイルカ ゆーっくり泳いでる
なんか自然体 自然ではないけど水槽の中だから でも自分のペースで
あ 寄ってきた
「ちょ、ちょっと来て、ほら、こっちに」
モリシタダイチを呼ぶと私のとなりに立って
「こんな近くでイルカ見んの初めてだ」
「ですよ、私もです」
イルカがまさに私の前に
「私のこと見えるの？」
優しい目で私のこと見てる
「愛里のそばから離れねえな」
水槽の向こうとこっちだけど
「同じ空間にいる気がする」
でも・・・
「私があっちに行ったら息ができないよねえ」
モリシタダイチの方を見たら イルカよりずっとずっと優しい目で私を見ていて
「こっちにいるから息ができます」
あなたといると息ができます

キーホルダー

いちおう いちおう おみやげコーナーに来ました
なーんにも欲しいと思わない
モリシタダイチもボーッと見てるだけ
「お父さんとお母さんにおみやげ買わなくていいんですか？」
「とうちゃんとかあちゃんに何買えばいいんだよ」
笑ってるけど たしかに あの大きなイルカのぬいぐるみなら枕にはなるけど
あ 小さなタコのぬいぐるみのキーホルダー
「このタコの口、あなたが私に言い返せないときやスネたときの口に似てます」
「俺こんな口しねえよ」
「します、これよりもっと、タコよりもっとタコです」
「タコよりタコってなんだよ」
笑ってるけどするのよ口とんがらせて
そうだ
「私、これをあなたに買ってあげます」
「あ？」
「ベタなチョーベタなキーホルダー」
フッフッフッ
「これはベタじゃねえだろ、どっちかっつうとこれとかさ」
たしかに イルカとか可愛いおさかなさんの方がベタか
「そんじゃ、俺はこれを愛里に買う」
イカのキーホルダー
「なぜイカなんですか」
「ヘモシアニン」
あ・・・
「タコもヘモシアニンですけど」
「そんじゃヘモシアニン仲間っつうことで」
たしかに

水族館に併設されたカフェで
モリシタダイチはアイスコーヒー 私はアイ스티ー
「愛里」
「はい」

「ありがとな」

「何がですか？」

「無理やり連れてきちゃったけどさ」

そうですね無理やりっていうか騙し討ちっていうか

「それでも俺、すげえ楽しかった」

本当に？ 私と一緒に？

「俺さ、水族館で生まれて初めて来たんだよな」

え？

「エーーーーーッ！ 生まれて初めてが・・・ 私とですか？」

「愛里と来たかったから」

「言ってくださいよ！ そしたら私もっとなんかもっとまともな反応っていうか」

「まともな反応ってなんだよ？」

「なんかもっと、わあきれいとか可愛いとか」

「できねえんだろ？」

「できません・・・けど」

「だから俺は楽しかった」

「そうですか・・・」

でも私も・・・

「私も楽しかったです」

「マジ？」

「あなたが私がしゃべることに引かないで、まあ引いてたのかもしれませんが、

なんか思ったことそのまま言えちゃって、なんかすごく楽でした」

「俺は愛里がしゃべってんの聞いてっと、こういう見方ができんのかとかさ、

愛里の感じた方つつうかさ、そういうの、なんつつうか、マジ、メッチャ楽しかった」

「そう・・・ですか」

なんかよくわかんないけど

「やっぱ俺の目に狂いはねえつつうかさ」

「え？」

「ぜってえ間違いねえつつうかさ」

何のことなのかわかんないけど

「そうですか」

としか言えない

「そんじゃ帰っか」

「はい」

駅までの道

モリシタダイチが私の手をにぎって

なんかこれがあたりまえみたいなカンジになってて

ホッとする

家に着いたら、モリシタダイチはスーパーに買い物に行った
着替えよう
水族館が楽しいって思う日がくるとはね
なんかテンパったりしたけど楽しかったよ
ちょっと不安になるとモリシタダイチがいたからすぐにホッとした
生まれて初めての水族館 私と行きたかったって
ちょっとその感覚はわからないけど でも嬉しかったな
イカのキーホルダー
モリシタダイチが買ってくれたイカのキーホルダー
イカのキーホルダーつけてる女子高生ってどうなの？
カバンにつけよう

キッチンに行ったら モリシタダイチが何かをこねてた
なに？ うどん？ 買ってきた方が早くない？
「愛里、イチゴ2パック買ってきたから、いくらでも食べっぞ」
「はい」
1個食べちゃおっかなあ 今朝は食べてないし
モリシタダイチにも1個あげよう
いちご2個だけ水で洗って
1個 ハァァァ 美味しい
「これ、あなたの分ですよ」
「今手え離せねえから」
あ そっか うどん？ こねてるもんね
えっと
「口あけてください」
モリシタダイチの口に入れたらニッコリして
「美味え」
「何を作ってるんですか？」
「企業秘密」
ハア？ うどんだよ 笑える
モリシタダイチがこねた塊の上にラップかけて
「俺、風呂掃除してくっから」
「はい」
「それ、ぜってえ触んなよ」
「あ、はい」
秘伝のうどんは触られたくない？ 私が触るわけじゃないじゃん
あれ え なんか 膨らんできてない？
え？ 大丈夫かな このままブワーッと膨らんでバーンとか？
わからない
部屋に戻ろう

明日の予習しなきゃ
でも ちょっと疲れたから ちょっとだけ

いい におい なんだろう なんか

「愛里」

いいにおい

「愛里」

ん・・・ モリシタ・・・ダイチ・・・の・・・

「愛里」

え あ モリシタダイチの顔が

寝ちゃってた

目が・・・ きれい・・・

「愛里」

「あ、はい」

「メシできた」

「はい」

こ れ は

「ピザ・・・ですか」

「おう」

「まさか・・・ あなたが・・・」

「作った」

「えっ 生地から？」

「作った」

エーーーーーッ ピザを生地から作ったああああっ？

こねてたのは うどんじゃなくてピザ生地だったのおおおっ？

ピザを生地から作っちゃうんだピザを・・・

「愛里好きだっつってたからさ」

「言いました・・・けど」

「俺、あれからいろいろ調べて何回も試作して」

あれからって・・・ え？ あのピザ食べたときから？

「硬くなっちゃったり水っぽかったりしたけど」

いったい いつそんなことを・・・

「やっとうまく作れるようになったからさ」

ピザ職人目指してる？ いや、そっちは100パーないって言った

私 今 口 開いてるよ その自覚はあるよ

驚くと本当に口開くんだ・・・

「こっちは愛里が好きだっつってたマルゲリータ」

名前も覚えてたんだ

「こっちはミックス」

2種類作ったんだ

「トマトソースは家で作って持ってきたんだけどさ」

トマトソースまで作っちゃうんだ

「早く食べよ 冷めちゃうからさ」

「はい」

一切れ取って お皿に載せて

「いただきます」

あ おお！

「美味しい！」

「マジ？」

「生地がパリッとしてトマトソースがなんていうかまろやかで酸っぱくない」

「ニンジン」

「ニンジン？」

「イタリアではトマトの酸味消すのにニンジン入れんだってさ」

そんなことまで調べたのかモリシタダイチ？

「まあ糖分つつうことじゃねえかな」

すごすぎる

「愛里は酸っぱえの嫌いだからさ」

え

「まあこんくれえかなって」

私が酸っぱいの嫌いだから？ 私がピザが好きって言ったから？

「あ？ え、ちょ 愛里、なんで泣いてんの？」

「だって・・・」

どうしたらいいのかって顔で私を見てるけど

「このピザって・・・」

あなたは・・・本当に・・・

「私のためだけに作ってくれたピザだから」

だから

「すごく美味しくて」

だから

「涙が出ちゃう」

くちびる噛んで私のこと優しい目で見てるあなたが

「モリシタダイチがいっぱい詰まってる」

「なんだよそれ」

笑ってそう言う声も優しくくて

「美味しい」

泣きながら

ピザ食べた

あさって

オープンの・・・なんていうの？ 大きなお皿？ を洗っているモリシタダイチ
「あなたが買ってくれたイカのキーホルダー、カバンにつけました」
「そっか」
なんか嬉しそうに
「あなたも タコ カバンにつけてください」
「おう」
「明日チェックしますから」
「明日？」
「はい、明日、学校で」
「明日は開校記念日で休みじゃね？」
「え？ あ！ 忘れてた！」
「ああああ、言わなきゃよかったなあ」
「なんで？」
「ぜってえ愛里学校行ってたのになあ」
おそらく 行ってたけどっ
「ポカンとしてる愛里の顔 見たかったなあ」
「私のポカンとした顔を見るにはあなたも学校に行かないと見れませんが」
「それ見るためなら行ってもいいなあ」
もうっ
睨んだら 笑ってる
「あの学校さ、けっこう古りいよな、今年で何十周年つったっけ？」
「私のパパも卒業生です」
「そうなんか」
「パパが自分の母校に入って欲しいって言うから、私必死に勉強してやっと入って」
「愛里のお父さんに感謝だな」
「パパに感謝？」
「愛里いねえとさ、つまんねえじゃん」
「つまらない？」
「愛里・・・ メッチャおもしろえじゃん 天然でさ」
「前にも言いましたけどっ 私は天然ではありません！」
「天然はみんなそう言うんだよなあ」
「他の人は知りませんが私は」

「かあちゃんも私は天然じゃないわよっつってさ」
「あなたのお母さんは天然じゃないですよ」
「かあちゃんはさ、まわりの人間の心理っつうか感覚っつうか・・・
　　そういうのにはメッチャ敏感なんだけど、自分のことにはバカみてえに鈍感」
「エー　　そう見えない」
「若けえ頃、とうちゃんがかあちゃんをかなり前から好きだったっつうことも、
　　自分が、自分で意識する前からとうちゃんのこと好きだったっつうこともわかんねえ」
「え？」
「浮浪者のとうちゃんを勢いで連れてきちまってさ、それでもなんか理由つけちゃ
　　引き止めるっつうか追ん出さねえってさ、単純に考えたらわかんじゃん」
「単純に？」
「とうちゃんのこと好きになってたっつうこつたろ」
「ああ！」
「それで浮浪者だっときのとうちゃんが、かあちゃんがなんかあるとそばにいたってさ」
　　そうなんだ
「それは、とうちゃんがかあちゃんのこと好きでずっと見てっからじゃん」
「ああ！」
「いまだに気づいてねえ」
「いまだに？」
「怖えよ」
笑ってる
「んっくに天然相手にすんのは一苦労っすよ、メッチャ苦労っすよ」
「そうですねえ」
「だからあ　愛里」
「はい」
「愛里も天然だっつうの」
だから？　どうつながるの、その　だからは？
「私は天然ではありません！」
「はいはいはいっと」
なにそのテキトーーにあしらう的な「はい」？
しゃがんでオープンの中見てるけどっ
「ここは・・・　もう大丈夫か　アヂッ！」
あ！
「待って！　今、今持ってきます！」
アロエとバンドエイド出して
「どこですか？」
「え、ここ」
赤くなってる
「あなただって、けっこうおっちょこちょいじゃないですか」
「なんだよそれ」

「前もヤケドしたし」

あのときは・・・ まだ この指は・・・ 私の手をにぎってなかった

え なに考えてるの えっと

「私はピザも焼けないし何もできないけど・・・」

バンドエイド貼って

「あなたのヤケドにバンドエイド貼るくらいはできますから」

バンドエイド貼ったモリシタダイチの手が私の手をにぎった

え？

顔をあげたら・・・

見たことないような目で・・・ 心臓がドクンドクンで・・・

「愛里」

「はい」

「あさって」

すごく真剣な目で

「あさって？」

私のこと見ていて

「あさって」

「あさって・・・って？」

急にフツて笑って

「学校はあさってからっすよ」

ふざけた顔になって

「なにそれえっ？」

「愛里は言わねえとわかんねえからさ」

「もうわかってます！」

一瞬真顔になって私を見て またふざけた顔で笑ってる

モリシタダイチが帰る時間

「そんじゃ・・・」

「はい」

背筋を伸ばして真っ直ぐに私を見た

「これで」

私のことジッと見て 何か言いたそうな目でジッと見て

一瞬目を外して ふつうの顔に戻った

「これで家政夫森下大一の仕事は終了です」

え？

「三週間、まあ、実質二週間、お世話になりました」

え・・・

「ありがとうございます」

え ちょっと・・・ 待って・・・ え・・・

「愛里」
え・・・あの・・・
「は、はい」
「楽しかったよ」
え あの え
「ありがとな」
え あの え
「愛里」
「は・・・ はい」
なにか なにか言おうとして迷ってるような顔して そして
「俺さ」
玄関のドアが開いた
「ただいまー！」
「ママ！」
え、あ・・・
モリシタダイチを見るとふつうの顔に戻ってて
「あら、こちらは？」
あ、あの・・・ なんて言えば・・・
「愛里さんの同級生の森下大一です、はじめまして」
同級生・・・
「まあ、愛里の！ 遊びにいらしてたの？」
「ママ、早く入って」
「そうだった、フフフ」
「それじゃ、失礼します」
え？
「また遊びにいらしてね」
「ありがとうございます」
え・・・
モリシタダイチが私の方を見て
「そんじゃ」
そう言って 玄関のドアが閉まった
「愛里ちゃん、会いたかったわあ！」
私・・・ 何か・・・
「ママ、愛里ちゃんのことを心配でね」
何か言わなきゃ 何か言いたくて 何を
「パパがね、せっかくこっちに来てるのに」
伝えなきゃ 伝えなきゃ
「私、ちょっと、言い忘れたことがあるから」
玄関飛び出した

通りに出ようとしているモリシタダイチに
「あの！」
振り返って私の方を見たモリシタダイチに
「私！」
大声で
「私！ あの！ あなたは・・・ あなたは仕事でしたけど！」
届くように大声で
「あなたは仕事で私のそばにいてくれましたけど」
届くように
「あなたには仕事でも、仕事だからそばにいてくれたんですけど」
言いたい
「あなたが仕事でも、あなたがそばにいてくれて」
私の気持ち
「私は・・・ とってもしあわせでした！」
本当の気持ち
「あなたがそばにいてくれて しあわせでした！」
えっと・・・あの・・・
「それじゃ 明日！ また学校で！」
クルッと玄関の方へ
「愛里！」
え？
振り向くと モリシタダイチは向こうに立ったまま
「明日！ 学校休み！ 開校記念日！」
あ・・・
「忘れてました！ 学校いくとこだった、ハハハ」
忘れてた・・・
「忘れてました・・・ 忘れて・・・ 私・・・ 忘れ・・・」
忘れてた
今が来るってこと あなたがいなくなるときが来るってこと
いつかあなたはいなくなるって・・・ わかってたけど・・・そんなの・・・
私を感じないくらいずっとずっとずっと あなたは私をしあわせの中に
何も感じなくていいようにずっとずっと
「愛里」
モリシタダイチが私のことギュッと・・・
この中にいられるのも もう・・・
行かないで行かないで行かないで 行かないで！
イヤ・・・ イヤだイヤイヤ 行かないで！
「愛里」
私の名前を呼ぶその優しい声を
行かないで！

「俺さ・・・」

わかってるわかってるけど わかってるけど

「俺・・・ 愛里を」

「愛里ちゃーん！」

反射的に体離れた

「電話が鳴ってるわよー！」

あ・・・ えっと

「それじゃ、さようなら」

玄関に走って ドア閉めた

アメリカ行きの話

玄関に入ったら ママが私の携帯持って

「ほら！ 早く出ないと！」

え？ 女神？

「も・・もしもし」

「愛里さん、森下大一の母です」

「はい」

「ダイチはもう帰ったの？」

「はい」

「そう」

帰りました

「お母様はもうお帰りになったの？」

「はい」

「明日の午前中、そちらに伺いたいの」

「え？」

「今回の仕事、途中で私も関わったから、お母様に説明とご報告したいのよ」

「はい」

「愛里さんとも話したいし」

私と話すことなんてもう・・・

「はい」

「それじゃ、明日ね」

「はい」

ピッ

「女神さんて変わった名字ねえ」

「ママ、明日、家政夫さんのことで説明と報告があるって」

「女神さんから？」

女神は・・・

「森下さん」

「どなた？」

めんどくさい

「明日来るから」

ママが、携帯忘れたのに気づいてあわてたこととか、久しぶりにパパに会って、

一緒にあそこに行ったとかこんなことがあったとか　しゃべってるけど
私は・・・　ほとんど聞いてなくて
「愛里ちゃん、大切なお話があるの」
「なに」
「ママね、パパのとこに行くことにしたの」
「え？」
「やっぱりねえ、パパがいないと不安だったなんだあって気がついて、
　　パパもしばらくは日本に帰って来られないみたいで、あと数年はいるって」
「そうなんだ・・・」
「この家も売って、アメリカでパパと一緒に暮らすことにしたのよ」
「この家を売る？」
「愛里ちゃん、一緒にアメリカで暮らしましょう」
「ハ？」
「パパの知り合いでね、とってもいい高校に推薦状書いてくださるって方が」
「なんで私がアメリカに住むの？」
「この家は売ってしまうし、ママとパパと暮らすのよ」
「なに勝手にそんなこと決めてるの？」
「愛里ちゃん、ママね、パパと離れて一年、やっぱり不安だったし心細かったの
　　久しぶりにパパと会ったらホッとしちゃって、やっぱりママ一人っていうのはね」
「それはママのことでしょ！　なんで私までアメリカに住まなきゃいけないの？」
「パパはね、ここの家は売って、愛里ちゃんには小さなマンションを買うか借りるか」
「マンション？」
「愛里ちゃんが一人でなんとかやっていけるくらいのお部屋に移って、
　　そこから今の高校に通う手もあるって言うのよ」
一人で・・・
「パパは愛里に選ばせた方がいいって言うんだけど、ママ心配だから」
私に選ばせる・・・
「私、アメリカには住みたくない、せっかくパパが行ってほしいって高校に入って、
　　友だちもできて、勉強も少し楽しくなってきて、それに・・・
　　アメリカに行ってやりたいことなんてないよ！」
「愛里ちゃん」
「アメリカに住みたいと思ったことなんてないよ！　ここがいい！」
「でもね、愛里ちゃん、あなた何もできないでしょ？」
え・・・
「こっちで一人で暮らすっていても何もできないんだから無理でしょ」
「アメリカに行ったらなんでもできるようになるの？」
「それはママが少しずつおしえていくから」
「だったらここでおしえてよ！　日本でおしえてよ！」
「愛里ちゃん、ママのことも考えてくれないかしら」
「ママのことってなによ」

「ママ、この一年一人で本当に心細かったの、それに、更年期がきててね」
更年期って
「余計に一人だと不安なのよ、寝込んだりしたら愛里ちゃんどうしようって」
「そんなの・・・ なんとかするし」
「なんとかできないでしょ？ 愛里ちゃん、何もできないでしょ」
何も・・・できない・・・ 一人じゃ・・・ 自分のこと何も・・・
「パパは愛里に選ばせなさいって言ったけど、パパわかってないのよ、
家事なんてしたことないんだから、向こうでだってメイドさん頼んで、
食事は外食かケータリングで、そんなことしてたら身体壊しちゃう
パパに何かあったら、愛里ちゃんもママもどうやって生きていくの？」
そんなこと・・・言われても・・・
「愛里ちゃんはまだアメリカに行ったことがないから不安だと思うけど、
パパの家がある地域はとっても素敵なところでね、ご近所の方たちもいい人ばかりで」
そんなこと・・・
「日本人もけっこういてね、それが皆さんとっても親切で、そうそう、ある方なんてね、
日本では娘さんが不登校気味だったんだけど、アメリカに来たら明るくなって」
ママの目には・・・ アメリカは魔法の国に見えるの？
アメリカ行ったら日本ではできなかったこと なんでもできるようになるって
そんな・・・
「私は、アメリカには住みたくない」
「愛里ちゃん、あなたも高校生なんだから、ちゃんと現実を見なきゃダメよ」
「現実？」
「あなたは一人では何もできない、でしょ？」
現実・・・
「こっちに残ってもどうやって暮らしていくの？」
どうやって・・・
「まあ、とにかく、パパは愛里に選ばせなさいって言ったから、
ママが絶対には言えないけど、現実的にはこっちに残るのは無理よ」
無理・・・
「突然の話だから、今は戸惑ってるかもしれないけど、冷静になって考えてみてね」
冷静に・・・
「シャワー浴びてくる」

突然アメリカに行って 帰ってきたら突然あんなこと言いだして
勝手すぎる
ママがパパのところに行きたいからってなんで私まで行かなきゃならないの
まるで小さい子どもみたいに ママが行くところは必ず私も行くって決めつけて
冷静になって 冷静に・・・
私が一人でこっちで暮らしたら・・・

掃除も、洗濯・・・は少しできるようになったけど 食事も
ゴミの分別だってなんかよくわからない
私が一人でこっちで暮らすのは・・・ 無理
それが現実
ノートにアメリカに行きたくない理由とアメリカに行く理由書いてみた
アメリカに行きたくない理由はいろいろあるけど
アメリカに行く理由は たったひとつ
一人では何もできない 自分のことが何もできない
そのたったひとつが すごく大きくて
アメリカに行きたくない理由なんて消してしまうくらい大きくて
そんな理由でアメリカに住むんだ・・・
一人では自分のことが何もできない
それだけの理由で・・・
だけど その理由が 日本に残って住むってことも不可能にしてしまう
行くしかないのかな 行くしかない・・・よね
私が自分のこと何もできないのは現実で こっちに残って一人で住むのは非現実
ピコン
え？ 森下大一
写真・・・
これは・・・ 引退したイルカの水槽でイルカが寄ってきたときの・・・
私・・・ すごくしあわせそうな顔してる
すごくきれいな写真 空気まで見えるような
モリシタダイチの目には 私はこんなふうに見えていたの
写真の中の この空気の中では 私は楽に息ができて こんなにしあわせそうで
今・・・
あと1分で今日が終わる
モリシタダイチが家政夫だった日が終わる
この写真を送ってきたのは 最後の仕事？
だよ
もう「愛里」って言ってこないもん 写真だけ送ってきただけ
この写真も モリシタダイチと一緒にいた時間も 非現実
モリシタダイチは現実に戻って行って 私をおいて戻って行って
私も・・・
現実に顔向けしないとダメなんだよね

電源 OFF にして
寝よう

森下大一のノート

朝起きて キッチンのドアを開けたら

誰もいない

ママは？

ママの部屋そっと覗いたら 寝てる

「ママ」

「ん・・・ああ・・・愛里ちゃん」

「具合悪いの？」

「ちがうのよ・・・時差ボケで夜中に何回も起きちゃって」

そっか

「今・・・起きるから」

「いいよ、今日学校休みだから」

「あら、そうなの？」

「め、森下さんが来るまで寝てていいよ」

「ありがとう、そうするわ」

一人の朝 前にもあったな

冷蔵庫の中のイチゴ 2パック

片方のは二粒分空いてる 昨日モリシタダイチと私が食べた二粒分

一個出して食べたら・・・ え 味がしない なんて？

大好きなイチゴの味がしない

ヨーグルトだけ食べよう

10 時頃ママが起きてきて

「サンドイッチ作るわね」

卵サンド 茹で卵潰してマヨで混ぜた卵サンド

ママの味 3 週間前までの味 現実の味

食べなきゃ 現実

10 時半に女神が、ううん、森下大一のお母さんが来た。

とっても簡潔でわかりやすく事情を説明してくれた。

「あらまあ！ そうだったんですか」

こういうときママが抜けていて助かる

「よかったわねえ、愛里ちゃん」

気がつかない

「森下さんの息子さんがいなかったらと思うと、ママ　ゾツとしちゃうわ」

同級生の男子が私の世話をしていたという異様な状態に

「料金のことですが」

女神・・・じゃなくて、森下大一のお母さんの言い方はテキパキしていて

「本人はいらないと言っております」

いらない？

「とんでもないです、お仕事していただいたんですから」

「実費だけ前金からいただきましたと、こちらを」

ノートにレシートと・・・　写真？　1ページ目が・・・　生姜焼き

「愛里さんに作った食事とお弁当のメニューが書いてあります」

そんなことしてたんだ・・・　全部仕事で・・・　作ったもの全部

「まあ！　美味しそう！」

「家政夫料金はいりませんが、紹介所の手数料は丸山さんとお話していただければ」

「本当にそれでよろしいんですか？」

「はい、本人の希望ですし、上原さんにご依頼いただいたのは本来夫の方ですので」

「でもお怪我なさったんですから、それはよろしいですよ」

「息子もいろいろ学ばせていただきましたので」

「まあ、学ぶだなんて」

ノンキに笑ってるママ

「あと、こちらはお預かりしていた鍵です」

スツとテーブルの上に・・・　森下大一が持っていた鍵

本当に終わったんだ　もう・・・

おかえりって・・・

「おかげ様で主人のところに行けて、本当に助かりました」

「いえ」

「実は私と娘もアメリカに住むことになりましたね」

なんで決定したみたいに言うの？　決定と同じってことか・・・

聞かれもしないのに、ベラベラしゃべってる

「主人はねえ、娘に選ばせろって言うんですけどねえ」

二択じゃなかったよ　結局一択だったよ

「このとおり、一人では自分のこともできませんから心配でねえ」

「そうですか」

森下大一のお母さんは穏やかな顔でそう言った　穏やかな顔で

「丸山さんは今日は午前中は事務所にいますが、午後から会合だそうです

できれば今日、手数料などのお話をしたいとのことでした」

「あら！　それじゃ急いで行きます、えっと・・・」

「私は少し愛里さんとお話したいのですが、よろしいですか」

「ええ、もちろんです、それじゃ愛里ちゃん、ママ出かけるからね」

「うん」

「では失礼します」

ママが出かけた

女神、森下大一のお母さんと二人きり

「ダイチはどうだった？」

どうって・・・

「いい家政夫だった？」

「はい」

「本人は家政夫失格だって言ってたけどね」

失格？　なんで？

「愛里さん、イチゴある？」

「ありますけど」

「食べたいな」

「はい」

冷蔵庫開けて・・・

「昨日ダイチさんが買ってきたばかりなので新鮮です」

二粒分空いてない方のパックを出して

「一粒でいいわよ」

「一粒？」

「一粒」

「はい」

イチゴ一粒を洗って、小さいガラスのお皿に載せて小さいフォークをつけて・・・

森下大一のお母さんの前に置いたら、指でつまんで　口の中に・・・

「うん、ダイチの想いが詰まってる」

ダイチの思い？

「カズオが、私の夫がパートを始めたのは、ダイチの姉が幼稚園に入って少しした頃

パートを始めたって言われたときは少しビックリしたけど、

まあずっと家にいるとストレス溜まるしねえって私が言ったら、

いつになく強い口調で、そんなんじゃねえよ！　って」

森下大一のお母さんはおもしろい話でもしているような顔で・・・

「ねーちゃんが大好きなイチゴは俺の稼ぎで買いたいわって」

え？

「惚れた女にはそれくらいしたいって」

惚れた女・・・

「それ以来、私はカズオが買ってきたイチゴしか食べない

会合で食事してデザートにイチゴが出てきても、イチゴアレルギーですって」

そんなに　そこまでするほど大切なんだ

え　でも

「今、イチゴ食べましたよね？」

「あれは、ダイチの想いが詰まってるから」
ダイチの思いって・・・ なに？
「このノートはね」
仕事で私の食事を作って仕事で記録したノート
「あなたのお母様のためではなくて、ダイチが自分とあなたのために作ったノート」
自分と・・・ 私のため？
「見たらもう丸わかりで笑っちゃった」
何がわかったんだろう？
「ちょっと中を見て」
「あの、私、レシートとかそういうのあまりわからなくて」
「大丈夫よ、見て」
森下大一のお母さんが1枚ずつゆっくりと・・・
写真を見るのが辛い
あれ？ レシート・・・ なんか・・・
どんどん書いてあるものが少なくなって・・・
ゆうべのピザの写真の横には何も貼ってない
イチゴは？ イチゴ2パック買ったよね？
「ダイチが買ってきたイチゴは美味しかった？」
「あ、はい、私、イチゴが大好きで」
「イチゴは森下家の男の漢気 なんですって」
その言葉は・・・
「惚れた女のイチゴは俺の稼ぎで買いたいってね」
え・・・ なに？
「あの、どういう意味なんですか？」
女神がビクビクって顔で私を見た
「すごいわ、ここまで言ってもわからないって、かなりの天然！」
天然？ ゆうべモリシタダイチがお母さんが天然で・・・ その人に・・・
「まだ言っていないのか」
「何をですか？」
「これはダイチの手には負えないな」
私に言っていないよね 独り言になってるよね
「そうね・・・」
何か考えてる
「これしかないわね」
どれ？
「あのね、カズオと、私の夫とダイチは、ダイチが中学生になってから、
よく二人きりで話をしているの」
“とうちゃんと俺の秘密基地”
「カズオは男友だちがいないから、父と息子っていうより男同士の話ってカンジ？」
「そうですか」

「カズオはダイチが話したことは私には言わないけど」
目をキラんとさせた
「私がうま〜く誘導するとスルッとしゃべっちゃうの、しゃべったことも自覚してない」
女神に誘導されたらみんな自白しちゃうと思う
「ダイチが高校に入って少しして、こう言ったんですって
　　とうちゃん、俺、運命の人見つけた！ って」
モリシタダイチの好きな人・・・
「クラスは違うけど、一目見て、この人だ！ この人しかいない！ って」
聞きたくないな・・・
「チラッと教室の中を覗くと友だちとおしゃべりしてる顔や笑い声、
　　廊下で話してるのを聞いてると、どんどん好きになってやっぱりこの人だって」
「そう・・・ですか」
「この4月に、ダイチが、とうちゃん！ 俺の運命の人とおんなしクラスになった！ って」
同じクラスにいるの？ 誰？
「上原愛里とおんなしクラスになった！ って」
え？
「わかった？」
「え・・・」
「ダイチの、ダイチが自分の運命の人だって決めてるのは、上原愛里」
「え・・・ウソ・・・」
「ウソじゃないわよ、あなたがカズオのお見舞いに初めて来たとき、
　　上原愛里って聞いて、カズオは、もうつき合ってるんだって思ったんですって」
「でも・・・ ダイチさんは、私に好きな人がいるって言って・・・」
「そこがね、ダイチのおバカさんなところよね」
おバカさん？
「ダイチはそれとな〜くわからせようとしたんだろうけど、相手があなただもの」
相手が私だもの・・・とは？
「ダイチはけっこうモテるのよ」
「はい、それは・・・ ダイチさんが言ってました」
「本人が？」
「はい」
「あいつも！」
女神が困った顔で笑ってる
「でも、つき合ったことは一度もない」
「それも・・・ 聞いてます」
「だからねえ、ダイチなりには頑張ったんだけど、相手があなただからねえ」
その相手が私だからって どういう意味だろう
「ダイチが好きなのは、愛里さん、あなたのことよ」
「でも、ダイチさんは一度もそんなこと・・・」
「まあこれから言うつもりなんでしょうけど」

「これから？」

「私が先に言っちゃったけどね！ ハッハッハッ」

だったら・・・ だったら・・・

「私は・・・ 私に嫉妬してたってことですか？」

あ もう 泣いちゃ・・・

「そのとーり！」

「バカみたいじゃないですか！」

「バカみたいよねえ ハハハハ」

「笑わないでください！」

「だっておかしいんだもの！」

「そうですね・・・」

モリシタダイチが好きな人は・・・ 私？ 私だって 女神が・・・

「でも、あなたはアメリカに行くのよね」

あ・・・ 現実が

「はい」

「そう」

「はい」

「あなたは行きたいの？」

「それは・・・ 母が言ったとおり、私は一人では何もできないので」

「あなたは行きたいの？」

「ですから、私は一人では・・・」

「却下！」

え あ 却下・・・された

「あなたは行きたいの行きたくないの、どっち？」

“かあちゃんには本音しか通じねえ”

「行きたくないです」

「でも、アメリカに行ったら可能性が広がるかもしれないわよ」

「可能性って・・・ そんなのまだ私のどこにあるのかもわからないのに」

「世界に大きく羽ばたいていくチャンスだってあるかもしれないわよ」

「世界とかそういう・・・」

「あなたの、人としての器を広げてくれるかもしれないわよ」

器・・・ “イチゴ1個入るくれえっス”

「私の器は・・・ イチゴ1個どころか、イチゴの種一粒しか入らない大きさで、

それを広げろって言われても、どこをどう広げたらいいのか、

広げるって何なのかさえわからないです」

でも・・・

「私の器にイチゴの種一粒は入るんだとしたら、私はその種を大切に入れておきたい、

そしたら、もしかしたら、小さな芽が出て、そしたら、私の器も役に立つなって」

だから

「私は世界に羽ばたくとか可能性を広げるとかより、

今ある小さな器の中の1個の種を大切にすることが私には合ってます」

女神が私のことを厳しい目で見ている

「そう、それがあなたの考えなのね」

「はい」

「今のがうちの会社の入社面接なら・・・」

女神が私を上目遣いで見て

「私はイッパツで合格を出す」

「えっ・・・」

なんかわからないのに・・・なんか泣けてきちゃって・・・

まるで憧れの会社の入社試験に合格してみたいな・・・

「私は海外事業部専属取締役なんだけどね」

とっ 取締役？

「よくいるのよ、御社なら自分の可能性を広げてくれると確信してとか、
世界に羽ばたくような仕事をしたいとか、自分の器を広げられるのは、
御社だと確信してとかね、漠然とし過ぎだっただの！」

お おお

「器？ まずはあんたの器はどんくらいなのよ!?って話！
今の自分の器がどれくらいなのかも知らないでどうやって広げるんだっただの！」

これは・・・ 私に言ってないよね 独り言だよ

「まあ、そういうことよ」

何か収まったのかな

「愛里さん、あなたに見せたいものがあるの」

「私に？」

「一緒に出かけない？」

「はい」

ママに LINE して女神と出かけた

マンション

もし私の理想の部屋はどんな部屋と聞かれたら ここ
私の理想の部屋が実在していた そんな気持ち
白い壁 本物の木のフローリング 窓枠も白で
窓から入ってくる風も気持ちいい
「ここがベッドルームよ」
白いベッドに白いドレッサー
「見て、このクローゼット、いくらでも服が入るわよ」
作り付けの白い扉の壁面いっぱいのクローゼット 女の子の夢！
「このドレッサーは古いんだけど、何度も修理したり塗装してるの」
雰囲気があってステキ！ こういうドレッサーが私の理想
リビングにはブルーグレーのソファにスモーキーピンクのクッション
白のフワフワのラグの上に白いローテーブル
「このソファはソファベッドなのよ」
ソファベッドまで？ 最高過ぎる
「ここは家具付き」
家具がついてるの？ このまま使えるってこと？ 最高過ぎる
「どう？」
「理想の部屋です！ 今すぐ住みたいくらいの部屋です！」
「そう」
女神が嬉しそうにほほ笑んだ
「ここはね、私が所有している物件」
女神の？ どおりでステキだと思った
「私が若い頃ここに住んでたの」
「そうなんですか！」
「ここにカズオを勢いで連れてきちゃって」
笑いながら話す女神
「妊娠して結婚してヒトミが生まれて、ダイチがお腹にいるときに、
いくらなんでももう狭すぎる、限界って引っ越したたんだけど、
ここだけはねえ、手放せなかった」
そうだね 女神の大切な歴史が詰まった部屋だもの
「今でも定期的にメンテしてるからいつでも住めるようになってるの」
「今すぐでも住めますね」

「そうね」

女神が優しい目で私を見て

「ここをね、あなたに貸したいなって思ったの」

「私に？」

「今まで誰にも貸してないし貸す気もなかったけど、あなたなら住んで欲しい」

私なら

「でも、あなたはアメリカに行くのよね」

現実

「はい」

「一人では何もできないから」

「はい」

なんか・・・ 夢から覚めてしまった気分

「あなた以外には貸すつもりはないから、ここはまた空き家ね」

そこまで・・・

「あなたに見せたかっただけ」

「こんなにステキなお部屋を見られて嬉しいです」

「愛里さんはアイス 好きよね？」

「はい」

「この近くに老舗のアイスの美味しいカフェがあるから行かない？」

「行きたいです」

このお店 ステキ

アンティークな雰囲気です ホットする空気

「ここはね、休みの日に家で仕事して息抜きによく来てたのよ」

「家の近くにこんなステキなカフェがあるって最高ですね」

「このアイスはこのお店の古くからの定番」

ベリーベリーストロベリー！

「美味しい！」

イチゴがゴロンと入っていて・・・ あれ？

「このイチゴは食べていいんですか？」

「このアイスは特別なの、思い出がたくさん詰まってるのよ」

そうなんだ そうなのっていいなあ

「これは自然なイチゴの香りがして、甘すぎなくて、アイスも上品でクリーミーですね」

「あなたの味覚はすごいね」

「はあ、多分味覚はあるとは思いますが・・・ 作るのは・・・」

「私も作るの大嫌い、料理なんて拷問よね」

拷問！ わかるううう

駅前で・・・

「今日はありがとうございました、女神の歴史を見せていただいてしあわせです」

「だからその女神ってなによ」

笑う女神

「私は病院へ行くけど、一人で大丈夫よね」

「はい、電車で一本なので」

「それじゃ、またね」

また・・・ またってあるのかな・・・

「はい」

夕食はママが時差ボケがひどくて作れないってお寿司を取った

鯛、マグロ、ヒラメ、ウニの軍艦巻、タコ・・・ タコはモリシタダイチの・・・

シャワーを浴びて

モリシタダイチのノートを開いた

この字は知ってる 生物のノートで見たから

私のために作った食事やお弁当の写真がいっぱい

あ このお弁当 コメノ マジでゴメンだったんだ

なんかずーっと昔みたいな気がする

女神はモリシタダイチの好きな人は私だって言ってたけど 本当かなあ

そんなこと言ったことないよ

おもしれえとかたまねえとか そんなことしか言われたことない

私は・・・ え 私・・・

“私は私に嫉妬してた”

嫉妬してた？ モリシタダイチが好きだっていう人に？

嫉妬って まあ でも モリシタダイチが好きな人のこと考えるとモヤッとして

でもモリシタダイチといるときは そんなこと考える なんていうか隙間もなく

でも チラッと頭に浮かぶと気持ちが・・・

私・・・ モリシタダイチが好き？ Like じゃなくて Love？

いつから？ え・・・っと エーーーーッ いつから？

なにかあったっけ？ そういうなんていうか きっかけみたいな

ない ないんだけど だって私、一度はクビ・・・じゃなくて契約やめたって

なんでやめたくなったんだっけ？ あのとき女神が来て・・・

“苦しい” 苦しいって言った 私 苦しいって

私にしてくれていることが仕事だからなのか・・・ 切り替えが・・・

え？ あれ？ なんてそんなこと思った？

あの日は・・・ カフェで・・・ ストロベリータルト一緒に食べて・・・

あのとき モリシタダイチは好きな人のこといっぱい言ってた

それで 私 なんかすごく・・・

いつ好きな人に告白するのかって聞いた 聞いた そしたら・・・

この仕事終わったらって
それで・・・ え ちょっと待って ていうことは 私はあのときもう
モリシタダイチが好きだった？ だから ドーンて
いつから？ あれではないことは確か、最初に購買で遭遇した？
あれは怖かっただけだよ モリシタダイチが初めて家に来て・・・
あのときも何がなんだかってカンジで あのときでもない
私・・・ いつからモリシタダイチを好きになったの？
わからない
LINE 見ればわかるかな？
なんか 全部楽しそうに 楽しかったし
写真？ モリシタダイチのふざけた顔とか 動画とか そんなのがいっぱい
私の中は・・・
知らないうちにモリシタダイチでいっぱいになってた
なんで？
モリシタダイチが送ってきた最後の写真
しあわせそうな顔してる しあわせだったから
この空気の中では 私は楽に息ができて こんなにしあわせで
この空気の中では・・・
でも・・・
私はアメリカに行く
アメリカに行くんだよ もう この空気の中にはいられないんだよ
どっちにしたって もう終わり
女神が言ったとおりなんだとしても モリシタダイチが私のこと好きなんだとしても
私がいつのまにかモリシタダイチのことが好きになっていても
やっぱり 昨日で終わり
いい思い出 そんなカンジじゃないよ そんな軽い言葉じゃない
いい思い出ができたから切り替えてアメリカに行こうなんて できないよ
切り替えられない
でも 現実には・・・ 私はアメリカに行くしかない
なんか・・・ 好きにならなければよかった
いつから好きになったのかもわからないけど
そしたらもっと軽い気持ちでアメリカ行けるのかな
モリシタダイチと出会わなかったら もっと
わからないけど 出会っちゃった 出会っちゃったから
なんか 苦しい 息が苦しい
だけど アメリカ行くしかない
アメリカで 息ができるのかな 何も想像できない
アメリカ行ったらいいことがあるかもしれないなんて
あるかどうかはわからないこと想像できないよ
わかってるのは 私は一人では自分のことも何もできないってこと

知恵熱

ママはまだ時差ボケで、起きなくていいって言ったら
私の朝食やお弁当作らなきゃって
そんなのテキトーにできるし昼は購買でパン買うからって言ったら
「愛里ちゃん・・・ おとなになって」って 泣く？ そんなことで泣く？
冷蔵庫開けたら イチゴ
モリシタダイチのノート 最後の日のところにはレシート貼ってなかった
イチゴ2パック買ったからいくらでも食べられるぞって言ったのに
“惚れた女のイチゴは俺の稼ぎで買いたいってね”
女神の言葉
ちょっと待って モリシタダイチのノート
レシートには イチゴが載ってない どこにも
“イチゴは、森下家の男の漢気”
女神が・・・ あ、その前に・・・ ストロベリータルト食べたとき
モリシタダイチが言ってたんだ
あのときもなの？
モリシタダイチは私の好きなイチゴは全部自分のお金で買ってくれてたの？
“ダイチの想いが詰まってる”
女神のあの言葉は そういうことなの？
イチゴ 一粒出して 食べたら
モリシタダイチがいっぱいで お弁当のイチゴも 朝のイチゴも
私はモリシタダイチの・・・ 知らないうちにいっぱい いっぱいもらってた
味がする イチゴの美味しい味
モリシタダイチがそばにいたときの なんにも考えなくても美味しかった味
私がイチゴ食べてると嬉しそうに見ていたモリシタダイチの顔が
ありがとうって こんなにいっぱいありがとうって 言えなかった 知らなかった
今日学校で どんな顔して会えばいいんだろう
何も知らなかったときの顔って どんな顔してたの私？
でも、もう知っちゃった
でも 私はアメリカ行っちゃうから 何か言ったって 意味ないよね 意味ないよ

モリシタダイチのパジャマはゆうべ縫った

パジャマはお互いに最後まで縫うって約束したから
ママがビックリしてた
「愛里ちゃん！　ママより上手よ！」って、モリシタダイチの線が正確だからで
「ママねえ、最近ちょっと老眼きちゃってるみたいでねえ」
更年期に老眼に時差ボケ　ママも大変だな
「上原さん、おはよう」
「川口くん、おはよう」
「これ」
えっ　私のパジャマが入ってる手提げ
なんで川口くんが？？？
「校門のところで森下のお母さんが上原さんに渡してくれって」
え？　女神が？
「森下、熱出して今日は休むって」
熱？
「知恵熱だって、森下のお母さんが言った」
「ちえねっ？　ちえねっってなに？」
「赤ちゃんが知恵がつき始めた頃に突然起こる熱」
赤ちゃん？
「おとなの場合はストレス性高体温症っていうんだけどね」
ストレス？
「森下、何かストレス溜まることとかあったのかなあ」
私のところで仕事してたストレスがイッキに出た？
「あれ？　臨海水族館に行ったの？」
え？
「このキーホルダー、臨海水族館オリジナルだよ」
キーホルダーだけでどこの水族館かわかるの？　すごすぎて・・・　引く
「僕はいつか三津シーパラダイスに行ってみたいんだよなあ」
どこなのかわかんないけど
「森下と行ったの？」
えっ？
「う・・・うん」
なぜモリシタダイチと行ったとわかるの？　キーホルダーでわかった？
「このキーホルダー、カバンにつけておくと外れて失くしちゃうよ」
「そうなの？」
「僕、何回か失くしちゃって、鍵につけるようにしてる」
そうなんだ
失くすのはイヤだな　私も鍵につけよう
「上原さん、元気ないよね」
「え？　私？」
「うん、なんかいつもと違うよ」

「そんなつもりは・・・」

顔に出てるのかな　すぐ顔に出るってモリシタダイチに言われた

誰かに話したい　アメリカ行くこととかいろいろ

誰か・・・

「川口くん、昼休み、ちょっと話聞いてくれない？」

「いいよ」

なぜ川口くんを選んだ？

ミカリンやアミリンは？　あの二人に話すにはいろいろ細かくたどらないと

めんどくさい　川口くんの方が楽　なんか楽　ちょっとマニアックだけど

川口くんと購買でミックスサンド買って中庭のベンチ

「そうか、上原さんアメリカに行っちゃうのか」

「うん」

「せっかく友だちになれたのになあ」

「そうだね」

「森下はなんて言ってるの？」

「モリ、森下くん？」

「森下には言ったんでしょ？」

「言っていない」

「なんで言っていないの？」

「まだ会っていないし、今日は休んでるし、そんなこと森下くんに言っても・・・」

「だって上原さんと森下、つき合ってるんでしょ？」

「つき合っていないよ！」

「え？　でもさ、どうしようかな、でも」

なに？　なんなの？

「これさ・・・」

川口くんが気まずそうに携帯を・・・　写真？　え？　これは・・・

モリシタダイチが私の口元にイチゴを・・・　金曜日

「僕のところまでまわってきてるってことは、かなりまわってると思うよ」

私がいいつも中庭でお弁当を食べるって知ってるのは・・・　あの二人

「前もさ、森下のこと学食で遠くから撮ってる子たちがいてさ」

子・・・たち　一人じゃなくて

「上原さんの友だちだと思うんだけど」

そっか　そういうことか

「でも、つき合ってるならそんなに気にすることないよ」

「つき合っていない」

「え？」

「私、森下くんから・・・　コクられたことはないし、私もそういうのしてないし」

「でも、どう見てもお互い好きだよね」

「ハ？」

「この写真だってさ、好きじゃなきゃこんなことしないよね」

「でも、これは・・・」

「上原さんだって好きじゃなきゃ、アーンてしないよね」

「でも、それは・・・」

「たとえばさ、僕が上原さんにアーンしてってイチゴ差し出したらどう思う？」

川口くんが・・・イチゴを・・・え・・・

「今キモイって思ったでしょ？」

「え・・・」

「僕も僕がそんなことしたらキモイよ」

「ああ、そうなんだ！」

「やっぱりキモイって思ったんだね」

「あ・・・ うん、ごめん」

「全然いいよ」

なんか 川口くんて 楽だ

「それにさ、森下、ずっと上原さんのこと好きだったよ」

「え？」

「僕も上原さんが好きだったでしょ？ あ、今はそういうの無いから」

「あ、うん」

「一年のときから上原さんと廊下ですれ違ったりすると見ちゃっててさ」

そうだったの？

「今思うと、好きっていうより憧れだったんだらうなあ」

あ、そう 何に憧れてたのか知らないしどうでもいいけど

「それでね、あれ？ って」

「あれ？」

「上原さんのこと、いっつも見てたんだよ、森下も」

「え？」

「森下とは中学が一緒でね、クラスは違ったけど」

そうなんだ

「森下すごくモテててさ」

マジだったか

「でも、全然そういうの興味なさそうで、僕、森下ってホモなのかなって」

ホモ？ どうすればそういう発想になる？

「それくらい女の子に興味ないってカンジで」

あ そういうこと

「その森下がずっと上原さんのこと見てたからさ、上原さんのこと好きなんだなって」

実感ない 女神に言われても 川口くんに言われても

好きって言葉の実感がない

「お互い好きなのにさ、なんでつき合わないの？」

「え・・・」

「まわりから見るとつき合ってると思えなかったんだけどなあ」
「それは・・・」
「どうしよう 家政夫だったってこと言わないとわけがわからないだろうけど
でもそんなこと・・・ でも・・・ 誰かに言いたい 聞いてほしい
「川口くん、今から言うこと、誰にも言わないでくれる？」
「僕は絶対に誰にも言わないよ、友だちに裏切られるのって悲しいよね」
「え？」
「僕、上原さんのこと好きだとか映画に誘うつもりだとかそういうの、
親友にだけ話してたんだよ、だけど、あちこちで言ってたみたいでさ」
だからモリシタダイチがその話を知った・・・
「だから僕は絶対に言わない、墓場まで持って行くよ」
墓場までは・・・ ちょっと重たすぎる・・・
「それじゃ言うけど・・・」

全部話した モリシタダイチが家政夫として私の世話をしていたこと全部
「そうだったのか」
こんなにスンナリ受け止めてくれるとは思わなかったけど
「森下も辛かったろうなあ」
えっ 私の世話は大変だってこと？
「好きな子の家に家政夫として働くって、切り替えできないよね」
「すごくちゃんと切り替えてたけど」
「上原さん、仕事でイチゴアーンはしないよ」
「え？」
「信号が青で手を握って渡るって、ヨボヨボのおばあさんの介護じゃないんだから」
え・・・
「好きが出ちゃったんだろうなあ」
好きが出た？
「上原さん、アメリカ行きのこと、森下に言った方がいいよ」
「まあ、そのうち言うけど・・・」
「すぐに言った方がいいよ、他の人から聞いたらショックだよ」
「ショック？」
「やっぱり直接上原さんから聞きたいと思うよ」
「そう・・・かな」
「今日、授業終わったら森下の家に行こうよ」
「えっ、きょ、今日？」
「早い方がいいよ」
「でも、熱・・・」
「心因性ならすぐ下がるよ」
しんいんせい？
「でも、私、森下くんの家知らないし」

「僕が連れて行ってあげる」

「ハ？」

「住所知ってるから、同じ中学だったから」

「ああ・・・」

「僕はそこまでですぐ帰るから安心して」

「はあ」

「上原さん」

「はい？」

「僕に大切な話をしてくれてありがとう」

「え、こちらこそ聞いてもらっちゃって」

「なんか上原さんと親友になれたみたいな気分で嬉しいよ」

「親友？」

「あ、気分だけだから」

川口くん・・・

「川口くんはもう私の親友だから」

「え？」

「ちょっとマニアックなところはついていけないけど」

「それでも僕の話聞いてくれるのは上原さんと森下だけだから」

そっか

放課後になって 川口くんとモリシタダイチの家に向かった

モリシタダイチの家

ここは・・・

「川口くん・・・ 住所・・・ 間違えてない？」

ここは・・・

「間違えてないよ」

「でも・・・」

ここは・・・ 昨日 女神に連れてきてもらったマンション なんだけど

「ちょっと待ってね」

ドアの前にある、昨日は女神が鍵をかざしてたところに番号打ち込んで

「はい」

この声は女神？

「森下くんの同級生の川口です」

「どうぞ」

ガラスのドアが開いた

川口くんがエレベーターのボタンを 5階 昨日の部屋は2階だったよね

502と書かれている部屋のドアホン

「川口です」

「はい」

ドアが開いて

「いらっしゃい」

女神が・・・

「あら」

私の顔を見てそう言ってニッコリした

「ちょっと待っててね」

玄関からいちばん手前のドアを開けて

「ダイチ！ あんたまだ寝てるの？」

「お友だちが来たわよ！ 起きなさい！」

「あぁ？ 友だちい？ だれ」

ダルそうな声

「川口くん」

え、私は？

「川口？」

メッチャダルそうな声が近づいてきて
ドアから赤いTシャツの裾めくってお腹ポリポリかいてあくびして
「ああ、おう」
寝ぐせでおっ立った髪で眠そうな目で川口くんを・・・
その目が横にスライドされてそのまんま止まった
あ 開いた あ もっと開いた そして 止まった まんま
「ダイチ！ 早くお通しなさいよ！」
奥から女神の声
「え、あ、え、どうぞ」
「お邪魔します」っていう川口くんの後ろを黙ってついていって
「どうぞ、座って」
女神の顔を見るとホッとする
川口くんと二人 ソファに座る
「何か飲む？」と明るく聞く女神
「大丈夫です」と言う川口くん
「何か飲みたくなったら冷蔵庫勝手に開けて好きなもの飲んでね」
勝手に冷蔵庫を開けさせてくれる太っ腹な女神
「コーヒーも煎れてあるから」
「ありがとうございます」と言う川口くん
「それじゃ、私は病院に行くから」
え？
「ゆっくりしてって」
女神！ 行かないで！ 行かないでー！

ローテーブルを挟んで 川口くんと私の前に立っているモリシタダイチ
横に線が入った緑のジャージ 右足の裾がひざ下までめくれあがってる
あ 視線感じたのかな 左足の指でそーっと下げた

なんだろう この沈黙

誰が耐え切れず声を発するかみたいな我慢大会みたいな沈黙
私は慣れてるけどね 新学期になって何も言わないまま学校終わったことあったし
「なんで」
モリシタダイチ 脱落
「なんで、あの、えーと、あの」
何が言いたいかわからないまま声を発したか
「あ、なんで、カバン、イカのキーホルダーつけてねえの」
ハ？
「カバンにつけたっつってたじゃん」
そこ？ イカのキーホルダー？ そんなに気になるイカのキーホルダー？

答える気にもならない

川口くんがチラチラ私を見てるけど 私は答えません

「あの、僕が、カバンにキーホルダーつけると外れるよって」

生真面目に答えなくていいと思うよ川口くん

「上原さん、ちゃんと鍵につけたから、安心して」

安心してとか そこまで重要？ イカのキーホルダー？

「あ、ああ、そっか」

なんか・・・ なんていうか・・・

頭の中でカラカラカラって 空回りの音が聞こえる

「熱は下がったの？」

「あ、おう、もう下がった」

「よかったね」

「おう」

なにこの中身の無い会話

なんかもうめんどくさくなっちゃった

え なに 川口くん ヒジで私のことツンツンて

「なあに 川口くん」

「僕？ 僕なの？」

誰だろうともうどうでもいい この耐えられない空気から逃げ出したい

「それじゃ、僕から、言うよ？ 上原さん、言うよ？」

さっさと行って

「今日来たのは、上原さんが森下に直接話したいことがあるからって」

行こうって言ったのは川口くんでしょ

「ほら、上原さん」

何を言えばいいの何を言いに来たんだっけ

「聞いた」

え？

「かあちゃんから聞いた、昨日」

昨日？

「愛里がアメリカ行くって」

聞いたんだ

「ああ！ だから森下、熱出したんだね、ショックで」

川口くん？

「知恵熱、おとなの場合、ストレス性高体温症だけど」

そんなにストレートに・・・

「え、あ、なんか知んねえけど、夜中に熱出て、昼には平熱になったけど」

「典型的な知恵熱だね、あ、ストレス性高体温症」

病院の診察みたい・・・

「ショックだよ、森下、上原さんのこと好きだもんね」

か わ ぐ ち く ん ？

「あっ！」
自分が何を言ったのか気づいたのか
「あの、僕、帰るね」
こんな状態にして帰れると思うな！
制服のジャケット グイッと引っ張って座らせた

そして また 沈黙

どうしよう 帰りたい もう知ってるなら 私から言わなくても
「行きてえの？」
え・・・っと 誰に言ってるのかな
「アメリカ行きてえの？」
私か
「愛里はアメリカ行きてえの？」
行きたいとか・・・
「母が父と暮らしたいって」
「愛里は？」
「あの家も売るので、私も行くことになりました」
「愛里は行きてえのかって聞いてんだけど」
「行くしかないんです、あの家も」
「愛里はアメリカに行きてえのかって聞いてんだよ」
なによその怒ったみたいな言い方
「お母さんがどうとか家がどうとか」
イライラしたみに
「俺が聞いてえのは、愛里はアメリカに行きてえのかっつうことだよ」
なによ！
「行きたくないです」
だけどね
「行きたいとか行きたくないとか、そういうことじゃ片付けられないことも」
カバン持って 立ち上がって
「あるんです！」
モリシタダイチを睨みつけて 私はもっと怒ってるもっともっと
「行かないという選択は私にはできないんです！」
怒ってる 自分に
「いろいろお世話になりました、さようなら」
そのままモリシタダイチの家を飛び出した

エレベーターのボタン押して 早く早く来て
来た
えっ モリシタダイチが走ってきた 閉のボタン連打

ドアが閉まッ えっ 手でグイッて 怖いっ 顔が怖いっ
モリシタダイチが乗り込んで 私の腕をつかんで 一階のボタン押した
なに？ なんなの？
エレベーターの中で腕つかんだって どうせ逃げられないんだから
早く早く着いて
あ 着いた
バス停はあっち って、えっ ちょ ど、どこに
「放してください」
無視？ 聞こえない？
「放してください！」
なんなの？
「私、帰りますから！」
もんのすごく腹が立ってきた
「腕が痛い！ 放して！」
モリシタダイチが腕をつかんだまま振り向いた
「頼むから、一緒に来てくれよ」
え・・・
頼むからって・・・
そんなこと言われたら・・・
行くしかないじゃん
どこに行くのか知らないけど

好きが出て

ここは・・・ 空き地？

いろいろな高さの草が生えていて 小さな白い花があちこちに咲いてる

この白い花って・・・

「ここは・・・ どうちゃんと俺の秘密基地、つか、野っ原」

ここが・・・ 動画では夜だったからよくわからなかった

「愛里が、いつかぜってえ連れてきてっつってたから」

それで・・・ アメリカ行くから 最後になって

そういう 最後に的なの やめてほしい

「そうですか、ありがとうございます」

帰ろう

「それじゃ」

さっき来た道の方へ

「ちょ、ちょ、ちょ、どこ行くんだよ」

「帰ります」

「まだ話終わってねえよ」

話って もう何も話すことなんかないよ

「愛里」

モリシタダイチが私の両肩つかんで 私の顔を見るけど 目を合わせられない

「かあちゃんから聞いたんだけどさ」

女神・・・ 他に何を言ったの

「愛里がアメリカに行くのは、自分のことが一人じゃできねえからって」

そんなの改めて言われなくても 言わなくても

「マジで、そんだけ？」

そんだけ そんだけって

「あなたには、それだけなのかもしれないけど、私にはすごく大きな」

「マジ、そんだけか？」

だから

「パパは・・・ ママとアメリカと一緒にいくか、こっちで一人で暮らすか、

愛里に選ばせた方がいいって言ったらしいんですけど」

だけど

「私は一人では自分のこと何もできないから、選択肢なんてなくて・・・

アメリカに行くしかないんです」

「なんだよそれ」

なんだよって言われたって

「なんだよ、そんな・・・ そんなんで、そんな理由だけで」

そんな理由が私にはすべてかき消すくらい大きいってことは・・・

「そんな理由でアメリカ行くなって なんだよ」

独り言みたいに言ってるけど・・・

そんな理由でアメリカに行かなきゃならないの 私は そんな理由で

「そんじゃさ、そんじゃ、そういうの取っ払って・・・」

取っ払うって・・・ できないよ それがいちばん大きいんだから それだけなんだから

「そういうの考えねえで、そしたら、こっちで暮らしてえの？」

だから

「こっちで暮らしたいとか、アメリカ行くとか行かないとか、そういう・・・

そういう選択肢は私にはないんです！ 自分のことができないんだから！」

あなただって

「あなたがいちばんよくわかってるでしょ！」

そばにいたんだから

「私は自分のことさえできない何もできない、だから」

「なんだよそれ！」

怒鳴られたって 事実なんだから それが 私の現実なんだから

「俺がいんだろ！」

ハ？

「掃除でも洗濯でもメシ作んでもさ、愛里のことは俺がやっからさ！」

ナニヲイッテルノ？

「全部俺がやっから、アメリカなんて行くなよ！」

それは・・・

「あなたが・・・ 私の・・・ 家政夫になると・・・いうことですか？」

「あ？」

「私は家政夫雇うとかそんな余裕は、三週間どころじゃなくてもっと」

「家政夫なんてやんねえよ！」

え？

「俺は、愛里んところ行ってたとき、仕事だと思ったこと一瞬もねえよ！」

え？

「最初は、仕事依頼されて、とうちゃんの代わりに、愛里ん家行ったけど」

バリバリ頭掻いて

「愛里ん家だって知らなくて、なんつうか、ビックリしたけど」

それは・・・ 私だって 同級生の男子が来て

「愛里は、俺が仕事で、つうか家政夫だからやってっと思ってたけど、

まあ、そう思うのはあたりめえっつうか、なんだけど」

全然私の顔見ないんだけど

「俺は、愛里が俺の作ってメシ美味えつつってくれて、俺が作った弁当好きだって、
なんつうか、俺は、そういうのすげえ嬉しかったっつうか」
え・・・っと 何が言いたいんだろう
「愛里が笑ったり泣いたり怒ったりそういうの、すぐそばで、なんつうか」
なんかよくわからない
「愛里のそばにいと、なんつうか、どどん、つうか、もっと」
「あの！」
モリシタダイチがやっと顔あげた
「何を言ってるのかよくわかりません」
「あ？」
「なんかダラダラと、何が言いたいんだか全然わからなくて」
「わ、わかんねえ？」
「もっと、生物のノートみたいに簡潔にわかりやすく言ってください！」
ポカンとした顔して
「何が言いたいんですか？」
あ タコみたいな口して なんか考えてる
「俺は・・・」
私の顔を見た 真っ直ぐ
「俺は！ 上原愛里が好きだ！」
怒鳴って言う？
「俺が、命賭けて惚れたのは、上原愛里なんだよ！」
どうしよう
「本当のこと言っていていいですか？」
モリシタダイチが眉間にシワ寄せてくちびる嚙んだ
「いいよ」
「絶対に怒らないって約束してくれますか？」
「ぜってえ怒らねえ」
「私、昨日、あなたのお母さんから聞きました」
「かあちゃんから？ 何を？」
「ダイチが好きなのは、愛里さん、あなたよって」
「へ？」
「ダイチが運命の人だって決めてるのは上原愛里って」
あ モリシタダイチ ヘタヘタッと座っちゃった
「かあちゃん・・・」
うなだれちゃってる
「なんで、んなこと・・・ 俺より先に言っちゃまうんだよ！」
「ダイチの手には負えないって」
「あ？」
「相手はあなただからねって」
情けな〜い顔で私のこと見てるけど

「相手が私だからって、どういう意味でしょう？」
情けな〜い顔のまま　なんか言葉探してるみたいだけど
「まあ、それはいいですけど」
見つからないみたいだから
「川口くんにも言われました」
「川口？」
「はい、川口くんに話を聞いてもらいましたから」
「なんで川口に言うんだよおお？」
「他に誰がいるんですか！　こんな話聞いてくれる人なんて川口くんだけですよ！」
ちょっと口はとがらせてるけど　納得したのね
「森下は一年のときから上原さんのこと見てて」
頭抱えた
「ああ、上原さんのことが好きなんだなって」
顔あげた　私のこと見た
「好きだよ、一年んとき、はじめて見たときから、ずっと好きだったよ！」
ヤケになったみたいな声でそんなこと言われても
「だけど、私、あなたのお母さんや川口くんやあなたに、好きって言葉言われても」
なんて言えばいいのかなあ　えっと・・・　あ！
「目の前に、好きって書いた紙を見せられてるカンジで」
「へ？」
「なんか、心に入ってこないんです」
そんな絶望的な目で見られても
「それってなぜなのか、いろいろ考えたんですけど」
どう考えても
「順序が逆なんです」
「あ？」
「川口くんが言ったんです、また川口かよって言わないでくださいね」
おうって顔した
「信号が青になって手をつないで走るの、なんていうか、そういうことで、
　　ヨボヨボのおばあさんの介護じゃないんだからって」
「へ？」
「私は仕事で手をつないでくれてると思ってました」
ポカンとしてるけど
「でも川口くんは、好きが出ちゃったんだねって、そうなんですか？」
モリシタダイチが上目遣いでチラッと私を見て
「出ちゃってました」
あれは　あなたの　好き？
「だから・・・　私はしあわせだったんですね」
「え？」
「あなたの好きを感じたから」

「愛里」

「私はあなたの好きをいっぱい感じて、その中にいるととってもしあわせで、

あなたの好きを、私はもう感じてたから、言葉で言われても・・・

だってもう知ってるから、あなたの好きの中にいたらどんなに・・・」

お願い・・・出ないで・・・涙・・・

「だけど、私はアメリカに行かなきゃならなくて」

笑わなきゃ・・・

「しかたないんです、もうそれは決まったことで、それをあなたに直接・・・」

顔を見たら・・・泣いてしまいそうだから・・・

「アメリカで私はきっと新しい可能性を見つけて、新しい友だちもできて、

新しい体験とか・・・」

だけど・・・

「私は・・・アメリカで・・・息ができるのかな・・・」

できるのかな・・・

「私、しかたないってわかってるけど、わかってるんだけど」

モリシタダイチが私の前に・・・

「困るんです、空気がないと・・・息ができなくて、苦しくて、すごく苦しくて」

私のことを見ているその目に・・・好きが出ていて・・・

「私、モリシタダイチがいないと困るんです」

抱きしめられて好きが出ている腕の中で涙が止まらなくて

「愛里」

好きがいっぱいのあなたの声を聞いて・・・

「愛里」

はい

「行くな」

その声にもいっぱい

「愛里のことは俺が全部やっから、やりてえから」

顔をあげたらモリシタダイチの目にも・・・

「やらせてくれよ」

濡れた優しい目で・・・

「俺がいたらさ、愛里が行かなきゃなんねえ理由、なくなっだろ」

どうして・・・

「どうして・・・そこまでしてくれるんですか」

「決まってるだろ」

決まってる？

「愛里がいなくなったら」

真剣な顔で言うその言葉が

「俺の世界は壊滅する」

震えるほど胸に響いて

「俺がなんとかすっから、ぜってえなんとすっから」

腕の中で うなずくしかできないほど

ここにいと 息ができる

ママの涙

私が泣きやんで ちょっと落ち着いて

「愛里」

「はい」

「ここ、とうちゃんとの秘密基地だけどさ」

「はい」

「愛里と俺の秘密基地にすっから」

「えっ そんな、とんでもない、恐れ多くてそんな」

「だってもう愛里がいんだよ」

私がいる？

「この白い花、毎年ここに咲いてんだけどさ」

これは・・・

「白くて可愛くてきれいで」

ちょっと照れたみたいに

「なんか愛里みてえだなって」

「そうですか」

「愛里がいるみてえだなって」

「フラワーアレンジメントの教室で何回か使ったことがあります」

「マジ？」

嬉しそうにしてるけど

「ドクダミです」

「えっ」

「私みたいなんですよね」

「あ、や、だから、なんつうか」

「好きですよ、私、ドクダミ、アレンジメントに使うと可愛いんです」

「そっか」

「年の数だけのバラよりずっと気が楽です」

モリシタダイチが情けない顔で笑った

「これは全部私がもらっちゃっていいんですか？」

「これは全部愛里のもんだ」

「はい」

あれ？

「川口くんはもう帰ったんですか？」

「あっ」
あって何？
「俺・・・」
なにその顔？
「川口に留守番してろ！ つって出てきちまった」
「エーーーーッ」
「と、とにかく、戻ろ」
「はい」

モリシタダイチの家に戻ったら
川口くんがソファの端っこにチョココンと座ってコーヒー飲んでた
律義に留守番してたんだ 川口くん
「おかえり」
おかえりとか言っちゃって
「コーヒー、勝手にもらっちゃったけど」
「ああ、おう、全然、ああ」
謝りなさいよ
「川口、あのさ、んっと」
「ベランダの窓が開いてたから」
「あ？」
「上原さんの声はそんなに聞こえなかったけど、森下の声はよく聞こえて」
えっ
「だから流れはだいたいわかってるから」
「あ、そ、そっか」
「森下ってやっぱりすごいなって思ったよ」
なにが？
「中学のジャージにヨレッとしたTシャツで寝ぐせつけてコクれるってさ」
モリシタダイチが「ん？」で顔から「あっ！」って顔になった
やっと気づいたんだ、自分がどんな格好で私にコクったか
「僕がそんな恰好してたら悲鳴あげて逃げられちゃうよ」
川口くん、私は見慣れているだけなの、寝ぐせは初めて見たけど
あ モリシタダイチが手でさりげなく寝ぐせ直そうとしてるけど
今さら遅いよ 直ってないし
「僕、感動したよ」
川口くん、もうそれ以上は・・・
「俺が命賭けて惚れたのは上原愛里なんだよ！ って大声でさ」
丸聞こえだったんじゃない！
「言えないよ、ふつう、あんなドラマみたいなセリフ」
川口くん、悪意がないから逆にメッチャ刺さると思うよ

モリシタダイチが真っ赤な顔 あっ！

あれは・・・ 甲殻アレルギーじゃなくて 照れた？ なんだっけ？ 忘れたけど

「それじゃ、僕は帰るね」

「川口くん、今日はありがとう」

「よかったね」

「川口くんのおかげだから」

「僕はソファに座ってただけだけどね」

一回帰ろうとしたよね

「座っててくれてよかった」

いてくれてよかったよ

川口くんが邪気のない笑顔で「それじゃ」と言って ドアが閉まった

私の家まで送るって言うから

「その恰好で？」って言ったら、「そんじゃバス停まで」って

歩きながらモリシタダイチが私の手を握った

これは・・・ 仕事じゃないんだよね なんかドキドキしてきちゃった

立ち止まったら

「愛里、どした？」

「なんか・・・ あなたに手を握られると・・・ ドキドキします」

「俺は・・・」

前向いちゃって

「ずっとドキドキしてた いっつも 愛里の手え握ってるとき」

そうだったの？

なんかやっと少し実感湧いてきた

モリシタダイチと私 もうつき合ってるんだ

今さらだけど

帰ったら ママに言わなきゃ

今夜の夕食は 老舗のうどん 私のは天ぷらうどんてママはかけうどん

「なんかねえ、作る元気がなくてねえ」

言わなきゃ

「時差ボケなんだか更年期なんだかわからないんだけどねえ」

「ママ」

「そうそう、アメリカに行くのは一ヵ月後にしたからね」

「一ヵ月？」

「あっちは6月から夏休みで、その間に英語学校のサマースクールがあるんですって

早めに行って英語に慣れておけば、愛里ちゃんも楽でしょ？」

一ヵ月 そんな早く・・・

「この家ももう買い手が見つかったのよ」

「え？」

「ママね、パパのところに行く前に、もう決めてたのよ」

聞いてないよ

「だから、いろいろ調べて、不動産屋さんも回って相談してたの」

言ってよ

どうしよう 一ヵ月じゃ 一人で住むって 何も準備できない

でも・・・

「ママ、私、やっぱりこっちに残りたい」

「愛里ちゃん、お願いだからそんなワガママ言わないで」

ワガママなの？ こっちに残りたいっていうのはワガママ？

「愛里ちゃん一人じゃ何もできないでしょ？」

それじゃ

「ママはアメリカに行っても私の世話をするの？」

「あたりまえでしょ」

「更年期なのに？」

「それは折り合いつけながらやっていくから心配しなくていいのよ」

「ママ、私ね、今日友だちに相談してきたの」

「相談？」

「その友だちが手伝ってくれるって」

「手伝うって何を？」

「私がこっちで一人で暮らすために手伝ってくれるって」

「それは」

ママがため息ついた

「お友だちも高校生でしょ、手伝うっていっても高校生じゃ」

なんて言えればいいんだろう

「森下大一くん」

「もりしただいち・・・くん？」

「昨日来た森下さんの息子」

「ああ！ 愛里ちゃんの面倒みてくれた！」

「うん」

「一度ちゃんとお礼に伺わなきゃって思ってたの、でも、こんなだからねえ」

「ママ、その森下くんが手伝ってくれるの」

「でもねえ、ずっと家政婦さんを雇うわけにもいかないでしょ」

「家政夫じゃなくて、友だちとして」

「愛里ちゃん、お仕事として、まあ3週間だったからあれだけど、

ずっとは無理よ、そのお友だちだって勉強もあるし来年は受験でしょ？」

どうして どうしてママは・・・

「ママ、それじゃママは死ぬまで私の面倒みるの？」

「死ぬまでって、そのうち愛里ちゃんだって結婚するだろうし」

「何もできない私と誰が結婚してくれるの？」

「それは・・・ 少しずつママが教えていくから」
「森下くんは、私にミシンの使い方を教えてくれたの」
「え？」
「下着の洗い方も食器の洗い方も教えてくれた」
「愛里ちゃん・・・」
「ママ、私、赤ちゃんじゃないよ、やり方がわかればできることもある」
「だから、それはママが」
「それを森下くんは教えてくれたの」
「それはありがたいけど」
「ママ、少しは私のこと信じてよ」
 モリシタダイチは 私の空気だから
「私はなんにもできないダメな子じゃないよ」
 離れたら
「できないこともあるし苦手なこともあるけど」
 息ができなくなる
「私、もう高校二年生なんだから」
ママが私のこと見ながら大きなため息ついた
「ママ、お願い、私、アメリカに行ったら」
モリシタダイチと離れたら
「死んじゃうよ」
「えっ」
「息ができなくて 死んじゃう」
ママが今まで見たことない険しい顔になって・・・
「愛里ちゃん・・・」
え・・・ ママが泣いてる
「死ぬなんて言わないでちょうだい」
それは・・・
「ママ、何回も流産してるのよ」
え？
「もう子どもはあきらめた方がいいかなって思ってたら、愛里ちゃんができる」
ママの目からは涙がポロポロ流れ続けて
「やっと生きた赤ちゃんが見られた」
ママ・・・
「だから・・・ 死ぬなんて言葉・・・ 使わないでちょうだい」
私の目からも・・・涙・・・
「そうよね、愛里ちゃんは生きていて、高校二年生にもなれて」
ママの思いを知らなかった・・・
「高校二年生になった愛里ちゃんを見られて、ママ、しあわせなのよ」
「ママ・・・」
「本当にしあわせなの」

「ママ・・・ 私もママにいっぱい愛してもらって甘えさせてもらって」
ママの思いなんか知らないでずっと・・・
「すごくしあわせだよ、しあわせって感じる隙間もないくらいしあわせだよ」
「愛里ちゃん・・・」
ママが声をあげて泣いた こんなママを見るのは初めて
「ママ、私、少しずついろいろなことができるようになるから」
そして
「いつか私と結婚してくれる人ができるようなおとなになるから」
そして
「子どもを生んで、ママに孫を抱かせるから」
「愛里ちゃん」
「だから待ってて、ずーっと長生きして待ってて」
「そうね、孫を抱くまで生きてなきゃね」
ママが泣きながら笑った
「パパに相談してみるわね、愛里ちゃんがこっちに残りたいってこと」
「ママ・・・ ありがとう」
ママと二人で声出して泣いた
ママがそんなに大変な思いをして 私のこと生んで
そんな思いで育ててくれたこと 何もわかってなかった
でも だから おとなになりたい もうずっと赤ちゃんのままではいたくない
生きたい 息をして 生きたい ずっと

物件探し

ゆうべモリシタダイチに LINE した
ママとの話、あと一ヵ月しかこの家にはいられないこととか
モリシタダイチは
『俺が必ずなんとかすっから愛里はなんも心配すんな』
そう言ってくれた
なんか私 いっつも頼りっぱなしだな
『私にできることはないですか?』 送信
ピコン
『あるよ』
『何ですか?』 送信
ピコン
『俺を信じてくれること』
なーにカッコつけてるの!
『wwwww』 送信
ピコン
『wwwww ってなんだよ w』
『カッコつけてるから wwww』 送信
ピコン
『カッコつけさせてくれよお w』
『あなたのこと信じてます』 送信
ピコン
『』
ハート! え なんか 突然でちょっとどうしたら
『』 送信
ピコン
『なんで目の細い人になんだよ! w』
『突然のハートに戸惑っちゃって』 送信
ピコン
『ずっと送ってたかった w』
ずっと送ってたかった イヤ〜ん なんか 恋人みた〜い
ピコン
『愛里の弁当は俺が作る』

え？
『そこまでしていただかなくても大丈夫です』送信
ピコン
『俺は愛里の何なんだよ?』
何って？
『何ですか?』送信
ピコン
『カレシだと思ってるんすけど w』
あ そうか
『そうでした』送信
ピコン
『そうでしたって wwwww』
なんかドキドキするんだけどお 今さらだけどお
ピコン
『本当は今日から作ろうと思ってた』
私のお弁当？
ピコン
『愛里の弁当はずっと俺が作りたかったから』
ずっと？
ピコン
『でも熱出しちまったから w』
『知恵熱ですね w』送信
ピコン
『そうっすよ メッチャショック受けましたよ w』
ピコン
『愛里のお母さんに弁当は俺が作るからって伝えておいて』
『ありが』 どうする？
『ありがとう』送信
ピコン
『このハートは間違えてねえよな w』
『間違えてないです w』送信
ピコン
『たまんねえ!』
ピコン
『E∞』
10 個のハートかける無限大って ハハハ
『』送信
ピコン
『バレた w』
『なんかそうじゃないかなって w ハートの代わりかなって w』送信

『見返してわかったんですけど』送信

ピコン

『遅せえ！ w 時差あり過ぎ w』

時差って

『私は鈍感ですから！』送信

ピコン

『愛里は鈍感じゃねえよ』

『鈍感だって言ったのはあなたですけど』送信

ピコン

『俺の気持ちには鈍感 w』

『言わないからでしょ！』送信

ピコン

『立场上言えないこともあるんですよ w』

ピコン

『それでも信号青になって手を握るのは介護じゃないんで w』

もうわかってるよ！

ピコン

『愛里のイチゴは俺が買う』

『森下家の男の漢気ですね』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『好きだよ』

愛里好きだよ エーーーーーッ照れるううう

『月がきれいですね』送信

ピコン

『それもバレてたんかよ w』

『なんとなく w』送信

『これも見返してわかったんですけど』送信

ピコン

『わかってくれて嬉しいっス w』

『まわりくどくてわかりづらい！』送信

ピコン

『w』

ハハハ また土下座

『それでは私はそろそろ寝ます』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『おやすみ』

『おやすみなさい』送信

なんか・・・ いつも LINE してたのに 今夜のはドッキドキしたんだけど
慣れてない まだ全然 つき合ってるという状況に

本人はまだ慣れていないのに、イチゴアーンの写真が拡散されて、
学校では私とモリシタダイチがつき合っているということが拡散されていた
つき合い始めたの昨日なんだけどな

「上原さん、おはよう」

「川口くん、昨日はありがとう」

「僕も楽しかったよ」

楽しかった？ 何が楽しかったんだろう

「上原さん、アメリカ行きはどうなったの？」

「こっちに残りたいって母に話して、それは認めてくれたんだけど」

「よかったね」

「でも、あと一ヵ月で今の家には住めなくなるから」

「一ヵ月だと早く物件探さないとだね」

物件！ そんな言葉使ったことないよ

「森下はなんて言ってるの？」

「俺がなんとかするって」

「だったらなんとかするんじゃないの？」

その軽――いカンジはなに？

「森下なら、なんでもなんとかしそうだなって思ったよ」

何を根拠に？

「あの恰好で上原さんにコクれる人だからさ」

あ・・・ そういうこと

お昼休みの中庭

モリシタダイチと一緒にベンチに座ってる

モリシタダイチはもうゼーンぜん隠そうとしない

これだけ知れ渡っちゃったら隠す意味ないけど

お弁当は ドライカレー ポテサラもある

「美味しい！」

久しぶりのモリシタダイチの味 大好き

「愛里」

「はい？」

「愛里の部屋のことなんだけどさ」

「はい」

「あのさ、ぜってえこれじゃねえかなって物件があつてさ」

物件 男子って物件で言葉好きなのかな

「たださ、そこの大家が一筋縄じゃいかねえっつうか頑固っつうかさ」

私ならその段階でやめるよ

「前にさ、どうしても貸してくれって客がいてさ」

「はあ」

「そしたら、家賃月 100 万つってよ」

「100 万!?!」

「1LDK で 100 万」

タワマンの最上階？

「ムリですムリ、そんなところムリです」

「だけど俺はぜってえそこっきゃねえなって」

100 万なんてムリだから！

「なんとか大家と交渉すっから」

「しなくていいです！ 100 万とかムリですから！」

「家賃も交渉すっから」

「半額でも 50 万ですよ？ 家賃半額なんてしてくれませんか！」

「俺は命賭けて交渉する」

「そんなものに命賭けないでください！」

「土下座でもなんでもして、もしその大家が頭丸めて坊主にしろっつたら」

だからさ

「俺、坊主にすっから」

「冗談ですよね？」

「マジだよ」

あ 目がマジ・・・

「そこまでしなくていいです、ママも不動産屋さんに電話して探してもらって」

「俺はぜってえあきらめねえ」

この人ときどきこうなるよね 前もぜってえあきらめねえって、何のことだったっけ？

あ 好きな人のこと あ 私のことか

家に帰ったら、ママが不動産屋さんからいくつか送られてきたって

「ほら、ここはワンルームで新築ですってよ」

「あ、きれいだね」

ちょっと狭いかなあ、でも私一人だからね

「ただねえ、ここから学校まで電車を乗り継いでバスでって 1 時間かかるみたいなの」

「一時間!?!」

「ちょっと遠いかしらねえ」

「かなり遠いよ！」

「こっちのはね、学校までバスで 20 分」

さっきのところよりは近いけど

「ただねえ、一階が、なんて言ったかしら、カバブ？ お肉の、外国の」

「ケバブ？」

「そうそう！ だから匂いがねえ」

ずっとケバブの匂いはイヤだな

部屋探して大変

なんかめんどくさくなってきちゃった

もうママと一緒にアメリカ行っちゃおうかなあ

ちがうちがうちがう それじゃダメだってば

そんなこと言ったらモリシタダイチが坊主になっちゃう

あ 坊主は大家さんとの交渉か

坊主でもいいけどね 頭の形いいからさ

ちがう 坊主がどうかの話じゃないよ

どうなるんだろう

じゃなくて どうにかしないとだよ

引っ越し

一ヵ月ってあっという間だった
その間に中間試験とかあって死ぬかと思った
モリシタダイチが助けてくれたからなんとか乗り切れたけど

今日、私は新しい部屋に引っ越して、ママは成田の近くのホテルに泊まる
ガラーンとしたリビングにママと二人きり

「ママね、愛里ちゃんに渡したい物があるのよ」

ママが私に渡した箱は ティファニー？

中には ネックレス 小さな青い・・・

「愛里ちゃんの誕生月の誕生石サファイアよ」

ステキ

「本当はね、愛里ちゃんの誕生日に渡そうと思ってたの」

そうなんだ

「でもね、直接渡せそうにないし、アメリカから送るのもねえ」

「ママ、私、こういうネックレス欲しかったの」

あどとき モリシタダイチで行ったお店で探してたのは まさにこんなカンジ

「本当？ まあ、よかった」

「ママからもらえて嬉しい」

「そんなこと言ってもらえるなんて・・・」

「ママ、泣かないでよ」

「そうね、今生の別れじゃないんだからね」

「そうだよ、夏休みには遊びに行くから」

追加講習に引っかからなければ・・・ 引っかかりたくないけど

「これなら、いくつになってもつけられるでしょ」

「うん」

「海外ではね、なんて言ったかしら、花嫁が身に着ける、4つの物があるらしいの」

「へえ」

「その中に、何かブルーのものっていうのがあるらしくてね」

「へえ」

「これなら花嫁になるときでも身に着けられるかなあって思ったのよ」

「気が早すぎるよ、まだ高校生なんだから」

「母親は女の子が生まれたときから、そういうこと考えるのよ」

そうなんだ

「パパは愛里ちゃんが赤ちゃんのときから、この子は絶対に嫁に出さないって」

笑ってるママ

抜けてるところがあるけど 辛いこと経験してそれでも笑って

私の思いも受け止めてくれて・・・

「愛里ちゃん、どうしたの？」

「ママ・・・」

「あらあら、まあ、もう高校生なんだからそんな顔で泣かないの」

「ママに言われると思ってなかったよおお」

「そうね、本当に・・・」

「ママも泣いてるじゃん」

引っ越しの軽トラックが私の荷物を積み込んで行った

ママは不動産屋さんに鍵を渡したりするから、私が先にこの家を出る

「それじゃ、ママ、またね」

「行ってらっしゃい」

「ママ、ありがとう」

目に涙をいっぱいためてママがうんうんってうなずいた

電車に乗ってバスに乗って 着いた 私の新しい家

部屋の前に来たら 引っ越し屋さんがダンボールを次々中に入れてて、

それを避けながら部屋に入ると

「おう、愛里」

「上原さん、おはよう」

モリシタダイチと川口くん

引っ越し屋さんからダンボール受け取って・・・

「あの、私は何を・・・」

モリシタダイチと川口くんが顔を見合わせて

「上原さんはベッドルームにいて」

ハ？

「僕が服とかベッドルーム用って書いてる荷物持っていくから」

「あ、はい」

クローゼットに服を入れて・・・ 終わっちゃった

このダンボール どうしたらいいんだろう

そ〜っとベッドルームのドア開けたら

川口くんは几帳面にダンボール折りたたんで重ねてて

モリシタダイチはキッチンで・・・ なんかメチャ手際よく入れてるけど

私、どこに何があるかわかんないよ いいけど ほっとんど使わないから

ママが使ってたキッチン用品「まだ新しいし品質も最高なのよ」って

私は使わないけどね

「愛里、なんか飲みてえなら冷蔵庫に入ってっから」

「あ・・・ はい」

ここは冷蔵庫もついていて、冷蔵庫の中身はモリシタダイチが 詰めたんだな

川口くんは几帳面に床を拭いていて・・・

なんていうのかな 疎外感

私の部屋なんだけどな 疎外感

あっという間に終わっちゃった

家具付きだから そんなに荷物なかったけど

「愛里、昼メシ食うだろ」

「え・・・ はい」

何もしてないけど

「川口！ 昼メシ作っから！」

「ありがとう」

えっとさ 私の部屋だよ

モリシタダイチの卵サンド 美味しい！

なんか ホットする

マグカップは新しいのを買った

モリシタダイチと買いに行ったんだけど

モリシタダイチは薄いブルー、私はピンク、川口くんのは白

「なんで川口のも買うんだよ」

「遊びに来たときに」

「そんじゃ川口のはこっち」

って、微妙に違うデザイン選んだのはモリシタダイチ

川口くんならあの水族館で売ってたマグカップの方が好きなのかも

私の部屋には置きたくないけど

あれ？ 川口くんの服

抑えたマスタードイエローのTシャツに カフェモカ色のカーゴパンツ

え メチャセンスよくない？

「川口くん、その服って誰が買ったの？」

「僕」

「お母さんじゃないの？」

「うちの母親は少女趣味だから」

そうなんだ 自分で

モリシタダイチの顔を見たら

「なに？ なんだよ？」

「なんでもないです」

見習え

お昼休憩終わって、モリシタダイチと川口くんはダンボールを部屋から運び出して

その間に 私は小物をリビングのあちこちに置いて

もう今日からふつうに暮らせちゃうよ 家具付きだから全部揃ってるし

モリシタダイチと川口くんが戻ってきた

「川口、先にシャワー使っただろ」

「ありがとう」

えっと・・・さ ここ 私の部屋だよ

「タオル出しとくから」

「タオルは持ってきたから」

マイタオル持参するんだ 川口くん

モリシタダイチはキッチンでお昼のお皿とか洗ってて

私は・・・ なーんにもすることない

ハァァァ ベランダの窓から入ってくる風が気持ちいい

「愛里」

「ウワッ」

「なんで驚くんだよ」

「急にいたから」

「あのさ、明日の愛里のお母さんの見送り、俺も行くから」

「はい」

それは・・・ 前から言ってたよね

「愛里」

優しく抱きしめるけど

「正直に言っただけですか」

「いいよ」

「汗臭い」

「あっ？ ご、ごめん」

「いいです、慣れてますから」

「慣れて・・・る？」

「あの、秘密基地で、コクられたときも・・・」

「あ？」

「おそらく熱を出して汗かいたんだと思いますけど」

「マ、マジ？」

「あと、私の家に来てたときも、たまに」

モリシタダイチが情けな〜い顔して

「言えよお」

「気にならなかったですから」

気にならないっていうより それどころじゃない状況のときばっかだったから

「愛里」

え なに？ 顔が近づいて

「シャワーありがとう」

モリシタダイチが跳ね上がって私から離れた

「そ、そんなじゃ、俺、シャワー浴びてくっから」

走ってバスルームに行っちゃった

あれ？ 川口くん

白のスエットのボトムスに薄いブルーのポーターの T シャツ

「その服も川口くんが買ったの？」

「うん、この前セールになってたから」

「そうなんだ、それって・・・ GAP？」

「よくわかるね」

「うん、まあ」

「お水もらっていい？」

「うん、えっと・・・ グラスは・・・」

どこに入ってるんだろう

「ここじゃないの？」

シンク上の扉を開けたら いちばん下にグラスとマグカップ

上には食器と・・・ まあいろいろ

「すごいね、機能的だね、無駄がないよ」

そうなの？

「ちょっと、この下も見ていい？」

「ど、どうぞ」

何が入ってるか知らないけど

「これは・・・」

なに？

「機能美だね」

きのうび？

どっちにしろ何にしる 私はほとんど使わないけどね

モリシタダイチがシャワー終わってリビングに入ってきた

「え？」「あ？」

川口くんとモリシタダイチがお互いを見て同時に声あげた

二人の服 丸被り

部屋で着てる服がダサイって言ったら、「そんなじゃ愛里選んでくれよ」って

先週 GAP でセールやってたから私が選んだんだけど

「ペアルックですね」

二人とも複雑な顔で私を見た ウケる 真顔でひそかにウケている

川口くんが帰って もう夕方

「愛里」

「はい」

「俺たちさ、つき合って一ヵ月になんじゃん」

「ああ、そうですね」

「あのさ、なんつうか」

「なんですか？」

「そろそろ・・・ なんつうか」

「そろそろ？ 何ですか？」

ボリボリ頭かいてるじゃけじゃわかんないよ

「いっかなあ？」

「いっかなあ？ 何がですか？」

「だからなんつうか、キ・・・キス」

「えっ エーーーーーッ」

「エーッてなんだよ」

「だって、そういうのって、聞いて、許可とって するものなんですか？」

「そんじゃ急にやっちまってもいいのかよ」

「やっちまうって、そういう・・・」

「いちおう愛里に、いかどうか聞いた方がいっかなあって」

「そんなこと聞かれて、いいですよって、そんな事務的な」

「そんじゃどうすりゃいいんだよ？」

「どうすればって、私は、そういうの、経験ないですから」

「俺だってねえよ！」

顔は メッチャ経験ありそうなんだけどね 顔だけは 自覚あるモテ男だから

「あの、お父さんに聞いてみたらどうですか？」

「どうちゃんに？ 何を？」

「あの、初めて、お母さんに、どうやって・・・って」

「んなことどうちゃんに聞けるわけねえだろ つか、どうちゃん憶えてねえよ」

「憶えてない？ ファーストキスを？」

「夢見てんじゃねえかつってただけだよ」

「ああ・・・ そうですね、それじゃ、お母さんは？」

「かあちゃんになんてぜってえ聞けねえよ！」

「そう・・・ですよね」

なんか・・・あ・・・

「え、愛里？ ど、どした？」

「なんか・・・怖くなってきちゃって・・・」

「えっ、あ、ご、ごめん、しねえ、ぜってえしねえから」

「ぜったいしないのも・・・ですけど」

私って・・・どうしてこう・・・自然にできなくて・・・

「あの」

「な、なに？」
「私でいいんですか？」
「何が？」
「あなたの・・・ つき合う相手」
「ハ？」
「こんな、キ、キスで動揺って、その前に、するかどうかで動揺して」
「愛里」
「はい」
「俺、べつにキスするために愛里とつき合ってるじゃねえから」
「え？」
「愛里っきゃいねえって 命賭けて惚れたから」
「はい」
モリシタダイチが私を抱きしめて
「今は汗臭くねえだろ？」
「はい」
「愛里」
「はい？」
顔をあげたら え あ Kiss
そっとくちびる離して 私の顔をちょっと照れくさそうに見ていて
えーっつと えーっつと
この後どうすればいいの？ どんな顔すればいいの？
なんか恥ずかしくて 顔そむけた
「愛里」
口きけない
「愛里」
ムリ
「怒ってんの？」
ちがうけど
なんていうか なんていうか
「吐きそうです」
「は、吐きそう？」
「ドキドキ・・・し過ぎちゃって」
「あ、ああ、そっちで、ああ、そっか」
「なんか・・・ 顔見れないっていうか」
「愛里はよ」
笑ってる？
「なんですか？」
「メッチャ愛里だなんて」
メッチャ愛里・・・とは？
「メッチャ たまんねえ」

「そうですか」

あ また ホワンと する

くちびる離して モリシタダイチの顔見たら すっごく優しい目で見ていて

なんか もうどんな顔していいのかわからなくて

モリシタダイチの腕の中に顔隠した

聞かないでやったよね 二回も

どうなの？ いいけど

空港と獣

ママの見送りに空港に行った

私はモリシタダイチに買ってもらった・・と今は認識できている白のワンピース、
ママからももらったサファイアのネックレス

モリシタダイチはどこからどう見てもお母さんがすべて選んでコーデしたよねな
薄手の紺のジャケットにスタンドカラーの白いシャツにオフホワイトのジーンズ
私のママの見送りだけなのに、そこまでキメなくてよくない？ な恰好

「まあ！ 二人で見送りに来てくれるなんてねえ」

ママは私の顔じゃなくてモリシタダイチの顔見て言ってる イケメン好きだもんね

「愛里さんのことは俺が全力で命賭けて守りますから」

ママ、こいつね、ゆうべ私にキスしたの二回も！ しかも不意打ちで！

「お母さんは安心してください」

安心できる？

「まあ！ 頼もしい！」

私にコクッたときの寝ぐせついた格好見てもそれ言えるかなあ

「愛里ちゃんも安心ねえ」

いつまた不意打ちがくるかと思うと安心できないよ

「愛里のこと、末永くよろしく願いいたします」

ママ、末永くって、こいつまだ高校生だよ

「愛里ちゃん？ 何したの？」

「え？ あ、なんでもない」

頭どこかに吹っ飛んでた

「ママ、具合が悪いときはちゃんと休んでね、パパに甘えてゆっくりしてね」

「そうね、そうするわ」

ママがちょっと涙ぐんでうなずいた

「孫の顔見るまでは長生きしなきゃね」

それをなんでモリシタダイチの顔見て言うのかな？

「はい、孫の顔見るまでぜったい長生きしてください！」

そしてなんでこいつが応えるかな

ママの搭乗便のアナウンスが流れた

「それじゃ、愛里ちゃん、ママそろそろ行くわね」

「ママ・・・」

涙出てきちゃった

「泣かないの、夏休みにはまた会えるんだから」
そう言うママの目にも涙がいっぱい
「ママ・・・ 私のこと生んでくれて、ここまで育ててくれてありがとう」
「愛里ちゃん・・・ ママは愛里ちゃんのママになれてとってもしあわせよ」
ママと抱き合っただけ泣いちゃった
やっとなんか・・・ やっと実感湧いてきた ママと離れて暮らすって
「ママ～ 私、ママと離れて暮らせるのかなあ」
今さらだけどおお
「何言ってるの、大一さんがついてるでしょ」
え？ てか、いつから森下くんから大一さん？
「愛里さんのことは俺がすべてやります！ 必ずしあわせにします！」
しあわせとかそういうことじゃなくてさ
「大一さん、あとはお任せしますね」
ママもさ
「はい、まかせてください！」
なんか なんか違うくない？
私と抱き合っただけ モリシタダイチにも抱きついて・・・
どさくさでイケメンに抱きついたよね ママってそういうところあるもんね
搭乗口に入っていったママ
行っちゃった
ママと離れて 一人で日本に残るってことを なんかちょっと肌で感じて
ちょっと心細くなって
もうママは見えない搭乗口 ずっと見ていた

空港からのシャトルバスの中
なんか何も言えなくて ときどき涙が出てきて
ティッシュ指でクルクル巻いて縄みたいにしてまた巻いて
そんなことずっとしてたら ちょっと車酔いしちゃった

シャトルバスから電車に乗り換えて 私の部屋がある駅に着いた
ここからまたバスに乗らないと
「愛里 歩いてこ」
え？
「なんか車酔いしてんじゃねえかなって」
わかったんだ

黙ったまま モリシタダイチと歩いた
なんか なんか手をつながれたくなくて
両手を前で握って歩いた
「愛里、なんか怒ってね？」

怒ってる？ そんな自覚はないけど 怒ってるみたいに見えるのかな
「お母さんと離れて淋しいからなんかになって思ったけど」
たしかに淋しいけど 空港から離れるうちに 落ち着いたけど
「なんかそうじゃねえみてえっつうか」
そうじゃないのかな
「俺のこと怒ってね？」
モリシタダイチのこと？
「な～んかそんな気すんだけど」
怒ってる？ 怒ってるっていうより なんか・・・
「なんかあんならさ、言ってくれよ」
言ってくれって言われても 自分が何を感じてるのかよくわかんないけど
えーっと えっと・・・ あれ？ 言葉が浮かんだ
「言葉が浮かんだんですけど」
「なに」
「そのまま言っているいいですか？」
「いいよ」
「あなたから・・・ オスの匂いがします」
「おす？ 酢？ すし酢とかの酢？」
「そうじゃなくて 獣のオスみたいな」
「獣のオス？」
「はい」
「汗臭せえっつうこと？」
「そうじゃなくて」
「ちゃんとシャワー浴びてきたんだけどなあ」
「だから汗臭いとかじゃなくて」
「なんだ？」
服の匂い臭いでるけど
「愛里、ちょっとよくわかんねえんだけど」
「私もよくわかりませんが・・・」
あ また言葉が
「あの、また言葉が浮かんだんですけど・・・ 言ってもいいですか？」
「いいよ」
「羊の皮をかぶった狼」
「あ？」
「なんか・・・ 羊だと思ってたら狼だった・・・みたいな」
「あ？」
「なんか・・・ちょっと怖い・・・みたいな」
「怖え？ 俺、愛里のこと怖がらせるようなことやったんか？」
「よくわかりませんが、なんか・・・」
「え？ あ？ んっと・・・ なんだ？」

なんか・・・ なんだろう・・・ なんていうか・・・

あ・・・！

「正直に言ってもいいですか？」

「いいよ」

「絶対に怒らないって」

「ぜってえ怒んねえ、ぜってえ怒んねえから」

「あの・・・ あの、こんなこと言っているのか」

「なんでも言っている、なんでも聞く」

「あの、キスされてから・・・」

「えっ」

「なんていうか、ああ、男の人なんだって」

「え、あ、えっと・・・」

モリシタダイチがどうしたらいいんだみたいに髪の毛グシャシャ触って

「愛里、ごめん！ 俺、マジごめん！」

「ちがうんです、ちがうんです、謝って欲しいとかそういうことじゃなくて」

モリシタダイチがすまなそうな顔で私を見てるけど

「あなたのこと、好きだったんですけど」

「好き・・・ だった？」

「それって、男の人として好きだったのかどうかちょっとわからなくなって」

「あ？」

「昨日キスされて・・・ あ、男の人なんだなって、今さらなんですけど、

なんていうか、たとえば、えっと、あ、川口くんとだと、多分おそらく絶対一生永遠にそんなことぜーったい感じない自信はあるんですけど」

なんていうか

「あなたと一緒にいると、ドッキドキしちゃって」

「あ？」

「なんかすごく意識しちゃって」

顔見れない

「今もドッキドキして・・・ 吐くかもしれません、それくらい、あの」

あれ 吐きそう マジで吐きそう

「吐きそう、あの、ドキドキとかじゃなくて、多分車酔い・・・」

モリシタダイチが私の手を握って 私の部屋に走った

トイレで吐いたらスッキリした

歯を磨いてうがいして もっとスッキリした

リビングに行ったら モリシタダイチが心配そうに見てて

「着替えてきます」

ベッドルームに入った

着替えて ベッドルームから出ると モリシタダイチがいない

帰ったのかな だよな

私 ひどいこと言っちゃった
獣のオスとか羊の皮を被った狼とか、吐きそうって
吐きそうだったのは車酔いだったけど
でも マジでドキドキしちゃって
空港で あの恰好してるモリシタダイチ
別人みたいで 別人じゃないけど
ああ これが伝説のモテ男なんだなっていうか
なんていうか 本人には絶対言いたくないけど 王子様みたいで
この人が私にキスしたの？ って思ったら ドッキドキしちゃって
「愛里！」
え？ 帰ったんじゃないの？
「これさ」
リビングに入ってきたモリシタダイチ
いつものあの煤けた赤の T シャツ着てる
「あっ、えっと、愛里に選んでもらったの洗濯してて」
視線感じたんだ
「急いでたからその辺にあんの着てきちまって・・・」
「いいです」
その方が
「見慣れてますから」
ホッとする
「あ、ああ、そっか」
「帰ったんじゃないんですか？」
「帰った、帰って、これ持ってきた」
その瓶は・・・ なに？
「愛里、あんま炭酸飲まねえから冷蔵庫に入れてなかったからさ」
炭酸？
「これさ、かあちゃんがツワリんとき、これにレモン入れて飲むとスッキリしたって」
ツワリ？ 私のは車酔いなんだけど
「冷えてっから、今、グラスに入れっから」
「はい・・・」
グラスにレモンが入ってて シュワシュワって泡が立ってる
あ スッキリする
「スッキリします」
「そっか」
「レモンの香りもホッとするう」
「かあちゃんさ、ツワリんとき、これ飲むとスッキリしたらしくてさ、
とうちゃんいねえとき、指でレモン、瓶にズボって押し込んでたって」
「なんか、私もやりそう」
「俺がちゃんとグラスに入れるんで」

「はい」
これを取りにわざわざ家に帰って・・・
ホッとする　なんか　すごくホッとして
「あの、ちょっと・・・　いいですか？」
「なに？」
「ちょっと・・・」
モリシタダイチの赤いTシャツに顔くっつけて
「ホッとします」
「え・・・」
「あなたといると・・・　やっぱりホッとします」
モリシタダイチの腕がそっと私のこと包んで
「私・・・　あなたが好きです」
モリシタダイチの体が・・・　震えてる？
顔を上げようとしたら　グイッと頭抑えられて
「愛里から・・・」
声もちょっとだけ震えてて
「んなこと　言ってもらえるって・・・」
鼻すすってる
「俺、一生言われなくてもいいって思ってた」
そ〜っと顔あげようとする　またグイッと
「なんか俺・・・　いいんかなあ　こんなさ　なんつうか」
隙をついて顔をあげたら　やっぱり泣いてた
「なんだよ、見んなよ」
「泣いた顔もイケメンですね」
口とがらせて　フフ
「うっせえ」
「照れてる」
「うっせえ」
すごく優しい声で　すごく優しく　Kiss
なんか　ドキドキして　顔あげたら
「俺、オスだから」
え？
「獣っすから」
涙の跡がついてる獣？
「それでも愛里のことは、ぜってえ傷つけねえ」
あなたに傷つけられたことは　一度もないよ
「俺がぜってえ守っからさ」
「はい」
モリシタダイチの腕の中に飛び込んだ
「獣のにおいすんだろ」

「しますね」

「おう」

私には メッチャ優しい獣 モリシタダイチ

新しい部屋

月曜日

私の新しい部屋からの初登校

モリシタダイチは私の朝食を作りに来て、自分の家で作ったお弁当持ってきて、一緒に学校に行った
学校に近いから歩いていけちゃう 最高！

「上原さん、おはよう」

「川口くん、土曜日はありがとう」

「楽しかったよ」

川口くんの楽しいのツボがちょっとわからないけど楽しかったんならよかった

「また遊びに来てね」

「うん、ありがとう、あ！」

川口くんが珍しく顔を近づけてきて

「上原さんのところに行くときはあの GAP のは着ていかないから安心して」

私はどーでもいいんだけど、川口くんとモリシタダイチは複雑だったよね
男同士で丸被りのペアルック

昼休みの中庭

今日のお弁当は私のリクエストのモリシタダイチスペシャルおむすびと、
唐揚げと卵焼きと、いつくらでも食べられちゃうサラダ
美味しい！

「愛里ってさ」

「はい？」

「メッチャきれい」

突然？ しかも言った本人が真―――っ赤になってるけど？

「どうしたんですか？」

「え、なんか、そう思ったから」

「そう・・・ですか」

なんかさ なんかにゆうべのあのときから モリシタダイチの“好き”がダダ洩れで
どうしたらいいんだろう

中休みに川口くんにチラッと云ったら・・・

「僕ずっと考えてたんだけど」
ずっと？ 何を？
「森下って、中学のときから冷静沉着っていうか鋭いところもあって」
冷静沉着？ 冷静沉着なところ見たことないけど
「どっちかっていうとS系？」
S系？
「でも、上原さんとつき合うってチョードMでしかないよね」
どういうこと？
「僕なら無理だなあ」
私フッタよね？ なんか今 私がフラれた体になってるけど？
「森下はかなりのドMなんじゃない？」
「どうしたらいいの？」
「放置プレイでいいんじゃない？」
「放置プレイ??？」
「森下は上原さんに何かして欲しいなんて期待してないよ」
「期待して・・・いない」
「いてくれればいいんじゃないの？」
というわけのわからない言葉しか返ってこなかった
私とつき合うとなぜドMってことになるの？
「ラブリーーン！」
あ・・・ あの二人
イチゴアーンの写真の発信元が誰なのか、わりとわかってる人もいて・・・
「二人で仲良くお弁当？」
なんか笑顔作ろうと思ってもきごちなくなっちゃって
「愛里の友だちだよ」
モリシタダイチ いいから！ 放っておいて！
「はい、一年のとき同じクラスで仲良く、ね？」
「う、うん」
「俺、一年のときから見てた」
「わ、私たちをですか？」
「二人といると愛里がすごく笑ってて、いい友だちなんだなって」
モリシタダイチが何をしたいのか わからない
「私たちも愛里さんと」
愛里さん？
「友だちでしあわせだなあって」
「そっか、ありがとう」
ウワッ 爽やかな笑顔！
ミカリンとアミリン完全にヤラレてる
「あ、えっと、そうだ！ ラブリン、これね」
ピコンピコンて私の携帯が鳴ってる

「最近見つけたカフェ、どれもステキなの、美味しいし、ほら、アミリン」
「あ、私も送るね、こっちは可愛いアクセ売ってるショップ」
ピコンピコン
「デートにおススメっていうか、あの、二人で、よかったら」
ミカリンの声が一オクターブ高くなってる
「ありがとう」
出た！ 爽やか笑顔！ ほら、瞬殺されてるよ
「それじゃ、またね」
「うん・・・ また」
去っていくミカリンとアミリン
「今のは何ですか？」
「お礼だよ」
「お礼・・・」
「あの二人がいたから、俺、愛里の笑ってる顔や声聞けたからさ」
え？
「すげえ嬉しかったから」
マジでお礼だったんだ
横に置いてる携帯に 二年になってから一度も来なかったアカウントからの LINE
クラスが変わるとやっぱり離れていくよね 友だちって
でも・・・
「私には川口くんがいるから」
「今なんつった？」
「え？」
「今なんつった？」
「私、何か言いました？」
「私には川口くんがいるってなんだよ？」
あ 心の声が口から出ちゃってた
「友だちってことですけど」
「それでもさ、そこは川口じゃなくてモリシタダイチだろ」
「モリシタダイチは友だちではありません」
あ ちょっと嬉しそう 嬉しさを必死に隠そうとしてる
「そんじゃ、モリシタダイチは何なんだよ？」
言わせようとしている モリシタダイチはカレシって
「モリシタダイチは何なんだよ？」
すっごく期待してる顔
この人ってすっごく頭がいいのに、こういうときって バカになるよね
「俺は何なんだよ？」
「獣」
はい 黙った
もう一回言ってあげようか？

「獣です」
ほら 口とがった
私のこと横眼で見て 絶対居直るよね
「そうっすよ」
ほら
「そうっすよ」
私の手の上に手を置いてギュッて 空見上げて
「俺は愛里の獣っすよ」
「私の獣？」
「おう」
「カレシじゃなくて？」
止まった
「今なんつった？」
「唐揚げ美味しいって」
「ぜってえ違えよな」
放置プレイ
「そろそろ教室に戻りましょう」
「愛里なんつったんだよ」
「行きますよ」
「おう」
川口くん、放置プレイで正解だったよ

学校から帰って 鍵 開いてる
ドアを開けたら
「愛里、おかえり」
「勝手に人の部屋に入らないでください」
「ヘッヘッヘッ」
タコのキーホルダーについたふたつの鍵チャラチャラして見せて
「大家の息子の特権」
「特権乱用です」
そうです この大家さんはモリシタダイチのお母さん 女神
ここは女神が見せてくれたあの部屋
これには長いいきさつがあって・・・
まあいいや、先に着替えよう

事の顛末

モリシタダイチが私をこの部屋に・・・っていうか、
「愛里に見せてえもんがあっから」って、このマンションに連れてきた
たしか・・・ 「ぜってえこれじゃねえかなって物件がある」って言った一週間後？

最初はモリシタダイチの家に何かあるのかなって思ったけど、
二階で止まって、この部屋の鍵を開けて・・・
「ここさ」
「あなたのお母さんの部屋ですよね」
「へ？」
「前に連れてきてもらいました」
「いつ？」
「えっと、ママが私を連れてアメリカに行くって、あなたのお母さんに言って、
そのとき、ちょっと見せたいものがあるって」
あれはいつだったっけ・・・
「あ！ あなたが知恵熱出して学校休んだ前の日」
ポカンとして私のこと見てるけど 聞いてなかった？
「あなたのお母さんの思い出がいっぱい詰まってるお部屋で、
誰にも貸す気はないけど、私になら住んで欲しいって言ってくれて・・・」
女神の気持ちがすごく嬉しかった
「こういうところに住みたいですけどねえ」
あれ？ モリシタダイチ 座り込んでうなだれてる
「大丈夫ですか？」
ゲンコで床ドンて ちょっと！ 傷つけたら女神に申し訳ないよ
「かあちゃんは・・・」
頭抱えてるけど
「ったくよーーーーーっ！」
「どうしたんですか？」
モリシタダイチが恨めしそうな上目遣いで私を見て
「俺が 一週間 かあちゃんに 頭下げ続けて」
一週間？
「ゆうべ やーーーーっど貸してくれるって 許可もらったのが この部屋」

「えっ」
「かあちゃん、最初っから愛里に貸すつもりだったのに、なんで！ なんでだよ！」
何があったんだろう
「かあちゃん、愛里がアメリカ行くつって、一人じゃなんもできねえからっつって！
　　そんだけしか言わねえから！ 俺、メッチャショックで！」
私に言ってないよね　これは　うん　独り言だよ
「だったらさあ！ 最初っからさあ！ ここ愛里に貸すつもりだっつってくれりゃあさ！」
私がかここにいること忘れてるよね
「俺・・・　バカみてえじゃん！」
何があったんだろう

モリシタダイチがへろへろになって話したこと、
あとから女神が説明してくれたことでやっと、流れ？ がわかった

私があと一ヵ月で部屋を探さないとならないって知って、
モリシタダイチは閃いた
自分が私の世話ができて、私が住むのに最適なのはここだ！　ここしかない！
女神に土下座して頼んだ一日目
「あの部屋は誰にも貸さないって、あんたも知ってるでしょ」
「知ってっけどさ、知ってっけど、今回だけはなんとかお願いします！」
「あの部屋は私の大切な部屋なの」
「わかってっから、俺がちゃんと掃除するしさ、今も俺がしてるしさ」
「家賃月 100 万」
「そこをなんとか！　なんとか安くしてください！」
「月 100 万」
「だったら、俺、一生働いて返すからさ、俺の貸しっつうことでお願いします！」
「あんたがどれくらい稼げるかわからないのに無駄な投資はできないわよ」
「ぜってえちゃんと稼いで返すから！」
「口約束だけで契約はできません」
「かあちゃん！　俺を信じてくれよ！　かあちゃんが生んだんだからさ！」
「生んだときは、そんなすね毛生えてなかったしヒゲだって生えなかったわよ」
「脱毛？　脱毛してくっから！」
「あんたが全身ツルツルになっても貸さない、はい、もうこの話は終わり！」
あとから聞けば笑えるけど、メッチャ手ごわいよね
それからも・・・
「世話をする世話をするって、高校生のあんたがどこまで責任持てるの！」
「何かあったときに、未成年のあんたに何ができるの！」
モリシタダイチがポツリと言った
「一週間・・・　そんなんでさ、俺、愛里にこんなこと言いたくねえけど・・・
　　しまいにはシッコチビりそうになった」

よっぽど辛かったんだな
そして一週間経って モリシタダイチは精神的に丸裸？ そんなカンジになって
これは女神から聞いたんだけど・・・
「かあちゃん、俺はたしかにまだ高校生で未成年で、なんもできねえかもしんねえけど、
　　それでもさ、俺は愛里のそばにいてえんだよ、俺が命賭けて惚れたんだよ
　　かあちゃんから見たら俺はまだガキで、たしかにガキで、それでもさ、
　　愛里いなくなったらさ、俺・・・ 頭おかしくなっちまう、マジ・・・」
泣きながらそう言って・・・
「だったら、そこの床屋で丸坊主にしてきなさい、そうしたら許さないでもないわよ」
涙でグショグショの顔あげて、目をキラキラさせて・・・って女神が言ったんだけど
「いってきます！」って玄関に走っていくから、
「あんたの髪はシンシンのところ以外で切るなって言ったでしょ！」
って止めたらしい

女神は、その一週間の間に賃貸に必要な書類をそろえて、あちこち手続きして、
ママのところに来たときには、ママが署名捺印すればいいだけにしてあった

なぜ女神はモリシタダイチに一週間、ほぼ拷問みたいな仕打ちをしたのか・・・
愛里さんをお預かりするという事は、好きだからだけでは済まない、
現実的な責任が伴うものだという事を叩き込みたかった
母親の所有する物件だからって、簡単に考えて簡単に手に入れられるものではない
そんなに簡単に手にいれてしまえば、もしものときの覚悟ができない
後々困難があったときに乗り越えられない、それではお預かりしても責任が取れない
「ちょっとそういうことを教えたくて」

笑顔でそう言った女神

ちょっと・・・ 女神のちょっとって・・・

モリシタダイチはチビりそうになったって・・・

「ダイチは絶対にあきらめないとわかってたから、蹴飛ばしても蹴飛ばしても、
　　絶対に食らいついてくるだろうってね」

モリシタダイチ あなたのお母さんはあなたのことこんなに信じてるよ

そして・・・ 私は泣いた

女神の聡明な計らいと、他人の私を預かる覚悟を決めて動いてくれたこと
だけど なにより・・・

モリシタダイチの思いに

私を部屋に連れていってくれるまでの一週間、私は何も知らなかった
ふつうにお弁当作ってきてくれて、ふつうにいつもどおりの会話して笑って
そんなことがあったなんて一言も言わなかった
モリシタダイチは本当に私を守ってくれる
モリシタダイチが、ぜってえなんとかするって言ったら、
体張って魂込めて絶対になんとかしてくれるんだって

そこまでしてくれるんだって

事務的な手続きが全部済んでから、川口くんにそのことを言ったら
「森下ならやるよね」って
モリシタダイチなら やるよね

女神は日本での私の後見人になってくれて、
学校にもママと二人で行って校長先生や担任に了承させてくれた

女神と二人きりになったとき、女神が話してくれた
アメリカ行き話を聞いたとき、そして私の気持ちを聞いたとき、
この子はまず日本で自分の基礎を築くことが必要だと思ったって
「もちろんご両親と一緒に住みたいって思いがあったら、それはそれでいいのよ」
あのとき、就職面接のようなやり取りをしたのは、私の気持ちをしっかり見たかった
「ハッキリしてたわ、あなたはこっちに残りたい、ネックは家事ができないことだけ」
私にこの部屋を見せて、その反応を見て決意した、私を預かるって
「あとはあなたのために大喜びで家事をやるってヤツを探せばいいだけ」
女神がヴィランス系の笑みを浮かべて言った
「簡単に見つかったけどね」

女神が、私にこの部屋を見せたことも、女神の決意も言わず、
モリシタダイチに
「愛里さんアメリカに行くんですってよ」
「あ？」
「お母様がお父様と一緒に住みたいからって連れて行くんですって」
「なんだよ・・・それ」
「愛里さんは行きたくないらしいんだけど、でも、自分のことができないからって、
それじゃあね、アメリカ行くしかないわよね」
それだけ言い放ったのは、それを聞いたモリシタダイチが絶対に動くと思ったって
「もうね、池の鯉みたいに大きな口あけてパクって食いついて笑っちゃう」
モリシタダイチ 女神の思うがまま
「ショックで熱出すって、わかりやすすぎてイヤになるわよ ハッハッハッ」
モリシタダイチ すべて見透かされていた
家賃月100万の話は、以前知り合いが貸してくれてしつこいからそう言ったって
「それから一度も連絡が来なくなったわよ ハッハッハッ」
家賃は5万円 ママもビックリしてた
あの辺りは1LDKなら最低でも10万以上するって
「本当はいらないんだけど、それじゃお母様もあなたも気が引けるだろうから」
なぜ女神は私にここまでしてくれるんだろう
「部屋ってね、人が住んでないと、どこか空気が死ぬのよね」

空気が死ぬ？

「あなたなら、あの部屋を私が若い頃のような空気で満たしてくれるって確信したの

あなたにそうして欲しかったのよ」

「女神の思いを叶えたいです」

「だからその女神ってなんなのよ」

笑って そして優しい目で私を見てくれた

引っ越しの一週間前

女神がモリシタダイチを連れて私の家に来た

モリシタダイチは制服着て メッチャ爽やかな笑顔でママに挨拶するから

ママはもう・・・ ヤラれた

「愛里さんのことは、俺が命賭けて守りますから、お母さんは安心してください」

「命賭けてだなんて、素敵ねえ」

ママ、そこじゃないよ

「俺、体張って愛里さんを守りますから」

「なんかドキドキしてきちゃったわ」

更年期だからじゃないの？

ママはいそいそと女神にストロベリータルト、モリシタダイチに

「若い方はこういうリッチなのが好きでしょ」って濃厚チョコレートケーキ

逆だよ逆

モリシタダイチはチョコに飽き飽きしてるし女神はお父さんのイチゴしか食べないよ

ママが目を離してる隙に私がお皿入れ替えたけど

そういう流れでの あの空港の抱きつきがある

私は・・・ なーんか なんとなーく 女神がママのこと見透かして

モリシタダイチに制服着せて連れてきた気がするんだよなあ

制服着てるとまさに「伝説の自覚あるモテ男」に見えるもん

そういうことで、私は今この部屋に住んでいる

「愛里！ 晩メシできたぞ！」

「はーい」

モリシタダイチとモリシタダイチが作った夕食食べて

「美味しい！」

モリシタダイチと一緒に宿題と明日の予習

一緒についていか、モリシタダイチに教えてもらおう比率の方がメチャ高いけど

でもね でも私だってちょっとは役に立ってるんだから

「愛里、ここの英訳チェックしてくんねえ？」

「はい」

えっと・・・

「あ、ここ、pがひとつ足りない」

「マジ？」

「appropriate は p がふたつです」

「ヤベ」

「こういうケアレスミスがあ受験のときにい命取りなんだぞお」

「なんだよそれ」

「英訳の先生の真似です」

「似てねえ！」

笑ってる

「もう9時ですよ、そろそろ帰った方がいいんじゃないんですか？」

「とうちゃんとかあちゃんは二人きりになりてえからさ」

モリシタダイチのお父さんは先週退院してきた

退院してきたその日からバリッバリに女神のために家事をやってるって

「俺、ここに越してこよっかなあ」

「えっ？ ベッドルームひとつだけですけど」

「ウソだよ」

なんだ冗談か

「かあちゃんに、高校卒業するまでは、なんつうか、そういうのは」

そういうの？

「ぜってえダメって釘刺されてっからさ」

なんだかわかんないけど

「愛里のお母さんにも約束したから」

「そうですか」

なに 私の顔見てため息ついて

「俺、頑張っから」

頑張る？

「ぜってえ、なんつうか、頑張っから」

「はい」

なんのことかわかんないけど

「応援します」

なに？　なんでそんな情けな〜い顔で見るの？

「おう」

そう言ってちょっと笑ってる

「そんじゃ、明日」

「はい」

モリシタダイチは自分がこの部屋から出ていくとき

必ず自分で鍵を閉める

学校に行くときも

私 この部屋に引っ越して 自分で鍵閉めたことくない？　まだないよ

夏休み前

期末試験が終わって結果が出た
なんととなんととなんとー！ 私の順位が飛躍的に UP したー！
やっぱりモリシタダイチに教えてもらったからだよ
あの部屋 優秀なカテキョ付き
モリシタダイチはトップ
私の世話をしてトップって いつ勉強してるんだろう すごいな
「俺は今までチンタラやってたけど」
トップ3常連でチンタラ？
「これから卒業するまで勉強頑張ることにした」
就職するにしても・・・とか言ってたもんね
「愛里のために頑張っから」
私のため？
「自分のために頑張ってください」
「愛里のためは俺のためってことじゃん」
意味がよくわからないけど
「頑張ってください」
「おう」

文化祭

うちのクラスは焼きそばの店
モリシタダイチは焼きそば作る係に手をあげなかった
「どうしてやらないんですか？ あなたが作ったら絶対美味しいのに」
「俺は愛里以外には作らねえ」
「ハ？」
「愛里と約束したじゃん、シェフにはなるなってさ」
文化祭の焼きそば作るのはシェフじゃないと思うよ
あの男子たち、絶対料理なんてできないよ できないって顔してるもん
売れないよ どうするの？
これは・・・ この手か？
「あ、あなたが大きな鉄板で焼きそば作るの見たいなー」
棒読みになっちゃったよ

「マジ？」

あれ？ 反応あった

「はい」

「ほんじゃ、やっか」

ちょろいな モリシタダイチ ちょろ過ぎだな

文化祭前日 クラスの男子の一人がとんでもないもの持ってきた

「うちの親父が、これはもう売り物にならないから 文化祭で使えってさあ」

花問屋の息子なんだって

大きな長い箱3つ 中に花が入ってる

しぼんでるのもあるけど使えるのもけっこうあるよ

「バケツに突入れて三本100円で売るか」

売れないと思う 私なら買わない絶対買わない

あ！ フラワーアレンジメントの教室で習った

ココットの容器にオアシス入れて小さなアレンジメント作ったことある

ココットの代わりは・・・ あれは？

「あの、学食で売ってるプリンプラスチック容器って、もらえるのかな」

「もらえると思うよ、どうせ捨てるだけだしさ」

「あれをもらってきてくれる？ できるだけいっぱい」

男子二人が学食に走る

花問屋の息子、名前なんだっけ？ 佐藤？ 鈴木？

「花問屋さん、オアシスある？」

一瞬 え？ って顔したけど

「あるある、角が欠けたやつとか持たされた」

空のプリン容器に水に浸したオアシス入れて、器が見えないように葉物さして

あとは、しぼんでない花を・・・ できた！

30個作った・・・ 他の女子も手伝ってくれたからなんとかできた

「これなら1個100円でも売れるよ」

100円は申し訳ないよ

「50円は？ 50円なら気楽なカンジで買ってくれると思うけど」

てことで1個50円で売ることになった

申し訳ないなあと思うのは、花問屋の息子は、私が花問屋さんて呼んだから、

みんな「花問屋、これは捨てていいよな」「花問屋、こっちの箱開けてよ」って

ごめんなさい 名前うろ覚えだったただけなの

文化祭当日

モリシタダイチの焼きそばは飛ぶように売れた

なんせ伝説のイケメンが焼くメッチャ美味しい焼きそばだから

他校の女子たちが行列作ってたよ

私はちょっと離れて モリシタダイチが焼きそば作るの見てた

「愛里！」
「はい？」
群がる人をかき分けてモリシタダイチのところへ行くと
「これは愛里の分」
「わあ！ 嬉しい！ 人がいっぱいだからあきらめました」
「愛里に食わさねえわけねえだろ」
「ありがとう」
ちょっと照れたような顔して
「見てろよ、俺が焼きそば作っとこ、愛里が見てえつつったんだからな」
「はい、ずっと見てましたよ」
「そっか」
「美味しい！」
「そんじゃ、今度から家でも焼きそば作っか」
「はい！ 食べたい」
「おう」
私の花もあつという間に売れた！ 売れたよ、よかったあ
「上原さんすごいね、完売だね」
「川口くん！ どこにいたの？」
「生物部の展示手伝ってた」
「川口くん、生物部なの？」
「ううん、1年のときの友だちが生物部でね、頼まれたんだけど」
「そうなんだ」
「怖いくらいガラーンとしててさ、誰も来ないから抜けてきた」
生物部の展示って、私も見たことないな 興味ないし
「川口くん、焼きそば食べた？」
「人がいっぱいだからあきらめたよ」
「ちょっと待ってて」
人混みをかきわけて
「あの、川口くんにもひとつくれませんか」
「1個一万円」
「だったらいらないです」
「ウソ、愛里、作っから、怒んなよ」
ちょろい ちょろ過ぎだよ モリシタダイチ

私はもうヒマになったから川口くんとあちこち回った
家庭科展示室
ウソでしょ・・・
「先生やっちゃったね」
やっちゃったよ やってくれやがりましたよ
完成したパジャマ

モリシタダイチつまり私が作ったのが最優秀作品で展示されてる
その隣りに私つまりモリシタダイチが作ったのが準優秀作品で展示されている
「これは・・・ ペアルックだね」
「偶然なの！ 本当に偶然！ 生地も別々に買ったしボタンもたまたま同じで」
「森下が見たら大喜びだね」
かもね・・・

パジャマ・・・
縫った人が変わると先生がすぐわかるってウソだった
私と同じテーブルの女子なんて
「めんどくさいから途中からお母さんに縫ってもらった」って
先生全然気がつかなかったよ
「なぜあんなウソを言ったんですか」
モリシタダイチは上目遣いで私を見て
「俺は愛里のを縫いたかったし、俺のを愛里に縫ってほしかったから」
「ハァアアア？」
「なんつうの？ 愛里の手作りパジャマが欲しかったっつうかさ」
この人・・・ ときどき発想が ガキだよ
「愛里、最優秀取ったじゃん」
「あれは、あなたが描いた線が正確だったから、あなたが最優秀ってことです」
「愛里はわかってねえなあ」
「何をですか？」
「俺が惚れた女はすげえっつうことがさ」
なんかよくわかんないけど
「そうですか」
最近は流すようにしてる

文化祭が終わって、あの花のことがあって、クラスの人たちと話すようになった
本当に申し訳ないのが、花問屋の息子、もうすっかり「花問屋」が定着しちゃった
ごめんなさい！

明日から夏休み

川口くんは夏休み中ずっと予備校の夏期講習だって
川口くんは医者を目指してるって初めて知ったよ
「父親が開業してるからね、いずれ僕が継ぐことになると思う」
「川口くんのお父さんの病院で何科なの？」
「肛門科」
えっ
「私・・・ 川口くんが継いでも・・・ ちょっと・・・ 行かないかも」
「僕は肛門科にはならないよ、小児科目指してるから」

「あ、そうなの」
「まだまだ先だけどね、まずは医学部合格しないとさ」
大変だな 医者の子

私はあさって、パパとママのところに行く
一週間だけ
ママは「夏休みずっといればいいのに」って言ったけど
一週間でも、まだ行ってもいないのにたそがれてる約一名がいるから
ほら また何か考えてる
「俺は決めた」
「何をですか？」
「愛里がいねえ間、俺はバイトする」
「そうですか」
「朝から晩まで」
朝から晩まで？
「やっぱさ、先は長げえから、金稼がねえとき」
「はあ」
「愛里のために稼いでくっから」
メッチャ決意した的な目でそう言うけど
「私のためじゃなくても・・・ 自分のために使ったらいいと思いますけど」
「俺は一生愛里のために金稼ぐって決めてっから」
一生って
「あんまり無理しないでくださいね」
「おう」
「梁の上のネコをつかまえようとししないでくださいね」
「しねえ、とうちゃんの轍は踏まねえ」
「メキシカンタイルには気をつけてください」
「なんだそれ？」
私もよくわからないけどメチャ硬いタイルだってことはママから聞いて知っている

モリシタダイチのお父さんは若い頃大ケガして右脚がほとんど曲がらなかったって
私が初めて会ったときは病院のベッドの上だったからわからなかった
この前の骨折も右脚で、そのとき、若い頃の手術が、なんていうのテキト～？
それがわかって、できるだけ脚を曲げられるようにしてもらえたって
「完全にじゃねえけど、とうちゃん、右脚曲がるってビックリしてさ、
かあちゃんは、ずっと曲がらねえのしか見たことねえから違和感感じるっつって」
そう言って笑って
「俺もさ、右脚曲がねえとうちゃんしか見たことねえから不思議っつうかさ」
森下家では、お父さんは右脚が曲がらないのがデフォルトでふつうだったんだ
「そんで、とうちゃんも右脚曲がんのに今までみてえな歩き方してさ、

慣れねえつつって笑っててき」
モリシタダイチが話す森下家の話を聞くのが好き
あのとき病室で感じた愛がいっぱいの空気を感じられるから

当日はモリシタダイチが空港まで送ってくれた

「なんかあったらすぐに連絡しろよ」

「はい」

「俺、格安チケットなら買えるくれえは貯めてっから」

そこまでしなくても・・・

「なんかあったらすぐ飛んでくから」

「はい」

淋しそうな目で私を見ているモリシタダイチ

私の手を離そうとしない

「いってきます」

「おう」

まだ離さない

「あの、そろそろ行かないと」

「あ、そ、そっか」

やっと放したけど

「おみやげ買ってきますね」

「みやげなんかいいからさ、早く帰ってこいよ」

いや 一週間の往復チケットなのよ 変更できないのよ

「いってきます」

「愛里」

「はい？」

「待ってっから」

「はい、待っててください」

「おう」

これで私がアメリカに住むことになってたら どうなったんだろう

まあいいや 一週間だけだし

飛行機に乗って ニューヨークに向かった

ニューヨーク

ニューヨークでパパとママといると 日本でのことが夢みたいに思える
もしかしたら私はママと一緒にここに来たんじゃないかってくらい

ピコン

『愛里』

向こうは朝だよ

『おはようございます』送信

ピコン

『今日は何してたの?』

『パパが美術館に連れていってくれました』送信

『モダンアートなんですけど、私には全然理解できない』送信

『自転車がつるしてあって、それがアートってどういうことでしょう?』送信

『それを見て Wow!とか言ってる人たちにはあれが自転車には見えないのかなって』送信

『白いキャンバスに絵の具ぶちまけたのとかもわけがわかりません』送信

『パパにそう言ったらパパもよくわからないって w』送信

ピコン

『愛里と一緒にその美術館行きたかった wwwww』

『なんで?』送信

ピコン

『愛里と行くとどんどこでも楽しくなる w』

楽しくなかったよモダンアート

ピコン

『愛里』

ピコン

『愛里がいなくて淋しいんですけど』

淋しい・・・

『私は実感がわかなくて』送信

ピコン

『何の実感?』

『こっちにいて、あなたといたこととかそういうことが夢だったのかなって』送信

『もしかしたら、私はこのままこっちにいるのかなって』送信

『このままこっちにいる方が現実みたいな』送信

あれ？ 返信が来ない トイレ？ 顔洗いに行った？

全然返信来ない 最後のから5分経ったけど どうしたのかな？ バイト行った？

まあいいや、シャワー浴びよう

シャワーから戻ってきたら モリシタダイチから LINE が来てた

『愛里、俺、ちょっと、つか、メッチャ、つか』

『バイト行ってくる』

なに？？？ ちょっとメッチャバイト行ってくる？ 忙しいってこと？

なんかいっぱいバイト入れてるって言ってたもんね

明け方 携帯が鳴ってた気がするんだけど 眠いから・・・

今何時？ わ、もう10時 こっちに来て4日目だから気が緩んできたのかな

今日はママと買い物 夕食は3人でパパおススメのレストラン

ママとパパがメッチャ予定入れるから忙しいよ

あ モリシタダイチからの LINE 入ってた

『愛里、俺とのことが夢だったとか、このままそっちにいるのかなとか』

『正直メッチャ腹立ってる』

『俺は愛里がいなくて淋しいのにさ、愛里にとって俺は何なんだよ』

なにこれ？

なんで怒るの？ 思ったこと書いてただけじゃん

愛里にとって俺は何なんだよって なに？

『私にとってあなたは何なんだよとか言われるなら、もう何も言うことはありません』送信

電源 OFF

ママと買い物中

ステキなワンピがあった

白に墨絵みたいなお花が裾に描いてあって ちょっとおとなっぽくて気に入っちゃった

おとといこっちの美容室で顔回りにレイヤー入れてもらったから

今までのただのロングボブより軽くておとなっぽいカンジになったから合うよね

このグラス可愛い

ハンドペインティングで白のハート描いてあって ふたつで LOVE になるんだ

買う？ でもさ、あんなこと書いてきて なんか腹立つ 買わない

このキーホルダー 指切りしてる

こっちは2つ合わせて “True Love” のハート

こっちは・・・ ハートに矢 これって・・・ そういう意味・・・

なんか・・・ 悲しくなってきた

夕食はステキなレストラン

ステーキが大きい！ これって一人分？

柔らかくて美味しいけど・・・ 美味しいけど私は・・・

パパの家に帰って 携帯の電源 ON にしたけど モリシタダイチからは何も来てない

きっとすごく怒ってるんだね

けどどね 私が言いたかったのは・・・

モリシタダイチが私の何とかそういうことじゃなくて

そういうことじゃなくて・・・

『今夜はステーキを食べました』送信

『すごく大きくて柔らかかったけど』送信

『私は食べながら』送信

『あなたの唐揚げが食べたくになりました』送信

ピコン

あ 返信がきた なんか怖い 見るのが怖い

『俺は愛里に俺の唐揚げ食わせたい』

涙が出てきちゃった なんかホロホロって心が溶けて

ピコン

『愛里、ごめんな』

ピコン

『俺、淋しすぎて頭おかしくなった』

淋しすぎて・・・

私の気持ちをなんて伝えればいいのか

うまく伝えたい

『私がこっちにいると あなたとのことが夢だったのかなって思ったのは』送信

『きっと』

そういうことで・・・

『あなたのお父さんが夢なんじゃないかって言うのと同じで』送信

『あなたから離れると、あれは夢だったんじゃないかって』送信

だって

『あなたといると夢みたいにしあわせだから』送信

ピコン

『愛里』

ピコン

『俺 マジ泣いてるんすけど』

泣いてる？

ピコン

『とうちゃんの夢みてえだっつうの同じってさ』

ピコン

『愛里にそう言ってもらえるなんてさ』

ピコン

『ちょっと今言葉出ねえ w』

『今日ペアのキーホルダーが置いてあるショップに行って』送信

『やっど←この意味がわかりました』送信

『これって傷つけるって意味じゃなくて』送信

『胸キュンみたいなことだったんですね』送信

ピコン

『やっどわかってくれましたか wwwww』

『でも矢の方が刺さると痛そうで買いませんでした』送信

ピコン

『なんもいらねえよ』

ピコン

『愛里がそばにただで』

ピコン

『俺はしあわせなんすから』

『あなたに会いたいです 今すぐ会いたいです』送信

すぐすぐ会いたい

ピコン

『待ってっから』

ピコン

『俺はずっと待ってっから』

『待っててください』送信

『あなたがいないと 私は 息ができません w』送信

ピコン

『』

『そうですか 今はわかります w』送信

ピコン

『そうですかって wwwww』

ピコン

『そうですよ w』

ピコン

画像？ 自撮り！ 寝ぐせ！ メチャ笑う！

あれ？ ここって・・・

『そこは・・・ 私の部屋じゃないですか？』送信

ピコン

『そうだったっけかなあ』

そうだったっけかなあじゃないよ

『私の部屋で寝てるんですか?』送信

ピコン

『愛里のベッドでは寝てねえから』

『勝手に私の部屋に入らないでください! w』送信

ピコン

『高校卒業したら』

ピコン

『愛里と俺の部屋にしていいますか』

私とモリシタダイチの部屋・・・

『大家さんに要相談』送信

ピコン

『今度はマジで丸坊主になんなきゃいけねえかも w』

ハハハハ

ピコン

『愛里 おやすみ』

『バイトいってらっしゃい』送信

ピコン

『稼いできやす! w』

『お願いします w』送信

私・・・

やっぱりモリシタダイチが好きだー！

約束と予約

日本に帰ってきた

到着口を出て

迎えに来るって言ってたんだけど どこにいる？

あ！ いた！ 私のこと見てた

「愛里！」

モリシタダイチのところへスーツケース引っ張りながら、これ、なかなか動かな

「愛里」

モリシタダイチの方が先に私のところに走ってきて ギュッて

「おかえり」

「ただいま」

モリシタダイチの顔が・・・

「ハワイに行ってたんですか？」

「あ？」

「日焼けしてるから」

「肉体労働者っすから 俺」

そう言って笑うモリシタダイチ

日焼けして 腕ももっとたくまくなって なんか かつこいいから照れる

シャトルバスの中

モリシタダイチは私の手をずっと握ってて チラッチラッて私を見てる

「なんですか？」

「愛里がいんだなあって」

「いますよ」

「愛里」

「はい？」

「メッチャきれい」

ときどきこういうなんて返していいかわかんないこと言うから

「そうですか」

「メッチャきれい」

「はい」

もういいから

私の部屋の鍵をモリシタダイチが開けて
ああ 帰ってきた！
ホッとする
すごっ フローリングピッカピカに磨いてる
もともといつもきれいに掃除してくれてたけど なんか気合を感じる

リビングに入って
ただいま 私の部屋！
「愛里」
「はい？」
ギュウウウウって
「ちょ ちょっと くっ 苦しいいっ」
「あ ごめん」
「あなたの腕！ 前よりもっとたくましくなってるんだから 加減して！」
「愛里だなあ」
そう言って 今度は優しく
ホッとする この腕の中

モリシタダイチの卵サンド
「美味しい！ これ食べたかったあ」
「マジ？」
「私、ニューヨークであなたの料理シックでした」
「料理シック？」
「ホームシックみたいな」
「俺は？」
「あなた？ なんですか？」
「俺シックは？」
「ああ、やっぱりこの卵サンド最高！」
「なんだよお」
口とがらせて その顔も好きだけどね

おみやげ披露タイム！
「これは川口くんに、自然博物館で買ったボールペンです」
「んなどこ行ったんだ」
「パパがそういうの好きで、なんか恐竜とか動物のはく製とか気持ち悪くて
走って逃げましたから、ほとんど見てません」
笑ってる

「おみやげコーナーだけは行ったんですけど、川口くんならこういう博物館好きかなって」
次は・・・
「これはあなたのお母さんへの ストッキングです」
「これって・・・ 見たことあんな かあちゃん使ってるやつじゃね」
そうなの？ よかったあ！
「あなたのお母さんて欲しい物は自分で買いそうだから、
こういう日常的なものがいいかなって、イタリア製ですけど」
次は・・・
「これはあなたのお父さんへのソックスです」
白のコットン素材だから普段履けるよね
「ここ見て、くるぶしから足の裏にかけてネコが線で描かれてるんですよ
ネコってふつう可愛くなっちゃうけど、これはオシャレだなんて」
「ネコ！」
「あっ！ あなたのお父さん、ネコを助けようとして・・・骨折・・・」
「それじゃねえつつうか」
「ネコアレルギー？」
モリシタダイチが笑って
「ネコはどうちゃんとかあちゃんの思い出つつうかさ」
「そうなんですか」
「どうちゃんメッチャ喜ぶと思う」
よかったあ
「これは、あなたに、ベタな、うんざりするほどベタなおみやげ屋で買いました」
「ニューヨークの地下鉄のマップ？」
「I LOVE NEW YORK みたいなのがたくさんあったんですけど、さすがにあれは・・・
これは作業用です、いいですか？ 作業用」
「もったいねえじゃん、せっかく愛里が買ってきてくれたのにさ」
「作業用です！ あの赤いTシャツが擦り切れてなくなっちゃったら着てください」
「おう、メッチャ嬉しい、愛里が買ってくれたなんてさあ」
「メインはそれではありません」
「あ？」
「これです」
指切りしている絵が掘られた銀の小さなメダルとイニシャルがついたキーホルダー
「ほら、あなたのはダイチのDで、私のは愛里のA」
「指切り」
「向こうではPinky promise っていうそうです、小指の約束みたいな？」
「約束」
「いろいろあったんですけど、これだなんて」
モリシタダイチが手のひらに載せてジッと見てる
「LINEでケンカしたときに買ったんですよ」
「あれは、俺が、マジごめん！」

「もういいです、仲直りしたし」
「愛里、これ、マジ嬉しい」
「よかった！」
ガバッと おっ
「愛里、俺、ぜってえ愛里のこと守っから、一生守っから」
一生って
「だから、愛里、俺のそばにいてくれよ」
「ずっと・・・ですか？」
「ずっと」
「ママのところにも行ってはダメってこと？」
「ママのところはいい」
「プッ ハハハハ」
「なんで笑うんだよ」
「だって・・・ あなた、今、ママって」
「あ？」
「ママのところはいいって」
「俺、ママっつった？」
「言いましたアハハハハ」
「それは、なんつうか、愛里がいつもママっつうから、なんつうか」
「いいですよ、ママで、あなたがママって言うて・・・ 可愛いアハハハハ」
「なんだよそれ」
ちょっと照れたみたいに口とがらせてる
「それではこれで」
「俺からも、あんだけど」
モリシタダイチから？
「ちっと待ってて」
キッチンに行って 食器棚開けて なに？
「これ」
これは・・・ 見るからに・・・ 指輪の箱
どーしよーーー モリシタダイチが選んだ指輪って
開ける前から ウワッ ダッサ！ って言っちゃいそう
「ほれ」
パカッはしないんだ 自分で開けろと
「あの」
「あ？」
「私に・・・ ふつうの反応は期待してないですよ？」
「なんも期待してねえけど」
なにも期待してないっていうのもどうなの？ まあいいけど
開け た え？
艶消しの銀に小さな青いガラスの・・・

「きれい」
「マジ？」
「はい、モロ私好みなんですけど」
「マジ？」
「はい、あなたのお母さんが選んだんですか？」
「俺！ 俺が選んだ！」
「ウソ・・・」
「マジ俺だって！」
「へえ」
「なんだよ、そのへえってよ」
「ちょっと・・・ 意外だったので」
「愛里が好きなのはこういうんかなって」
「はい、そのとおりです」
「そっか」
あれ？ でも・・・
「これは・・・ 何ですか？」
「指輪」
「それはわかりますけど、私の誕生日は9月ですけど」
「誕生プレゼントじゃねえよ」
「だったら何？」
「え、なんつうか、だから、なんつうか」
なんつうか何よ？
「予約」
「予約？ 何の？」
「愛里」
「私？」
意味がわからない
「私の予約って何ですか？」
「だから、なんつうか、愛里は俺が予約したつうか」
私はモリシタダイチが予約した？
「よくわからないんですけど」
「愛里は俺が予約したからもう他のヤツは予約できねえつうことだよ！」
怒鳴って言わなくてもよくない？
「私は あなたに 予約された と」
「おう」
予約の指輪って聞いたことないけど
「わかりました」
「マジ？」
「はい」
なにその感動したみたいな顔？

あっ！ でも・・・
「あの・・・」
「なに」
「もしも、もしも、私がこれを排水溝の中に・・・」
「俺が見つける」
「はい、でも・・・ もし、気がつかないうちにどこが落としたり」
「愛里」
「はい」
「失くしてもなんでもそれはどーでもいい」
「どうでもいい？」
「指輪なんかどうでもいい！」
指輪渡しておいてどうでもいいって
「なんか、なんつうか、儀式みてえな、そういうの、したかったっつうか」
儀式・・・
「わかりました」
「そっか」
「だったら はめてください」
「あ？」
「儀式やりたいんですよね？」
「え、あ、はい」
「だったら、指輪、はめてください」
「お、俺が？」
あなた以外の誰がやるのよ
「はい」
左手差し出したら プルプル震えた手で私の薬指に指輪をはめた
「きれい！」
「愛里がずっと 100 万くれえに見えんなあ」
「これ、100 万円じゃないですよ？」
「ごめん、んな金はまだねえっつうか」
「100 万円じゃなくてよかったです、100 万円だったら私ぜったい受け取りません」
「100 万じゃねえから」
「いくらですか？」
「それは言えねえよ」
「イヤですよ、なんか高いのとかそういうの」
「俺が高けえの買えるわけねえじゃん」
「あ よかったです ホッとしました」
「愛里がそんなだからさ、俺の金、全然減らねえよ」
「減ってるでしょ！ 私、そうとは知らずにピザ屋さんのとときとかカフェとか、
お弁当箱にワンピ！ メッチャお金使わせちゃってますよ」
「俺、夢叶ったから」

「ハ？」

「いつか上原愛里のために使いてえって稼いでたから」

私があなただけを知ることから 一年も前から

「これからはガンガン稼いで、いつかは愛里のこと」

「私のこと？」

「まあ、なんつうか、そういうことだから」

「はい」

なんだかよくわからないけど

予約されちゃった

なんだかよくわからないけど

この指輪

モリシタダイチが選んだんだ ビックリ

10年後

鏡の中の私

白いドレスに昔ママにもらったサファイアのネックレス
左指には10年前モリシタダイチからもらった予約指輪

プロポーズはね 工作中

モリシタダイチはソファに座って何かの書類読んでて
私はどうしても明日までに終わらせないといけない案件があって
ローテーブルでキーボード打ってた

「愛里」

「はい」

ここは・・・ このままでいいって・・・

「結婚してくんねえ？」

「はい」

でもここは・・・ え？ あれ？

「今 なんて言いました？」

笑ってる メッチャ笑ってる

「今 結婚がどうのって 言いました？」

「言った」

「ハ？」

「結婚してくんねえかって」

そんなことを

「なーんで私が仕事してるときに言うの？」

「改まって言ったら、愛里ぜってえ吐きそうっつうから」

私を知り過ぎている男 モリシタダイチめっ

「私がイヤですって言ったら？」

「いいよ」

「結婚しなくてもいいってこと？」

「俺は愛里と一緒にいれんならこのまんまでもいいけど」

「だったらなんで結婚してくれって言ったんですか」

「法的に愛里のことを守れる立場になりてえだけ」

法的！ さすが弁護士！ まだ駆け出しだけど

「つうのは言い訳で」

法的が言い訳？

「単純に、愛里に、森下愛里になって欲しい」

森下 愛里 え 可愛い

「愛里」

あ 私の横に座った

「森下愛里になってください」

「はい」

照れたような顔になって

「そっか」

私のこと抱きしめた

「あなた、10年前に予約しましたよね？」

「した」

「このこと？」

「このこと」

「そうですか」

だから婚約指輪はいらないって言った

「もう10年もこれつけてますから愛着度ハンパないです」

「愛里がそんなだからさ、俺の金全然減らねえじゃん」

「わかりませんよ、そのうちドーンと高いもの買ってって言うかも」

「ドーンと高けえもんで何だよ？」

「え・・・ まだ浮かばないけど」

「愛里が欲しいつつうんならなんでも買いますよ」

「私もう持ってますから、いちばん欲しいもの」

「なに？」

「モリシタダイチ」

ほーーら、真っ赤になった 絶対なると思った

10年一緒にいても こういうこと言うとこれなんだから

10年！ まあ一緒に住み始めたのは大学入ったときだけど

でも高校二年生から10年で 俯瞰して見るとすごいよね

「森下取締役には明日報告します」

「かあちゃんととうちゃんには俺から言っとくから」

「私は部下なので、そこはちゃんと報告しないと」

「そっか」

海外事業部直属専務 会社ではメッチャ厳しい

「愛里のお父さんとお母さんには直接会って報告しねえとな」

「いいですよそんなことしなくて、結婚もしてないのに孫はまだかって言う人ですから」

「そんじゃ、孫、早く・・・しねえとな」

「今は抱えてる企画があるので無理です」

「かあちゃんみてえなこと言うなよ」
「だって私あなたのおかあさんみたいにキレッキレじゃないし」
それに
「子どもを育てる自信がまだないっていうか」
「愛里は生んでくれればいい」
ハ？
「まあそれがいっちゃん大変なんだけどさ」
「はあ」
「育てるのは、俺ととうちゃんできりゃいいから」
「そう・・・ですか」
「おう」
そんなカンジ？

結婚式と披露宴はやらなくていいって言ったの
だって同僚の話聞いてると、会社の誰と誰を呼ばなきゃとか席順とか？
結婚という喜ばしいことを前にしてゲッソリしてるんだもん
それにキャンドルサービスとかケーキ入刀とか、あんなの絶対やりたくない
・・・って言ったら、
「俺は愛里のウェディングドレスが見たい」って
まあそういうことで、式は家族だけで、川口くんもいるけど
その後は家族で会食ってことで、川口くんもいるけど

川口くんは今研修医
この前、なんか胃がムカムカするけどどうしたらいいって聞いたら
「研修医ってさ、ほとんどシロウトだからね、僕に聞かないで病院行って」だって
早く一人前になってよ！

「愛里ちゃん、そろそろ時間よ」
いよいよか
チャペルの扉の前 え？ パパ？ 泣くの早くない？ なんかメッチャ泣いてるけど

「パパ、扉開くから」
ダメだ、ハンカチ出してウッウって泣きやまない
開いちゃった
泣いてるパパを引きずるようにしてバージンロード歩いて
いた モリシタダイチ
濃紺のジャケットに襟の立ったシャツにネクタイ メッチャかっこいい
え？ あれ？ モリシタダイチ 泣いてる
ちょっと待ってよ パパだけでいっぱいいっぱいだよ
パパが泣きながら私をモリシタダイチに渡して

モリシタダイチが泣きながら私の手を取った
ふつうさ 花嫁が泣くよね なにこれ？

式が終わって最後に誓いのキスをして
扉に向かって腕を組んで・・・ え？ 川口くんまで泣いてるんだけど
まあね 川口くんには この10年いろいろ聞いてもらってるしね
もしかしたらいちばん私たちのこと詳しいかも

「愛里、メッチャきれい」
「あなたに見せられてよかったです」
「やっと・・・ やっと見れた、11年かかってやっと見れたよ」
「お待たせしました」
「なんだよそれ」
笑ってる

高校二年のあのとき あなたが間違いと手違いで私のところに来てから
あなたはずっと私のそばにいてくれて 私のためにだけいてくれて
あなたといると 私は息ができて すごくホッとして しあわせで
だから・・・

「森下愛里になりました」
モリシタダイチが泣きそうな顔で 私のこと抱きしめた

私 森下愛里になりました

- Fin. -

Poppins - ポピンズ -

著 神原 涼

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
